

# 計画経済の根本問題

——経済計算の可能性に関する吟味——

経済学博士

山本勝市著



## 複製版上梓にあたって

わたくしが「計画経済の根本問題」を世に問うたのは、すでに三十余年前のことである。その間、悲劇的な第二次世界戦争を経て、世界の政治・経済・社会は著しい変化をみせている。しかし基本的には、自由経済か計画経済かの何れかの理念に立って展開されてきている。そして、こうした環境のもとで、わたくしじしんの考え方について、問われるならば、わたくしは、今日においても、基本的には本書に述べているところと何ら変るところがないとお答へしたい。

この数年来、友人、知己から絶版となっている本書の複製をしばしば薦められてきたが、ついに機を得ずに今日にいたった。しかし、このさい、わたくしじしんの学業をかえりみるとともに、またわたくしじしんのためのモニュメントとして、原版に加筆訂正を加えることなく、敢てここに再刻に附することとした。

また、本書がはじめて上梓されたさい、多くの同学各位から温かい書評や推薦の言葉を頂いたが、そのなかから、とくに忘れがたい東畑、手塚両氏の書評を巻末に再掲させていただいた。

なお、わたくしは本書を東京商科大学に提出して経済学博士の学位を得た。京都帝大を出たわたしが、東京商大へ学位論文の審査を求めるのはまったく異例のことであったが、そういうことになったのは、当時京大教授であった高田保馬先生と、当時東京商大の教授であった中山伊知郎先生との特別の配慮によるものである。当時を回顧して謝意を新たにせざるを得ない。

昭和四十六年九月

山本勝市

## 自序

想へば私が社會主義を問題とするに至つてから廿數年の歲月が流れて居る。明治四十三年、幸徳秋水を首班とする大逆事件が發覺したとき、私は隣村の小學校につとめて居たが、たまたま其の居村から二名の被告を出したといふこと、殊に其のうちの一人は村でもかなりの人望を集めて居たといふ事實は、私に一種の複雑な印象を残した。私がクロボトキンとマルクスの名を聞き、社會革命の輪廓を耳にしたのは其の時がはじめである。

大正五年大阪朝日新聞に連載された河上博士の『貧乏物語』を、私は非常な感激を以て讀みつづけた。そして貧富の問題の解決が、強く念頭を支配して離れぬ様になつた。當時大阪に於ける私の生活があまりにも激しい貧者と富者との對比の中に置かれて居たからであらう。

其の後京都に於ける高等學校から大學にかけての六年間、時は恰もデモクラシー、無政府主義、社會主義、共產主義等の思想が次々に燎原の火の如く焰上した時代であるが、私も亦この時代の激しい思潮の影響をうけて次第に左に傾いて行つた。友愛會の西陣支部が出来た當時には、私も早速

かけつけて話も聞き、話もしたけれども、私は、そうした會合で叫ばれた鈴木文治氏や高山義三、古市春彦氏等の演説には、根本に於て共鳴することが出来なかつた。労働者達に階級闘争を煽るところが、國家秩序の上からは勿論、労働者に對しても斷じて幸福を齎すものでないことを痛感して居たからである。

赤松克麿氏が來て新人會の京都支部を設けたとき、市會議事堂で演説會が開かれ、私も求められて演壇に立つたが、しかし私の話した趣旨は「労働者よ煽動に乗るな」といふのであつて、他の辯士のととは全然反對のものであり、従つて開會直前に赤松氏からやめて呉れといふ交渉をうけた位であつた。

當時私はいはゆる資本主義組織の下に於ける貧富の對立と階級闘争の必然を信じ、眞の舉國一致が社會主義制度の下に於てのみ可能であると信ぜざるを得なかつたのであつた。自らの忠君愛國の精神を信頼し、また労働者を煽動することのよくないことを痛感して居ながら、資本主義の矛盾と社會主義の理想とを大衆の前に幾度叫んだことであらう。舞鶴の海軍工廠の職工の集まりに招かれて駆付けた時など、たしか高等學校の卒業試験の初まる前日であつたと記憶する。

思想的には河上博士に傾倒し、そのために大學も京都の經濟學部を選んだのである。博士からは

學問研究の上のみならず、色々つくせぬお世話になつて居る。和歌山高商への就職も博士の推薦によつたのである。しかも私は大學在留中から、田島錦治、山本美越乃兩博士の國家觀念と其の人格とは強くひかれて居た。さうした矛盾が私の大學時代を貫いて居るのである。

社會の根本缺陷の救済策を求めんとしてマルクスを読み、マルクスに倚りながら、一面其の理論の根底に對する疑惑は、すでに大學の中期から萌して居た。東京の新人會から來た細迫君と論争して、同君を憤慨させたり、大學聯盟の講演會で「唯物史觀への疑義」を發表して、極左の學生達から激しい詰問状をうけたりした。しかも和歌山へ赴任して後も、マルクス經濟理論への愛着を離れ得ず、容易に國家社會主義の支配から脱することは出来なかつた。かくして赴任後の二ケ年間、今から思へば、生徒に對してはまことに申譯のない講義をして居るのである。

私の思想に重大な轉機を與へたものは二年半の外國留學であつた。在外一年にしてすでに私の思想は、ただにマルクスのみならず、社會主義一般に對して、全然反對の立場に轉じて居た。次々に留學して來る學友達が、ヒルファードイングの『金融資本論』の輪讀などを初めるのを不愉快に思ひ、口を極めて社會主義、共產主義を批判したが、當時歐洲各國は非常な勢で社會民主主義化して居た際でもあり、多くは私を反動と呼んだ。私はロシアを在留國として追加を願ひ（革命後の留學生

としては初めての終りであつたかも知れない。昭和二年の春、新經濟政策による「復興期」の終りのモスクワを訪ねたが、すでに一人の熱烈な批判者としてであり、何一つとして魅力を感じしむるものはなかつた。

昭和二年の秋に歸朝して見ると、日本の共產運動は恐しいまでに普及して居た。私は微力ながらも、かたくマルクシズムの理論的克服を決意して正面から批判して行つた。生徒は授業中に立上つて反抗して來た。講演會場には勞農黨派からの脅迫状が届いて居た。會での恩師からは堪へ難い言葉を以て罵られもした。「マルクシズムを中心として其の説明と批判」は私の處女出版であるが、當時の忘れ難い記念物でもある。

社會主義計劃經濟が經濟計算に於て、即ち生産の經濟的遂行に於て、救ひ難い難點を藏することに氣附いたのは、あたかもソ聯の五ヶ年計劃の大成功がジャーナリズムによつて傳へられて居た昭和五年の春である。翌六年の夏には再びロシアを訪ねた。山岡大尉のお世話でコム・アカデミーに於て、オストロヴィチャノフ、ゼニースの兩教授と、經濟計算に關する應答を重ねた。更に獨逸に於けるこの問題の先覺たるブルツクスとハルムの兩氏の門をもたたいて見た。そうして爾來約十年の間、この問題は私の社會主義研究に於ける中心の課題である。

昭和七年の夏、この問題についての一應の研究の結果を、『經濟計算』と題して世に問ふて見たが、二三の學者を除いては殆んど反響を呼び得なかつた様である。然るに其の後英米の經濟學界に於ても、この問題はハイエークやピグーを初め名のある教授たちによつて取上げられるに至り、また私の學問も、遅々としてではあるが若干の進捗を見て居る。加ふるに私の前著はすでに久しく絶版となつて居ることでもあり、書肆の求めを機會に、全部に亘つて書改め、更に其の後の研究を加へて今ここに公にする次第である。

わが經濟學界に於ても、近頃に至つて、若い學者たちのなかに、この問題の重要性が次第に認められて來た様である。私はこの書がさうした人々の研究に資し、眞に我が國體に即する新しい經濟學の樹立のために、いくらかでも役立たんことを期待するのである。

昭和十四年一月三日

於東京 著 者



# 目次

## 第一編 問題の性質と歴史……………一

### 第一章 問題の性質……………三

第一節 經濟と經濟計算との關聯……………三

第二節 交換經濟組織の下に於ける經濟計算……………一八

第三節 社會主義計劃經濟制度の下に於ける經濟計算と其の研究の必要……………三九

### 第二章 問題の歴史……………五

歐洲大戰までの概觀(五) 歐洲大戰時に於ける戰時經濟の經驗と其の影響(五)

フォン・ミーゼス、マックス・ウェーバー、ボリス・ブルツクスの三人の寄與(六三)

獨塊に於ける爾後の推移(六六) 英米に於ける研究の經過(七三) ソ聯邦に於ける

經驗と理論(七七)

第二編 諸理論の批判 ..... 九三

第三章 實物によりて計算せんとする見解 ..... 九五

第一節 ノイラートの實物計算論と其の批判 ..... 九六

第二節 チャヤノフの實物計算論と其の批判 ..... 一〇九

第四章 労働を尺度として計算せんとする見解 ..... 一三七

第一節 ヴアルガの労働價值計算論と其の批判 ..... 一三八

第二節 ストルミリンの労働・效用計算論と其の批判 ..... 一六〇

第三節 ライヒターの労働價值計算論と其の批判 ..... 一七六

第五章 貨幣價格によりて計算せんとする見解 ..... 一九二

第一節	カウツキーの傳承價格・協定修正論と其の批判……………	一九二
第二節	ハイマンの傳承價格・歸屬計算論と其の批判……………	二〇一
第三節	テイラー、ランゲの傳承價格・試行錯誤法の提唱と其の批判……………	二一九
第六章	合理的經濟計算を不可能とする見解……………	二三七
	——ルードウツヒ・フォン・ミーゼスの所説——	
第七章	競争導入による問題解決の試み……………	二五七
	——競争的社會主義の吟味——	
第二編	經驗の吟味……………	二八一
第八章	ソ聯邦の經驗と經濟計算……………	二八三
	はしがき(二八三) 十月革命直後に於ける一聯の措置(二八四) 狹義の戰時共產主義	
	への移行(二八八) 破局と其の原因(二九三) 新經濟政策の本質(二九六) 一九二四年	

の恐慌——ネップ末期の行詰(三〇二) 五ヶ年計画の由來と其の本質(三二) 資金  
調達の仕方——貨幣經濟の前提と市場均衡の考慮(三六) 前提せし實現條件の  
缺除(三三)

## 第九章 ソ聯邦の經驗と經濟計算 (つづき)……………三九

計劃遂行途上に於ける動搖(三九) Ⅱ「一」生産計劃の修正と國民消費の強制的縮  
少(三九) Ⅱ「二」紙幣の増發と私的部門に於ける收奪の強化(三三) Ⅱ「三」商品飢  
饉と配給制の出現(三六) Ⅱ「四」信用制度の改革と幣制の崩壞(三九) 經濟危機の  
實相——經濟計算の喪失(三九) 諸の企圖の効果(三六) 一九三二年以後に於ける  
混亂の兆候(三六) 難局突破の窮策——テロの強化と資本主義諸制度の復活(三八)  
計劃の齎せる民衆の經濟狀態(三二) 結語(三九)

## 附 錄——經濟計算に關係した四つの論文……………三九

### 第一 社會主義國家に於ける價格……………四〇

- 一、社會主義國家に於ける價格決定機構の必要(四〇三) 二、貨幣制度——地代の必要とその量の決定規準(四〇七) 三、利子の必要とその量の決定規準(四一〇)
- 四、勞賃決定の規準(四二三) 五、社會主義國家に於ける價格決定の可能性——價格決定機構の要件(四二六) 六、實行の可能性に就て——ロ氏の見解(四三二)
- 七、實行の可能性に就ての吟味(一)(四三五) 八、實行の可能性に就ての吟味(二)(四三九)

## 第二 經濟計算の立場から見たギルド社會主義並に

サンディカリズムの批判……………四三七

- 一、本文の目的——執筆の動機(四三七) 二、サンディカリズムの主張(四三九) 三、サンディカリズムに對する從來の主なる批判(四四〇) 四、サンディカリズムへの經濟計算の立場からの検討(四四三) 五、ギルド社會主義の主張(四四五) 六、ギルド社會主義への從來の批判と經濟計算の立場からの検討(四四九) 七、分權的社會主義と經濟計算(四五二) 八、社會主義の幻想性と經濟計算の立場(四五四)

## 第三 共産治下に於けるロシヤ農民の生活……………四五七

- はしがき(四五七) 革命直前のレニンの認識と革命直後の農村對策——土地の分配(四六〇) 強制的な差押と徴發の開始——貧農委員會から武装徴發部隊まで(四六三) 農業生産力の漸減と農民搾取の強化(四六四) 政策轉換論の擡頭と處置の混亂(四六六) 資本主義への退却——新經濟政策の採用(四六八) 戦時共産主義の教訓(四七二) 新經濟政策の本質(四七三) 所謂資本主義經濟機構の復活——新經濟政策の教訓(四七五) 政策轉換の遲滞——餓死する者五百萬(四七七) 餓死の原因——政策の影響(四七九) 復興過程に於ける農民の苦難——缺狀價格の開閉(四八〇) 缺狀價格發生の原因(四八三) 工業品の販路恐慌——一九二三年秋の農業狀態(四八七) 農民生活の一时的平安(四八九) 穀物最高價格の公定——農民一揆——政府の農民に對する大讓歩(四八九) 政府の穀物買附けの失敗(四九二) ソ聯當局のなやみ——集團化政策への契機(一九九三) 農村集團化政策への轉換の契機(一九九四) 集團化政策と富農剝滅政策(四九八) 富農剝滅政策實現の方法(四九九) 祕密廻章と

富農剝滅の實相(五〇三) 青天の霹靂——農民の一揆とスターリンの退却(五〇七)——  
—集團化の再強行——農民の涙(四〇九) 集團化運動と農業生産力(五三三) 最後年  
度に於ける決定的失敗——餓死する者再び五百萬(五五五) 窮餘の策——單一旅  
券制度と連座の刑(五二八)

#### 第四 自然經濟組織と計劃經濟制度……………五二

- 一、自然經濟組織(五二)
- 二、計劃經濟制度(五八)
- 三、統制經濟制度(五三)



第一編 問題の性質と歴史



# 第一章 問題の性質

## 第一節 經濟と經濟計算との關聯

財貨に對する需要（欲望、要求）と其の充足との持續的な調和を求むることは、生の根本的な要請であり、而して吾々が經濟と呼ぶものは、生のこの要請に答ふるところの生活現象であると考へられる。それ故に吾々の經濟の研究は何よりも先づ、吾々の生活體驗に於ける、財貨に對する需要と其の充足との根本關係を反省することから出發するであらう。

凡て吾々の需要は、ある特定のとき、特定の財貨に對するもの、すなはち特定の需要に就て見れば、それが充足せられるにつれて、次第にそのはげしさを減少し、遂に飽和の状態に達して終息する。たとへば如何なる酒豪も杯を重ねるにつれて飽くに至ること、何人も經驗熟知するところである。而して欲望漸減の法則、又は效用遞減の法則などよばれるものは、需要の充足に於ける右の事實の認識に外ならないであらう。（註一）

然るに吾々の需要は充されるにつれて次々に擴大して止るところがないといふことも亦、何人も知るところである。蓋しある特定の需要は、上述の如く、充足することによつて遞減終息するのであるけれども、それと共に新たな需要が次々に發生するからである。かくの如くにして、たとへ需要を充足するための生産物が如何に増大し行くと、需要の全部は、常に永久に、充足しつくされるものではない。換言すれば全體としての需要には飽和點が存しないのであり、需要充足の手段たる財貨は、常に需要に對して稀少たるを免れないのである。周知の如く、人類社會の歴史に於て、財の生産力は不斷に増大の一路を辿り來つた。而して、生産され分配される財貨は、其の種類も分量も驚くべきほど増大して來たにも拘らず、家計に於ても財政に於ても、充されざる要求がつきず、常に所謂「財源の不足」を告げつつあるといふ事實は、まさしく需要と充足との間に存する右の根本關係によりて然るものと考ふべきであらう。

生産物が永久に稀少性を免れないと云ふことは、財貨の生産調達に要する生産資源が、人類の需要に對して、永久に稀少であるといふことと同じ意味のものである。このことは説明するまでもなく明であるが、私が以下の立論に於て第一の前提とするものは、この生産資源の永久稀少性といふ事實である。すなはち生産資源が、需要に比して少いといふことは、人生の需要と其の充足との根

本關係に基いて起る現象であるから、社會組織の如何に拘はらず、また國民性の如何を問はず、人類の歴史を貫く、いはば宿命的の事實であるといふことが出来る。(註二)

生産資源の、稀少といふことは、さきにも一言せし如く、家計にとりてはその所得が用途の全部に及ばざることを意味し、國家の財政にとりては國費支出の諸要求に對する歳入の不足として表現されるのであるが、國民經濟に就ていへば、生産力が如何に増大し行くと、其の生産總資源は、つねに國家並に國民のすべての要求を充すに足らぬといふ事實を意味するのである。

さて右の事實から必然に結論され得ることは、財及び生産資源は、稀少なるが故に、無駄や浪費をしてはならないといふこと、すなはちそれ等の使用はつねに經濟的であるべく、不經濟的であつてはならぬといふことの要請である。普通の場合における空氣や太陽の光の如くに、要求に對して供給が無限に存在する財(所謂自由財)については、それ等が如何に大なる利用性を有するとも、これを經濟的に用ふべしとの要請は起らないのであるが、一般の財貨に就ては需要に比して稀少なるが故に「經濟的に用ひねばならぬ」との要請が起るのである。而して財貨の稀少が永久的事實である如く、その必然の結果たる、その生産資源の經濟的使用の必要も亦、永久的事實であるといふこ

とが確認されなければならぬ。

價值と稀少性との關係については、西洋の經濟學者がやかましく問題にして來たところであるが、そのことは西洋の學者の説をまつまでもなく、わが國では古くから常識的に知られて居たことであらう。國語の上に於て、「乏<sup>ま</sup>し」といふ言葉が、足らず、少しといふ意味から、愛でたし、好しと思ふ、羨し、戀ひ慕はしといふ意味に用ひられ、また「めづらし」といふ語が、愛づらし、うつくし、愛づべくありといふ意味であり、同時に稀有なりといふ意味である。「ありがたし」が、世にあること稀なりの義より來れることは周知の通りである。(言海)

然らば財と生産資源とが經濟的に使用さるべしとは如何なることを意味するかといふに、吾々は吾々の諸の需要のうちに價值判斷を行ひ、選擇を行つて、稀少なる資源が生活に對して最大の効果を發揮する如くに配分利用されねばならぬといふことを意味するのである。これを家計に就ていへば「家計の主」はその收入總額を考へ、その家の諸需要を考へて、一家と云ふ永續する構成體の需要と充足との持續的調和の精神に於て、用途の比較選擇を行ひ、それぞれの諸需要の間に適當に總收入を配分しなければならぬのである。ある要求があるからといつて、その充足のために餘りに多くを配分しすぎて、より大切な他の要求が充されないといふ様なことがあつたり、現在の需要が充分に充されるために、年末や老後や、更には子孫の時代に於て首が廻らぬといふ様な家計のもち方

は、經濟的であるとはいへない。國の財政に就ていへば國務に關して必要とする各官廳からの諸要求に基き、「國家隆昌」の立場から價值判斷を行ひ、取捨選擇を行つて、要求に比して稀少なる國庫の歳入總額をば、それが國家に取りて最大の効果を發揮し得るところに適切に配分利用することゝを要する。家計や財政や其の他の構成體を内包するところの綜括形成體としての國民經濟についても亦同様であつて、限りある國の總資源は廣き意味に於ての國民生活の諸需要と充足とが持續的に調和する様に適切に配分されなければならないのである。

配分はすなはち資源並に諸需要についての價值判斷であり、取捨選擇であり、比較考量であるから、ある特定の需要だけを他の諸需要から獨立遊離して、その充足が必要であるかどうかといふことの決定され得る問題ではないのである。たとへば衛生の見地からのみ考へれば、堅牢にして陽當りもよく、風通しも景色もよい家を造つて住むことが要求されるであらうけれども、それに多くの資源を割くために、子供を學校に通はせることも出来ないし、租税も納められぬといふ様なことは、全體として經濟に合しない。國民教育は大切である。だからといつて一切の國の經費をその方に廻すことの出来ないのもその故である。經濟的配分に於ては、多くの要求が一定量の資源を争ふのであり、従つて一の要求は他の諸要求によつて牽制されざるを得ない。かくして稀少資源の經濟

的使用とは要するに諸の要求の間への資源の適切なる配分であるといひ得る。

この配分を司る者として家計にありては家計の主があり、國家財政については當局があつて、ともに意識的に遂行されて居るが、總括形成體としての國民經濟にあつては、今までの經濟組織の下に於ては、それを意識的に司る者は存在せずして、いはば自然に行はれて來たのである。今日の國民經濟には其の總資源を意識的に配分する者が居ないといふ點をとりあげて、社會主義の側からは、今日の國民經濟に對して、「無政府的生産」といふ激しい惡罵を浴せかけた。而して社會主義計劃經濟の根本的主張は、この生産資源の配分を國家の中央部の手で意識的に計劃遂行しようとする所にあるといひ得るのである。けれどもこれまでの國民經濟組織の下に於て生産資源が意識的に配分されなかつたといふことは、決して配分されなかつたといふことでもなければ、無秩序に配分されたといふ意味に解されてもならない。それ等のことは次節に於て明にせられることである。ただここで確認を求めて置きたいことは、一國の總資源は國民生活の諸需要に對して稀少であるといふ理由によつて、何等かの方法に於て、全體として無駄のない様に節約的に、有效適切な具合に、配分されねばならないといふ一事である。

生産資源の經濟的配分の實現、すなはち無數の需要に應ずべき無數の財貨のうち、何々をどれだけづつどこでどうして生産することにすれば、稀少資源が經濟的に配分利用せられて、家計又は國家生活の需要と充足との持續的調和の精神に適ふことが出来るであらうか。これこそ國民經濟の、従つて國民經濟學の根本問題であるが、疑の餘地のないことは、經濟的配分のためには、それぞれの財の生産に要する費用と結果（犠牲と效果）とを互に比較考量し得なければならぬといふことである。ただその場合問題となることは、諸財の生産調達に要する費用とその結果との相互的比較考量を可能ならしむる條件は何かといふことである。而してこのためにも吾々は何よりも先づ、自らの生活體驗に照して考へて見る必要がある。

先づ吾々の生活需要を直接に充足すべき諸の完成せる消費資料の價値に就て考へて見る。吾々の需要を直接に充足すべき完成消費資料に關する限り、吾々は頭腦による直接的價値判斷に訴へて、諸財の效用を相互に比較決定することが必ずしも不可能ではないであらう。素よりそれ等の財貨が一般に市場價格を有する現實の状態の下に於ては、市場價格の大小を規準として、價格の高きものを以て價値の大なるものとするのが常であらう。けれどもたとへ市場價格を有せざる財、又は市場價格の知られざる財貨に就ても、其の場合己れの需要を充足するといふ見地から、直接判斷によつ

てその效用價値を比較決定することは不可能ではあるまい。例へば健康や名譽や風景の如きものは何等市場價格をもつものではないが、吾々は生活をつづけて行く上に、しばしばそれ等のものと他の諸財との間に價値選擇を遂行しなければならぬし、遂行して居る。また毫も市場の價格を知ることのない小兒と雖も、示されたる玩具のうち、己が好むものを選択し得ることは何人も目撃するところであらう。

斯様に私は完成消費財に關する限りは、人の頭腦による直接の價値判斷が不可能ではないと認める。けれどもそれは嚴密にいへば、其の場合に於ける自らの需要との關係に於てのみ可能であるにすぎないといふことを思はねばならない。せいぜい己れと生活をともにせる家族員の其の時の需要との關係に於て、ある程度まで可能たるにすぎないであらう。生活をともにし居らざる他の人々の需要との關係に於ける財貨の效用價値を比較評價することは不可能である。蓋し特定の財に對する需要の強さは、實に變化常なき性質のものであつて、時により所によりて異なるのみならず、人によりて異なるを常とするからである。異なる個人の諸の需要の相對的重要度を比較乃至評價することを可能ならしむる如き規準が存在するものでないといふことは、今日のすぐれた學者たちの何人も疑を容れざるところであらう。

さて完成消費財に就てここに云ひ得たことは、そのまま其の生産財についても亦いひ得るであらうか。すなはち諸の生産財についても、頭腦による直接なる價值判斷によつて其の價值效用を比較決定することが出来るであらうか。このことは直接判斷の力で諸の消費財の「生産費用」の決定をなし得るであらうかといふ問題でもある。

私見によれば、この直接の價值評價は、評價さるべき生産財が所謂低次のものであつて、それが完成消費財に至るまでの生産行程が、短く従つて簡單に見通され得るが如き場合に於ては、自家の生活諸要求との關係に於ては必ずしも不可能ではあるまいと考へる。例へば家族の封鎖的な自給自足の經濟に於て家長が經濟の形成を行ふ場合の如きがそれである。生産行程が簡單で短かいといふことと、生産せられる財貨が家族の需要のみに應ずるといふことが、そのことを可能ならしむるのである。然るに社會的分業によりて他の諸家族の生活需要に應ずる財貨の生産を行ふといふが如き社會に於ては、それが如何に幼稚な段階に於てさへも、完成財に對する諸要求の強さ、すなはち諸財の效用を比較することの困難なために、直接なる頭腦の價值判斷によりて生産財の評價を遂行するといふことは容易ならぬことで、恐らくは不可能であらうと考へる。

それはともあれ、今日の國民經濟の如き複雑廣汎な社會的生産の行はれる場合に於て、生産財の

評價を直接なる頭腦の價值判斷に訴へて遂行し得ないといふことだけは何人にも議論の餘地はあるまい。今日の國民經濟にあつては廣汎な領域の上に分業が行はれて居り、而も生産物は自家の諸需要を目標とするものではなくて、互に他の人々の家計の、若くは國家の諸需要に應ぜんが爲めのものである。また生産行程は實に複雑を極むるものであつて、同一の生産財も無数の多様な消費財の生産に役立ち得るし、更にまた同一種類の消費の欲望を充し得る財の種類も方法も極めて多種多様であり得るのである。

而して生産の上述の如き複雑な關係は、今日以後と雖もさまで變化があらうとは思はれない。生産力の發達のためには益々複雑にこそなれ單純化することはないであらう。斯くの如き複雑な、いはゆる迂曲生産が、廣汎な領域の上に行はれるところの國民經濟に於て、生産財の價值、消費財の價值、從つて一般に生産の費用と結果とを頭腦の直接判斷によつて評價し比較するといふことは、明に不可能とより思はれない。繰返すやうであるが、この場合過去の封鎖的な自足經濟の經驗からの推論は役に立たないであらう。例へば孤立せる封鎖經濟を營む農民が家畜の増加と狩獵との間に決定を行ふことは困難ではあるまいが、しかし今日吾々の行ひつつあるが如き、例へば一の水流を利用して電力を起すために資源を用ふべきであるか、それとも石炭の採掘規模を擴大するために資

源を投すべきであるかといふが如き問題になると、生産當事者の立場から見ても、國民生活の立場から見ても、何れの立場から見ても、生産の費用とその効果とを單なる頭腦の判斷で評價決定するといふが如きは、到底考へられぬことである。

如何なる社會、如何なる時代に於ても、生産資源はその需要に比して稀少であるから、生産資源の各種生産への配分利用は、經濟的に、即ち最大の効果を發揮するが如くに遂行されなければならぬ。而してかかる資源の經濟的配分の行はれるためには、各種財貨の生産費用とその効果とがそれぞれに評價比較され得なければならぬ。然るに今日の如く廣汎複雑に、分業と迂曲生産の行はれる國民經濟に於ては、各種財貨の生産費用とその効果とを相互に評價比較するといふことは、單なる頭腦の價值判斷によりては行はるべくもない。これが以上述べ來れるところの要旨である。而して以上述べ來れるところを認むるならば、今日の國民經濟に於て、單なる頭腦の判斷に訴へて生産資源の經濟的配分を行ふことは不可能である、といふことを承認しなければならぬ。

然らば今日の如き廣汎複雑な國民經濟に於て、生産の費用と効果との評價比較が可能となり、従つて生産資源の經濟的配分が實現せられ得るための根本條件は何ぞやといふに、それは消費財とい

はず生産財といはず、すべての財について一般的な價值が発見され得るといふことであらう。今日の經濟に於ては、周知の如く、而して後に詳細に述べられるが如く、殆んどすべての財貨が市場に於て賣買せられ、賣買のうちに市場價格が形成される。而してこの市場價格を基礎として生産の費用と結果との綿密な計算が遂行され、それによつて或る生産が經濟的であるか不經濟的であるかを測定することが行はれて居る。今日までの經濟に於て市場價格を基礎として費用と結果の比較計算が遂行されて來たといふことは兎も角として、如何なる經濟組織を採用しようとも、今日及今後の國民經濟に於て、生産に於ける費用と結果の計算のためには、何等かの價值尺度（價值單位）が與へられねばならぬといふことが確認されなければならない。

諸財の生産のための費用と結果とをそれぞれ計算比較するといふことは、生産資源の經濟的配分の條件であり、個々の生産が經濟的に行はれ居るや否やといふ、行動の經濟性を測定することであるといふ意味に於て、それを「經濟計算」と呼ぶことが出来るであらう。而して今日の如き價值尺度を媒介とする綿密な計算によらずしては經濟計算を遂行し得ざる複雑廣汎な國民經濟に於て、若しも價值尺度を発見し得ずして、單なる頭腦の價值判斷に訴へて生産を行はねばならぬとすれば、その費用と結果との比較即ち經濟計算を行ふことを得ず、生産の經濟的に行はれ居るや否やを知る

ことなきが故に、あたかも暗夜に羅針盤なくして航行する船の如くであらう。而して費用と結果とを知ることなき生産に於ては、生産資源の非經濟的配分、すなはちその浪費は必然の結果といふべく、而も容易にそれを自覺する方法なきが故に、結局經濟の破局はこれを避くべくもないであらう。それゆゑにまた、かかる生産は、國民生活の需要と充足との持續的調和を保證するものではなく、むしろ不經濟の混亂と呼ぶべきものであつて、言葉の嚴密なる意味に於て「國民經濟」と名附くるに値しないであらう。

註一 效用遞減の法則に對して「奢侈の欲望に限りがない」といふものがあるかも知れない。けれども奢侈欲望といふ特定の欲望があるわけではなく、それは不特定の奢侈品に對する欲望を包括せるものであり、いくらでも新たなる奢侈品に對する欲望を包括し得るものであるから、效用遞減の命題と矛盾するものではない。貨幣に對する欲望に就ても飽和點がないといつて右の命題に反對するものがあるかも知れない。けれども貨幣に對する欲望は、貨幣の交換價值に對する欲望を意味するものであり、換言すれば、貨幣によりて購ひ得べき無數の財貨に對する欲望をさすに他ならぬから、それは特定せる財貨に對する欲望といふを得ず、従つてまた特定欲望の充足による飽和性への反證となるものではない。元來交換價值に對する欲望は、ただに貨幣に對してのみならず、如何なる種類の財に對しても、これを取得して飽和状態に至るといふことはないであらう。

註二 財貨並に其の生産資源が社會組織の如何に拘はらず永久に稀少性を免れないといふことは、本書全篇の理論の前提をなすものである。その故に、起りうべきあらゆる疑惑を豫想してそれに答へて置くことが適切であらう。

第一に「知足安分」の人士の存在する事實を以て需要の無限擴大性に反對し、従つて財と生産資源との稀少性に反對するも

のがあるかも知れない。かかる疑惑に對しては、知足安分は需要の限りなく擴大するといふ性質を否定するものでもなければ財と生産資源との要求に對する稀少を破るものでもなく、ただ知足安分の士は其の需要を抑制して、處分しうる財力の限度内に於て要求を充すことに不平をもたず、而もその限度が如何に低くとも要求をそれに均衡せしめて安住する事實をさすにすぎないと答へねばならない。彼等と雖も生きて居る以上要求のない筈はなく其の要求が充足されるにつれて次第に高まり行くといふことに於て何等常人と異なるところがある譯ではあるまい。思ふに「知足安分」が説教せられる場合、すでに需要の無限擴大性を前提し、従つて財の稀少性を是認した上で行はれて居るものと解せられる。「知足安分」を説くに當りて往々にして「欲には限がないから」とか「下見て暮せ」とかいはれる所以のものも、要するに人若し現在の要求を充足せる地點に安住の境地ありと思ふて進む場合には、つきつきに新たな需要を孕んで、恰も己が影を把へんとする努力の如く、つひに徒勞に終るべき事實を確認せしめんとして居るのであらう。

第二に私が人の生活に於ける財に對する需要の無限擴大性をとき、従つて財及び資源の永久稀少性をいふとき、人々が四六時中財の不足を感じつつ不満足な氣持で暮して居るなどといはうとして居るのではない。人が需要の充されざることには不満を感じるや否やは性格や年齢、環境、修養等の如何によりて異なるものであるが、何人も仕事に没入せる間は不平不満の感どころか、要求そのものさへも感じないであらう。けれども人が要求を感じると否とにかかはらず、またそれが充されざることには不平不満を感じると否とを問はず要求が充足されるにつれて次々に生起し永久に其のごとくを充足することを得ないといふ事實そのものには寸毫の變化もないと考へられるのである。

第三に極めて重大なことであるが、健全な精神と常識とをもつものは、空腹に際しての食欲、寒中に於ける保温の要求の如き、生理必然的の要求をのぞけば、所謂便利品に對しては、充足し得ないと信ずる要求を抱くものではない。現在もつて居る財力によつて、または努力の如何によつて、充足されうと思はれる場合に欲望となり要求となる。要求の無限とはその様な

ものであつて、充足力の増加につれて擴大するのであり、充足力と無關係に生起するのではないといふことを忘れてはならない。この點について従來多くの西洋經濟學者の欲望又は要求の分析には不充分なところがあり、それが實際政策(社會政策)の上にも重大な過誤をおかすに至らしめて居る様に思はれる。これ迄の學者は需要のうちには有效需要と無効需要とを區別し、富者の欲望は購買力を伴ふが故に有效需要であるが、貧者の欲望は購買力に裏付けられざるが故に無効需要であるなどといひ、而して無効需要の一例として乞食のダイヤモンドに對する欲望の如きを云寫するを常とした。かくの如きはある條件のもとに持ちうべき欲望又は要求と、具體的に持たざる欲望又は要求との混同から來たあやまれる見解である。普通の乞食は現實にはダイヤモンドなどを欲望するものではない。健全な人々は購買力をもつ場合にのみまたは持つ可能性が考へられる場合にのみ、欲望要求をもつに至るものであるから、欲望又は要求と購買力に裏付けられた需要とを區別することは、實際にはさまざまの意味がなく、却つて誤解のもととなるであらう。

生理必然的の欲望、例へば空腹に際しての食欲の如きは購買力のあるなしに拘らず生起する欲望であるが、購買力なくして飢餓に陥るといふが如きは、今日の經濟現象の研究に於ては特殊の場合として取扱はるべきであらう。強いて購買力の如何によつて有效需要と無効需要とを區別するとすれば、有效需要をするか無効需要をするかは富者と貧者とによることではないことを忘れてはならぬ。世の如何なる財産層にも、ひとしく、財の缺乏を愁訴するものと、然らずして満足するものが存在するといふ現實を見るべきである。要求は充足につれて擴大し行くのである。なほこの點については拙著『社會主義制度觀の批判』(一六五—一七二頁)に詳説して置いた。

## 第二節 交換經濟組織の下に於ける經濟計算

本書の問題とする所は、「社會主義計劃經濟制度の下に於ける經濟計算の吟味」である。すなはち計劃經濟をとるところの社會主義制度のもとにあつても、經濟計算が他の組織の下に於けると同様に必要な不可缺なる所以を論證し、更に此の必要不可缺なる經濟計算が、その制度のもとに於て實行可能なりや否やを吟味することである。だが一國の生産總資源の經濟的配分を實現して、國民生活の諸需要と其の充足との持續的調和を形成して行くがために、經濟計算が必要不可缺であることをすでに了解せる吾々にとつては、社會主義的經濟計算の可能性如何の問題は、じつは社會主義經濟そのものの存立の可能性如何を決すべき重大問題なのであり、かくして社會主義の主張に對する批判は、種々なる角度から可能であるとしても、經濟計算の可能性如何の方面からの批判こそは、最も其の核心を突くものであることが明であらう。(註一)

さて問題の全意義を明瞭にするためには、社會主義制度の下に於ける經濟計算の研究に這入るま

へに、從來の國民經濟の組織、即ち所謂「資本主義」經濟組織（註二）の下に於て、經濟計算が如何にして遂行されて來たかといふことについての概觀を與へて置くことが適當であらう。

所謂「資本主義」經濟の本質とするところは、純理論的に、且つ簡潔に公式化するとすれば、ゴットル教授のいふ如く、「企業が優位を占むるところの大規模の交換經濟」と規定するのが適當であらう。けれども本書が主題とするところの「社會主義計劃經濟の下における經濟計算」を検討しようとする今の立場からは、それを社會主義經濟に對比せしめ、所謂「資本主義經濟」としては、何よ<sup>り</sup>も先づ、生産資源の私的分有が是認せられる點、ならびに生産が、原則として、國家中央機關の意識的計劃に基いて行はれることなく、各人民の自由なる活動の綜合としての市場の自動調節作用によりて規制せられて行くといふ點を、其の特質として擧ぐべきであらう。

素より今日の國民經濟の組織に於ても、一切の生産資源が私的に分有されて居るといふのでもなければ、人民の生産活動が無制限に自由であるといふのでもない。また國家官廳人其の他の指導的規制が國民經濟の形成のために有効に作用して居ない等と云ふ意味ではさらさらでない。それにも拘らず、今日の經濟組織の特質として生産手段の私的分有と、生産の自由とがあげられる所以は、それ等が「原則として」合法行爲として是認せられて居ると云ふ意味であり、また市場による自動規

制を指摘するのにも、それが國民經濟の形成にとつて「根本的に」重要な働きをなして居り、國家官廳人其の他の指導規制は、市場の自動規制を前提としての、いはば調整を目的とする高次の「補足的」の作用を營むといふ意味に於てである。

國家官廳人の指導規制が、いはば調整を目的とする補足的の作用を營むといふことを以て、國の統治者が補足的の作用を營むと解されてはならない。むしろ國家官廳人も亦爾餘の國民、即ち經濟活動に勤務するすべての國民と同様に、扶翼者であつて、統治者ではないといふことを意味せんとするのである。官吏の意思または人民の意思などを以て直ちに國家意思なるかの如く見る誤れる考へ方が流行して居るので、誤解をさけるために附記して置く。

さてかくの如き所謂「資本主義」經濟組織の下に於て、經濟の綜合秩序は如何にして可能となるであらうか。すなはち、個々の企業が生産の暗中模索を免かれ、其の所有する資源を經濟的に配分利用し得て、其の持続と存續を實現し得る所以のものは何であらうか。また家計がその勞働力を社會的分業のうちに適當に配置し、また其の所有する財を以て、社會的に生産せられたる諸種の財貨を適當に選擇調達し得て、家計自身の存續を確保し得る所以のものは何であらうか。更に國民經濟全體の總資源が各種生産部門の間に適當に配分せられて、廣義における國民生活の存續の保證たり得る所以のものは何であらうか。これ等の諸問題に答へんとして、探究の歩を進め行くときに、吾

吾は必然に市場に於て形成せられる「市場價格」なるものの、經濟計算の基礎としての重大な役割を發見せざるを得ないのである。(註三)

家計に就ては、すでに前節で述べた様に、其の單純にして規模の狭小なる理由により、封鎖的自給自足の行はれる場合、すなはち市場價格の存在せざる場合にありても、家長の直接判斷のみに訴へれば、諸需要と充足との持續的調和への形成が實現され得たであらう。けれども今日の如き廣汎なる國民經濟の中に於ける家計が多様なる職業のうち、其の勞働の場所を見出し、また多様なる社會的生産物のうちに適當な選擇調達をなし得る所以のものは、諸の勞働と諸の財貨とが、原則として、ほぼ安定せる市場價格を有するからといはねばならない。すでに價格の極めて不安定なる場合に於て、健全なる家計形成の如何に困難に陥るかを想起すれば、價格の今日の家計形成に對する重大なる機能を理解するためには、多くの説明を必要としないであらう。

企業の形成に對する價格の役割は更に重大である。周知の如く今日の企業は一應販賣を目的として生産するものであるが、所與の有限なる資源を用ひて、何をどれだけ如何なる方法を以て造るべきかの決定の指針(方向量)となるものは、何よりも先づ利潤の大小である。利潤とは費用と結果との差額であるが、究極に於て、費用は用ひられる生産諸要素の價格から算出せられ、結果は生産物

の價格から算出されるのである。かくして生産物に就ても、生産資源に就ても、市場價格が客觀的に與へられて居るといふ事實こそが、企業者をして其の活動の經濟性の吟味を可能ならしめ、以てその處分する資源の經濟的配分による形成を可能ならしめて居ることを知るのである。而してかかる重大なる機能を果すところの價格が、私的分有組織に條件づけられる市場の賣買と不分離の關係にあるや否やに就ては、本書の後章に於て明にさるべき問題として、暫く未解決に残して置かう。

ただ誤解を防ぐために次のことを述べて置かねばならない。今日の經濟に於ける企業經營の指針が市場價格による利潤計算であるといふことは、企業者は企業の最大利潤の收得のみを考へて他を考へて居ないといふ意味ではない。もとより最大利潤の收得のみを考へてよいといふのでもない。また利潤計算による生産が事實上つねに當該企業にとつての經濟的生産を成就せしめて居るといふ意味でもないのである。現實の企業者は、立派な企業經營のためには常に利潤の外に公私の色々な考慮をするのであり、せねばならぬのであり、また如何に綿密な利潤計算に基いて生産したからとて、需要や技術や競争等の諸要素の豫期し得ざる變化によつて、常に必らずしも、豫期の利潤を收得し得るとはかぎらないのである。ただここで確言し得ることで、且つ重要なことは、市場價格を基礎とすることによつて、兎も角も利潤計算が可能となり、利潤計算を指針とすることによつて、兎も

角も企業活動の經濟性の測定に可能性が與へられるといふことである。すなはちそれによつて企業は暗中摸索を免れて其の持續と存續といふ意味での經濟活動の可能性が得られるといふことである。現實には一時的に如何に經濟性の實現から離れようとも、それが離れたといふことを知るための「ものさし」が與へられて居るといふことこそが、經濟の形成にとつて重大な意味をもつのである。

今日の國家財政にとつての價格の役割の重大性については、價格の變動でさへもが豫算の實行を不可能ならしむるといふ一事を想起すれば明であらう。ほぼ安定せる價格を前提とすることなしに、歳出を見積ることも、歳入を見つめることも共に不可能となるであらう。

最後に問題とすべきは、一般的な市場價格形成の「國民經濟」の形成に對する意義に就てである。上述の如くにして行はれる所謂「資本主義」經濟組織の下に於ける意識的な企業の經濟計算による企業經營は、多くの場合直接には、企業自體の立場から見ての經濟性（利潤性）確保のためのものであり、個人資源の經濟的配分が期せられるだけのことである。各企業が自己の存立のために經濟を實現せんとする努力が、國民經濟全體の立場から見ての經濟性を、すなはち總資源の經濟的配分を招來する所以なりや否やは、見えざる自動規制の脈絡を辿る必要の存する所であつて、それこそ學的吟味を俟つて、初めて決せられ得べき問題であらう。

各企業が利潤の持續的收得を忘れざるとき、その結果はどうなるであらうか。いふまでもなく、「引合ふ」ためには商品又は生産物は充分な販路をもつものでなければならぬ。而も單なる販路をもつといふだけではなく、仕入又は生産の原價並にそれに伴ふあらゆる諸掛をば、計算の最後の結果に於て超過する程度の價格で販賣し得るといふことでなければならぬ。而して斯かる販賣を可能ならしむるものは、畢竟その財貨への需要があるといふことであるが、その需要を分析すれば、家計の側からの家庭的需要、企業の側からの技術的な需要、財政の方面での公の需要から構成されて居る。企業家の利潤收得の努力はそれ等の需要を目指して行はれるのである。

企業が需要の充足を目指すといふとき、人あるひは異議を挾んで、企業は屢々種々の方法によつて需要そのものを造り出すにあらずやといふかも知れない。けれどもかかる疑問は需要の分析の不充分のゆゑに起るものであらう。企業の賣行きの基礎となる需要は、元來すでに物的に體化せられた需要たるを要しないのであつて、屢々いはば「潜在的」需要たることで充分なのである。その場合廣汎な大衆の如きにあつては、最初は特定物に對する欲求といふのではなくて、例へば差當り「教養」とか「娛樂」とかを望む漠然たる欲望として動いて居るのであり、企業はかかる欲望に對して、供給によつて、例へば娛樂の欲望に對してはラヂオの如きそれを充足する新たな様式を提供

するのである。大衆は暗示、模倣、等の方法を通して遂には「ラジオを聞きたい」といふ欲求を生じ、それを契機として供給品に對する一の具體的な需要を生ずるのである。かくして潜在的の需要が一の對象的に定まれる需要に轉化するわけである。

さて企業家は如何なる欲望をも直ちに充足せしめんと努めるものではなくて、需要者が充足のために充分なる値の支拂を認める如き欲望をのみ選擇して充足せしめんとつとめる。それは企業が利潤を追及することの一つの結果といふべきであらう。而して買手自身にとりては、かかる價格の受諾せられるのは、其の家計、企業等の固有形成の立場から考へてのことであるから、企業者が右の選擇を行ふといふことは、畢竟需要者の經濟の固有形成を助ける意味をもつものである。かくして右の過程の行きつくところは、價格、利率等今日の經濟生活に於けるすべての所謂「方向量」(指針)は、企業にとりては其の利潤性を保證するものであり、家計にとりては同時にその家計の存續を保證するところの高度、すなはちそれ等すべてにとつて、同時に充分なる存續を保證する高度を指示するものと云ふことが出来るのである。

尤も右の如き方向量の一般的均衝は現實には近似的にしか到達せられ得ないのみならず、屢々混亂の迂路を辿りてのちに現實にされるのである。即ち往々にして、價格は右の高度以上に上ること

もあり、逆に右の高度以下に下る場合もある。價格が右の高度以下に下るといふ事實は、企業にとりては利潤性の中絶を意味し、その故に企業者は其の方向に於て、より以上の購入又は生産を中止せんことを志すことになり、需要者にとりては、當該需要は所與の状態の下に於ては、すでに飽滿せること、従つて需要の後退を意味するものである。また反對に價格が右の高度以上に上ることは需要者にとりては當該需要の充されざること、即ち需要の増加を意味し、企業にとりては豊かな利潤性を意味し、企業者は其の商品の購入又は生産擴張を意圖することを意味する。

かくの如くであるから、企業者が利潤の指針に従つて生産活動を營むといふことは、すでにそれだけで、原則として需要者の形成作用に適當に奉仕することであり、一國の國民經濟から見れば、其の生産總資源が需要の強度に適應して最も經濟的に配分利用せられることを意味するのである。それ故に、今日の經濟に於て、萬一にも企業者たちが利潤性を指針として行動しないとか、してはならないとかいふことになれば、其の結果は必然に一國資源の配分が需要の強さに適應しないこと、即ち不經濟な配分利用が行はれることになつて、國民生活の需要とその充足との持續的調和といふ意味に於ける國民經濟は形成されがたいことになるであらう。今日の國民經濟の存立にとつて、企業者の企業の利潤性に従ふ活動は凡そ右の如き重大な役割を果すのである。それは價格による經濟

計算の結果として「自動的」に達成されるものであり、その意味で屢々「見えざる手に導かれて」實現されるといはれて來た所以である。

なほここで右の説明に關して起ることあるべき若干の疑義に答へて置かねばならぬ。吾々が屢々社會主義者たちから聞かされるところの非難は、第一に、なるほど今日の經濟に於ける自動規制は、生産をして諸需要に適應せしむるであらうが、ただ一概に需要といふも需要者のなかには貧富の差があり、従つて其の購買力に差があるために、需要に適應する生産は、必然に國民のすべてに對し平等に其の要求を充す結果とならないではないかといふ抗議である。かかる抗議に對しては次の如く答へねばならぬであらう。

凡そ私的私有組織（私有財産組織）を基礎とする限り、所詮貧富の差は免れない。而して購買力に裏付けられた需要のみが生産資源を吸引し得るのであるから、論者の云ふ如く、また論者のいふが如き意味に於て、萬人平等にその要求を充足し得るが如くに資源の配分は行はれるものではない。けれども論者は、第一に私有財産組織が必然不可避のものであることに思ひを致すべく、第二に萬人平等の需要充足はただ一つの原理に基く共產理念に止まるものであつて、それが必らずしも一國資源の最大效用を發揮する方法でもなければ、國民の最大幸福を實にする所以でもないことを思は

ねばならぬであらう。私有財産組織が人の世に不可避のものである所以の説明は、他の著述に述べたからそれに譲る（社會主義制度觀の批判（二））。平等分配の理念に就ては、平等分配の理念と同じ程度に、またはそれ以上に、努力に應ずる分配、徳性に應ずる分配、功績に應ずる分配、等々の理念も亦、それぞれ一面の立場からは、正義の實現と考へ得ないではないといふことを注意したい。更に考へねばならぬことは、第一節の註に於ても觸れた如く（一七頁）人の持ち得べき要求は如何にあらうとも、健全な精神の人々は、現實具體的には、原則として達成不可能なることの明な要求を持つものではなくて、それぞれ購買力に相應した要求をもつものであるといふ現實である。それ故に今日の經濟が購買力に裏付けられた需要に適應した生産を實現するといふことは、概言して通常具體的に人の抱く要求に適應した生産の實現を意味すると考へられるのである。

第二に、これも社會主義の側から、「利潤を追及する經濟のもとにあつては、儲かりさへすれば『不必要』な財貨が生産せられる反面、儲からぬといふ理由で『必要』なものでも生産せられ得ないではないか」といふ抗議が繰返されて來た。けれどもこの場合先づ、嚴密に反省さるべきは、所謂必要又は不必要といふ言葉の意味であらう。所謂必要なる言葉が「需要」を意味し、「儲かるが故に需要のない財貨が造られる」といふ意味であるとすれば、左様な非難は事實に反すると答へねば

ならぬ。さきに縷々説明せる如く、企業者が利潤性に従ふことの結果として、生産はむしろ必然に需要に適應するに到るものなのである。「需要のなきものでも儲ければ云々」といふこと自體が粗雑な表現である。需要のないものは儲かることがないからである。

また「必要」といふ言葉が、風紀、衛生、教育、美術等々、要するにある特定の見地から見て必要と言はれる場合がある。例へば「酒煙草の如き不必要なものの生産に多くの生産資源が割かれるのに、必要な美術館等の建設が起らぬ」などといはれる場合の如きがそれである。個人の主觀的な嗜好の立場から見ての必要不必要の論議は、いふまでもなく取上げる價値のないものであるが、しかし國民生活の健全な持續發展といふ全體的見地から、諸の需要のうちに必要な價値判斷を加へることは極めて重要なことである。例へば風紀を濫し、身心を害する如き消費は排斥せらるべきであり、またかかる不健全な需要に應ぜんが爲めに企業者が資源を投ずるといふことは非難されるべきことである。けれどもこのことは、消費者に對する消費道徳、企業者に對する生産道徳の教育と指導統制の必要なる理由とこそなれ、價格による利潤計算を指針とする生産組織そのものの罪として其の排棄を主張する根據とはならぬであらう。

さて以上の諸の非難は、今日の經濟組織に於ての生産が需要に適應して行はれることを一應承認

した上で提起されて居るのであるが、更にそれらとは種類を異にして、生産が需要に適應して行はれるといふ事實そのものを承認せざる一の非難が存する。それは次の如く要約することが出来る。

「資本主義經濟組織の下に於て、生産が需要に適應し、結果的に見てそれが全體の消費者に奉仕し得たのは、生産に自由競争の存した過去のある時代のことである。然るに資本主義的生産競争の必然の結果は、ある時期に到つてカルテル、トラスト等の支配的な『獨占資本主義の時代』を成立せしめた。この獨占資本主義への構造變化の結果、競争はすでに死滅せるがゆゑに、獨占者は任意に生産數量を制限して高價格を維持し、消費者の犠牲に於て獨占利潤を持続することが出来る。すなはち最早生産者たる企業者の利益は需要者の利益と一致せず、従つて一國の總資源は需要に適應して配分せられざるに至つた」云々と。

かかる見解は今日はかなり廣く我が一般思想界並に經濟學界を支配して居るのである。それが元來マルクス・レーニン主義の見解に出發せるものであることは改めていふまでもないが、それは兎も角として、かかる見解の誤謬を指示するためには、第一に「過去の如何なる時代と雖も任意の誰もが任意の生産事業への競争者として立あらはれ得た様な時代はなかつた」といふ事實を、第二に「カルテル等の支配する今日の時代に於ても、生産競争は不相變、陰に陽に、作用をつづけて居り、

競争の形態こそ變化して居るが競争そのものは決して排棄されては居らない」といふ事實を反省確認せしむることが根本的に必要であると考へるのである。而して第一の點に就ては説明を要しないであらうから第二の點についてのみいささか説明を加へよう。

大規模の企業がその創設費の増大其の他の理由によつて次第に競争企業者の數を減少せしめたといふことは承認されねばならぬ。けれども他の一面に新たなる無数の企業が創設せられつつある現實も看過されてはならぬ。更にまた、競争企業數の減少せる産業に於ても、競争者の數の多寡は競争の烈しさを決する尺度とはならぬことを忘れてはならない。現に某々の二、三の巨大なる企業の間にはさへ激烈不斷の競争がつづけられつつあることは、何人の眼にもあきらかな事實であらう。

固定費の大なる企業（所謂資本組成の高い事業）の間に行はれる自由競争の結果は、生産物の價格をして比例費の近くまで低下せしめる傾向をもち、競争者の双方をして永久に固定費の回收を不可能ならしむる結果となる。かくては双方ともに企業の存續への形成が不可能となるがために、やがて兩者の間には「停戦協定」にも比すべき、カルテルの成立を見るに至るであらう。これ會て獨逸の經營學の鼻祖シュマーレンバッハ教授が初めて明にせるカルテル形成の論理であり（註四）、後に獨逸に於けるカルテル新學說の中心思想となつたものであるが、要するに「困難の兒」としてのカルテ

ル成立の必然性を明にせる右の見解は、その限りに於ては、是認さるべきである。けれどもそのことから、「競争なき經濟」への「發展」乃至「進化」の傾向を云爲することは、充分に検討されなければならぬことである。

理由はあとで述べるとして、私の結論をいへば、競争の結果として自然に發生するカルテルやトラスト等は、そのままでは、永遠に競争を排棄する力をもつものではなく、従つてそれによつて獨占利潤を持續しうるものではなく、結局一般的には、共倒れを防止し得て、精々會てのそれ無き時代の競争の結果たる平均利潤を含む「生産費に於ける價格」を實現し得るにすぎないと考へるのである。この結論の正否を確めるためには、各個の財貨の供給が唯一の企業の手集中せられる場合、すなはち供給側に全く競争の存せざるに到れる場合を想定して、その場合企業が消費者を犠牲として獨占利潤の收得をつづけ得るか否かを吟味することが便宜であらう。それは恰も、價格が所謂安定均衡點としての需要供給の一致點に落付くといふことを論證するために、一應價格が需要供給の一致點以外の點に定まる場合を想定して、それが持續し得ざる次第を明にする、すでに久しく用ひならはされたと同じ方法を用ふる譯であつて、方法として許されるであらう。

いふまでもなく右の想定の下に於ては、多數の消費者がただ一人の賣手を相手としなければなら

ぬ。従つて、一見した所では、かかる状態に於ては供給者は思ふがままに價格を引上げることが出來て、消費者を犠牲として獨占超過利潤を取得しつづけることが出來さうに思はれるであらう。けれども、かかる場合に於て

第一に、獨占による超過利潤を取得することそのことが、競争企業の創設を誘發することとなつて、獨占は破られ、價格と利潤とは再びもとの水準まで低下せざるを得ないと考へねばならぬであらう。

第二に、一の生産部門又は少數の生産部門に於て、生産量を減少して販賣單價を高め、總利潤を高めるために資本及び勞働力の使用を縮少し得るものとすれば、かくしてかかる部門の事業から解放された資本と勞働力とは、必らずや他に用途を求めて、爾餘の生産部門に流れ込み、そこでの競争を激化せしむると考へねばならぬ。

第三に、若しも高價格を維持するために、從來存在せしすべての生産部門に於て生産制限の努力がなされるならば、資本と勞働とは先づ以て解放せられることによつて其の資本勞働の供給價格を低下せしめる。資本、勞働の供給價格の低下は新企業の設立を刺戟し、この新企業は他の企業の獨占地位を破るであらう。

以上説明せるが如くして、「競争の發生が法律的に禁壓せられて居ない場合」〔註五〕に於ては、再生産の可能なる財貨に關する限り、カルテル等は獨占利潤を持続せしめ得ないのである。それは理論上さう考へられるのみならず、事實の上でも亦證明され得る。ただ再生産の不可能な財貨、例へば特定の鑛物資源の如きが一つの特定企業によりて專有せられる場合、その企業は其の地位を利用して獨占利潤を取得し得るか否かは別に吟味を要するところである。

思ふにかかる場合に於ては、企業者の意思によりて獨占利潤の取得を持続し得るものと考へられる。而してかかる獨占利潤は生産者にとりては普通以上の地代の取得を意味するであらう。尤もかかる場合に於ても獨占利潤を持続し得るとはいへ、次の諸點は注意されて然るべきである。すなはち右の如き場合、一般に消費者は當該商品の使用を制限して、高くつり上げられた原料の代りに代用品を求むるに至るといふことである。例へば石油の世界獨占が、著しく水力、石炭等への需要の増加を惹起せし場合の如きがそれである。それ故にかかる場合に於て、獨占者の獨占的地位に基く超過利潤のみに着眼すれば、如何にも消費者を害して不都合の如く思はれるけれども、要するに再生産の不可能な或る自然資源が現在、節約的に使用されて、より多く將來の使用に残されることを意味するのであるから、廣い永い見地から眺むれば、一概に憤慨するにも當らぬのである。殊にかか

る獨占者の超過利潤に對しては、今日の國民經濟組織の下に於ても、課税といふ方法を用ふることによりて、毫も國民經濟に害を及ぼすことなくして、それを國庫に收め得るのだといふことをも思ふべきであらう。

註一 マルクスは『經濟學批判』の序言のなかで「新たなヨリ高度の生産關係は、その物質的存在條件が舊社會自體の母胎内に於て孵化し了るまでは、決して舊社會組織にとつて代るものではない。だから人間は常に自ら解決し得る問題をのみ問題とするものである。何故といふに、一層正確に之れを觀察するならば、常に問題それ自體は、その解決に必要な物質的條件が既に存在して居るか、或は少くとも其の生成の過程にあるか、の場合にのみ、始めて發生するものだからである」と述べて居る。彼は斯く云ふことによつて、社會主義の實現が問題とされて居る事實によつて社會主義經濟の存立の條件が既に存在してゐるか、或は少くとも其の生成の過程にあることを云はうとしたのである。しかし若し社會主義制度の下に經濟計算が不可能であり、従つて社會主義が經濟として存立の條件を缺くことが明となるならば、現に社會主義の實現を問題として居る者も、それが實現を期することを止め、而して「人間は常に自ら解決し得る問題をのみ問題とする」といふ言葉は「人間は自ら解決し得る問題をのみ問題とするものではなくて、解決し得ないと信ずる問題を問題としないものである」といふことばに改めねばならぬことをさとするであらう。

註二 故ボール教授が『國家學辭典』(Handwörterbuch der Staatswissenschaften)のなかでもいつてゐる様に、今日ノ經濟の組織を「資本主義」と呼びはじめたものは社會主義者であつた。それは現存組織を惡罵する意味に於て、政治的のスローガンとして、用ひられしにはじまつたのである。それ故に社會主義者でもない者が、そうした社會主義の特別の惡意を以て慣用され來れる概念を眼鏡として經濟の現實を認識しようとすることは適當ではない様に思ふ。殊に日本の國民經濟生活を對象とし

て日本經濟學の樹立を志す人々が、いつまでも社會主義の概念に把はれて居るといふことは是正さるべきだと考へる。本書は社會主義の見解への批判を目的とするものであるから、批判の便宜上資本主義といふ彼等の概念を用ひたが、それでも上述の意味から、特に所謂資本主義といふ風と呼ぶことにした。

註三 マルクスが商品經濟（交換經濟）の生産をば、しばしは「無政府生産」（Anarchie der Produktion）と呼んで以來、この言葉は一般に用ひられて居る。それは生産が無政府だといふのであつて經濟が無政府だといふのではない。けれども彼等は生産を以て經濟の中心と見るのであるから、實は「經濟が無政府だ」といふ意味である。そうして無政府とはたんに中央の一元的計劃に基いて遂行されないといふだけの意味ではなくて、「無政府」とは「無秩序混亂」といふ意味で用ひられて居るのである。

今日の國民經濟が中央官廳の一元的計劃に基いて遂行されて居ないといふならば、その通りだといはねばならぬ。家計も企業も自己形成を行つて居るし、國民經濟も官廳の指導統制をうけて居るとはいへ、根本的には自動規制によつて形成されて居るからである。けれども今日の國民經濟に秩序と統一とが無いなどと考へることは重大な誤りである。秩序と統一とが無くて現に幾千萬の家計や幾十萬の企業が分業協力の關係に於て需要と充足との持續的調和を形成して行かれる筈はない。「無秩序の經濟」とは生きて居る死人といふ如き形容矛盾である。現存經濟組織のもとに實現せられる統一と秩序を發見してフィジオクラットはこれを「自然の秩序」とよび「神わざ」と見た。英國正統派の學者達は、これを「自然的自由の組織」といひ「見えざる手に導かるる秩序」といひ、更に「自然の調和」とも呼んだ。彼の歴史學派でさへも、それを「統一的、實在的全體」として見たのである。

社會主義の學者ですらも、實はそこに一定の法則が行はれて居ることを認め、ただ社會主義の社會の如く意識的法則として行はれないで「無意識的法則として作用する」と見たにすぎない。それ故に社會主義者たちが現存經濟を以て「無政府」と呼

ぶとき、それは宣傳目的の意識的な言葉の手法の一種としてか、もしくは理論的思惟の素材を示す以外の何物でもないといはなければならぬ。

註四 「新經濟體制」 Die Betriebswirtschaftslehre an der Schwelliche der neuen Wirtschafts-verfassung, 1928. (土岐政藏氏譯 シュマーレンバッハ著『原價計算と價格政策の原理』東洋出版社)

それは一九二八年五月三十一日ウィーンに於て開催されたドイツ經營學會の大會席上に於てシュマーレンバッハ教授(カチにナチスによつて免官された)のなせる、講演の内容である。その中で教授は自由經濟の時代は永久に過ぎ去つて、今や拘束經濟の時代に這入らんとするとの見解を披瀝し、而して「過去の自由經濟の時代」から、「今日のカルテルやトラスト、その他の獨占事業、國有鐵道、國有郵便、國立銀行、國營保險等々」によつて特徴づけらるる「新經濟時代」すなはち「拘束經濟時代」に變移せし根本的原因を説明して「吾々をして舊經濟を去らしめ、新經濟に入らしむるものは、殆んど只一個の現象に過ぎないで、その現象たるや最初は全く徐々に現れ、何人も夫はそんな有力な作用を營むものとは信じなかつたものであり、且つ、此の現象は今日尙多くの經濟學者から充分にその意義を認められないで、之を理論的に研究してその重要性を正しく批判せるは經營經濟學の明白なる功績である事に氣附くであらう。經濟の大構造を建替へる事を餘儀なくせしむる程の偉大たる影響を有する現象は、經營内部に於ける生産費の推移である。即ち専門の言葉を用ふれば、生産行程中の比例原價の部分は次第に少くなり、固定原價の部分は次第に大きくなり、遂には固定原價の部分は生産費構成の重大部分を占むるに至るであらうと云ふ事が問題となるのである」といひ、而して「比例原價の特質は個々の生産されたる數に従つて、或は各採掘されたる噸數に従つて比例的に増加するにある」が「乍併原價の大部分が固定原價であると、生産を減じて夫だけ原價を引下げる事は出來ない。この場合に價格は下つても、生産減少によつて價格の下落を調節せんとしてもだめである。平均原價の下に更に生産を續けた方がよい。實際經濟は損失を忍んで作業を續けるのであるが、その損失たるや、生産を制限しても殆んど從來と變

らぬ原價を負擔せねばならぬのと較べて輕いのである。」かかる理由から、固定原價の大きい企業は獨立しては生産制限のブレキを失つて居るために、愈々價格を下落せしめるから、やがて相結んでカルテルをつくり、その共倒れを防がざるを得なくなつたのだと云ふのである。

以上の限りに於ては、吾々は大體教授の見解を是認しうる。ただ教授が進んで「近世經濟はその高い固定原價の爲に、自動的に、生産と消費とを調節して經濟上の均衡を保つ處の救済手段を奪はれて終つた」とか「經濟の機構、即ち國民經濟はその獨立せる調節機を失つた」等といふことは、カルテルの下に於てなほ競争が作用し、自動調節が作用をつづけて居るといふことを忘れた謬見である。この誤謬は當時國民經濟學者からも指摘された所である(例へば A. Weber, *Ende des Kapitalismus*)。更に「吾々の經驗するものは根本に於て大社會主義者マルクスの豫言の實現でなくて何であるか？ 經濟の將來に關する彼の考へは現に實現しつつあるを見る」とか「今日の吾が經濟指導者」たちを以て「欲すると欲せざるとにかかはらず、謂はばマルクスの遺言の執行者である」などと揚言するに至つては、此の偉大な經營學者は經濟問題の何たるかについては甚だ乏しい知識よりもたないことを暴露したものである。尤も教授自身は經濟學者達の批判にあつて、自分はマルクス主義者でないのを誤解されたのだと漏してゐたといふことであるが、なほ吾々は日本の經營學者や經濟學者達の述ぶる統制經濟必然の論據(例へば向井、本位田氏等のそれ)に於て、シュマーレンバッハの上記の見解の大きな影響を見通すことは出来ない。

註五 現實には往々にして再生産の可能なる性質の財貨であるに不拘、獨占が存続し獨占超過利潤が持續する事實が見られる。けれどもかかる場合、仔細に獨占利潤を持續しうる理由を観察すれば、それがつねに國の政策によりて支持されて居ることを發見するであらう。例へば自然生のままのカルテルは共倒れを防ぐ機能を果すに止まり、獨占利潤の持續は出来ないのであるが、國家がアウトサイダーの競争を禁止する政策をとることによつて、カルテルは獨占利潤の持續を可能とされるのである。故にかくて生ずる獨占利潤の存続はいはば國の政策がつくり出したものであつて、自然生のカルテルの機能といふことは出來

ない。國家が強制カルテル政策によりて、結果として獨占利潤の存続に可能性を與ふることが、一概に非難されるべしといふのではない。ただ若し非難されるべしとすれば、非難はそれを可能ならしめた國の政策と、かかる政策を利用して獨占利潤を收得するカルテル指導者に向けらるべきものであつて、從來の競争の經濟組織そのものに向けらるべきものではないといふのである。なほ附録第四の敘述を參照。

### 第三節 社會主義計劃經濟制度の下に於ける

#### 經濟計算と其の研究の必要

所謂「資本主義」經濟組織を根本的に變革せんとする意思の上に構想せられたる社會主義計劃經濟の理念とするところは、何よりも先づ一國の生産資源の私的私有組織を排して、それを社會主義國家に所屬せしめ、すべての生産活動を國家の單一なる中央機關の意識的計劃に基いて遂行せんとする點に存する。そは社會主義のとする方法の構成上の特質である。今日の經濟を以て無政府の生産の名を以て罵るところの社會主義は、今日の經濟を根本的に規制して居るところの自動規制に代るに中央官廳による計劃を以てせんとするものともいひ得る。社會主義を其の究極の目的からいへば、所謂無産者を所謂搾取から解放せんとする點に理念を求むべきであらう。けれども其の目的遂行の

ための唯一の方法として彼等にとらんとする經濟制度は、上記の意味に於ける計劃經濟である。社會主義の方法（計劃經濟）をその目的から分離し得るといふことは種々なる便益をもたらず。第一吾吾はある究極の目的の正當性に就ては、或はこれを探り或はこれを拒否することを得るけれども、それを證明したり反證したりすることは恐らく不可能であらう。然るに一定の方法が所期の結果に達し得るや否や、またどの程度まで達し得るや否やの問題に就ては、合理的論議が可能となるからである。而して私が本書に於て取扱はんとするものは、いふまでもなく、社會主義の究極目的の正當性に關するものではなくて、其の方法の妥當性に關するるのである。第二に社會主義の方法たる計劃經濟の制度はプロレタリア階級の利益のために用ひられ得るのみならず、他の目的たとへば貴族的又は官僚的獨裁のためにもまた用ひられ得るものであらう。現に多くの人々によりて、これまでの社會主義の究極目的（プロレタリアの解放）とは異なる目的のために、計劃經濟が主張されて居るのである。かくして社會主義計劃經濟批判に關する本書の所説は、ほとんどそのままに計劃經濟一般への批判として妥當するであらう。（註）

すべての資源を國家に所屬せしめ、國家の單一なる中央官廳の意識的計劃に基いて遂行せられるところの計劃經濟制度の下に於ては、今日の國民經濟の如く、其の構造の中に内包せられる諸の自

己形成の作用を營むところの構成體、例へば家計や企業等は最早存しないであらう。少くとも自己形成を實現する企業が存在しなくなることは明である。今日の企業はそこではすべて全體の一體たる經營に轉化する。各經營の指導者は今日の企業者の如く形成の自由と責任とを負擔するものではなくて、中央部から命ぜられた仕事を、命ぜられた期間内に遂行すべく要求せられるにすぎない。個々の經營指導者は、命ぜられたところを、さらに個々の部分について處理するの自由を有するにすぎないのであるから、固有の形成作用を營むものとはいへないのである。若しも計劃經濟の下に於て個々の經營指導者に對し、今日の企業者に見る如き廣汎なる自由裁量の權限を與へ、何を造るべきか何を造らざるべきかの決定を委ねるとすれば、彼はまさしく固有の形成作用を營むものであるが、しかしかかる場合、そこに形成される國民經濟は、最早計劃經濟ではなくて、自動規制によりて秩序づけられる經濟であり、社會主義者の所謂「無政府的生産」に外ならぬものであつて、其の本質からいつて、彼等の所謂「資本主義」經濟と何等異るところなきものといはねばならぬであらう。(第八章參照)

さて上記の如き計劃經濟制度の下に於ても亦、個々の生産に於ける犠牲と效果との比較考量、即

ち經濟計算を基礎として經濟性を測定すべきことは、それが經濟として存続せんとする限り不可缺と考へねばならぬ。社會主義計劃經濟制度の下に於て一切の生産活動が中央官廳の單一なる意思に從屬するといふ點に於ては、それは會て存在せし自給自足の封鎖的自然經濟に類するであらう。けれどもその生産行程が技術的に複雑を極め、また分業協力が廣汎に亘る點に於て、前者は到底後者と比較さるべくもない。生産行程の單純なる過去の封鎖的家族經濟の事例を援用して、今日の如き國民經濟が社會主義計劃經濟の制度を採る場合に價値を尺度とする綿密な經濟計算なくして存続し得べしと考ふることの誤謬なることは、すでに第一節に詳しく述べた通りである。

社會主義經濟と雖も生産力に限りがあつて資源の供給が需要に及ばぬといふ事態に變りがないとすれば、生産資源の使用は經濟的に行はれることを期せばならず、そのためには生産に要する犠牲費用と效用結果とを比較計算し得るといふことは、必要不可缺なる條件といふべきである。否ただに必要不可缺といふに止まらず、所謂「資本主義」經濟組織の下に於てよりも、社會主義計劃經濟制度の下に於ける方が、一層經濟計算を必要とするとさへ考へられる。この點に就ては次の如く云へるブルックス教授の見解はそのまゝ是認されざるを得ないであらう。

「社會主義の體系から明白に導き出すことの出来る一つの結論は、社會主義社會にとつては、經

濟計算が、資本主義社會にとつてよりも、遙に重要な意義を有するといふ一事である。資本主義の企業ならば、もし望むなら一冊の簿記も持たずに仕事をやらせて置いても差支はない。といふ譯は、もし簿記をつけずに仕事をして失敗に終るとすれば、詳言すれば彼が社會の要求のなきものを生産したるか、若くは平均以上の生産費を費したるか故を以て、經濟的に失敗するに至るとすれば、その失敗の結果は直ちに彼の頭上に落ち來り、彼はその財産とその社會的地位とを以て、生産力の浪費に對する責任を取らねばならず、かくて經濟原則の遵守はおのづから保證せられるからである。然るに社會主義の社會では事情はこれと異なり、若しも大經營の指導が經濟上の計算なしに遂行せられるとせんか、經營の非合理的組織の爲めに起る社會の生産手段の浪費がどんなに激しくとも、經營の指導者自身は全く安穩に止ることが出来る。ところが斯様な經營は、國民經濟といふ有機體にとりては、恰も病的肢體の如きものであり、而も見附からぬ病症の様なものである。見附からぬといふ理由で危険が少いと考へられてはならぬ。人體に於て苦痛を起さぬ傷が一番危険である様に、それは甚しく危険なのである。社會主義社會にとつて最も危険なのは經濟計算の衰弱である。けだし經濟計算の衰弱の結果は國民經濟全體の解體を不可避的に惹起すべきを以てである」(Brutzkus, Die Lehren des Marxismus, 1928, S. 17—18)。

ブルックス教授の右の立言は、一九二〇年、市場を失へる戦時共產主義のロシア經濟の現實を見ながら、公にされたのだといふことは注意に値するであらう。けれども教授自身はもともと社會主義に對して批判的な立場を維持して來たものであり、やがてソ聯を逐はれた學者である。それゆゑに私はさらにマルクス主義者自體が社會主義社會の經濟計算を如何に必要と見て居るかを明にすることによつて、それが如何に重大であるかを示すであらう。此の點に關する代表的意見の二三をあげれば次の如くである。

先づ獨逸の戦後に於ける社會化委員會の書記長をつとめ、後ハンブルグ大學の教授たりしハイマン教授（倫理的社會主義者であり、社會民主黨員であつた。今はナチスによつて免官され、アメリカに亡命して居る）はこの問題の解決のために非常な努力をした學者であるが、彼れは社會主義社會に於ける經濟計算の問題を指して

「この問題は、社會主義經濟にとつて極めて面倒な問題であるが、面倒なるが故に一層その解明が必要なのである」(Eduard Heimann, *Kapitalismus und Sozialismus*, 1931. S. 20)

と述べて居る。また奥大利のマルクシストたるオットー・ライヒター博士は『マルクス研究叢書』第五卷第一冊の中に、明確に次の如く述べて居る。

「經濟計算こそは、全經濟に對して、はじめて固有の意味を與へるものである。何となれば、計算なき經濟は、一個の無茶苦茶な無意味な、原始的欲望充足のものがき以外の何物でもないからである。經濟計算によつて經濟ははじめて自覺せるものである。」(S. 8)

(Die Rechnungslegung muss der ganzer Wirtschaft erst den eigentlichen Sinn verleihen, da das Wirtschaften ohne sie nichts anders als ein wüstes und sinnloses Bemühen um die Befriedigung elementarer Bedürfnisse ist. Die Rechnungslegung ist erst die Selbstbesinnung der Wirtschaft.)

と云ひ、更に語をつづけて次の如く強調して居る。

「社會主義的社會秩序に於ては、ひとりでに、いはば自動的に夥しい消費財貨が與へられるであらうとの考、即ち高度共產主義の考は、少くとも社會主義經濟の最初の階段には妥當せしむるを得ない。他の社會秩序と全く同様に、社會主義社會も先づ節約をしなければならぬことは明白である。吾々にして溢れるばかりの生産力を有する社會を假想するに非ざる限りは……社會主義的社會秩序が經濟計算を必要とするや否やはすでに決定せられて居る問題である。社會主義經濟も亦、費用といふ概念を知るといふこと、すなはち社會主義經濟に於ても亦、勞働の結果と欲望充足とは、それに先行する勞働苦、人間勞働力の使用と物的生産基礎の消費とに支配されるといふ

こと、換言すればすべての勞働の行程は、先行せる費用を償ふに充分なる結果を擧げねばならぬといふ點は、疑の餘地なき所である。……この意味に於て社會主義經濟は、少くともその最初の階段にあつては、否恐らくは其の後の階段に於ても亦、一の合理的經濟でなければならぬであらう。」(『Ⅱ—12』)

同氏は更に次の如くさへ云つて居る。

「社會主義經濟に於ける經濟計算の問題は事物の根本に横はる問題である。従つてこの問題は社會主義經濟一般の可能性に關する問題であつて、それ以上のものでもなければそれ以下のものでもない。蓋し費用と結果とを相互に比較し得ざるが如き一の經濟は、全く非合理的であるからだ。斯の如き經濟、即ちより少き費用で同量の財の生産が可能であるか否かがわからず、生産の結果のうち、どれだけ消費されてよいのか、生産の消耗補充及び擴張、即ち欲望充足改善のために幾何を控除すべきかがわからぬ様な一の經濟は、永續することが不可能である。なぜならば、それは程なく破産して、完全な暗中摸索の状態に陥らざるを得ないからである。」(『Ⅱ—13』)

ハルム教授も、社會主義經濟の經濟計算の問題を以て「すべての社會主義の主たる問題である」といひ「若しも社會主義がこの問題を解決し得ないとすれば、社會主義は最早一つの經濟秩序を造

り得るものではなくして、單に一の經濟混亂を齎し得るにすぎないことを意味する」(Fohle-Halm. Kapitalismus und Sozialismus, 1931. S. 237)と述べて居る。其の他今日では歐米の學者のうちで凡そ社會主義を問題とするほどのものならば、社會主義が解決の必要な重大問題としての經濟計算問題に當面することを否定するものは居ないであらう。だから社會主義計劃經濟も他のすべての國民經濟組織と同様に、またそれ以上に經濟計算を必要とするといふ點に就ては、私もこれ以上に述べる必要はないであらう。

ただここで述べて置かねばならぬことは、經濟學徒としてこの問題をわざわざ研究する學問的の必要があるか否かといふ點に就てである。いふまでもなく、社會主義經濟が經濟計算を必要とする所以を如何程論證した所で、そのことから直ちに、それが學者の研究問題とする價值ありとの結論は出ないであらう。第一その問題が今日の經濟に於けるが如く自然的・自動的に解決の方法が與へられるとか、若くはその解決は意識的に容易く達成されることが明白だといふならば、今からわざわざそれを一個の研究問題として取上げる値打はあるまい。

また社會主義計劃經濟は將來の問題である。經濟學は現實を説明するものであつて將來を問題と

するものではない。だから社會主義經濟の計算といふが如きは、科學としての經濟學の取扱ふべき範圍外に置かるべきだといふものがあるかも知れない。而して左様な見解を有する人々にとつては、私の努力は如何にも奇異な物好きと思はれるであらう。かくして私は社會主義經濟の經濟計算を問題とすることの意義に就て、一言して置く必要を痛感するのである。

社會主義社會の下に於ける經濟計算の遂行は、極めて困難な問題である。このことは經濟計算の可能性に就て學者の間に激しく論争せられて居るといふこと、而してそれはただに社會主義を主張するものとそれに反對する者との間に論争せられて居るのみならず、社會主義者として自他共に許す學者のあいだに於てさへ、見解は區々にして、相互に相手の經濟計算方法の可能性を否定しあつて居る事實を見れば明であらう。社會主義計畫經濟を實驗しつつあるソヴェート聯邦に於ても、この問題が解決の困難なる問題として當面した。多數の解決方法が考へられたがつひに歸一する所を知らず、革命以來一貫して未解決のままに苦心を重ねつつある問題である。それ等の事情については第二章以下の叙述そのものがこれを明にするであらう。

社會主義計畫經濟に於ける經濟計算といふが如き問題を以て現實を離れた未來社會を扱ふものとなし、現實の説明を任務とする科學者の課題の外に却けんとする見解は、從來の我が學界の風潮に

照して、多數の經濟學者の抱懐する所と察せられる。かかる見解に對しては、社會主義計劃經濟の問題は決して遠き未來の世界ではなくて、將に眼前に迫り來れる問題であるといふ事實を指摘しなければならぬ。而して社會主義計劃經濟が經濟として所期の存在に到達し得る可能性ありや否やの嚴密な検討の結果を示すことは、社會主義に賛成すると否とにかかはらず、現代經濟學者のすべてに課せられた最大緊急の任務なりと信ぜざるを得ないのである。いふまでもなく我が國の經濟學者には、こと國民經濟に關する限り、當局者をして輔弼の道をあやまらしめざる様に指導すべき重大な義務がある筈である。従來の經濟組織を根本的に變革せんとする社會主義運動に直面し、また危険の存在を自覺せずしてややもすれば同じ方向に引づられて行く政治の傾向を眼前に眺めながら、何等の指導力もなき我國の多くの經濟學者達は、一體それで學者としての臣道を實踐して居るといへるのであらうか。

「社會主義が人類發展の必然不可避な結果として到來するものだといふ説を承認するとせざるとを問はず、また生産手段を社會の所有に移す結果が、人類に對し最大の幸福を齎すと考へるか。最大の不幸を齎すと考へるかに論なく、社會主義を基礎とする場合の經濟經營の諸條件を研究することは、カウツキーのいふ様に『單によき思考力の練習と考へられたり、政治上の明確を早める

「手段とのみ見らるべき」ではないといふことは、何人も承認しなければならぬ。今日の時代の如く漸次に社會主義に近づき、否或程度まですでにその中に入り込んでゐる時代に於ては、社會主義經濟の諸問題を研究することは、吾人の周圍に起りつつある現象を説明するためにも亦重要である。現時の獨逸並びに東方諸隣國の國民經濟的諸現象を理解するためには、もはや流通經濟の分析だけでは十分ではない。吾々は今日すでにかなりの範圍に社會主義的共同經濟の諸要素を關聯させて考へねばならぬ。かくの如き狀勢のもとに於ては、社會主義經濟の本質を明白にする企ての必要なことは、何等特別の辯明を要しなすであらう」(V. Mises, Arch. f. Sw. u. Sp. 47 Bd., I Heft, S. 78)。

「現代經濟學の直面して居る最も重要な問題は、經濟活動の社會主義的組織が可能であるか、またそれが望ましきものであるかと云ふことに關する諸問題である」(Roper, The problem of pricing in a Socialist State, 1931, p. 9)。

前者は一九二〇年にウキーンのミーゼス教授が、後者は一九三一年にアメリカのローバー氏が、ともに自國の經濟學界に對して社會主義社會の經濟計算問題を投げかけるに當つて宣言した言葉である。私は昭和七年『經濟計算』なる一書を公にするに當つて、其の序文の中に次の如く述べて置

いたが、爾來六年有半今この書に筆をとるに當りても、腦裡を往來するものに變化はない。否むしる日本史の重大な局面に於ける經濟政治の動向に對して愈々憂慮を加へて居る次第であるが、この私の心情と所論とが、どれだけ世の識者の共感を得るであらうか。

「奔流の如き社會主義計劃經濟への動きに、一步をあやまらんか帝國日本の破局來らん。山雨將に到らんとして風堂にみつるもの、微力も顧みるに暇あらず、默せんとするも亦能はざるにあらずや。今や政治家は爲すべく又爲し得べきを爲さずして、爲さざるべく又爲し得ざるを爲さんとす。經濟の地盤動搖して、善良の民をして修身齊家の計を立つるに由なからしむるもの、政治家の無智と無責任なる言動に發する所尠しとせず。經濟領域に於て政治家の役割は何ぞや。又云はん。經濟領域に於て、政治家の爲さざる事と能はざる事との別何處にか存する。これ私が研究の終局の目的とする所にして、本書は固よりその道程に於ける勞作の一部のみ。ただ俱に帝國日本の健全なる成長を希ふものにとつて、脚下照顧の一資料たり得れば幸とす」と。

思ふに社會主義計劃經濟の經濟計算の方向からの検討批判が、單に理論的興味にとどまるものであつて、國家にとりてしかく重大な實踐的意義を有しないと考へられるならば、私は恐らくそれを研究することも結果を公表することもしなかつたであらう。

注 今日我國では「計劃經濟」といふ言葉は、「統制經濟」といふ言葉とともに、人によりて多種多様の内容を以て語られて居る。而してある人は兩者を區別して、前者は所謂資本主義を否定して國家が中央官廳の一元計劃に基いて生産分配を行はんとするものであるが、後者は資本主義競争經濟の基礎の上に國家の指導統制を行はんとするものだといふ。ある人は兩語を全く同意義に用ひて、一般に國家の計劃に基く生産分配の行はれる經濟を指稱する。兩語を同意義に用ふるものの中にも、アメリカのルーズヴェルトのニューディール程度のもを計劃經濟又は統制經濟と呼ぶものもある。ソ聯及びソ聯の系統を引く人は、兩語を區別せず、眞の計劃經濟又は統制經濟は私有財産制を排棄せざる限り實現しうべからざるものとなし、私有財産制の上に於ける計劃、統制化の試みは所詮資本主義の變態にすぎないと見るのである。獨逸や英米には統制經濟といふ言葉はなくて、専ら計劃經濟といふ言葉のうちに、色々な程度のものを含めて居り、ゴットル教授の『計劃經濟の神話』\*に述べて居る様に、時代の合言葉として魅力を以て語られて居るが、すべての合言葉が然るがごとく内容は極めて空漠たるものである。一九三一年アムステルダムで開かれた社會經濟會議の報告討論の記録は『世界社會計劃經濟』(World Social Economic Planning, The Hague, 2 vol., 1931—2)と題されて居るが、その内にはソ聯代表の社會主義からアメリカ代表の科學的管理までが含まれて居る。

斯様な曖昧な状態ではあるが、我が國の計劃經濟論者乃至統制經濟論者の多くが、それを「資本主義」經濟への否定として主張して居ること、従つて市場による經濟の自動調節作用に代るに、國家の中央機關の意思による一元計劃乃至統制を理念として居るといふ點では、共通の觀念の上に立つて居る様に思はれる。しかし計劃經濟又は統制經濟といふ言葉が、一義的に用ひられて居ないといふことを考へて、それに對する批判も亦、言葉よりも其の内容をとらへて問題としなければならぬ。なほ今日我國に於ける統制經濟論者や計劃經濟論者のなかには、言葉の上では「共產主義」や「社會主義」に「絶対反對」を表明しながら、事實はソ聯邦でも企てないほどの徹底した變革案を提唱して居るものも居るし、曾ての社會大衆黨の様に「重要

産業國有」といふ言葉で「私有財産制度の廢止」や「生産手段の社會化、政治的には階級なき社會」の實現を企圖するもの（『日本評論』昭和十一年九月號所載、麻生久氏談話筆記）もある。

また赤旗のもとに世界共產主義のマークを胸につけて平氣で「國體の本義に基き云々」の綱領を叫ぶ政黨もある仕末であるから、「皇道經濟」だの「國體經濟」だのと云つたところで、内容を見ないうちは少しも安心のならぬ状態である。

\* Friedrich von Gottl-Oetilienfeld, Der Mythos der Planwirtschaft, 1932. 經濟の形成に現實に作用しつつある種々なる計劃活動を綿密に分析せる點に於て、私の知る限り、此の書の右に出るものはない様に思はれる。

## 第二章 問題の歴史

### 歐洲大戰までの概観

周知の如くに、社會主義がみづから「科學的」社會主義の名を誇稱してからでもすでに久しいことであり、社會主義社會の實現可能性が問題とされるに至つたのは更に古いことである。しかるに社會主義社會が經濟計算といふ視角から問題とされるに至つたのは比較的新しいのである。我國の如き今なほ極めて少數の學者の注意をひいて居るにすぎない狀況にあるが、英米の學界に於ても、それが問題とされ出したのはほんの二三年來のことに屬する。本章はこの問題についての研究の歴史を概観することを目的とする。

すでに前世紀の中葉に於て、價值問題の研究が、價值の實體實質は何ぞやといふが如き、所詮徒勞に終るべき問題提起の仕方から離れて、價值現象を經濟主體の行動の分析の上に基礎づけようとするに至るや否や、共產社會もまた從來の社會と同様に價值問題に逢着せねばならぬと云ふことが、

ほのかに氣附かれた様である。例へばハインリッヒ・ゴッセンが「共產主義者によつて提案された種々なる勞働と其の報酬の分配のための中央部は、まもなく、個々人の力の解決すべからざる任務を自ら設定したといふことを經驗するであらう」といふ結論に到達した場合に、實は共產主義社會に於ける價值問題の解決の困難が示唆されて居たのである。

ただ前世紀の學者たちは、この問題に氣附いて居たといふだけで、ほんの示唆以上に出ることが出來ず、その立場からの社會主義批判を徹底的に遂行し得なかつた。その大きな理由としては、社會主義者たちがマルクスの遺言を忠實に守つて、未來社會の構造を描くことを極力避けて居たことに原因すると考へられる。すなはち社會主義者たちはもつばら從來の經濟への批判をこととして、社會主義社會が如何なる方法で生産分配を規律するかは之を明示せず、従つて社會主義を批判しようとする者に、批判の對象を判然とせしめなかつた爲めに、批判の徹底が不可能であつたと見るべきであらう。社會主義者たちが意識的に社會主義の構成を示さなつた理由の一つは批判を回避せんが爲めの戰術と見るのが穩當である。

ともかくも、社會主義社會もまた價值の諸問題を有し、それが何等かの方法で解決せられねばならぬ困難な問題であるといふことが明白に指摘されるに至つたのは、今世紀に這入つてのちのこと

である。この仕事を最初になし遂ぐるの名譽を擔つた者は和蘭の經濟學者ビエルソン教授であつた。ビエルソン教授に批判の契機を與へたものは、マルクス主義の代表的學者と目されて居たカール・カウツキーが、和蘭のデルフトに於て行へる講演のなかで、幾分從來の社會主義者の傳統を破つて、躊躇しながらにもせよ「革命の直後」に何が生ずるかについて具體的な素描を與へたといふ事實であつた。

すなはち教授は一九〇二年カウツキーの前記講演の直後に「社會主義社會に於ける價值問題」と題する論文を發表し、社會主義社會が當面すべき價值の諸問題をば、國際貿易並に國內生産關係の兩者に就て詳細に指摘し、且つこの問題は價格制度の無き場合に、異なる諸財の價值を如何に定むべきかの問題であることを明にしたのである。この論文は最初は和蘭語で書かれたのであつて、それが獨逸語に譯されたのはすでに教授の死後一九二五年のことであり、英語に譯出されたのは更におくれて一九三五年のことである。<sup>(3)</sup>言葉の關係から最初は和蘭以外の國には殆んど知られなかつた様である。若しこの論文が最初から英佛獨の何れかの國語によつて發表されてゐたとすれば、世界の學界に大きな波紋を投じて居たことであらう。而して社會主義に對する經濟計算の角度からの批判も二十年も早く徹底して居たことであらう。もしさうであつたとすれば、歐洲大戰前後の、社會

主義のあの様な激しい進展はなかつたのではないかといふ想像すらも不可能ではない。餘談ながら、日本文化の世界宣布といふ課題を考へつつある今の私にとつて、日本語の普及といふことがまことに切實な問題とならざるを得ないのである。

ピエルソンの右の論文が公にされてから二年後の一九〇四年には、佛蘭西に於て、巴里大學のブルギャン教授が『社會主義組織論』といふ大著を公にした<sup>(4)</sup>。而して其の第二章の大部分を以てマルクス社會主義に於ける「價値の單位」を明にし、それにつづく數章を其の批判に當てて居る。夙に社會主義社會の價値問題を取扱へるものとして注目すべきものである。この書は第一版が出て間もない一九〇六年にカツツェンシュタイン氏によつて獨逸譯が公にされて居るが、この問題に關する限り當時はあまり注意を引かなかつた様である。ただ遙か後に、すなはち一九二二年に至つて、オーストリーのマルクス主義者ライヒターが『社會主義社會に於ける經濟計算』といふ書物のなかに、右のブルギャンの説明を引用し且つ讚美して以來は、獨逸でも色々な學者がそれに注意を拂ふに至つた(例へば Johannes Gerhardt, *Unternehmens und Wirtschaftsführung*, 1930)。ブルギャンの右の書は、著者が存命中にすでに幾度か版を重ねて居る。著者の歿後に學士院賞を與へられた。今日に於てもなほ佛蘭西に於ける社會主義批判書中の白眉といふべきであらう。同書の上記の部分は、他の數章

と共に、曾て京都帝大の田島錦治博士の手に邦譯されたことがある。けれどもマルクス主義の支配的であつた當時の我が學界は、ブルギヤンの文章が値するだけのものを汲取ることが出來ず、田島博士譯出の意圖にそひ得なかつた様である。

爾來歐洲大戰の勃發に至るまでの間に、社會主義社會の經濟的諸問題については可成り立入つた論争が行はれ、貸銀、地代、利潤等の如き主なる價格範疇は、社會主義の社會に於ても存立しなければならぬこと、而して少くとも中央計劃部の計算の中にはそれ等が今日と同様の方法であらばされねばならぬこと、更にまたそれ等は本質上今日と同様の諸因子によりて決定せられねばならぬといふことなどが主張された。而してこの點に關して利潤論の發展が殊に重要な役割を演じたが、利潤が經濟活動の合理的計算を行ふに當つて重要な一要素をなすべきことを明確に指示せるものとして、ベーム・パウエルとカッセルの兩教授の寄與を忘れてはならぬであらう。

ただ大戰前に於けるそれ等の著者たちは、伊太利のバローネを唯一の例外として、社會主義社會も今日の如く地代、賃銀、利潤等を決定せねばならぬこと、それ等が今日と本質上同様の因子によりて決定さるべきことを明にしたに止つて、今日いはば自然的に・自動的に解決せられて居るそれ等の價值問題をば、經濟形成の原理を異にする社會主義社會に於て果して實際に解決されうるや否

やを問題としなかつたのである。その點に就ては疑問をさへ起さなかつた様であり、カッセルの如き其の不用意な言葉が後に至つて、往々其の追隨者達をして、社會主義の社會が均衡方程式の助けをかりて問題を解決し得るかの如き誤解を起さしむるの因をつくつて居るのである(例へば Dickinson, "Price Formation in a Socialist Community, Economic Journal, June 1933)。

伊太利に於てはバレートの弟子パローネが一九〇八年に『集産主義國家に於ける生産の管理』といふ論文を公にし、微分方程式の適用によりて社會主義國家の中央計劃部の當面する價值問題の解決を企圖した。この論文は問題解決のための諸條件を明にしたといふ意味に於て興味のものである。ハイエック編輯の『集産的計劃經濟』の附録には、其の英譯が收められて居る。

### 歐洲大戰時に於ける戰時經濟の經驗と其の影響

周知の如く世界大戰が終を告げて、中部及び東部ヨーロッパの諸國に於ては、社會主義諸政黨がつひに政權を掌握するに至つた。而して、今や政治を擔當するに至つた社會主義政黨は、在野當時の様に、「資本主義」攻撃ばかりをやつて居る譯には行かず、一定の積極的な社會主義行動綱領を

考へねばならなくなり、それに應じて、大戦直後數年間に出た社會主義文獻は、如何にして生産を社會主義的方法に改組すべきかといふ實際的問題をやうやく熱心に取扱ふこととなつた。かくして「社會化」(Sozialisierung)に關する驚くべき多數の文獻が公にされたのである。

これ等社會化の問題に關する論議に對して重大な影響を與へたのは、いふまでもなく大戦時に於ける所謂「戦時社會主義」の經驗である。すなはち重要物資の缺乏に對處するために大戦中實施せられた食料品及び原料品の國家管理の經驗は、一般人の頭にも、國民經濟の中央からの指導は必ずしも實現不可能なものでないといふ印象をあたへ、また戦争經濟の諸問題を克服するために發展せしめられた計劃經濟の特殊技術は社會主義經濟の永久的管理にも適用し得るであらうといふ希望を抱かしたものである。

大戦後に於ける社會主義の經驗とそれに関する理論の上から見て、最も注意すべきはロシアと獨逸と埃太利とである。ロシアの事例については別にのべるが、獨逸のうちで、殊に注目されるべきは埃太利の經驗であらう。強固なる單一の社會主義政黨が經濟政策に支配的な力を及ぼしたる點に於て、ロシアを除けば埃太利に及ぶものは無かつたのであり、それだけに此の國では社會主義の諸問題は、重大な實踐的意義を有して居たのである。かかる激しい社會主義的實踐に對應して、理論的

にも尖端を切つたものは塊太利の學界であつた。

先づ一九一九年にはオットー・ノイラート博士の論文集『戦時經濟を通して實物經濟へ』(ミュンヘン)<sup>(10)</sup>が公にされた。彼はこの書に於て、大戦時の經驗によつて、物貨供給の管理は、價値單位なしに實物のままで遂行し得ることを教へられたといふことを示さうとしたのである。詳細は後にのべる(第三章第一節)が、兎に角それによつて、一流の社會主義者も凡そ經濟問題の本質に關しては、甚だ乏しい認識をもつに過ぎないといふことが示された。けれども彼が明確率直な形で社會主義の經濟計算問題に關する見解を公にしたといふことは、其の後の批判に對して直接間接に機縁を與へて居るのであり、その意味に於て重大な役割を果して居ると云はねばならぬ。ノイラート博士の著書について同じ役割を果して居るものは、同じく塊太利の社會民主黨の指導者の一人であつたオットー・パウエル博士の諸勞作であらう。<sup>(11)</sup>彼も亦ノイラートとほぼ同様の組織を展開して居るのである。兩者ともに、社會主義社會は價値計算の存しないために、財の合理的經濟的な使用をなす上に打克つべからざる困難の存することを判然と感じて居たのみならず、むしろそれを以て一の利益とさへも考へ様としたのである。

獨逸に於ても社會民主主義の政權の下に「社會化委員會」を中心として、個人企業の社會主義化

に關して盛に研究せられた。そこではカウツキーを初めレデラーやハイマン、ラテナウ等が研究に参加して居るのであるが、論議は競争的な經濟組織の内部で比較的社會化された個人企業を如何にして國有に移すべきかといふ問題に引かかつて仕舞つたために、ただちに社會主義的な組織の主要問題に當面する機會を得なかつたのである。當時社會化委員會の書記長までつとめてゐたハイマンの言葉によれば、無數に公にされた「社會化」に關する文獻のうちには、一言も經濟計算の問題が觸れられなかつた、といふことである。斯様な狀況であるから、大戦直後の數年間にあらはれた獨逸學者の諸研究は、經濟計算に關する限り、注目に値しない。強いて注目に値することといへば、當時の獨逸に於ては、社會主義者も然らざるものも、頻りに社會主義を問題としながら、其當面すべき最も重大な問題たる經濟計算の問題を認識し得なかつたといふ事實であらう。奧太利の學者は、この點には一步を先じて居たのである。なほ序に觸れて置くが、一九一九年獨逸國經濟大臣のウィッセルと國務次官メルレンドルフによつて發表された「計劃經濟」の提案は、恐らく其後種々の意味を附せられて世界的に一般化された計劃經濟といふ名稱の起源をなすものであらう。けれどもその提案の内容そのものは社會主義經濟といふを得ないものであるから、この問題の發展史の上には問題とするに足りないのである。

フォン・ミーゼス、マックス・ウェーバー、

### ボリス・ブルツクスの三人の寄與

社會主義社會に於ける經濟計算の問題の研究に對して、不滅の寄與を致せるものは、埃太利の經濟學者ルードウツヒ・フォン・ミーゼス教授の論文『社會主義的共同經濟に於ける經濟計算』である。<sup>(13)</sup>それは一九二〇年の春 Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 47 Band. I Heft. 誌上に發表せられて、獨逸の學界に一大センセーションを捲起したのみならず、後の諸論者の議論の出發點をなせるものと見ることが出来る。ミーゼスの論文は直接には前に述べたノイラートの見解への駁撃を契機として展開されたものである。その所説の詳細は後に譲るとして、いまその要旨を述べれば、現今の經濟に於ける合理的計算の可能性は、貨幣で表現された價格がかかる計算を可能ならしむるための本質的條件を提供するからであること、而してこの價格が完成財のみならずあらゆる中間生産物並に生産要素に於ても形成せられるのでなければ、財の經濟的生產は不可能であること、従つて經濟的生產の可能性は完成財のみならず生産手段の私的分有組織と不可分的に結びつ

いて居ることを明にしたものである。この論文に刺戟されて社會主義側から數多くの反駁があらはれたが、それ等の反駁に對する反批判の目的で書かれた第二の論文『社會主義共同經濟に於ける經濟計算の問題に對する最近の文獻』(Arch. f. Sw. u. Sp. 51 Bd. 1923) 並に前者を含む大著『共同體經濟』(一九三二年、一九三三年第二版)はこの問題を考へるものにとつて、永久に顧みられねばならぬものである。

ミーゼス教授の前記論文とほぼ時を同うして、しかもそれとは獨立して、同じ見解を示したものは、マックス・ウェーバー教授である。ウェーバーの見解は一九二一年に公にせられた遺著『經濟と社會』<sup>(15)</sup>の中に、複雑な經濟組織の下に於ける合理的判斷を可能ならしむる諸條件を取扱つて、簡潔な覺書風のものではあるが、明白に、交換と貨幣の使用に基く經濟組織にして初めて資本の合理的使用と維持とが行はれること、ノイラートの如き計劃經濟の主なる擁護者が提案した經濟計算では、本質上、斯かる組織の當局者が解決しなければならぬ諸問題の合理的解決をなし得ないこと而して完全に社會化された組織に於ける合理的計算の不可能に基く浪費は、人口の稠密な諸國の、現在の人口を養ふことを不可能ならしむる程はげしいものであらうといふことを強調したのである

ウエーバーの學問的名聲の故もあらうが、獨逸の學界に對しては極めて大きな影響を與へて居る。

同じ見解は、これまたほぼ時を同うしてソ聯邦に於ても公にされてゐる。それは一九二〇年の夏、當時レニングラード大學の農業政策の教授であつたボリス・ブルツクスの講演によつてである。ソ聯邦の共產政府は、思想の徹底的彈壓の後に、軍事的成功に氣をよくして、一九二〇年の夏には、暫く思想取締を寛かにした一時があつた。その際あちらこちらで、なかば祕密の形で社會主義に對する批判が行はれたと云ふことであるが、ブルツクスの右の講演も亦その際ある集りで連續して行はれたものである。

その草案は最初ロシア語の雜誌にカムフラージュの意味で『社會主義下の社會經濟の諸問題』と題して掲載せられたが、やがて學者の一齊檢舉があり、伯林に亡命を餘儀なくされ、一九二三年伯林で露語版が、ついで一九二八年に至つて『ロシア革命の光に照して見たマルクス主義の理論』と改題して自らの手で獨譯が公にされた（遙か後に一九三五年にはハイエークの手で出版された『ソ聯に於ける計劃經濟』の中に、其の英譯が含まれて居る<sup>18)</sup>）。題目の示すが如く、ロシア革命の實驗に照してマルクス社會主義の理論を批判するのが目的であるが、その第二章は「經濟原則と社會主義」に、第三章は、

「社會主義經濟に於ける勞働價值計算」にあてられて居る。ブルツクスの批判はミーゼス、ウエーバーと同様に、必然的に價格を喪失するところの中央指導下の經濟に於ては、合理的計算は不可能であるといふ事の論證に集中されて居るのである。激しい社會革命の渦中に書かれたといふことのみならず、彼の社會主義に對する深い造詣と批判の透徹せる點に於て、恐らくはミーゼスの勞作について參考せらるべきもの、私の以下の論述に於ても亦、屢々引用せられるであらう。

### 獨塊に於ける爾後の推移

さきにも一言せし如く、經濟計算の問題に於て最も大きな影響を與へたものはミーゼス教授の前の論文であるが、その出版後の數年間に大陸にあらはれたものは、殆んどすべてがミーゼスへの挑戦の形に於てなされたものであつた。たとへば一九二二年にはカール・ポラニーが「社會主義的計算方法」と題してこれを取扱ひ、特殊の機構、即ち一種のギルド經濟を構想することによつて、ミーゼスの指摘せる難點を避けようと試み、更に同じ年には當時ケルンの私講師であつたエドアルド・ハイマンが其の著「剩餘價值と共同經濟」に於て四十五頁に互る末章の全部を割いて「共同經

濟に於ける經濟計算」を取扱ひ、ノイラート、ミーゼス、ウエーバー等に、時に追隨し、時に對立しつつ、これ亦特殊の社會構成を考案することによりて問題を解決せんと試みた。ハイマンの構成とは、消費財の價格は全く市場に於て消費者の買競争によりて決せしめ、生産財の價格は消費財の價格の變動に従つて中央部が歸屬的に決定し、其の生産物の價格を生産費と一致せしむることを目標として生産を増減するときは、今日の社會に於けると同様の經濟計算が、生産手段の私有なき社會主義の下に於ても再現出来るであらうといふのである。詳しくは後に述べる。

社會主義の耆宿カール・カウツキーも一九二二年その著『プロレタリア革命』<sup>(註)</sup>の中で論争に參加した。すなはち彼は革命前の資本主義市場の價格をそのまま革命後の社會主義社會へ持越し、あとは生産者が消費者と相談のうへ適當に修正して行くといふ見解を公にした。翌二三年には既記の如く塊太利のマルクス主義者オットー・ライヒター博士が『マルクス叢書』第五卷第一冊として『社會主義社會に於ける經濟計算』を著はし、諸學者の見解への批判と共に、所要労働を唯一の價值尺度として經濟計算を遂行しようと提案した。同年にミーゼスの諸の挑戦への反批判があらはれた事は、さきに述べた通りである。

一九二五年にはピエルソンの前述論文『社會主義社會に於ける價值問題』が和蘭語から獨逸語に

譯出され、一九二八年にはブルツクスの著『ロシア革命の光に照して見たマルクス主義の理論』も獨逸語で公にされた次第もさきに一言せし處であるが、それ等は獨逸の學界で、社會主義に於ける經濟計算の論争が盛に行はれた事に誘發されたのである。そのことはビエルソンの右の論文を譯載した『國民經濟及社會政策論叢』誌の編輯者が「社會主義共同經濟に於ける經濟指導の理論的問題に就ての近時、甚しく高まれる興味……」（傍點山本）と述べて居ることによつても知られるのである。

一九二九年にはアドルフ・ウェーバーやミーゼス、ボーレ等の學問的影響の下に社會主義社會に於ける經濟計算の可能性に對して疑問をもちつつあつたゲオルク・ハルム（今のヴェルツブルグ大學教授）が『競争、資本主義的流通經濟の組織原理、並に發展傾向の研究』といふ書物をついで『社會主義は經濟的に可能なりや』<sup>(23)</sup>といふ小冊子を公にして、競争なくして價格形成は不可能であり、従つて經濟的生産は不可能であるといふ見解を主張した。ハルムは其後も引續き著書や論文に於て同じ見解を展開して居る。社會民主主義の側からは、ランダウアーが『計劃經濟と流通經濟』<sup>(24)</sup>（一九三二年）の中で、レデラーが『計劃經濟』<sup>(25)</sup>（一九三二年）の中で、僅にこの問題に觸れて、何でも無い問題の様に述べて居るが、問題の本質を理解してゐないことを曝露してゐる。

斯様な經過を辿つて來た社會主義經濟に於ける經濟計算の問題は、獨逸の學界に於ても未だ終局

點に到達して居るとはいへないであらう。ただ嚴密に一元的に中央から指導される計劃經濟の組織に於ては合理的計算が不可能であり、従つて經濟的生產は不可能に陥るといふミーゼスの見解は、反駁出来ないものだといふことだけは明となつた。ミーゼスに對する最初の反對論の多くは、彼が時々不用意に、「社會主義は不可能だ」と響く様な表現を用ひた事に基くのである。けれどもミーゼスのいはんとした處は社會主義が不可能だといふにあるのではなく、社會主義が目的として來た合理的・經濟的な生産が不可能だといふ點にあつたのである。如何なる提案も「試み得る」ものである以上、一概に不可能といへないことはいふまでもないことであらう。

獨塊に於ては、かたくななマルクス信奉者を除いては、ミーゼスの主要論點は承認せられた。實物による經濟計算や勞働を單位とする價值計算を可能と信ずるものは、最早存在しない。殘存するものは大別して二つの方向を辿つて行つたと見られる。

その一つは集産的社會主義は合理的計算の方法を有せざることから、能率の喪失、總體的國富の減量は免れない。けれどもそれ等の損失も、社會主義の實現によつて富をより平等に分配するといふ效果に比して、高すぎる代價ではないと考へる人々である。けれども斯様な見解が公然と表明されるならば、恐らく社會主義的計劃經濟への大衆の支持は著しく減退するであらうと思ふ。尤もこ

の立場に於て問題となるものは、總體的國富が所謂「資本主義」流通經濟に比して、どれほど分量を減少するか、またより平等なる分配が國民生活の幸福にどれだけ貢獻するかといふ點を決定すべき簡単な方法を發見し難いことであらう。この場合に對する答を得るためには具體的に兩組織の機能を綿密に比較研究することを要するであらうが、なほ一般的には次の注意を要するであらう。それは所謂「資本主義」經濟の理想形式と何等か不完全な形式の社會主義計劃經濟とを比較してはならないと同様に、現存するが如き不完全にされた所謂「資本主義」經濟と、理想的諸假定の上に乗用すると思はれる社會主義計劃經濟とを比較してはならないといふことである。この比較をして原理の問題にとつて價值あるものたらしむるためには、人間性及び外的環境の一定條件の下で最も合理的なる形式で實現されるといふ前提の下に兩者を比較しなければならぬであらう。

ミーゼス教授の批判に對する第二の反應は、ミーゼス教授の問題とせる如き中央集權的な社會主義については教授の批判が適中する事を承認し、他の組織を構想することによつて其の批判を免れようとするものであつた。歐羅巴大陸に於ける社會主義者の多くはこの方向に向つて行つた。この方向に於ても更に二つの異なる傾向が見られた。その一つは曾て維持せんと主張して居た消費者の選擇自由を放棄することによつて問題の困難を克服せんとするものであり、第二の傾向は、競争とい

ふ要素を社會主義機構のうちに取入れようとする試みである。理論的にも實際的にも研究に價するものは第二の傾向であらう。第一の傾向は、論者の意識すると否とにかかはらず、經濟計算による生産を放棄せるものであるからである。第一の傾向に屬するものは、經濟計算の放棄を自覺しないのみならず意識的には消費の自由の放棄をも自覺しないのが常である。銀行の國有化により、信用の授與に當りて、一定利率をば支拂ふべき需要者の意思や能力を顧慮することなしに、人爲的に定めた高率又は低率で以て、個々の生産部門に資金を割當つべしと主張する論の如きがそれである。けれどもかかる組織の下に於ては、生産は需要に適應するものではなくて、需要が生産に適應せしめられるものであつて、本來の意味の消費の自由の放棄を意味する。眞の消費の自由なるものは、生産が消費者によつて形成せられるところの需要價格によつて規制されるものでなければならぬ。先づ任意に生産され、生産されたものうちで選擇消費されるといふことであれば眞に需要あるものが生産されずして、然らざるものが生産されることになるが、それでもよろしいといふ事ならば、かかる組織の下で經濟的生産ははじめから問題とされてゐないのである。そもそも經濟計算の問題は生産を需要に適應せしむる方法に關して起るといふことを忘れてはならないであらう。

## 英米に於ける研究の經過

英米に於けるこの問題への關心はヨーロッパ大陸に比して著しくおかれて出發して居る。しかし遅れて出發してゐる結果としてまた比較的高い水準から始められることになつてゐる。たとへば實物計算を主張したり、勞働價值計算を主張したりするのは、英米の學者のなかには一人も居なかつた様である。

私の知る限り、英語國民のなかで最初にこの問題の本質に觸れたものはミシガン大學の故テイラ教授の『社會主義國家に於ける生産の指標』<sup>(26)</sup>といふ論文である。それは一九二九年三月の『アメリカ經濟評論』に載せられたが、前年の十二月に米國經濟協會例會の席上で行はれた講演の草案に手を加へたものと記されて居る。それがどの程度まで大陸の理論の影響を受けて展開したかは、論文自體からは明でないが、その論旨とする處は、「一定の社會主義國家が有する生産資源から如何なる諸財貨が生産せらるべきかを決定する方法如何」を問題とし、その答として、それは本質的には資本主義社會に於けるそれと同一でなければならぬといふのである。而して財貨の販賣は生産費

に於てし、生産費は生産諸要素の價格により、而して生産諸要素の價格表は、一應は從來の經驗に基いて作製されるが、あとはよろしく「試行錯誤法」によりて發見せられ得るといふのであつて、生産要素の市場賣買なき社會主義國家における生産手段の價格決定に於ける困難について深く考究せる形跡を見ない。一九三一年にハーバードで公にされたローバーの『社會主義國家に於ける價格決定の問題』<sup>(22)</sup>は全く同じ考へであるが、しかしテイラーよりも深く考へて居る。附録第一はそれに対する紹介と批判とである。所謂「資本主義」社會に於ける價格現象への理論經濟學の説明手續をかりて、社會主義の經濟計算を解決せんとせし試みの一つの雛型として興味あるものである。一九三三年六月 *Economic Journal* にのせられたデイキンソンの『社會主義社會に於ける價格形成』<sup>(23)</sup>もカッセル、マーシャル、ヘンダーソン等の需要供給關係の説明にヒントを得て、「社會主義經濟に於て、生産財の合理的價格づけが、少くとも理論的に可能なることを示さうとした」ものであり、遙かに素朴な形に於てではあるが前二者と同じ方向をとるもの、従つてローバーへの批判は根幹に於てデイキンソンの論文への批判ともなり得る。

一九三三年十二月號の *Economic Journal* にジャーンナル誌上にはドップ博士の『經濟理論と社會主義經濟の問題』<sup>(24)</sup>が發表された。而して彼は、もしも消費者の自由を犠牲にして社會主義が可能となるも

のならば、その犠牲は代價に値するといふことを主張するに到つた。彼は、社會主義者がこれまで  
の様に消費者の自由を維持しようとする考をつづけるのを陳腐であるとし、「報酬の均等が一般化  
した場合には市場の評價は事實上その意味を失ふであらう」といふのである。即ち前三者の如くに、  
社會主義社會に於ける生産財の價格決定方法の發見に對する努力を放棄するのである。消費の自由  
の拋棄が問題がある點で簡單にすることは認められるが、消費者の需要の豫知し難き性質が經濟計  
算を困難ならしむる唯一の事情ではないことを考へただけでも、財の一般的价格(價値)づけなくし  
て經濟秩序が成立すると考へることはあまりにも甚しい問題への無知といふの外はない。更に消費  
の自由を放棄した社會の生産が如何に資源の浪費となり、消費者の幸福を破るかといふことを思へ  
ば、ドップの見解に對して、ほとんど賛成するもの無かつたのはけだし當然であらう。そもそも  
社會主義に多くの共鳴者があつたのは、それが社會主義だからといふのではなくて、消費者に對し  
てより以上の幸福を齎すと考へられたからであるといふ事を反省すべきであらう。かくして英米に  
於ても、大陸に於けると同様に、若き社會主義者たちの多くは、むしろドップとは反對に、社會主  
義の構成のなかに能ふ限り自由競争を導入せんことを目指して動いて居るのである。

英米の學界に於ける、社會主義經濟の下に於ける經濟計算問題の研究に投げられた巨彈は、疑ひ

もなく、一九三五年の春に奧太利の經濟學者ハイエーク教授が倫敦に於て、姉妹篇として世に送つた『ソヴェート・ロシアに於ける計劃經濟』と『集産的計劃經濟』の二つの書物であらう。前者はすでに觸れた様に(第六五頁)ブルツクスの『ロシア革命の光に照して見たマルクスの理論』(一九二〇年)の英譯と『ロシアに於ける計劃經濟の結果』(一九三四—英文)とに、ハイエーク自身の序文を附したものであり、後者は大陸に於て經濟計算を取扱つた四つの論文、即ちビエルソン『社會主義社會に於ける價值問題』(一九〇二年)、ミーゼス『社會主義共同社會に於ける經濟計算』(一九二〇年)、ハルム『社會主義社會に於ける適當な計算の可能性に關する其後の諸考察』、パローネ『集産的國家の生産管理』(一九〇八年)の英譯に、ハイエーク教授自身の手になれる『問題の性質と歴史』並に『論争の現狀』の二文を加へたものである。彼の序文に述べられて居る通り、彼がこの二著を公刊したのは從來大陸に於て行はれた經濟計算に關する論争の結果を英語國民に紹介することによつて、問題の重要性を認識せしめ、更に研究のための資料を提供せんことを目的としたものである。

ハイエーク教授の公にした右の書物の、英米の學界に及ぼした影響は、極めて大なるものがあつた。ハイマン、ランダウアー、レデラー等の獨逸から亡命した社會主義者たちの理論活動の刺戟も見逃がし得ないであらうが、兎に角英米に於てはハイエークの右の著書以後に、社會主義社會の經

濟計算の可能性を示さうとする論文や著書が急激に増加して居る。就中注目すべきものはピグー教授の『資本主義對社會主義』(一九三七年<sup>(22)</sup>)とミネソタ大學助教教授リッピンコットの公にした『社會主義の經濟理論』(一九三八年<sup>(23)</sup>)の二つの書物であらう。後者に就ては本書第五章第三節に要旨と批判があるからそれに譲るが、要は所謂「試行錯誤法」によりて生産要素の價值評價を可能とするテイラーの見解並にその發展たるラング(カリフォルニア大學經濟學講師)の見解を世に普及せんとせるものである。ピグーの書物は經濟計算だけを取扱つたものではないが、しかしそれに多くの部分を割いて居る。而して「すべての生産要具が、土地を含めて、永久に磨損も減價もしないで持續するもの」、而して「新しい資本財がつかられないもの」、従つて「消費財のみが生産されるもの」、「流動資本が存在しないもの」といふ諸の想定の外に、「多くの種類の完成消費財は唯一の産業で生産せられるのではなくて最後の消費者に小賣される行動を含めて多くの繼起的階段に於て生産されるものだとしふ事實を無視し、更に多くの財貨は別々の過程の産物ではなくて結合的に生産されるものだとしふ事實をも無視する」としふ「一つの人為的なひどく單純化された型」(an artificial and highly simplified model)に於て考へてゐる(P. 113)、生産資源の經濟的割當としふことは、「原理としては解決され得るけれども、仕事は法外に困難なことが判る」(can, in principle, be solved. But it has showed

that task is extraordinarily difficult.) と云ひ (p. 119) 更に假定された如きものではなしに現實の複雑な條件を考慮に入れるならば、「中央計劃當局のなすべき實際の仕事が全く恐ろしく困難なもの (quite appalling difficult) であらうことを知ることは困難でなり」といふ結論に達して居る。(p. 119)

なほビグーの見解に就ては英米に於て最近にあらはれた數多の論著と共に、別の機會に於て詳細な吟味を公にしたいと考へて居る。

### ソ聯邦に於ける經驗と理論

社會主義計劃經濟の下に於ける經濟計算に關する研究をする者の直ちに念頭に上るものは、ソ聯邦に於てそれが如何なる状態にあるかといふ疑問であらう。而してソ聯邦が社會主義體制の下、兎も角も廿年の生命を持續し得たこと、而も所謂五ヶ年計劃ピヤトレチカのもとに急テンポの經濟の發展が傳へられて居ること等から推測して、この問題はソ聯邦に於ては事實上何等かの方法によりて適切な解決策を見出して居るのではあるまいかと想像する人は可成りに多い様である。

けれども實はソ聯經濟の實驗の示すところでは、經濟計算の衰弱こそ集權的計劃經濟の最大のな

やみであることが明にされて居る。マルクス主義の實行者として、市場を資本主義の支柱と考へて、それに代るに國家中央部の計劃を以てせんことを期して行はれた一九一七年十月の革命以來今日までの廿年の経過は、却つて右の様な最後の斷案を下すに充分なる資料を提供して居る様に思はれる。ソ聯の計劃經濟の經驗そのものの分析によつて經濟計算がその最大の難點であることを明かにする仕事は、後章「ソ聯邦の經驗と經濟計算」に譲る。ここにはただソ聯當局の中に現實に行はれた經濟計算の問題に關する研究論議に就て簡單に述べて置かうと思ふ。

ロシアに於ては一九一七年の革命につづく所謂「戰時共產主義」の時代を通じて、市場は意識的に破壊せしめられたが、それに伴つて市場價格を以てする經濟計算は不可能となり、生産は全く見通しのつかぬ「盲目狀態」(ザアルガ)に陥つた。かくして社會主義經濟に適用すべき經濟計算の方法は、切實な實際の要求となつて來たのである。斯くして一九二〇年十月から十二月にかけて、『エコノミーチエスカヤ・ジーズニ』紙上に於て、この問題に關する激しい論争が展開された。

先づ十月九日と同月十六日の紙上に、市場なき社會主義社會に於ては「價值」によらずに「實物」の規準によつて生産の經濟性を測定すべしといふチャヤノフ教授の方法が提出された。同月二十三日には、有力な共產主義者ストルミリンのチャヤノフの提案に對する批判が公にせられ、實物計算

は實行しうべからずとして否定せられた。

ついで十一月四日にはチャヤノフのストルミリンへの駁論、十八日にはヴァルガのチャヤノフに對する批判と彼自身の見解が、それから十二月に入つてストルミリンのチャヤノフへの再批判と自らの見解とが披瀝せられた。ヴァルガの見解は専ら労働價値を尺度とする費用計算を主張するのであり、ストルミリンの見解は、生産の費用は労働價値により、其の結果は「效用」によりて計算せんとするものである。ブルツクスの言葉によれば當時ロシアではこの問題を解決するがために、わざわざ公の委員會まで開かれて論議された由である。而して結局ストルミリンの方法が採決されたといふことであるが、周知の如くやがてレーニンの英斷による「新經濟政策」の採用の布告によつて、市場の復活となり、自然に市場で成立する貨幣價格がある程度まで計算の基礎を提供することとなつたが爲めに、根本的には所謂資本主義の方法によつて救はれたものといはねばならぬ。従つて社會主義の經濟計算方法の可能性に對して、この時代の經驗は積極的な寄與をしなかつた。ただ労働價値計算が役に立たぬといふことがストルミリンやブルツクスの理論によつて述べられて居る點は注目すべきであらう。また一九三一年私がコムアカデミーでオストロヴィチャノフ、ゼニースの兩教授に直接質問した所では、「今は過渡期の經濟であるから大體一九一三年の市場價格に手

を加へた公定價格を基礎に經濟計算を行つて居るが、純粹な社會主義が實現した曉には勞働を單位として經濟計算を行ふのだ」との答へであつたことも、當時この問題が事實上未解決であつたといふことを示す意味に於て注意さるべきであらう。

いふまでもなく、ソ聯に於ては研究の自由も發表の自由も極度に制限せられて居る。従つて社會主義經濟に於ける生産の經濟性に疑問を起させる様な議論は發表の許される筈がない。だがそれでもなほ、經濟學者の中には社會主義の經濟性に對して重大な疑問を持つて居る者が少なからず居たといふことを推察すべき若干の資料を發見することは困難ではない。その二三を拾つて見よう。

(一) 獨逸のマルクシストたるポロツクは「ソ聯に於ける計劃經濟的試行<sup>3)</sup>」を公にし、革命以來一九二七年に至るまでの計劃經濟の發展を取扱つたが、其の末尾に「市場職能の代替」と題して次の如く述べて居る。

「決定的な問題、すなはち社會主義においては市場の諸職能の計劃經濟的措置による代替がそれによつて勞働痛苦を費すことがヨリ少くなり、然かも勞働收益が市場經濟に於けると同じ大きさ、若しくはヨリ一層大であるように行はれ得るかどうかといふことに對する解答は、暫く保留さるべきであらう。蓋し、この點に關し科學的に根據のある論斷を下すことは、從來なほ行はれてゐ

ない一聯の諸研究を前提としてゐるからである。」

青年マルクシストたるポロツクでさへも、ソ聯の事實を研究して、經濟計算の問題が解決されて居るといふ論斷を下し得なかつたといふ點が、すでに吾々の注意に値することである。だがそれにも増して興味のあることは、ポロツクのこの書に對するソ聯の一經濟學者の批評である。ポロツクの右の著書を「ロシアに於ける計劃活動の企圖に好意をよせ、ロシアに於ける建設の有利な方面も不利な方面も客觀的に敘述しよう」とつとめてゐる」ところの「一大勞作」なりとして推賞を惜まなかつたモスクワのワレンシユタイン教授は、この書のもつ缺點の一例として、

「市場なき、貨幣なき、社會主義經濟の建設といふことから直ちに生ずる理論的諸問題のうち、經濟計算の問題が、ポロツクの書物では闡明されて居ないといふこと、即ちポロツクは一九一九—一九二一年のソ聯經濟學界に於て、勞働支出の單位を以つて經濟計算の單位の基礎とすべしといふ提議をめぐつて可成り廣汎圍に互りて行はれた討論に觸れて居ないのみか、社會主義的經濟計算の問題に一章を當ててゐるところのユーロフスキの著作を眼に留めてさへもゐないといふこと、この點は遺憾とさるべきである。」

と評してゐる。私はいま、ワレンシユタインやユーロフスキのこの問題に關する積極的見解を知

る便宜を持たぬ。けれども、思ふに「市場なき、貨幣なき社會主義經濟の建設といふことから直ちに生ずる理論的諸問題のうち經濟計算の問題……」(傍點—山本)とのべて居るところから見ても、それが重大な困難なる問題であることを認めて居たであらうことを推察するに難くはない。このワレンシュタイン教授自身が、同じく經濟計算の困難を重視したチャヤノフ教授や其他コンドラチエフ、マカロフ、オガノフスキー、グローマン、バザロフ、グリーンツブルグ等と一緒に、やがて一九三〇年の經濟學者捕縛事件に際して刑に處せられたことを知つて、成程とうなづかれるものがある。ユーロフスキーの方はどうなつたのかと思つて居ると、これもまた處刑された様である。ラビドス、オストロヴィチヤノフ共著の『マルクス主義經濟學教程』第七版日本譯の第一卷一四四頁には「反革命家妨害者としてプロレタリア裁判に附された教授ユーロフスキー」云々と記されて居る。ユーロフスキーの見解としてラビドスは次の様に引用して居る。

「現存の體系を以て混合的構成、即ち過去と未來との混成物と解してはならぬ。それは商品經濟の體系であるが、ただそれは特殊の形態であるにすぎない。市場と商品との存立するところ、其處には必ず、價值法則が作用する。經濟的情勢は次第に自由競争に適合するやうになる。(この)經濟的情勢に於て、獨占的タイプの諸組織が大なる役割を演ずるであらう。國家は生産、交換、分

配の諸條件に『干渉しない』であらう。國家は一部の經濟形態または經濟部門を保護し、他の部門を驅逐するやうな政策を施し、對外貿易、信用、生産の諸條件を統制することが出来るが、若しこれ等のすべての諸條件の中に市場が殘存するならば、則ち『價值法則』は作用するであらう」(ユーロフスキー、『ヴェストニク・フィンンス』一九二六年第十二號)。

ユーロフスキーが一九二六年所謂新經濟政策の下のロシア經濟の本質を市場經濟なりと規定し、そこには國家の統制があらうとも、價值法則の支配するところの、所謂資本主義經濟と本質上かはらぬ經濟が存すると見て居たことは右の引用から明であり、「其の目的が資本主義を復活せしむるにある」として非難されて居るところを見れば、彼が社會主義計劃經濟の經濟計算につき如何なる見解を包持せしかは、推察するに難くはないであらう。

(二) 一九二八—九年、所謂五ヶ年計劃の樹立に際して、自然發生的發展のテンポに、即ち均衡を持續する計劃の樹立を主張する「自然成長派」と、目的論的に自然的均衡を無視して、計劃によりて新しき均衡や新しき生産力をつくり出さうとする「目的論派」との間に、激しい論争が展開され、結局前者がたたきつけられて、一九三〇年の經濟學者の檢擧となつたのであるが、兩派の對立は、理論的に云へば前者は安定せる均衡價格なくして計劃經濟も存立し得ないとするのであり、後

者はかかる思想をもつて資本主義の復活を企圖するメンシェヴィキト的妨害者となすものであつて、經濟計算に理解をもつものと、それを理解せざるものとの對立とも見る事が出来るのである（ユフマン『マルクス主義經濟學』一九三二年第一卷一七—一三三頁。ラビドス、オストロヴィチャノフ教程』第七版一九三二年、第一卷第六章參照）。而して爾來ソヴェート・ロシアに於て公然と承認されてゐる經濟計算論を要約すれば次の如きものである。

「自由社會（共產主義の理想の社會——山本）の區別の様相とは何よりも先づ、生産手段が社會的財産であり、かかる社會に於ては人々が『己れの個人的勞働力を一つの社會的勞働力として意識的に支出する』といふ點にある。つまり社會的勞働が直接には私的勞働として現はれる商品＝資本主義經濟に對し、自由社會においては、それが直接に社會的なる勞働として現はれるといふことになる。周知のやうに商品＝資本主義社會では人間勞働の社會的性質が發現し得るためには一つの廻り路——價值及び價值形態を通ずる——が必要である。しかるに自由社會においては如何なる廻り路をも必要としない。ここでは人々が最初から、己れの個人的勞働力を『一つの社會的勞働力』として支出することを意識する。自由社會は生産物に支出された勞働量を直接に計算し、これを勞働時間（時間、分等々）で直接に表示することが出来る。……」

「マルクスはいふ、資本主義社會の運動法則は『生産に活動する人々に對し、盲目的法則として強制する』しかるに自由社會の運動法則は『彼等の集團的理性によつて達せられ且つそれ故に彼等の權力下にあり』そして生産分配過程の意識的計劃的指導に於て表現され且つ活用されると然らばソヴェート經濟に於て吾々は何をもつか?……ソヴェート經濟はキャピタリズムからソシアリズムへの過渡期經濟である。完全な社會主義社會への運動に於ける現モメントでは、それは一つの段階を經過する。この段階を同志スターリンは第十六回黨大會の結語に於て、ソシアリズムの初期段階であり、同時に新經濟政策最後の段階の展開期であるとした。」

「資本主義經濟に對するソヴェート經濟の區別的様相はソヴェート經濟に於ては社會主義的分野の××(今では優勢でもある)のお蔭で『生産の發展が競争の原則にではなく、計劃的指導の原則に從屬する』といふ點にある(スターリン)。然らば我が計劃の特性とは如何なるものか?

同志スターリンはいふ『吾々の計劃は……豫想計劃ではない。それは指導機關にとつて義務的であるところの、將來に於ける我が經濟の發展方向を全國的規模に於て決定するところの命令である。』

「復興期の初頭に於ては農民經濟の計劃的指導が、主として農民との市場的關聯を把握するとい

ふ方法によつて實現されたのに對し、今や吾々は直接的計劃的指導をば農業にも及ぼす。何となれば最早や社會主義的工業化が力強く成長し、商取引が一般化し、農業の六〇%が集團農場化し、『社會主義的分野は全國民經濟のあらゆる經濟的槓桿をその掌中に握る』からである（スターリン）。

與へられた段階において、新情勢は新たな指導方法への、計劃的働き掛けの新たな様式への、推移を要求した。これ等の新しい形式は同志スターリンにより彼の六つの歴史的條項において提供され、第十七回黨會議の決議及び黨政府の一聯の決議において更に發展せしめられた。新段階においては、自主經營ホズラスチヨット（獨立採算制）の根柢を確立すること、

『ル、ブルによる統制』の保障

ソ、ヴェ、ト、商業の展開

従つて我が經濟における商業形態の確立と發展

が經濟的計劃的指導の有力な道具であり、計劃の遂行およびその突破のためにあらゆる資源を動員する道具である。』

『かくて吾々の諸條件において『商品』形態、『貨幣』、自主經營はブルジョアジーの道具から社

會主義××の最重要なる手段へ、我が經濟の計劃的指導の手段へ、轉化する。

資本主義に對する社會主義の攻勢がますます強まつたこと、力強い社會主義工業の成長、幾百萬農民大衆の集團農場への引き入れ等々、これ等一切は、計算——それなしにはかかる複雑豪壯な經濟を計劃的に指導することは思ひもよらぬ——に關する、生産、分配、消費の最も合理的な組織化、ヨリ大なる屈伸性、責任と獨立性との向上、指導における具體性および機動性、等々に關する問題を特に鋭く提起した。吾々がまだ直接の社會主義的分配と直接労働時間による計算とへ移行し得ない現段階に於ては、吾々はこれ等すべてを『商品』形態、『貨幣』、自主經營等の使用に基いて——それ等の性質が資本主義下におけるそれとは全然異なることを念頭に置いて——獲得し得るのである」(ラビドス、オストロヴィチヤノフ著『マルクス主義經濟學教程』第七版第六章)。

要するに完全な社會主義(自由社會＝マルクスの共產主義の高度の段階)になれば労働日を尺度として計算する。現在の如き社會主義部門の優勢の下に而もなほ然らざる各種の分野を内含せる過渡期に於ては、商品形態、貨幣、自主經營等の資本主義的手段をば利用して、命令的計劃によつて完全な社會主義の實現にとめるのだといふのである。コフマンの『マルクス主義政治教程』には同様のことをより簡單にのべて居る。

「貨幣と商業のない社會主義の下にあつては、計制化は現物形態において、勞働日に於て實施される。過渡期においては各種の分野なかんづく小商品生産者の分野が存在するため、調整に當つて資本主義的諸要具——即ちプロレタリアート獨裁の下にあつて別な性質を持つに至つた貨幣制度、銀行、商業——が利用されねばならぬ。プロレタリア國家の掌中にあつては、それは全國民經濟の社會主義的再建における有力な武器、槓桿である。貨幣、商業、自主經營（獨立採算）に反對する者は、『左翼がりや』型の、最も甚しい政治的過誤を犯してゐる人々である」（デイーマン『マルクス主義政治教程』第六版一九三一年八月、上卷、日本譯二六二頁參照）。

この様な方法を以てして果してよくその目的を達することが出来るかどうか。完全な社會主義の社會に於ける勞働價值計算の妥當性、生産手段の國有の下に於ける自主的經營其の他の資本主義的形式の効果等々の問題についての検討批判は後に譲るとして、ただロシアの經驗を見て痛感するところは、政治的的心理的問題に關する限りそれは極めて教訓的であるが、社會主義の當面すべき經濟問題の研究者にとりては、何等解決の積極的寄與をなさず、むしろ社會主義は經濟問題を解決し得ないといふミーゼスやブルツクスの理論の妥當性を裏付けたといふ意味で、消極的寄與をなせるにすぎない様に思はれる。

註一 ヲ、聯邦が革命以來二十年間の不斷の努力にも拘らず、經濟計算問題を解決し得ないで惱んで居る次第に就ては、本書の第三篇に述べるが、なほ外務省調査部發行の『露西亞月報』所載の伊部政一氏の次の二論文を参照されんことを望む。それは傍證の意味に於て極めて有益である。

ソ聯邦に於ける國民經濟バランスの問題（昭和十三年四月號）

ソ聯邦企業財務論（昭和十三年十二月號）

註二 佛蘭西に於けるこの問題の研究は非常に遅れて居る。一九三八年七月八月號の『Revue d'Economie Politique』にミーゼス教授の論文『數理經濟學の方程式と社會主義制度に於ける經濟計算の問題』<sup>(35)</sup>が佛譯掲載されたが、編輯者の脚註に「此の極めて興味あるミーゼス教授の論文は、近年殊に英國に於て、數多の論争の種となつた一問題を取扱へるもの、本誌は此の研究に對する讀者の諸反應をば喜んで掲載するであらう」と記して居るところから見ると、經濟計算の問題が明瞭な形で學界に問題とされたのは、これが最初のように思はれる。而して今後の讀者の反應こそ興味を以て期待されるところである、ミーゼスの論旨は、經濟均衡方程式そのものの性質を吟味して、機械學の方程式との差異を明にし、それはハイエーク教授の指摘する様に單に實行上困難だといふに止らず、元來本質上、社會的交換の領域に於ける問題解決に利用し得べからざる性質のものだといふことを論證したものである。

註三 日本に於ける研究狀況に就て簡単に述べて置く。我が國の學界では社會主義計劃經濟が何れの國の學界にも見られぬ程問題となつたにかかはらず、その最も根本的な經濟計算の問題は、何れの側からも不思議に看過されて來た。私が昭和五年の夏に公にした小著『マルクシズムを中心として』のなかで「經濟上の諸々の均衡が取れるか」を問題とし「生産と消費欲望との適合の不可能、勞働分配の不可能」を論證したとき、不十分ながら經濟計算の困難が考へられて居たのである。そして翌六年には「經濟計算の問題」として一文を文部省學生部の思想資料のなかに掲載し、更に七年には『經濟計算』といふ一書を公し

した。慶應の小泉教授が『社會政策時報』で、名古屋の宮田教授が『時事新報』紙上で、高岡の大能教授が著書のなかに、拙著を紹介されて問題の重大性を承認されたが、しかし其後の數知れずあらはれた統制經濟、計劃經濟の論議もこの根本問題にはすこしも觸れなかつた。私はその後も引續きこの問題を考へ、論文に講演に幾度か問題の重大性を強調したが一向に反應なく、久しく淋しい一人旅をつづけねばならなかつた。

然るに昭和十年春に至り、倫敦でハイエック教授の著書が公にされるや、俄然この問題は英米の學界の大きな問題となり、我國に於ても昨年ごろから、若い學徒のなかに熱心な研究を見るに至つた。『一橋論叢』の昭和十三年三月號、六月號、十一月號には山田助教の有益な研究が公にされ、其他『國民評論』十月號に關西學院岡本教授の論文、『經濟學論集』十四年一月號には東大安井助手のランゲの見解の詳しい紹介が發表されてゐる。かくて今後は恐らく經濟組織を問題とする學者は一應は必らずこの問題を通過せねばならぬこととなるであらう。

- (1) Gossen, H. H., *Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln*. Neue Ausgabe. 1884, Berlin, S. 231.
- (2) Pierson, N. G., *Das Wertproblem in der sozialistischen Gesellschaft*(Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik. Neue Folge IV. Band. 10—12 Hef, 1925. 希臘語の原文が發表されたのは *De Economist*. 1902).
- (3) *The problem of value in the Socialist Society*. (von Hayek, *Collectivist Economic Planning*. London, 1935)
- (4) Bourguin, M., *Les Systèmes Socialistes et l'Évolution Économique*. Paris, 1902.
- (5) Katzenstein, *Die sozialistische Systeme und die wirtschaftliche Entwicklung*. Tübingen. 1906.
- (6) Leichter, O., *Die Wirtschaftsrechnung in der sozialistischen Gesellschaft*. 1923. (Marx-Studien V Band, 1 Hef)
- (7) 經濟論叢 第二四卷。

- (10) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins. 1884—89  
Cassel G., Theoretische Nationalökonomie. 1923.
- (11) Barone, E., The Ministry of production in the Collectivist State. (v. Hayek, Collectivist Economic Planning. 1935)
- (12) Neurath, O., Durch die Kriegswirtschaft zur Naturalwirtschaft. München, 1919.
- (13) Bauer, O., Der Weg zum Sozialismus. Wien, 1919.
- (14) Wissel-Möllendorf, Die planwirtschaft. Hamburg, 1920.  
” , Praktische Wirtschaftspolitik. 1919.
- (15) v. Mises, Die Wirtschaftsrechnung in sozialistischen Gemeinwesen. (Archiv für Sozialw. u. Sozialp. 47 Band 1  
Heft, 1920)
- (16) v. Mises, Neue Beiträge zum Problem der sozialistische Wirtschaftsrechnung. (Arch. f. Sw. u. Sp. 51 Band 2  
Heft, 1923)
- (17) v. Mises, Gemeinwirtschaft. 1922 2 Aufl., 1932.
- (18) Weber, M., Wirtschaft und Gesellschaft. 1921. (Grundriss der Sozialökonomik III. Abteilung 1. Halbband)
- (19) Brutzkus, B., Die Lehren des Marxismus im Lichte der russischen Revolution. Berlin, 1928.
- (20) Brutzkus, B., Economic Planning in Soviet Russia. London, 1935.
- (21) Polanyi, K., Sozialistische Rechnungslegung. (Arch. f. Sw. u. Sp. 49 Band, 1922)
- (22) Lehmann, E., Mehrwert und Gemeinschaft, Kritische und Positive Beiträge zur Theorie des Sozialismus. 1922.
- (23) Kautsky, K., Die proletarische Revolution und ihre Programm. 1922.

- (21) Halm, G., Die Konkurrenz, Untersuchungen über die Ordnungsprinzipien und Entwicklungstendenzen der kapitalistischen Volkswirtschaft. 1929.
- (22) Halm, G., Ist der Sozialismus wirtschaftlich möglich? 1929. (邦譯日本評論社社會文庫第五冊)
- (23) Landauer, C., Planwirtschaft und Volkswirtschaft. 1931.
- (24) Lederer, E., Planwirtschaft. 1932.
- (25) Taylor, F. M., The guidance of production in a socialist state. (American Economic Review. vol. XIX, 1929)
- (26) Roper, W. Crosby, The problem of pricing in a Socialist State. (Cambridge, Massachusetts 1931)
- (27) Dickinson, H. D., Price Formation in a Socialist Community. (Economic Journal vol. XLIII, 1933)
- (28) Dobb, M. H., Economic Theory and the Problem of a Socialist Economy. (Economic Journal. vol. XLIII, 1933)
- (29) Hayek, F. A., Economic Planning in Soviet Russia. London, 1935.
- (30) Hayek, F. A., Collectivist Economic Planning. London, 1935.
- (31) Pigou, A. C., Socialism versus Capitalism. London, 1937.
- (32) Lippincott, B. E., On the Economic Theory of Socialism, Papers by Oskar Lange and Fred M. Taylor. Mimeographed, 1938.
- (33) Pollock, F., Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion. 1917—1927, Leipzig, 1929.
- (34) Les Équations de l'Économie Mathématique et le Problème du Calcul Économique en Régime Socialiste.

第二編 諸理論の批判



### 第三章 實物によりて計算せんとする見解

「資本主義」經濟に反對するところの所謂「科學的社會主義」(マルクス主義)が、市場取引を以て所謂資本主義經濟の支柱と見做して其の排棄を主張して來たことは周知の通りであるが、市場取引の放棄が市場價格の放棄を意味するであらうことは、素より彼等にも初めから意識されて居たことである。マルクス自身も、しばしば、價值價格等の範疇を以て單に商品經濟に特有なる歴史的・社會的範疇であつて、それ等が如何なる時代如何なる社會の經濟にも共通なものとは考へて居なかつたのである。かくして社會主義經濟の下に於ける經濟計算を最初に解決せんと志した人達が、それを價值尺度に訴へずして、實物又は實物單位を以て遂行しようと着想せしことは全く無理からぬことであるといはねばならぬ。

前章で觸れたように實物による計算(かりに實物計算論と名付けて置かう)を主張せしものは奧太利のオットー・ノイラート博士と、ソ聯の小農理論學者チャヤノフ教授とであつた。前者は價值尺度に

よる經濟計算を排斥し、後者は價值尺度による經濟計算を最早不可能と見て、共に實物計算方法を提唱したのである。だが、兩者の見解にはかなりの距離があるから、別々に取扱ふであらう。兩者の見解ともに今日に於ては最早歐米の學界には一人も支持するものは居ないといつてもよいのであるが、しかし今日の經濟計算に關する研究も、最初かかる素朴な見解への批判の形で發展したといふ意味に於て一應取上げられて然るべきであらう。我國の現状ではかなり名のある學者のうちにさへも、社會主義社會に於ける經濟計算は實物單位を以て、而も綿密に遂行されるであらうと想像して居る者が居ないではないが、それほど我國の學界に於ての問題理解の水準は低いのである。かかる低い水準に顧みても曾て行はれた實物計算論の要旨を概説して置くことはあながち無意味ではあるまい。先づノイラートの見解を、次でチャヤノフのそれを問題とする。

## 第一節 ノイラートの實物計算論と其の批判

### 一

ノイラートの見解を要約すれば「今日の個人企業による貨幣經濟の組織は、將來は國家の手によ

つて管理せられる實物經濟的社會主義經濟に發展すべき必然の傾向を有し、また發展せしめねばならぬ」といふことに歸着するのである。すなはち彼の提唱する社會主義機構は、第一に生産分配が個人の自由なる競争による市場の自動調節に委される代りに、國家中央機關の經濟計劃によつて管理され指導されるといふこと、第二に貨幣による利潤計算を生産の指標とする代りに實物計劃の基礎の上に行はれる國家中央部の直接價值判斷に訴へて生産を遂行するといふ點に存する。

彼が從來の競争經濟に對して國家中央部の管理經濟 (Verwaltungswirtschaft) を主張する根本の理由は、別に目新しいものではなくて、社會主義者に共通な思想の上に立つて居た。

「吾々の時代の大變革は、明白に、經濟の一元的統制と所得分配の變革とを指して居る。『社會化』への決意は、一方に於ては在來の秩序の恐慌、時々の大量的失業及び不景氣による非經濟性——それは就中『市場と生産の無政府と無規律』に基くのであるが——によつて、他方に於ては正當な根據もなく正當に根據付けることも出来ない所得の分配によつて條件づけられてゐる。生産手段の社會化は在來の非經濟性並に在來の所得と生活條件との分配を排棄するであらう。一の經濟を社會化するといふことは、すなはち經濟を一の計劃的管理により社會によりて社會のために行ふことを意味する」(Nenrath, Durch die Kriegswirtschaft, S. 209)。

特色の存するのはむしろ第二の點、すなはち貨幣計算に代るに實物計算 (Naturalrechnung) による實物經濟 (Naturalwirtschaft, Naturwirtschaft) を提唱した點に存する。而して彼は二つの論據に基づいて實物計算の必然と優越とを主張した。第一には、經濟事實の進行を歴史的發生的に觀察して、歐洲大戰の當時ならびに大戰前の經濟事實の推移は、貨幣經濟がすでにその歴史的任務を終へて將に實物 (自然) 經濟に這入るべき成熟期に到達して居ることを示すとなす見解であり、第二の論據は、貨幣經濟、貨幣計算に比較して、實物經濟、實物計算は價值的に優れたものだと思つたところにある。かかる二つの見地から、今日までの個人的な貨幣經濟の組織は將來國家の手による實物經濟に進展し行くべき運命をもつものであり、また進展せしめねばならぬと考へたのである。

先づ彼の第一の見地がどうして生れたかといふに、素より社會主義者として貨幣經濟の死滅を豫言せしマルクスの影響のあつたことはいふまでもあるまいが、彼が明に指摘して居る事例は、何よりも先づ、大戰による經濟の大變動、すなはち獨逸の戰時經濟に於て貨幣計算は全然その用をなさざるに至れるか、少くとも甚しく用をなさざるに至りて、反對に原料食料等の實物配給等の實物計算が廣汎な範圍に實行せられるに至つたといふこと、また國際取引の上に於て、大戰中例へばスエーデンの如き、輸出品に對する金による支拂を明白に拒否して商品による支拂を要求したといふ事

實である。すなはち大戦下の交戦諸國の戦時經濟の諸現象は貨幣經濟から實物經濟へ、「金」の經濟から「物」の經濟へ、の推移を豫測せしむるといふのであつて、彼の論文集の題目が「戦時經濟を通して實物經濟へ」(Durch die Kriegswirtschaft zur Naturwirtschaft)とせられて居る所以は正にかかる理由に基くと見るべきである。

けれどもノイラートが貨幣經濟⇌貨幣計算から實物經濟⇌實物計算への發展傾向を見出したのはただに戦時經濟の諸事象に於てばかりではなかつた。すでに歐洲大戦の始まる以前の經濟現象のなかに、同じ發展傾向が看取されたといふのである。例へば戦前に於て、各國ともに盛にカルテルの結成が見られたが、カルテルはカルテル外に立つ所謂アウトサイダーを倒す方法としてしばしば其の生産物を生産費以下に引下げて販賣した。即ち利潤を無視して賣つたのである。

然るに純利潤が生産性の指標たる機能を果すことが貨幣經濟⇌貨幣計算の特色であるのに、カルテルが利潤を無視して賣るといふことは、最早純利潤が經濟性の指標たる役割を果し得ざるに至つたことを意味するものであつて、貨幣計算の終焉を暗示せしものだといふのである(Lind. S. 209, 216, 217, 261)。

次にノイラートの第二の見地、即ち實物經濟Ⅱ實物計算の方が、貨幣經濟Ⅱ貨幣計算よりも價值的に優るといふ考は、彼の論文の到る處に窺はれるけれども、例へば二一六頁には貨幣計算により純利潤を經濟性の指標として生産を遂行する結果は「事情によりては企業者は生産物を放棄しまたは生産が可能でも生産をしないことによりて純利潤を増加することが出来る」と難じ、また「純利潤は人間の力の誤用 (Missbrauch an Menschenkraft) を促進した」と非難して居り、實例としてたとへば英國の漁夫は大漁に際して價格をつりあげて純利潤の増大をはかるが爲めにその漁獲物の一部をば再び海中に投棄するといふ事實をあげて居る(75)。

人間の力の誤用といふ意味は、恐慌、失業、不景氣等を惹起することを意味する(75)のみならず貨幣計算による利潤性を追及する生産に於ては文化政策的、社會政策的見地等から見て好ましからぬ物も利潤が多いためにつくられ、逆に同じ見地から好ましい物も利潤がないといふ理由で生産されないといふことにより、人間の力が正しく用ひられないといふことを意味して居る。それは利潤性 (Rentabilität) と生産性 (Produktivität) との矛盾として、社會主義者が反覆する古典的な非難であるが、ただノイラートの特質は、それ故に實物經濟Ⅱ實物計算がよりよいと考へた點であらう。彼は實物經濟が普通に一つの極めて幼稚な經濟にのみ行はれると考へられて居るのを誤りとなし、

「古代エジプトの如く高度に發展した文化のうちにも亦大きな實物經濟が存在したのだ」(S. 151)と稱し、また「吾々はありふれた偏見から脱して大實物經濟 (Grossnaturalwirtschaft) が一つの有力な經濟形態 (eine vollwertige Wirtschaftsform) であることを認めねばならぬ」(S. 216)と云つて、貨幣經濟から實物計算的社會主義に推移することを以つて退歩ではなくて「進歩」であると見て居るのである。

貨幣計算のない經濟、従つて純利潤を生産活動の指標とすることの出来ない實物經濟の社會に於て、何が今日まで純利潤が果して來た生産活動の指標(方向量)たる役割を果すであらうかといふ疑問は、實物經濟の主張に接するものの何人も容易にいだく疑問であらう。この疑問に答へてノイラートの述べるところは次の如くである。

「一つの社會化された經濟に於ては何が純利潤の代りにあらはれて來るか。ある規模の一つのシステムがヨリ大なる又はより小なる經濟性を有するか否かは總體の計劃の比較によつてのみ確認せられうる (Kann nur durch den Vergleich der Gesamtpläne festgestellt werden)。實物計算中央部は例へば電力工事をなし且つ農業經濟をある方法で改善するといふことを假定する一の計劃案をもち、また運河を開掘し冶金工場を設けるといふことを假定する第二の計劃案をもつ場合、經濟指導部

就中人民代表は、第一計劃案すなはち電力並に食料の調達の改善其の他と、第二計劃案すなはち輸入並に鐵の生産に伴ふ調達改善とのうち、何れの案を選ぶべきかを決定しなければならぬ。その場合凡そ如何なる種類の單位もこの決定の根據とはされ得ない。貨幣單位と労働時間も共に決定の根據とはされ得ないのである。二つの可能性のどちらがよいかは直接に判断されねばならぬ。多くの人々は、その様なことは不可能だと考へるかも知れない。だが併し、それはただ、この領域に於て慣れて居ないといふだけのことであつて、他の領域ではいくらでもやつて居ることである。なぜならば新たな學校を建つべきか、それとも病院を建設すべきかを決定する場合に人々は從來と雖も教育單位や病氣單位を基礎としないで、學校により又は病院によりて惹起せられる諸變化の全體をば直接に、たとへ大體のことにもせよ、互に對比するのである。なほまた將軍がその大砲、その汽車、その兵等を何所へさし向けるべきかを決定する場合に、何等かの「戰爭單位」(Kriegseinheiten)を基礎とするであらうか？ また彼が榴彈、地雷、小彈等の幾何量を一一定點に投すべきかの決定に當つて、何等かの「爆破單位」(Schiesseinheiten)を基礎としてそれを行ふであらうか？ 吾々は恰も生産と消費、住宅、食料、衣服、教育、労働、艱難等の分配をも、それと類似の方法で、種々なる可能性の直接なる觀察によつて (in ähnlicher Weise durch unmittelbare

Betrachtung der verschiedenen Möglichkeiten) 決定しなければならぬのである」(7. 217)

要するにノイラートの見解は、實物經濟の經濟に於ては、經濟活動の經濟性の比較決定は可能な諸計劃の全體を直接に比較判斷するのであつて、何等かの一定せる比較の單位尺度を用ひないといふのである。而して「如何なる種類の單位もこの決定の根據とされ得ない。貨幣單位も、勞働時間も共に決定の根據とはされ得ない」といふことによりて明かなることく、彼が實物計算を主張する場合、ただに貨幣計算を否定するといふに止まらず、財の生産に要する勞働時間を尺度とする計算、すなはち後に私の述ぶるところの所謂「勞働價值計算」の方法をも、ともに意識的に却けて居るといふことは特に注目を要するところである。

## 二

以上はノイラートの實物計算論の本質並にそれを主張する根據をば彼の戦争經濟論集たる「戰時經濟を通して實物經濟へ」によつて明にしたものであるが、以下それに對する私の批判を右説明の順序に従つて述べるであらう。

先づ彼が實物計算Ⅱ實物經濟の社會が、將來に於て貨幣計算Ⅱ貨幣經濟の社會に代つてあらはる

べき運命を有するとする第一の根據に就て検討しよう。

第一に、歐洲大戰の當時聯合國特に獨逸奧太利等の國に於て、自由なる市場の流通經濟は極度に拘束管理されて、大規模なる實物計算に實物經濟が、廣汎に行はれたる事實は周知のことである。また當時第三國たるスエーデンの政府が國際取引の上に於て輸出の代價に對する金の支拂を拒否して實物商品による支拂を要求したといふ事實も亦存在したであらう。けれども斯の如き事實は、歐洲戰爭といふ非常の現象に伴へる事實であつて、當時の實物經濟は戰時の特殊なる要求によりてのみ説明せらるべきものであり、これを以て經濟の正常なる發展の一階段として把握するノイラートの態度は妥當ではあるまいと思ふ。特殊現象を無視すべきではない。けれどもそれはあくまで特殊現象として重視すべきものであつて、特殊現象を正常現象と同視して取扱ふことはハイマンもいつて居る通り「病體を以て健康體を推すに類するもの」(Heimann, Mehrwert u. Gemeinwirtschaft, S.167)と評さねばならぬであらう。兎角戰爭の苦痛を感じることに少い官吏や學者等は、ややもすれば戰時の特殊現象を正常視して恒久化せんとするの誤謬に陥りやすい。生命を危険にさらして居る第一線の軍人やその家族又は戰時政策による犠牲事業に従事する人々が、ヂット艱難を堪へ忍ぶのは、祖國の非常時を乗り越えて和平を齎さんがためであつて、恐らく戰爭を以て正常なる永久的事實と

は考へ得ないであらう。なほ吾々は常に戦争の用意を忘れてはならないが、戦の「用意」と「戦」を混同することはあやまりであらう。第二に、大戦前より、カルテルがカルテル以外の競争者を驅逐せんが爲めに、しばしば其の純利潤を無視した廉價を以てその生産物を販賣せることのあつたことも、亦何人も疑はない事實であらう。けれどもいふまでもなく、カルテルの目指すところは純利潤であつて競争者の驅逐自體にあるのではない。いはんや損失が目的である筈はない。アウトサイダーを驅逐せんがために一時の損失を忍ぶのも驅逐後に於て競争期に於ける損失を償ひ、能ふべくんば純利潤の増加を實現せんがための故である。従つてカルテルの支配する場合に於ても亦、純利潤は相變らず生産の指標たる役割を失つては居ないのである。これまた一時の特殊現象を見て一般を推す誤謬といはねばならぬ。

第二の見地、すなはち實物經濟が貨幣經濟に優るといふ見地に就て検討するに、第一に漁夫が價格維持の目的を以て漁獲物の一部を再び海中に投じたなどといふことは、フリーエのマルセイユに於ける故事を想起せしむるものであつて、事實としては必ずしも絶無だといふのではないが、併しながら、その際吾々の注意を要することは、かくの如き事象の發生しうるのは何等かの形に於て供

給獨占の存する場合に限られるといふことである。上記の例に於ても、かりに漁夫の間に獨占が存しないとすれば、如何なる漁夫が眞先に、敢てその漁獲物を海中に放棄しうるであらうか。いふまでもなく貨幣經濟は直ちに獨占經濟を意味するものではない。獨占といふ特殊の場合の事象をあげて貨幣經濟一般の責に歸するは妥當ではあるまい。加ふるに吾人は社會主義經濟が計算方法の如何に拘らず、國家による供給獨占の經濟であらうといふことをも考慮しなければなるまい。素より社會主義社會に於ける生産首脳部の見地は、今日の私的獨占者のそれとは比較すべからざる高度のものだと云ふかも知れないが、漁業の當事者たる漁夫が右の事例の如き大漁に際して、より多くの魚を捕へて一般の食膳をにぎはす代りに、その勞働量の節約を選ぶといふが如き危険は充分にあり得べきことであらう。由來社會主義者がこの種の非難をなす場合にはいつでも、而して誰でもが、三、四の古典的な實例を繰返すのであるが、一體同一の事例をいつまでも繰返さねばならぬといふことのうちに、吾々は今日の貨幣經濟の下に於てもかかる事例は容易に見つからぬものだといふことに氣附かねばならぬであらう。

第二に文化政策的、社會政策的其の他の見地から見ても好ましい物も生産されず、逆に好ましくない物も生産されるといふ非難については、すでに第一篇に於ても述べた様に（二九頁）無論現實の事

實としては認められるであらうが、併しながら、貨幣經濟の今日に於ても、右の如き見地から好ま  
しからぬものは、例へば阿片の様に、その生産乃至消費を禁止することは必ずしも不可能ではない。  
故に現に好ましからぬものが生産されつつありといふ事實は、政策の當否の問題とこそなり得よう  
が、それを以て貨幣經濟の本質的缺陷とするのは當らぬであらう。また文化、社會政策等の見地か  
ら好ましいものが生産されないといふ點は、なる程今日の經濟では買手がなければ生産されないで  
あらう。けれども、たとへ社會主義計劃經濟をとる場合と雖も、貨幣經濟の下で絶対に買手を求め  
得ない様なものは、社會主義首脳部がそれを生産したところで消費させるわけにも行かず、消費の  
ないものなら生産する譯にも行かぬであらう。貨幣經濟の下で恐慌失業等の事象が起ることも周知  
の事實であるが、しかしそれとても「非經濟性」と呼び得るためには貨幣のない實物計算でより以  
上の經濟性が實現されるといふことを論證しないかぎり、貨幣經濟よりも實物經濟の方が經濟的だ  
と斷定する根據とはなり得ないであらう。

一體今日の如き廣汎複雑な分業社會に於て、何等の價值尺度をも媒介とせずして、經濟活動の經  
濟性をば、單に全體の直接なる觀察に訴へて、判斷するといふが如きことが、到底實行し得べから  
ざる次第は第一章に於て繰々説明したところで繰返す必要はあるまい。素より今日の社會に於ても、

ノイラートの擧げる例の如く、學校、病院等の建設や戦争に於ける諸活動の如く、特別なる價值比較の尺度單位なくしてただ全體の直接的判斷に訴へて事を決するの外なき場合はすくなくない。けれども、それは貨幣計算だけで充分でないといふことを物語るものではあるが、貨幣計算がなくてよいといふ理由とはならぬ。今日社會的に取引される財貨は多くは價格をもつて居るので、今日の經濟に於て貨幣計算に訴へ得ない場合は例外に屬する。然るに社會主義の實物經濟に於ては、今日のこの例外的事實か、原則となり全體となることを思はねばならない。なほ今日の社會に於て單に直接判斷に訴へて決定するの外なき場合も、それ等は通常享樂財であつて生産財ではない。だから結局全體的直接判斷に訴へて兎も角も決定し得るのであるが、それがかの社會主義社會に於けるが如く、生産財に關する場合に於ては、價值尺度なくして、經濟性の比較決定をなすことは單なる恣意による外不可能といはねばならぬであらう。

社會主義者のカウツキーさへ次の様に述べて居る。

「資本主義的生産方法が現實となつてから數千年の歲月が經つて居る。價值の尺度として、また生産物の流通の手段として、貨幣は社會主義社會に於ても存立しつづけるであらう。つひに信心からの果なき願望にすぎないかも知れぬところの共產主義の祝福された第二段階の黎明が來るま

では、貨幣制度は廣く網の目の如き分業の行はれる社會の機能には不可欠な一の機械である。實物經濟の原始的な方法に訴へるために、この機械を破壊することは野蠻時代への飛躍であらう。貨幣制度を破壊することによつて資本主義を破らうとする者は、前世紀の劈頭に於て、手にした機械を壊すことによつて資本主義的搾取の息の根を止め得ると考へた素朴な労働者達に類する。」

## 第二節 チャヤノフの實物計算論と其の批判

—

學界周知の如く、チャヤノフ教授はロシアに於ける小農經濟に就ての理論家として、帝政時代よりすでに世界的に著名な學者であつた。十月革命以後もそのまま教職に止つて居たが、一九二〇年九月『エコノミーチエスカヤ・ジーズニ』誌の二二五號と二三一號とに繼續して、社會主義社會の經濟計算に就ての見解を公にした。やがて夫れに對するストルミリンからの批判にあひ、同紙二四七號に再び同じ問題で筆を執つた。けれども、そこには別に新しい見解は示されて居ないのであつて、我々は最初の二論文のうちに彼の見解の全貌をうかがふことが出来るのである。

第一回の論文の首題は『社會主義國家に於ける經濟計算の問題』とあり、其の區分題目として、「其の一、社會主義社會に於ける經濟性の概念」と記されて居る。而してそこには、これまで行はれて來た資本主義的計算方法はソヴェート・ロシアでは最早全く役に立たなくなつた次第を述べ、社會主義ロシアに於ては全く新しい簿記の原理とそれに基く方法を必要とする理由を明にし、其の新方法を提示することが論文の目的であることを叙べたる後、所謂新しい方法の内容を詳しく述べて居るのである。第二回の論文には區分題目がなくて首題たる『社會主義國家に於ける經濟計算の問題』とのみ記されて居るが、其の内容から見れば、第一回の論文で展開された新しい經濟計算の原理原則をば具體的に適用する方法を詳述したものである。

ロシアに於て經濟計算が問題とされるに至つた動機は、さきにも一言せし通り、當時のソヴェート經濟の事情そのものである。すなはち社會主義革命によつて市場市場價格が崩壊し、從來の貨幣による經濟計算の方法が其の用をなさざるに至つたといふ事が、「新原理」の提唱を強制したのである。ノイラートの見解と無關係に成立したものであることは云ふまでもない。彼は這般の事情を次の如く述べて居る。

「規準價格と自由價格との間の絶縁、ルール相場の底なしの下落、經濟生活のあらゆる根本概

念の完全な變化は、吾等の簿記帳者をして、手を膝にして茫然自失するか、さもなければ色々な組合せを試みることによつて、無理に舊い革袋に新しい酒をつぎ込むの外はなからしめた。けれども、吾々はこれ等の複雑な構成の批判的觀察の後に、不幸にして、それらすべての試みは目的を達し得るものではなく、今日の經濟は資本主義的簿記の中では身動きの出来ないものだといふ確認を餘儀なくされる。……すべてが私經濟的レンタピリテート(収益性)の原理の上に築かれた資本主義經濟の立派な簿記の諸組織は、社會主義經濟の建設に於ける吾々にとつては、恰も超勞級戰艦が海の無い國クルスクの戰爭に於てと同様に、役には立たないのである」と。

また次の様にも説明して居る。

「貨幣形態を装へる總收入から、同じく貨幣形態を装へる原價と勞賃を減ずることによつて純收入を確認せんとする私經濟的經濟計算は死滅した。蓋し計算を遂行する所の諸量(Die Größen)が死滅したからである。」

計算を遂行する所の諸量とは、いふ迄もなく、生産物の市場なき社會主義の下では貨幣形態を採る總收入もなく、生産財市場のなきが故に貨幣形態をとる原價も存在しない、即ち計算の基礎たる數量が消滅したといふ意味である。

而も吾等は、上述の如き叙述と見解、即ち共產ロシアに於て從來の經濟計算方法が全くその用をなさざるに至つたといふ事實の叙述、並にその理由をば舊い經濟の基本概念の變化に求め、よつて新たなる基本概念、新たなる經濟組織の本質に適應せる經濟計算方法の原理を必要とする見解は、チャヤノフの以前に於て、すでにブハーリンの『轉換期の經濟學』の中に於ても發見する所である（同書第九章、獨逸譯「1932. 6. 154—155. 稻垣氏日本譯第一九四—一九五頁參照）。ただブハーリンにあつては、新たなる計算方法の必要を暗示せるに止り、未だ自ら必要とする新原理、新方法を示すまでに到らなかつたのである。

チャヤノフは、自らその論文の目的を規定して次の如くいつて居る。

「吾々のここで問題とするのは、社會主義經濟の任務は何であるか、而して何が社會主義經濟の成果の評價をするための可能なる規準であるかといふ問題である。なぜならば、經濟計算そのもの並にその結果の評價は吾々にとつてこの任務に關してのみ、而して規準の助けによつてのみ可能となるからである。」

注意すべきは、吾々はすでにここに於て、チャヤノフの見解とノイラートの實物計算論との根本的差異を發見するといふことである。即ち、ノイラートにあつては、要するに社會主義に於ける生

産分配の活動の撰擇決定は、可能なる數多の計畫の全般的直接判斷に訴へて行はるべく、何等特別なる比較の規準を用ひず又用ふるを要せずとなすのであつたが、チャヤノフに於ては、經濟成果の評價に於て一定の規準の缺くべからざることが明白に認められて居るのである。

彼の所謂新たな原理をば、彼の思考の過程に沿ふて述べれば次の如くである。

先づ彼は、その理論の出發點として「最少の犠牲を以て最大の効果を收める」といふ原則を以つて、社會主義社會も亦これを遵守實行すべき根本的經濟原則と認め、社會主義社會の經濟性とは要するにこの原則の社會主義的な遂行を意味するものと考へて居る。

「今や新たな經濟計算は如何なる基礎の上に築かるべきであらうか。最少の費用を以つて最大の効果を達するといふ根本的經濟原則が社會主義經濟にとつても其の妥當性を維持することには疑がない。それ故に問題の全部は、この原則の資本主義的でなくして社會主義的なる表現形態を發見する事に存する。」

と述べてゐるのがそれである。チャヤノフはもう一つの出發點として、實物による計算を不可避と見た。而も實物計算を不可避と見た根據は、從來の貨幣計算が新社會に用をなさぬといふ點に求めた様である。素より貨幣計算と實物計算との間には、後にストルミリンが提唱した様に、少くとも

勞働價值計算といふ第三の見解の存在を想像する餘地があるのであるが、併しチャヤノフに於ては、意識的にかそれとも無意識にか、最初はそれが問題とされなかつたと見られる。即ち彼のいふ所は次の如くである。

「社會主義的經濟の經濟性の概念構成に當つて、吾々は明白に、資本主義的經濟の上述諸概念を用ひ得ざるのみならず、用ひる權利もない。そこで吾々は實物に於ける費用と効果との根本關係を求め、それに社會主義的經濟の性質に適應した形を與ふることを餘儀なくされる」と。

以上述ぶるが如く、最少犠牲を以つて最大の効果をあげるといふ原理をば、實物に於ける犠牲と効果との根本關係を求めることによつて貫かんとするチャヤノフは、そこから出發して、その考へを順次次の如く運んで行つた。

「社會主義經濟の組織の最も經濟的な形態は、國家が處分し得る勞働量を、生産手段と原料、換言すれば、爲されたる勞働の最少の費用を以て、有用財の最大量を得る様に用ふる形態であらうといふ事は明である。」

「右の原理は、勞働と材料との、何百萬といふ可能なる諸の使用方法の中で、最大の效用を齎す様な方法が探求されることによつて達せられる。」

「右の原理の確認が、社會主義經濟に於ける簿記の任務である。而して曾て簿記の結果は、純利潤の百分比の形で……表現されたけれども、今や吾々が一の經濟の判斷をなすに當つては、生産實物一〇〇〇單位がこれこれ量の勞働、原料及び生産手段の費用を以て得られる可能性があると云ふ風に云はれるであらう。而してここでは、それ等の費用の収益性が、全産業部門の管理部門 (Glantz) が社會的に有用だと認めた規準 (Norm) に比較して、より高きとか、より低きとかいふ事がいはれるであらう。」

これがチャヤノフの第一論文の到着點である。吾々の知り得た事は、要するに、全産業部門の管理部門が、實物で測定した、社會的に有用と認めたある規準を定め、その規準と比較して犠牲と効果の比較、即ち經濟性の比較決定を行ふといふことである。第二の論文は、この結論の具體的な適用方法の説明である。

「吾々はこれから、經濟性の尺度、即ちそれによつて得られたる結果の成功と失敗とを量的にあらはす單位の設定に移らう。」  
「新たな計算の最後の結論は、一單位當りに費されたる勞働、原料、耕地面積、建物、家畜共の他の量の量に於て表現せられねばならぬ。」  
「ある資本主義的經營の結果は大體に次の如き形式、即ち『その經營の純利潤は一二二五〇ルーブル三七・五コベックに等しい。』」

それは投下資本の單位當り配當三二ルーブル三一・五コベック或は五・三・四パーセントに當る。」といふ形式であらはされる。所が理想的國家農場の技術的機關となつた同じ經營の社會は、得られたる小麥一〇〇〇ブード當り二六二日の人の勞働、一六二日の馬の勞働、單純な機械一二單位、複雑な機械二一單位、秣の1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>立方單位等を費したといふ風に表現されるであらう。」

斯様にして、生産物の單位量當りに要した實物で測定せる費用は、各生産部門について中央部の決定せるそれぞれの規準と比較することによつて經濟的なりや否やが決められる。流石にチャヤノフは農業經濟學者であるだけに引用する所は常に農業に關するのである。

「外的評價の組織に於て動物の各部分は一つの特別な評點によつて評價される。最高點は一般評價に於ける部分の重要性によつて決められる。得られた評點の總數はその動物の質の係數を與ふる。たとへばある動物がすべての點で最高點をとるので、あらゆる點に於て理想的であるとすれば、而してそれを一〇〇點とすれば、より質の悪い（理想的でない）動物の總點數は、九二點、八一點、七二點又はそれ以下といふ風になるであらう。」

チャヤノフは、普通に行はれるこの動物評價の方法を經濟の評價に適用した。即ち右の例に於ける動物身體の各部分の代りに個々の生産部門をもつて來る。また最高點制度の代りに中央部の決

定する所の、「社會的に有用なる限界生産規準」(Grenzwertproduktionsnorm)なるものを用ひたのである。チャヤノフが言ふ所の社會的に有用なる限界生産力規準といふ概念は、後に述ぶる通り、極めて獨斷的に決定するの外なきものであるが、チャヤノフの説明によるとそれは次の如き概念である。

「得られし結果が經濟的であるかないかを云ふためには、吾々はその結果をば、社會主義的生産の評價に於て一の標準として認められ得るある規準と比較しなければならぬ。換言すれば、單なる經濟内部計算だけでは經營結果の經濟性の概念を吾々に與ふことは出來ない。内部計算は單に達せられた技術的結果を表はすに過ぎない。吾々は、その經濟性をばただ外部からある標準によつてのみ確め得るにすぎない。何が一の標準としてとられ得るかを發見しよう。

單純な例をとつて考へて見よう、國內に於て大茴香アニサイズを生産し得る五つの經營ありとする。これ等の各は大茴香の一〇〇封度を生産するとしよう。然るに自然的並に經濟的條件を異にするがために、それ等の經營は同じ一〇〇封度を得るに同じ努力を以てしない。即ち一〇〇封度を得るために、第一經營では一三二労働日を、第二の經營では一四七労働日を、第三のそれでは一五三労働日を、第四のそれでは一六八労働日を、而して第五のそれでは一八一労働日を要するとする。所が、吾々が更に國內で年々、單に三百封度の、大茴香を必要とするに過ぎないと假定すれば、國は如

何なる經營に於てそれ等を得ようとするであらうか。三百封度の大尙香だけを生産せんと欲する國家は、基本的經濟原則を貫くがためには、第一、第二、第三の經營に生産を集中し、第四、第五は他の財の耕作に用ふるであらう。

吾々は最初の三つの經營を選択したので、選ばれた三つの經營のうち労働生産力の最も悪いものは第三番目の耕作即ち、一〇〇封度の生産のために一五三労働日を要する耕作經營となる。我國に於てこの第三番目のものが、労働生産力の限界となるであらう。……この場合、一五三労働日は大尙香の生産にとつて労働生産力の求められた規準と認められ、すべてのより生産力の高いものはより經濟的と認められ、より少ない生産力のものとは經濟的でないものと認められるであらう。

右のいふ所の「労働生産力の限界……一五三労働日……」が、この場合に於ける労働の「限界生産力規準」の意味である。この概念決定に對する批判は後に述べることにして、兎に角チャヤノフの考では、國家産業管理の中央部は、右の如き方法によつて限界生産力規準をば、あらゆる生産手段及び原料——生産要素——に對して、それぞれに決定し、それと、ある經營がその經營に要する

實物費用とを比較することによつて生産が經濟的なりや否やを識別せんとするのである。大體の  
 法は右の説明によつて明となつたと思はれるが、併し彼の具體的例説を見ると、一層明瞭となるで  
 あらう。

「ここにその生産の經濟性を吟味すべき一の農業經營「A」があつて、そこでは穀物生産をなす  
 のであるが、ここでは穀物の一〇〇〇單位を生産する爲めに、勞働三〇・〇單位、生活資料九〇・  
 〇單位、土地八・五單位、運搬〇・六單位、建物二五・〇單位、道具〇・四單位、材料一・〇單位、  
 燃料〇・〇三單位を要したとする。右それぞれの生産要素の限界生産力規準をば、順次に、四五・  
 〇・一二〇・〇・一一〇・〇・六・一五・〇・〇・五・〇・〇三單位とすれば、即ち次表第一表が得  
 られる。

(第一表)

生産の諸要素	限界規準(單位)	現實にA經營で用 ひられた量(單位)	割 合
勞 働	四五・〇	三〇・〇	一・五
生 産 資 料	一二〇・〇	九〇・〇	一・三



の總係數は次の如くなる。

(第二表)

部 門	經濟性係數	相對的重要度係數	總 計
農 耕 (Field Cultivation)	一・二四	四	四・九六
牧 畜 (Pasturage)	一・〇二	一	一・〇二
菜 園 (Vegetable Growing)	〇・九〇	一	〇・九〇
家畜飼養 (Product Cattle)	一・四八	二	二・九六
	九・八四		八〇・二三

斯くの如くにしてその全部門に於ける經營の限界規準を一・〇〇とすれば、經營に於て示されたる成功（經濟性）は、一・二三單位といふことになる。これが吾々の提唱せんとする社會主義經濟の經濟性測定組織である。それは各經濟部門に於て費される勞働及び生産手段の成功をば他の産業單位に於けるそれ等の費用と比較することによつて、終局的に且つ極めて精密に、計算するの可能性を我らに與ふるものである。かくして總經營の經濟性の一般係數をも計算することも可能となる」といふのである。チャヤノフの實物計算論の内容は大體右の如くであるが、以下項

を改めてそれに對する批判を述べよう。

## 二

先づ、チャヤノフは、社會主義社會に於ても亦、生産活動の經濟性を比較判定するためには、何等かの外的標準を不可缺と考ふるものであるが、この點に對しては全く同感である。何等特定の標準によらずして、合理的に比較判定することは明に不可能と考へる。この意味に於ては、チャヤノフの見解は、ノイラートのそれに較べて、遙に進んで居るものと見なければならぬ。而して實物計算の方法としては、チャヤノフの方法以上のものを案出することは不可能とさへ考へる。然しながら、彼れが提唱する「新原理」に於て發見せし處の經濟性比較の標準なるものは、これが決定の過程を詳細に吟味する時、それは毫も客觀的合理的な存在ではなくして、全然國家産業統制中央部の任意放恣なる決定に過ぎないことが發見される。従つて私は、かかる任意放恣に決定された標準によつて、測定せられたる經濟性なるものも、また任意放恣に止まるものであつて、合理的經濟計算の方法と認むることは出來ないのである。

例へば所謂限界生産力規準の決定に於て、穀物の生産に要する多くの生産要素が組合せられてゐ

る際に、勞働の限界生産力を四五とし、生活資料を一二〇とし、農具を〇・五となすといふけれども、そもそも何を論據に斯様な決定が出来るのであるか。無論一應の根據はあらう、だが他の根據からは他の結果が可能であらう。吾々はすでに、勞働や、土地や、農具等のうちには無数の質的差異を見る。例へば一つのクワも農具であり、一つの打穀機やトラクターも亦農具である。それ等無数の質的差異を無視して、單に「農具」として概括し、一個の限界生産力規準を定め又實際に消費された數を算出するといふが如きことは、チャヤノフにあつては任意に決定するの外なきものではないか。又チャヤノフは勞働、農具其の他の異質なる生産要素の消耗分を合計して居るけれども、凡そ合計の可能なる爲めには、先づ以つて共通なる分母に還元される事を必要とする。實物について、土地五反歩と鐵十貫目を合計しても、その無名數の五と一〇合計たる一五は何等の意味をも有し得ざること論をまたぬ。又所謂重要度係數なるものについて見るに、建物、農具材料、燃料等の重要度係數はそれぞれ勞働力の四分の一とするといい、放牧、菜園は一とし、農耕を四とし、家畜を二とするといふも、如何にして、これ等の係數を合理的に決定しうるであらうか。いふ迄もなくそれは産業中央部が任意放恣に決定するの外なく、従つて甲者の決定の結果は、乙者丙者の決定の結果とそれぞれ異なるものとならざるを得ない。それは言葉の嚴密なる意味に於ける經濟の名に値しない

ものである。そこには經濟的混亂はあつても經濟的秩序は存在しないといはねばならぬ。

以上吾らは、簡單ながら、ノイラート及びチャヤノフの實物による經濟計算論の要旨を明にし且つこれを批判して來た。ノイラートに對しては、カウツキー、ウエーバー、ミーゼス、ハイマン、ライヒター等の批判があり、チャヤノフに對しても、ストルミリン、ヴァルガ、ライヒター等の批判があらはれた。要する所それ等すべての批判は實物によつては、異質の生産物を比較すべき共通尺度を缺くが故に、經濟性の比較が不可能であり、従つて經濟性に從つた生産が出来ないといふ事に集中するのである。私は最後に、多少觀點を異にせるカウツキーと、ビエルソンの二人の實物計算論一般に對する批判を援用して、本章を結びたいと思ふ。カウツキーの文章は、『プロレタリア革命とそのプログラム』第三一七頁から、ビエルソンのそれは、『國民經濟及び社會政策誌』第四卷一〇—二冊一九二五年第六二八頁以下からの引用である。

カウツキーの批判の要點は次の如くである。

「社會主義社會が如何様に組織されようと、必ず注意深き簿記を必要とするであらう。而も社

會主義社會に於ける經營の各がそれを必要とするであらう。各經營はこの簿記によつて、何程を受取つて何程を支出し、幾程の利得をして幾程の缺損をしたかを、何時でも明瞭に知り得なければならぬ。然るに出入を單に實物で記帳する場合には、この目的は斷じて達せられることが出来ない。例へば或る一の機械工場が、一つの打穀機を供給して、其の代りに例へば四〇頭の豚、一〇〇ツェントナーの麥粉と、二〇ツェントナーのバターと二〇〇〇個の玉子を受取つたものと假定しよう。彼は如何にしてこの取引を得をしたか損をしたかを知り得るであらうか。勿論知るところを得ない。實物記帳はやがて底知れぬ混亂に陥ることが明白である。……生産費が記帳せられることを要するのであり、而も何時でも明瞭に見られ得る様に記帳せられることを要するのであるが……すべての生産物は共通物を有すること……によつてのみ、互に交換せられる量は測定し得べきものとなり、それによつてのみ一般に交換し得べきものとなるのである。」

次にビ、エルソンの見解は左の如くである。

「何が所得と見られる事が出来、従つて分配されるために考慮されるべきであるか。勿論それは純所得に限られるのであるが、併し社會主義の社會に於ても所得は先づ總所得としてあらはれるで

あらう。社會が得る所の生産物の中には、加工された原料が含まれるであらう。更に加工に當つては燃料その他が費されて居る。社會主義社會は、その分配し得べき純所得を計算するためには、總所得から、それ等の費用を引去らねばならない。だが織物から綿や石炭や機械の一部を引去ることは出来るものではなく、又一匹の牛から其の飼料を引去ることも出来るものではない。吾々に出来ることは、一方のものの價值から、他のものの價值を引くことだけである。故に價值づけ又は評價 (Bewertung oder Schätzung) をくしては、共產社會は、何が純收入 (Nettoeinkommen) として分配されて差支ないかを確保することが出来ない。」

實物計算の秩序ある經濟の發展が行はれ得ると考ふる見解は、カウツキーとピエルソンの右引用句だけからでも、すでに充分に打破され得るであらう。

## 第四章 勞働を尺度として計算せんとする見解

社會主義經濟に於ける經濟計算をば、實物又は實物單位によつて遂行せんとする見解は右の如くにして否定されるのである。併し乍ら、實物計算を否定する論者のうちにも、色々な見解がある。或者は爾餘の一切の計算方法をも無効とし、他の者は、實物計算以外に可能なる計算方法ありと見る。今一切の計算方法を無効となす論者を暫く措いて、社會主義經濟の下に經濟計算を可能となす者を見るに、そのうちにも、更に分れて修正せられたる一種の貨幣計算方法を主張するものと、勞働價值計算を主張するものとの大きな對立を認め得る。私は前者の考察を次章に譲ることとし、ここには先づ、勞働價值計算によらんとする見解を研究したいと思ふ。

然るに勞働價值計算によらんとする論者の中にも、見解には多少の相異がある。この論者がすべてマルクスの流れを汲むといふこと、財の生産のために、社會的に必要とする勞働價值を以て其の財の生産費を測定せんとすることに於てのみは、ともに共通してゐるけれども、其他の點殊に生産

物の價値の尺度として、生産費と見られし所要労働量のみを以て充分と見るか否か、不充分と見る者に於ては如何なる方法に於てその缺を補正せんとするか等の諸點に就ては、見解必らずしも一致して居ない。従つてそれ等の主張を一括して説明することも、一括して批判することも妥當でないと考へる。それは恰も、すでに所謂資本主義社會に於ける價值理論としての労働價值説が多様であり、従つて、一括して論評することの不可能なるに似て居るのである。

以上の理由に基き、私は労働價值計算を主張する學者の代表的なるものとして、ロシアのヴァルガ、ストルミリンと、オーストリーのオットー・ライヒターの三人を選び、その見解の公にせられた順序に従つて、個別的に稍々詳密なる研究を遂げたいと考へる。

## 第一節 ヴァルガの労働價值計算論と其の批判

### 一

私がここにヴァルガの見解を知るに就ての據所とせるものは、『Economicideskaya Zhizn.』 Nr.

230. (一九二〇年十一月十八日號) 上に公にされた彼の論文『貨幣なき經濟に於ける生産費の計算』であ

る。この論文はすでに一九二一年ウキーンに於て雑誌“Kommunismus” II. Jahrgang, Heft 9/10. Wien 上に獨譯せられたといふ事である。私の利用せるものは、チャヤノフ、ストルミリンの論文と共にミハエル・ブルツクス君を煩し改めて露文から獨譯せしめたものであり、私の引用句に一々原文の頁を附記し得ざりじはかかる理由に基く。

ヴァルガは、社會主義社會に於ける經濟計算の問題を、如何なる意味に理解し、如何なる理由でこの問題の重要性を認めたか。吾々はこの點につきては、彼の次の如き明瞭な記述を見出すのである。即ちいふ。

「同志チャヤノフとストルミリンの間に、E・Z・紙上で行はれた論争は、多くの讀者の目には無駄な理論的論争と見えたかも知れぬ。けれども、この生産費計算の問題は、實際はすべての社會主義國家にとつて、非常に重要な問題である。蓋し次の如き諸問題は、正しい生産費計算を基礎としてのみ、初めて解決され得るものだからである。

(一) 一の特定範疇に屬する如何なる經營が、一定の生産物をば最も有利に(經濟的に)生産し得るかの問題。

(二) 客觀的技術的意味に於て一定の欲望を同じ様式で充す所の財の多く、例へば燃料としての

薪、石炭、泥炭又は石油。運搬用具としての鐵道又は汽船等のうち如何なる財が國家によつて生産せらるべきであるかの問題。

(三) 將來社會主義的生産が、今日の様に不可欠な欲望財のみが供給される(それすらも今日是不充分であるが)といふに止らず、もつと效用の少ない財をも供給し、社會の成員に財選擇の可能性が與へられる様な發展階段に到達する場合には、個々の財の生産費の一つの客觀的計算の存在が必要となるであらう。」

ヴァルガが右の文章でいはんとする所は、説明を俟たずして明白であるが、ただ私は、彼が「社會主義社會に於ける經濟計算の問題」をば貨幣なき經濟に於ける生産費計算の問題として居るといふ一點に先づ注意を促して置きたい。チャヤノフの所謂「社會主義社會」はヴァルガのいふ「貨幣なき經濟」と同一物を意味するものであるが、それはたんに表現の差異に過ぎない。ただ「經濟計算」を「生産費計算」とのみ解することは單なる言葉の相異の問題ではない。經濟計算は犠牲(生産費)と効果との比較計算の問題である。ヴァルガの生産費計算が、生産の犠牲即ち經濟計算としてはその一部分を意味するに止まる事は、彼の論文の内容によつて明かである。この點詳細は、次項批判の際に述べるであらう。

ヴァルガは彼の勞働による生産費計算方法を主張する前提として、チャヤノフの實物による計算——「客觀的技術方法」——の適用可能性を吟味して居る。私は彼自身の積極的主張の説明に移る前に、彼のチャヤノフ批判の結論だけを述べて置かう。それは要するに「一般に、客觀的技術方法は、實物に於ては、ただ稀なる場合に於てのみ適用しうべきものにすぎぬ。異なる生産物の生産費比較のためには用をなさぬ」こと、及び同一生産物の生産にあつても、種々の經營に於て、「用ひられる要素が異なる方向に向つて變化する場合又は同じ方向に變化する場合でも異なる割合で變化するに至るや否やその適用性を喪失する。」而して「すべての經濟的方向決定の可能性を失はざらんが爲めには、吾々は諸の生産物の生産費に對し、何等かの一定の尺度を決定しなければならぬ」といふのである。

即ちヴァルガは、社會主義經濟に於ても生産費の計算なくしては、經濟的生產は不可能であり、而も生産費の計算の爲めには、一般に實物計算は適用し得ず、必らずや生産費の一尺度を要するとの考へから、「かかる尺度の役目をつとめ得るものは、ただ生産行程に用ひられし勞働時間の外にはなし」と主張するに至つたのである。何故に彼が、生産費計算の尺度として、生産に要したる勞働時間を用ひ得ると考へ、又生産に要したる勞働時間のみを用ひ得ると考へたか。この論據につい

てのヴァルガの説明の第一は、正にマルクス資本論第一卷冒頭に於ける、資本主義的生産方法の支配する社會に於ける商品價値の説明を想起せしむるものである。即ちいふ。

「尺度として用ふべきものは、ただ比較せらるべき對象物に共通な或ものでなければならぬ。すべてにマルクスがいつた様にかくの如き共通な性質アイゲンシャフトとしては、ただ一つあり得る、而もそれは、すべての經濟財が用ひられた労働時間の一定量を含むといふ性質である。すべての經濟財が持つ他の性質——その效用即ち使用價値は決して物自身の性質ではなく、その財に對する人間の關係の表現にすぎない——使用價値は人の個人的な、多様な價値評價に依存するものであり、従つてそれは尺度として用ひられ得ざるものである。その結果、市場の無い社會主義の經濟では、労働は何等の交換價値をも有しないけれども、併し異なる生産物の生産費の比較のためには、それに含まれる労働時間以外の他の基礎が存在しないといふことになる」と。

ヴァルガが労働費用計算を主張する第二の論據は、労働生産力の最大なる發展を社會主義經濟の目標と見ることから來る。即ち社會主義生産は、出來得る限り少い労働費用で生産することを一の目標とするが爲めに、社會主義國家は無條件的に、各生産物の生産にどれだけ労働時間を費されたかを知らねばならぬからと見るのである。

そこで問題は、然らば生産費の尺度としての、各財の生産に要する労働量を實際に如何様にして測定しうるかといふ事に移る。而してこの仕事が非常な困難に遭遇するといふこと、マルクスにその解決を求めることが出来ないといふことは、すでにヴァルガの認むる所である。而もなほ、「問題の實際的解決のために若干の指導を與ふることを可能と考へ」て、述ぶる所は、すなはち次の如くである。

「物理學者が、メカニクに於て數學的振子運動を問題とする場合、彼等は先づ全重力が一點に止まること、運動が真空内で摩擦なく行はれること、等の色々な假定を設ける。所が斯様にして得た數學的振子運動に適應せる數式を、具體的な重力や磁力の測定に用ふる場合には、一聯の修正が行はれる。かくして、絶對的な正確は望まれないけれども、それに近づくことによつて、すべての細かい測定のためには充分である。」ヴァルガは、この力學に於けると「同じ方法によつて」、先づ一つの理論的表式フォルメルを發見することを企てた。従つて「このフォルメルは最初は現實からかなり離れたものであるが、それに漸次一聯の修正を導入することによつて、一步一步と、現實に近づける」といふのである。即ち、彼が、數學的振子運動の表式にも比すべき、生産費の「測定單位としての抽象的労働時間」の表式を求めるために、出發點に於て設定せし前提は次の七つである。

「一、生産手段の消耗分として生産物に移渡さるべき部分の労働時間は顧慮しない。」  
現實には生産手段の消耗分はその生産物に於ける生産費の一部として計上せられねばならぬものであるが、最初は先づそれを無視する譯である。

「二、無質労働、有質労働及び専門家 (unqualifizierte, qualifizierte Arbeiter, und Fachleute) の労働時間は、互に等價と見る。」

つまり、一先づ、手傳の労働も、大工の労働も、建築技師の労働も、それぞれの一時間を相互に値打を等しいものと計算するのである。

「三、何れの労働者に於てもその労働強度 (Arbeitsintensität) を等しと見る。」  
つまり、ここでは、國內の全労働者が、同一のはげしさで働くものと假定するのである。

「四、運搬の労働費用を顧慮しない。」  
運搬のために要したる労働は生産に計算しない、換言すれば、運搬のための労働を要せざるものと假定する譯である。

「五、氣候の關係から必要な農民の冬季の休業を顧慮しない。」  
一般にロシアの農民は冬は寒さのために畑で働くことは出来ない。その點で都會工業の労働者と

違ふのであるが、併し先づ、工業労働者と同様に一年中働くものと假定するのである。

「六、現時の劣悪な營養を正常的なものと假定する。」

當時（一九二〇年頃）ロシアでは榮養不足に陥つて、労働者は、當り前の労働力を發揮し得ない状態にあつた。従つてそんな状態を基礎に算出した數式は、正常的な榮養が與へられ、従つて正常的な労働生産力を復活せし場合に適用し得ないではないかとの疑問の餘地があるので、この點を顧慮し、一先づ現狀を正常的なものと假定するといふ意味である。

「七、同じ労働も、異なる自然的條件の下では、異なる生産物をつくり出すといふ事實を考慮の外に置く。」

つまり、すべての同種労働者の生産の自然的條件に差異なきものと假定するのである。

ヴァルガは、以上の七つの前提（假定）から出發することによつて、次の如き二つの基礎的な、抽象的な、表式を得た。第一は、石炭、薪、泥炭、建築石財、穀物（種子を引いた残り）、秣等の如き、その生産に原料を要せざるが如き財の生産費の表式である。さういふ財の一單位の生産費たる労働時間は、當該生産に従事する労働者數に、その期間内に實際なされた一人當りの労働時間を乗じた數を、同期間内に生産された當該財の單位數で除したる商である。即ち、

$$\text{労働時間で表はせる労働費用} = \frac{\text{労働者の数} \times \text{労働時間}}{\text{生産されし単位の数}} \quad \text{又は } A = \frac{H \cdot Z}{n}$$

第二に、右の如くにして素材の労働費用を確定すれば、鐵、建築用木材、煉瓦等の加工品の労働費用は、すでに知られた素材の労働費用へ、その加工に要する労働時間を加算することによつて得られる。またこの加算を追加することによつて、複雑な生産物についても、「吾々は一つの完結せる、たとひ現實からはなほ遙かに離れて居るにしても、相聯絡せる一のシステムを形成することが出来る。その表式はさまざまで複雑ではない。即ち

「 $A_1 + A_2 + A_3 + \dots$ 」である」といふ。

それから、ヴァルガは、最初に前提した七箇の條項を一つ一つ考慮に入れることによつて、歩抽象より具體に近づかうといふ譯である。先づ第一は、生産手段の消耗分を考慮に入れることによつて、右の表式に修正を施さうとする。即ち彼の説明する所は次の如くである。

「かりにすべての生産部門並にすべての經營に於て、労働時間で表現せる生産手段の消耗分の、用いられた生ける労働に對する割合が常に等しいと假定すれば、この修正を加へる必要はない筈である。なぜならば、吾々の求むるものは生産費の絶對量ではなくて、その助けて諸財の生産費

を比較し得るための一の尺度なのであるから。けれども吾人はかかる假定を設けることは出来な  
い。そこには極めて大きな差異が存するのであり、従つて一の修正を加ふことは止むを得ざる  
所である。」

全くヴァルガの認むる通りで、それは説明を俟たずして明なことである。所で彼の引續きいふ所  
では、

「吾々の工學テクノロギの教科書によつて、かなり精密に各種の機械装置の平均壽命を知る、加之、吾人は上  
記方法の助けによつて一定の機械の生産のために幾程の時間を要したるや——先づこの一機械生  
産のために用ひられし他の機械の消耗分を計算に入れないで——を決定することが出来る。斯様  
にして得られた數に消耗係數 $1/10$ 又は $1/20$ を乘じ、而して直接用ひられた労働時間に加算せられ  
財の單位に割當てらるべき一年間の時間數(Arbeitsstundenzahl)を得る。吾々がこれまで、二米平方  
圓材の費用を $A$ を以て計算したとすれば、生産手段の消耗係數の導入後はその生産費は $A_1 + P_1$   
となる。尤もこの修正は、更につづけられねばならぬ。例へば一の二米立方板の生産費は、これ  
までの表式では、

$$a_1 = \text{木材の労働} + a_2 = \text{鋸挽の労働} \quad \text{であつたものが、今最初の修正を加味して後は } (a_1 + P_1) +$$

( $88+12$ ) となる。而して生産過程が複雑になればなる程、右の系列は長くなる。ここに  $P_1$  は伐材に要する生産手段の消耗分、 $P_2$  は鋸挽に要する生産手段の消耗分である。

ヴァルガの此の點に關する見解は右の通りである。機械の消耗分を算出するに「工學の教科書」の教へる「機械装置の平均壽命」に據る、とする點特に留意に値する。蓋し、「工學の見地」からいへば未だ健全な機械装置に就ても、よりよき機械装置の發明又は需要側の變動による所謂「經濟的見地からの壽命」を考察するの必要なきは一つの問題となり得るからである。

次は前提の第二項、労働の品質の差異の考慮による修正である。若しもあらゆる生産部門、あらゆる經營に於て、各種品質の労働の組合せが同一であるならば、少くとも經濟性の見地からの比較に於て、労働の品質の差異の考察による表式の修正を必要としないのである。所が事實は、生産部門の異なるに従ひ、又經營の異なるに従ひて、その組合せを異にする。故に質を異にする労働に對しては、等しく一時間でも異なる評價を必要とする。所謂異質労働を共通なる單位労働に還元する問題として、後述の如く労働量による生産費計算論に於ける最大難問の一つである。ヴァルガの解決案は極めて簡單である。當否の批判は暫く後廻しにして、兎も角彼の見解は次の如くである。

「すべての無質労働者は、十六歳から四十八歳迄労働するものと假定しよう。又この無質労働者から、有質労働者を造り上げるために四ヶ年間の教養を必要とするものと假定しよう。この四年間、社会は彼を扶養しなければならぬ。故に彼は四十八歳迄の間に廿八ヶ年働くこととなる。即ち無質労働者よりも $\frac{1}{8}$ だけ短期間働くこととなる。この故に、私は有質労働者の労働時間を、も亦、無質労働者の労働時間よりも $\frac{1}{8}$ だけ高く評價する。更に工業技師、農事専門家、經濟學者、醫者等の養成のためには、十六歳から八ヶ年を要するものと計算する。即ち彼の労働すべき全期間の四分の一を要する。故に、私は、専門家の労働時間をば、普通の労働者の労働時間よりも $\frac{1}{4}$ だけ高く評價する」かくして修正後の生産費の表式は、「單純な  $A = \frac{ZH}{n}$  の代りに、  $A = \frac{Z_1H_1 + 1\frac{1}{8}Z_2H_2 + 1\frac{1}{8}Z_3H_3}{n}$  が得られる。」

となすのである。勿論右の表式に於て、 $Z_1Z_2Z_3$ は、それぞれこの生産に参加した所の無質労働者數、有質労働者數、専門家數を示し、 $H_1H_2H_3$ は右範疇に於ける労働時間の數を示す。尤も右のヴァルガの表式は、「どの人間からでも社会は一定年數を放棄することによつて、一人の平均的な有質労働者又は専門家をつくり得るといふことを根本思想とする」ものであり、その社会が放棄した労働年數だけを社会にとつての犠牲と見て、それだけ高く評價するのである。だからヴァルガの云つて

ある通り、「以上のすべては特に天分のすぐれた者には妥當しない」のである。そこで天分の差を無視することは、經濟原則に従ふ所以ではないのか、との疑問を生じ得る。併しヴァルガが敢て天分の差を無視する所以は、人に天分の差のある事實を無視するのではなくて、「かかる場合は、何等實質的重要な(Praktische Bedeutung)を有するものでなく」と考へたが故に無視するのである。

次は、労働強度の差の考慮による修正である。「どの労働者も同じ強度で働くものではない。従つて各労働者の同一労働時間は、決して同一労働量を表現するものではない」から、この點からもある労働の一時間は他の労働の一時間半、又は二時間に等しいといふ風な評價の差異を設けざるを得ない。この評價の差異を如何にして合理的に決定し得るであらうか。ヴァルガは、この點の合理的決定方法を示して居ない。ただ、「この事情から生ずる過誤を修正することは極めて容易である」となし、極めて容易である理由として、「恰度ロシアに於ては……すでに各種の労働に對して、一つの規準ノルムが決定せられて居り、且つこの規準制度はたえず完成されるからである」と述べてゐるに過ぎない。規準とは生産力の規準の事である。例へば煉瓦積職工に對しては一時間何十個を積む場合、それを一人前(規準)とするといふ風に決定されて居るといふ意味であらう。それを單位とし、即ち恰もノルムだけの生産物の労働時間は、現實の一時間を一時間に評價し、「労働者にして二倍

のノルムを生産する場合には……彼の労働時間は一労働時間として計算される。即ち労働時間數に生産力係數(1)が掛けられる」。か様にして、最初の數學的形式で労働時間Hとありし所は、常にHとなる譯で、「Hは労働時間數に生産力係數をかけたものであるから、生産力がノルムに及ばない場合には1は分數となり、HはHよりも小さくなる。即ち實際なされた労働時間よりも少く計算せられるので、左様な労働者の労働は『平均的な社會的——必要労働』として計算されないのである」。尤も當時のロシアでは、すべての労働に生産力係數が決定されて居たといふ譯ではなく、まだ決定されてゐない經營もあつた。さういふ經營に従事してゐる労働者並に専門家に對してはヴァルガはただ、「全經營の生産力に適應して係數が決定せられる」と述べてゐるに過ぎない。なほ又彼の所謂生産力規準が如何にして決定せられしかについては、一言も述べてゐない。ただ一つここで注意を要する點は、労働強度の考慮によるヴァルガのこの提案は、あくまでも生産に要した労働量の計算、即ち生産費計算の立場からなされたものであるといふ事である。換言すれば二倍のノルムを生産する労働は一時間労働が二時間分と計算されるけれども、それは二時間の労働費用として計算されるといふ意味であつて、さういふ労働者への分配が、一時間に對して二時間分を報酬として與へられるといふ意味ではない。この點は彼が、「労働者にして二倍のノルムを生産する場合には、

——彼の得し報酬の高さとは全く無關係に——彼の労働時間は二労働時間として計算される」と記して居るによつて明である。この點から推すと、前項の異質労働の係數決定の場合にも、それはあくまで生産費計算の見地から行はれるものであつて、有質労働者の労働を無質労働者の労働よりも $\frac{1}{8}$ だけ高く評價するといふことは、必らずしも $\frac{1}{8}$ だけ高く報酬を與へるといふ意味ではないものと考へられる。

次は、前提の第四項、即ち運搬費用の考慮による修正である。この點について、彼は、「すでに述べたる所によつて、運搬費用を労働時間で表はすことは困難ではない」といつて居る。而して「鐵道建設の費用をば、運轉材料と同様に、労働時間で表現することが出来る。そこで吾々は、鐵道従業員自身の労働をば、燃料費並に建物、運搬材料の消耗係數と加算しなければならぬ。かくしてブドヴェルスト(重さの單位に長さの單位を乗じたもの)當りの労働時間の數を算出することは困難ではないであらう」と述べて居る。思ふに労働價值計算の困難は他にあるので、他の諸點にして合理的に解決せられると假定する以上は、何人もこの點に特殊の困難を認めるものはあるまい。この意味で、この點の説明はこれだけに止めて、次の修正、農民労働の冬季休業の考慮による修正に移るであらう。ロシアの農民は、その氣候の關係から、一年中田畑に出て働くことは出来ない。この點に

於て一年中を通して働く所の工業労働者と趣を異にするのである。即ち半歳の間は、農民は働き度くも働けないのである。この意味で農民労働の一時間は工業労働の一時間に比して、高く計算する必要はないか？ 高く計算すればどれだけ高く見積るか？ 一見かうした疑問の餘地があると考へたことが、ヴァルガ自身をしてこの點を考慮せしめた所以である。然るに彼自身の結論は、農民と工業労働者との間に區別の必要はない、農民の一労働時間はこれを無質の工業労働者の一労働時間と同一に評價してよろしい、といふのである。その理由は、事實に於て工業労働者と農民との労働時間數にはあまり大した差異がない、といふ點にあるので、詳言すれば「ロシアでは現在の所、左様な差異は全く存在しない。なぜならば工業労働者は病氣、榮養の配慮、全年の休暇等の結果、一年間にはほぼ  $315 \times 8 = 2520$  時間を労働するが、之に對し農民は労働季節の間は、一日に十二乃至十四時間働くので、百八十日の間に殆ど同數の労働時間を働く」からといふのであり、「この理由に基いて、吾々は安んじて、農民の一労働時間をば無質労働者の一労働時間と同様に見なして差支なく」といふのである。

次は前提の第六項、劣悪なる榮養に關する修正である。つまり、ロシアの工業労働者は、その榮養状態の劣悪のために、今日では満足な生産力を發揮して居ない。斯様な状態に於ける一労働時間

を完全な一労働時間と見ることは出来ないかとの抗議があるかもしれぬ。ヴァルガは、この點については、「榮養が改善せられるれば生産力が高まるであらうし、この生産力の向上は、一般的な生産力規準引上げといふ形で計算に入れられるであらう。……一の尺度の適用性は生産力の増加によつて影響されないで、吾々はその場合でも、矢張りもとの規準でやつて行ける」と答へて居る。つまり、榮養状態による生産力の變動は、労働費用の計算に於て考慮に入れる必要はないといふ見解である。思ふにロシアに於ける當時の實狀からは、ヴァルガのいふ様に「抗議がなし得る」ものであつたかも知れぬが、一般に、經濟計算としての労働價値計算の問題としては、多く論ずるに値せぬ問題であらう。

最後に前提の第七項即ち、「異なる自然條件」の考慮による修正の問題である。この問題は、ヴァルガの承認する通り、「最も困難な」問題であると考へるが故に、能ふる限り詳しく紹介して置きたいと思ふ。

私は先づ、ヴァルガのこの點に關する全文をそのまま譯出して置かう。それは次の如くである。

「自然的關係の多様性の問題を解決することは最も困難である。等しい緊張度に於ても、一労働時間の物質的生産物は極めて多様であり得る。即ち鑛夫は石炭層の廣狹に従ひ、鑛石の豊富と貧

弱とにより、農民は肥沃な黒土を耕すか砂地を耕すかにより、其の結果を異にする。資本主義は此の問題をば、地代又は鑛山地代の形に於て解決した。この方法は現在のロシアの關係では用ひることが出来ない。ロシアに於ける土地が國家の直接占有にあると假定すれば、吾々は財の單位當りの平均労働量を算出する事が出来る筈である。工業によつて加工される鑛産物の計算に對しては、それは慥かに唯一の正しい方法である。然るに此方法は農業に對しては用ひる譯には行かぬ。國家が若し、農民に對して、その生産物に對し労働費用から見て同價値の工業生産物を與へるであらうならば、この方法の結果、よい土地をもつ農民には比較的利益を與へ、悪い土地を持つ農民をば虐待する結果となるであらう。それ故にここでは、農産物の生産に用ひられし労働時間、個々の肥沃帶に従ひ、且つ現實に一致する様に、從つて不等に計算する以外に解決の方法はない。同様にして、小麥の一封度に含まれる労働時間は、收穫の結果に從つて決定されねばならぬ。一デシヤチンの土地の上への労働費用は、事實上得られし穀物の封度数へ分割せられねばならぬ。農業經濟に於ける労働費は最も複雑な問題である。この問題はすでに貨幣經濟の條件の下に於ても困難な問題であつた。巨大な工業コンツェルンが幾百といふその生産物の生産原價を、一コベックの十分の一に至る迄も綿密に計算するのに、貨幣經濟の下でも農作物に對しては、曾

て正しい計算は行はれなかつたのである。」

以上の簡単な説明から知り得る事は次の如くである。

(一) 假りに土地が國有であるのみならず、國家が直接占有して居る場合であれば、全國に於て生産せられる財の單位當りの平均労働時間が、尺度として用ひられる。例へば、國內に一等地と二等地とがあつて、一等地では自然的條件の優秀なために五〇〇時間で六〇〇單位の穀物が生産せられ、二等地では四〇〇時間で四〇〇單位の穀物が生産せられたとすれば、全體平均して單位當り $900/1000$ となるから、何れの土地の産物も等しく一單位の平均生産費たる $3/2$ の労働時間を尺度として測定せられ、従つて、一等地の總生産物は五四〇労働時間を要し、二等地の總生産物は三六〇労働時間を要したと計算される、事となるであらう。

(二) 所がロシアの當時の現状では土地は名義上國有であつても、直接國家の占有に屬してゐないから右の方法に據り得ない。矢張り國家は農民から農作物をば、國家の工産物と交換に受取る外はない。然るにその場合右の方法によつて平均生産費を尺度とすると一等地の耕作農民は、五〇〇労働時間を働いて置きながら、五四〇労働價値の工業生産物を受取ることになり、二等地の農民は四〇〇労働時間を働いて三六〇労働時間の工産物を受取ることになり、非常な分配の不公平を招來

する。よつて止むを得ず、一等地の産物は、五〇〇時間で六〇〇単位を生産したのだから、全體で五〇〇時間費用（價值）を、從つて單位當り $\frac{5}{6}$ の労働時間費用（價值）を、二等地の産物は、全體で四〇〇時間價值を、從つて單位當り一労働時間費用（價值）を有するものと評價される。即ち同一の生産物でありながら、生産されし土地の優劣の如何によつて、各々その生産労働費用（價值）を異にする如く評價される外はないと、斯様な意味であらと思ふ。

さてヴァルガの「貨幣なき經濟に於ける生産費計算」の方法として提案せし要旨は右の如くであるが、彼はその論を結ぶに次の如き言葉を以てしてゐる。

「私は讀者に對し、ここでは單に一の素描を與へうるにすぎない。けれども私は私の提案せし道が唯一の正しき道であることを信ずる。ロシアは今日あるが如き盲目の状態から脱せねばならぬ。生産費計算のためには、すでに用をなさざるに至れる貨幣計算の代りに、一つの價值尺度が發見されねばならない。而してかかる價值尺度は、ただ労働時間でのみありうる。」

言葉は多くないけれども、吾々はそこから色々な事を確實につかむ事が出来る。經濟計算の破壊せし當時のロシアの經濟は盲目の状態であつたこと、その状態を脱するためには、正しい生産費の計算方法を必要と考へたこと、更にそのためには一の價值尺度を必要とし、而して生産に要したる

労働時間のみが價值尺度たる用をなし得ると信じたること等。ミハエル・ブルツクス君の獨譯ではこの所は次の如くなつてゐる。

Ich konnte hier dem Leser nur eine rohe Skizze geben. Ich glaube aber, dass der vorgeschlagene Weg der einzig richtige ist. Russland muss heraus aus dem Zustand der Blindheit, in dem es sich heute befindet. Für die Produktionskostenrechnung muss anstatt der bereits völlig unbrauchbar gewordenen Geldrechnung ein Wertmesser gefunden werden. Und solcher Wertmesser kann nur die Arbeitszeit sein.

「ロシアは現に陥れる盲目の状態から脱せねばならぬ」といふ文句は特に注意を促す爲に、私がゴチックにしたものであるが、その次の muss のゴチック印刷は、ヴァルガ自身のものである。

二

經濟計算の尺度として、生産に要する社會的必要労働によるといふ上述の如きヴァルガの提案は、果して實際の適用に堪へうるものであらうか。私の批判の結論を豫めいへば、私はかくの如き方法は、ただに技術的困難の故のみならず、理論的根本的缺點を有するの故を以て、斷じて其の用をな

し得ざるものなりと確信する。何故にかく確信するか。以下順次その理由とする所を明にするであらう。

(一) 最も根本的なる理論的缺陷の一は、ヴァルガの提唱するが如き勞働價值計算に於ては、生産に寄與する一切の自然的要素を頭から無視せざるを得ないといふことである。といふ譯は凡そ如何なる財の生産に對しても、自然の參加なくしてこれを行ふ事を得ないことは論をまたぬ所で、太陽の熱や光、土地の表面又は地下、水、金、銅、鐵、石炭等々、あるひは動植物生存の條件を提供する意味に於て、或は素材を供給する意味に於て、或は其他の生産の條件を整へる意味に於て、自然の參加なき財は皆無と稱してよい。この事は何人も知る所の眼前の事實であるが、更にそれ等の生産に參與する自然の提供物のうちには、その數量が生産の需要に比して極めて少きものより、無限に多きものに至る迄、無數の差別の存することも亦、明白な事實である。然るに、ヴァルガの方法に於ては、理論上必然的に、それ等自然の提供物の價值はすべて、一樣に零と評價せられることとなり、太陽の熱、光、水、空氣等の需要に比して無限に多量なるものも、金、銅、石炭、鐵等の如くにその量が需要に比して稀少なるものも、其の間に、何等區別して評價せられることなく、等しく零に評價せられるに至るのである。いふまでもなく自然のままの提供物は、人間の勞力によつて

得たるものではない。けれども社會主義經濟が、社會にとつて最少の犠牲を以て生産を行ふといふ以上、如何に自然の提供物と雖も、その量の稀少なるものは、無限に存在するものとは明に區別して、これを消耗することを以て國家社會にとつての一の犠牲と見なければならぬ。そのためには需要に對比しての稀少さに應じて、最初から相當の價值を計上すべきこと明である。ヴァルガの計算方法にあつても、山から掘出して都市に運ばれし石炭はすでに價值を有する。けれどもそれは、採掘、運搬、設備の消耗（過去の勞働）等に要したる勞働のみが計上されて居るに過ぎないのであつて稀少なる自然の寄與は計算に這入つて來ない。彼の勞働價值計算ではそれが理論上計算される餘地が存しないのである。鐵、石炭等の消耗を空氣、水の消耗と同一犠牲、同一價值に評價するに至るが如き生産費計算の方法が、經濟計算の用をなし得ざることとは多く説明を要せぬであらう。私がこの缺點を以て、彼の勞働價值計算方法の最大の缺點とする所以である。

此の缺點はフォン・ミーゼス教授の次の批判に當る。

「勞働計算は一見した所では、人間外に横る所の生産の自然的條件をも考慮してゐる様に見える即ち『社會的に必要なる平均的の勞働時間』といふ時に、自然的な生産條件の差異に基いて作用する限り、收穫遞減の法則は考慮されてゐるといへるであらう。

従つて一商品に對する需要が増加して、より惡しき自然的條件を利用するのやむなきに至れば、一單位の生産のために社會的に必要とする労働時間も亦増加するし、逆によりよき生産的條件が發見せられるに至ると社會的に必要とする労働量も亦減少することとなるであらう。(この見解は、ヴァルガの「土地が國家の直接占有に屬する場合」と同じ場合を對象としての批判で、現狀ロシアに對する計算方法としてのヴァルガの提案とは、やや批判の對象を異にする——山本)けれども、この自然的條件の考慮は、その條件が社會的に必要とする労働量の變化としてあらはれる限りに於てのみ考慮されるに止まるものであつて、それ以外の場合に對しては何等の用をもなさぬ。……例へば、生産物P及びQを生産するために必要とする労働時間は共に十時間と假定しよう。PをつくるためにもQをつくるためにも原料aを要するとし、而してaの一單位は社會的に必要とする労働一時間で得られるものとしよう。更にまたPの生産のためにはaの二單位と外に八時間の労働を要し、Qの生産のためにはaの一單位と九時間の労働を要するとしよう。今労働價値の計算によれば、P一單位もQ一單位も共に社會的に必要とする労働量が等しいといふ理由によつて等價値とせられるであらうが、價値計算に於ては、PはQよりもヨリ高く評價せられねばならぬ。……勿論此の物質的な實體は人間の努力なくして自然に存在するものに相違ないけれども、その分量が人間の評價<sup>ベウイユル</sup>

トシヤツングの對象となるだけより存在しないとすれば、何等かの形に於て、價值計算の勘定の中に入れられねばならぬ筈である。……勞働計算によると物的な生産要素の使用は、全く計算から無視されることになる」(V. Mises, Arch. f. Sw. u. Sp. 47 I. S. 106—107)。

この缺陷が需要に比して稀少なる自然的要素を要する一切の財の生産費計算にあらはれることは、上の説明から直ちに理解せられるであらう。それはヴァルガの毫も豫想せざる缺陷である。彼がロシアの當時の現状に於ける農作物に關してのみ自然的條件の差異を問題としてゐることが、彼がこの問題の存在を意識してゐなかつた何よりの證據と云ふべきであらう。

(二) 勞働價值計算の第二の重大な理論的缺陷は、異なる質の勞働を共通なる單位勞働量に還元する合理的方法が存在しないといふ事である。勿論この問題については、上記第一の問題と異なり、ヴァルガ自身が問題の所在を明に理解してゐた。理解して居たればこそ、一度ひ前提第二項の留保をなし、後に修正を試みるに至つたのである。

ただ私は彼の解決を以て解決たる價值なきものと考へるのである。彼は勞働者を品質に従つて、任意に無質、有質の勞働者並に専門家の三種に分ち、それ等の品質のよつて生ずる理由をば、單に一定期間の養成(勞働放棄)にのみ求め、全勞働期間に對する右放棄期間の割合だけを高く評價する

といふのである。「根本思想は、社會が一定年數の労働年數を放棄することによつて、どの人間からでも、一人の平均的な有質労働者又は専門家をつくることが出来るといふ事に存する」と彼がつて居るのがそれである。

而して「天分あるものに妥當しないが、併し左様な場合は何等實際的重要さを持つものではない」とする。

けれども、社會主義社會が經濟的生産を行はんとするに當つて、單に労働者の教養年限のみを規準となし、毫も其の天分を考慮に入れないとしたら、どうであらう。同一の年限を修業乃至修學せし者で、その生産力に非常な差異の生ずることは何人も知る事實である。それ等は修業に際しての個人の趣味、熱心、健康、體質、才能等所謂廣義の天分に基いて分れるものである。この天分を無視した労働時間の評價は生産力の大部分を無視することとなり、従つて經濟原則に遵ふ所以ではない。「社會が一定年數を放棄することによつて、どの人間からでも一人の平均的な有質労働者又は専門家をつくることが出来る」ことを「根本思想」とする、といふけれども、そはただに生産力の重要な因子を無視するばかりでなく、ヴァルガ自身と雖も、無數の所謂無質労働者から、何人を有質労働者又は専門家として養成すべきかの決定を考へる場合には、要するに廣義に於ける天分を考

慮するの外なき事を是認しなければなるまい。かくして異質労働を單一労働單位に還元するの合理的方法の存せざる限り、異質労働に對する評價の差別はただ任意に決定せられるの外はない。生産に要する労働量といふ所謂量は、畢竟合理的に算出する方法なきものであり、それなき限り、これを以て經濟計算の尺度として合理的に適用するに由なきものである。素より今日の社會に於て、市場に定まる勞賃の上には、自らある品質の労働の報酬は他の品質の労働のそれに比して二倍又は三倍等の大きさとしてあらはれて居る。けれどもそれは労働に對する需要供給法則の作用の結果、に外ならぬ。それはマルクス及び其の徒が通常主張する様に、甲の労働が乙の労働の二倍の勞賃を得てゐる場合、その事實から、前者は後者の二倍の實質を含むからだと見ることは、市場流通の結果を以てその前提と誤解するものであり、これから明にせんとする未知を前提に置く論理的誤謬といはねばならぬ。ヴァルガ自身が、異質労働を共通單位労働に還元する問題を解決するために、何も斯の如き證據をあげてゐるのではないけれども、往々にして起り得る議論であり、又事實起された議論でもあるので、特に附言して置く譯である。なほこの事は、後にライヒターの労働計算論を述ぶるに際して再び論及するであらう。

この點についてのブルックス教授の次の言葉はヴァルガの見解に對する直接の批判たり得る。

「一つ一つの経営内部に於てすらも、高下色々な品質（カリフィカチオン）の労働が使用せられる。何等の教養をも必要とせず、さらに存在して何時でも用ひ得る労働の側に、長年の教養を要し、屢々ある天分を要する、少くとも自然的好みを必要とする労働がある。吾々が、質が高く而して僅かな量より存在しない、従つて社會がこれを節約的に取扱はねばならぬ様な労働をば、非教養労働に妥當すると同じ規準に従ふ費目として日々評價し得るであらうか？ 吾々（ソヴェート・ロシアをさす——山本）の平等化の努力が勞資政策に於て如何に強からうとも、吾々は労働價値計算に於て、さういふ事は出来ることではない。吾々はマルクスに於ても亦、質の高い労働の一單位時間は、質の低い労働の單位時間に對して、單に若干の係數を乗じて、等しいと置かれ得るといふ一指示を見出す。けれども、吾々は如何にしてこの係數を決定し得るか？ この問題の解決をマルクスに求めても駄目である。勿論人々はこの問題の解決として、一の教養労働者と一の非教養労働者との教養費の比較を企てるのが常である。だがこの問題はさう容易い問題ではない。もし高い品質が、たとへ例外的なものでなくとも一つの自然的天分に條件づけられて居るとすれば、斯かる方法は全然用をなさない。故に吾々の係數は一つの極めて限られた價値を有するか、或は寧ろ任意に墮するであらう事は明白である」(B. Brutzkus, Die Lehren des Marxismus, S. 21—22)。

(三) 第三に、ヴァルガの提案の重大な缺陷の一つは、生産の效果、換言すれば、生産物に對する社會成員の要求度が如何にして測定されるかが、毫も考慮されてゐないといふ點にある。彼は其の提案の冒頭に於て、問題解決の必要なる所以として三つの問題を擧げた。即ち第一に、「一の特定せる範疇の經營が、一定の生産物を最も有利に（經濟的に）生産し得るかの問題」を解決するために必要であるといふのである。即ち「一定の生産物を」といふのであつて、何をつくるべきかの問題はすべて解決せられたるものとして前提されて居る。第二に「客觀的技術的意味に於て一定の欲望を同じ様式で充す所の財の多く、即ち例へば燃料としての薪、石炭、泥炭、又は石油、運搬用具としての鐵道又は汽船等のうち、如何なる財が國家によつてつくらるべきかの問題」である。ここでも「一定の欲望を同じ様式で充す財」といふのであつて、そこには客觀的—技術的に一定の欲望を同じ様式で充すにあらざる諸財間に於て、例へば、米と石炭の間に於て、何れがつくらるべきかの問題は少しも考へられてゐない。第三には、「將來に於て社會主義的生産が、今日の様に國民に不可缺な欲望のみならず、もつと效用の少ない財をも供給し、社會成員に財選擇の可能性が與へられる様な發展階段に到達する場合には、個々の財の生産費の一の客觀的計算の存在は必要となるであらう」といふ。そこにも亦、生産費の多少によつて決せらるべき諸財の種類と數量とはすでに既知な

ものとして前提されて居る。社會主義的生産が、生産費の側から見て最少の犠牲の法則を實現すべきであるのみならず、最大の效果あるもの即ち國家國民の最も必要とするもの、換言すれば國家國民の要求の強さに應じて生産を遂行すべき事は、如何なる論者にも異議なき所である。従つて社會主義社會は、生産費の比較を必要とするに止まらず、その生産の國家國民の欲求を充す程度を知るを以て不可缺なる前提とする。ヴァルガの云ふ「不可缺なる財」と然らざる財とを區別することは、ある程度迄、客觀的に可能であらう。併しながら、不可缺にあらざる所謂便宜品相互の間に於て何がより強く國民に要求されるかは、しかく容易な問題ではない。そはヴァルガの労働價値を以て解決し得べからざる問題であるが而もこの問題を解決する計算方法を發見することなくしては、社會主義は所期の生産を遂行し得ないのである。ヴァルガの労働生産費計算方法は、單に生産費の計算即ち社會主義生産の犠牲側の測定としてのみ見るも、すでに既述の如き根本的缺陷を有するものであるが、暫くこの點を離れて考ふるも、彼が生産效果の側、即ち國民の異種の便宜品に對する要求度の測定を看過せるによつて、經濟計算のシステムとしての不完全さを加重するものといはねばならぬ。この點に於ては、後に述べべきストルミリンの労働計算方法は、少くも理論上、遙かにヴァルガのそれに優れるものといはねばならぬ。

(四) 私は以上の三點を以てヴァルガの價值計算システムの有する最大の缺點と見る。その故を以てすでに、經濟計算の組織として到底適用に堪へ得ざるものと考へる。だが更に、技術的實行的難點とも稱すべきものを舉げて置かう。それは周知の如く獨逸のみならず世界的にマルクス社會主義の碩學とうたはれたカール・カウツキーの勞働價值計算に對する批判である。カウツキーは恐らくヴァルガの論を知らなかつたであらうし、それを對象に書かれたものでないことも明であるが、而もヴァルガの説に對する批判としても妥當するものであり、彼が社會主義の碩學といふ點を別にしても、觀察そのものが甚だ注目し値するものと考へられる。それは次の如く要約することが出来る。

勞働價值計算に於ては、

(一) 「請負勞働又は勞働の種類による勞賃の差別の決定に際して、甚しき複雑に陥るがその困難を暫く問題としないとしても」

(二) 「各生産物に對してその最初の着手から、完成に至るまで、運搬その他の附屬勞働をもあはせて、要したるすべての勞働量を計算することはとても大變な仕事であること。」

(三) 「社會的に必要とする勞働量は、技術的關係の變化につれて絶えず變化するものである。」

然るに計算をやつてゐる間に諸種の部門のどこかに於て技術的關係に變化が起る。よつて右の大變な仕事は、これを漸く完成したかと思へば直ちに再び初めから遣り直さねばならない。」

(四) かくして社會主義社會で勞働價值計算をやらうとする企は、「恰も流れる水をフルヒで測らうとする望みなき仕事」に等しく、「考へ得べきものではあるが實際に行はれ得ないものだ。」といふのである。

思ふに勞働價值計算が、愈々これを實行するといふことになる、技術的に如何に複雑を極むるかについては、ブルツクス教授の次の言葉を味ふ時、一層判然と意識に上るであらう。

「如何なる經營も、原料、要具を他の經營から得來るのであるから、如何なる一生産物の評價も同時に、國民經濟の全領域に於ける勞働作用の評價を行ふことなくしては不可能である。」

素材の生産から、それを素材とする消費財の完成に至る迄、生産に於ける初めと終りとを考へるのは、吾々が、思考の要求によつて、便宜或る一點に着目しての事にすぎない。所が實際の國民經濟に於ける各財の生産と消費は互にすべてが結ばれる有機體的流れであつて、素材の生産も亦、他の農、工、鑛萬般の經濟活動の結果を前提として生産を行ひつつあるのである。直接にか間接にか、

すべては他の前提となり、又すべては他を前提として存在する。眞にブルツクスのいふ通り、意識的に労働價值計算を行ふとすれば、如何なる一財の労働價值も、他の全部の財の労働價值の計算を同時に遂行することなくしては不可能である。かくして國民經濟の何處かに、何れかの一財について生産技術の變化を生ずる時は他のすべての財の労働價值の計算をかへねばならぬ。而も生ける經濟、動態の經濟にあつては、事實何れかの部門に於て、不斷に變化が起ると見なければならぬが、然らば、労働價值計算の遣直しはあらゆる財について不休息に行はれざるを得ない。吾々はカウツキーの所謂「流れる水をフルヒで測るが如き望みなき仕事」といふ批判をば、あながち途方もなき比喩とは考へ得ないであらう。所謂「資本主義」經濟の下に於て、それが自動的な一般的價值形成過程によつて、いはば無意識的に遂行されることは、第一章第二節で述べた通りである。

## 第二節 ストルミリンの労働・效用計算論と其の批判

### 一

ストルミリンは、ヴァルガと共に、ソヴェート・ロシアに於ける有数の經濟學者とされて居る。

我國ではヴァルガ程に知られてゐない様であるが、併しロシアの内部にあつては、極めて重要な役割を演じ、殊に第一次五ヶ年計劃の起案者の一人として著名な共産主義學者である。忠實なるマルクスの學徒であり、勞働價值説を信じ、従つてその經濟計算論は、勞働計算を基礎とすることヴァルガのそれと同様である。而も私が既にヴァルガの見解を紹介し批判せる後に於て、重ねて勞働價值計算論者たるストルミリンの見解を問題とする所以は、ストルミリンが、その見解の重要な點に於て、純粹の勞働價值計算に修正を加へたといふ一點にある。修正を加へたといふよりも修正を加へざるを得なかつたといふのが妥當であらう。ストルミリンの見解そのものの説明批判は後段に譲り、ここには豫め、彼の勞働價值計算論が、その純粹な形から、如何なる事情に基いて變形を餘儀なくされたか、に就て一言述べて置き度いと思ふ。それは、「社會主義的計劃經濟の下に於ける經濟計算の問題」が如何に解決の困難な問題であるかを理解する上にも大きな助けとなるであらう。すでに第二章に概説せし如く、

ストルミリンが、本問題に關して初めて其見解を公にしたのは、一九二〇年十月二十三日のE・Z紙に於ける論文『勞働價值計算の問題、その一、實物計算か價值計算か?』であるが、それは、その論文に記されて居る様に、チャヤノフの同問題に關する論文『社會主義國家に於ける經濟計算

の問題』一九二〇年十月九日及び同年十月十六日のE・Z・紙上」に刺戟されての事である。チャヤノフの見解はすでに説明した通り、資本主義の貨幣計算に代るに社會主義では實物單位を尺度とする比較によつて生産の經濟性を比較測定するといふのであるが、ストルミリンはこれを批判し、且つその積極的方法の提案を意圖して、先づ前記十月二十三日のE・Z・紙にその見解の一部を公にした。それは未完結のものであるから、サブタイトルに『その一、……』とある。このストルミリンの第一論文にあらはれた彼の積極の見解をよむものは、何人も彼が勞働價值を以て唯一の價值尺度と考へて居るものと解せざるを得ない。然るに同論文の續き『その二、主たる經濟的尺度』が公にされたのは、『その一』が公にされてから實に五、五、日、後の一九二〇年十二月十七日の同紙上に於てであつた。所が斯様に長い間隔を経て公にされた第二の論文に於て見られる彼の見解は、最早『その一』に見る如き純粹なる勞働價值計算論者ではなくして、それは、勞働と效用とを二つの主たる經濟的尺度とすると明言する、折衷論者としてのストルミリンであつた。

この飛躍的な變化が、彼の第一論文に對して公にされたチャヤノフ教授の反批判『價值實體と勞働エキヴァレンテのシステム』によつて餘儀なくされたといふ事は、何人にも容易に看取され得る所である。チャヤノフは、周知の如く、單なる農業經濟學者として當時なほ大學に教鞭をとつてゐ

たに止り、ヴァルガやストルミリンの様な、マルクスの信奉者でもなければ共産黨員でもなかつた。従つてチャヤノフの實物計算論は、彼自身のいへるが如く、「完全なる社會主義の實現の可能なりや否やはここに問題としない、ただ社會主義をすでに與へられたるものとして……」必要にして然も可能なる限りの經濟計算方法の提案をすべく、主張したのである。私はソヴェート・ロシアの内部に於て、社會主義的計劃經濟の遂行に伴ふ現實の困難に直面しつつ展開された所の、黨員と「黨外」學者との間に行はれた論争、並に黨の内部に於けるヴァルガとストルミリンの見解の相違は、本問題の研究上看落すべからざる重要なものと考へた。この意味でヴァルガの論文と同様に、チャヤノフの三つの論文は伯林滞在のミハエル・ブルツクス君に獨譯せしめ、ストルミリンの第一及び第二の論文はモスコフ在住の某露人に英譯せしめたのである。ただ残念なことにストルミリンがE・Z・紙二九〇號に公にしたその論文「その三」は、モスクワに於て求めて得ず、獨逸國內の圖書館に求めて亦得なかつた。モスクワの圖書館保存の分もドレスデンの圖書館保存の分にも、不思議に缺號となつて居たのである。

先づ最初の論文にあらはれた彼の見解を述べんに、

「生産手段が國家の所有に屬する現ロシア經濟の計劃的統制のために貨幣的經濟計算が支持せら

れ得ざることは甚だ明瞭であつて、何人と雖も疑ふ餘地はない。經濟財の貨幣的計算は非貨幣的計算にその席を空けた」といふ點迄は、ストルミリンの見解はチャノフの見解に等しく、又後に公にされたヴァルガの見解とも一致する所である。然るに「如何なる經濟計算が新たなシステムとなるであらうか？ 一の價值計算であるべきか、それとも實物計算であるべきか？」といふ段に至つて、すでにチャノフから一步を分つ。チャノフにあつては、貨幣的価格のみならず、價值概念そのものも亦、商品生産經濟に特有のものであり、従つてその崩壊と共に消滅すると考へ、従つて亦非貨幣計算は即ち實物計算を意味するものであつたのに對して、ストルミリンにあつては、貨幣計算と實物計算の外に、一種の價值計算の存立する餘地を認めた。蓋しロシアの社會革命の結果ロシアの生産に於ては、「社會の資本主義支柱殊に市場は消滅し、價格は價值の實體たる勞働費用の（ここにマルクス價值論者としての彼があらはれる——山本）貨幣的表現に於てそのあらゆる基礎を失つた。けれども、その故に吾々は諸價值の何等かの一尺度を見出さねばならぬと考へるのであつて、價值の尺度そのものの考を一般に放棄して、何等の價值評價もなしにやつて行けるとは思はぬ。」價值尺度なくして經濟を可能と思はぬ理由は、そのチャノフの提案に對する批判にあらはれてゐるのであるが、それは、吾々がすでにチャノフの提案に對してなせる批判と同一の根本思想に立つ

ものであり、従つてここに詳細な反覆を避けるが、それは要するに、ストルミリンの「近代社會に於ける財の全多様性は、それをあるユニフォームティーに還元することなくしては、計算され得ないものである。ヤードは噸又はダースと合計されるを得ない。又キャラコの一ヤードは絹のヤードと合計することも出来ない。蓋し彼等は異なる價值を有するからである。それ所ではなく、二ヤードのキャラコの相互の間ですらも、一方は八コベックを費し、他は五十コベックを要したる場合に、同様な方法で測定され得ない」といふ言葉に要約され得ると思ふ。

彼が勞働を以つて價值尺度と主張するに至れる論據は何處にあるかといふに、それは社會革命によつて「價值表現の歴史的形態の一つが消滅したにすぎないので、價值創造の要素たる勞働の支出が消滅したのではない」といふことと「勞働以外には共通の尺度が見つからぬ」といふことに存する。いはばマルクス價值論者として、ア・ブリオリーにそこに落付いたと見るべきであらう。即ち勞働がかかる共通價值尺度として、充分その用をなし得るや否やは、最初は充分に吟味して居なかつた様である。このことは、次の言葉の中にも明示される。

「チャヤノフは勞働は資本主義社會に於てのみ、嚴密にいへば交換のシステムに於てのみ價值を創造すると主張する。けれども價值とは一體何であるか？ 一定の社會關係だ。それは何によつ

て測定されるか？ 當該財の再生産のために社會的に必要とする労働費用によつて。故に何よりも先に立つものは産業關係である。それは市場で生れるものではなくて工場の中で生れたのだ。どうして市場とその運命を共にするといふことがあらうか？ マルクスの交換價值は知られたるあらゆる經濟に固有なる一定の社會關係としての價值表現の諸形式のほんの一つにすぎざらう云々。

要するに吾々は、ストルミリンの第一論文に於ては、生産に社會的に必要とする労働が、社會主義社會での價值の唯一の尺度だといふ主張に於て、價值の實體を労働だからといふマルクス價值論の反覆以外に、労働でなければならぬといふ理由の説明も、労働のみで充分だといふ根拠をも示されて居るのを見ないのである。

次に第二の論文で明にされた修正後の彼の見解に就て述べよう。

以上述べたるストルミリンの見解に對するチャヤノフの反批判は多岐に互るが、そのうち、ストルミリンの見解の變化の原因となつたと考へられるのは、チャヤノフが『哲學の貧困』から引用せし、マルクスの次の一句である。

「社會主義社會で經濟計劃を樹立する場合に、色々な財の生産のために割合てられる時間は、

諸財の社會的效用によつて決定せられるであらう。」

即ちここに示されたマルクスの見解によれば、社會主義國家は計劃經濟の樹立に當つて、諸財の社會的效用の大きさに従つて社會全體の勞働時間の配分を行ふといふのである。換言すれば、「産業の割合を決定する要素は、生産せられた事物の社會的效用である」といふのであつて、このチャノフ教授のマルクス引用に關して、ストルミリンも「この點に關してはマルクスの見地に疑を生ずる餘地はない」と承認した。それは經濟計劃の出發點の決定に關することであるが、いふまでもなく總勞働力を如何なる割合で諸財の生産に配分せらるべきかの決定なくして計劃經濟は一步をも踏出すことが出來ない筈である。ストルミリンは、マルクスからの援用に對しては、黨外者チャノフの指摘にも服するの外はなかつた。そこでいふ。

「社會主義社會に於ての一つの經濟計劃を構成するためには、ただ生産に要した勞働費用に從つて生産された諸財の評価を行ふだけでは未だ充分ではない。それと相並んで、他の評価をば、諸要求の充される程度、即ち其の財が社會に對して與へ得る效用の程度に從つて行ふ必要がある」と。またいふ。

「恰もすべての私經濟に於て『出費』を『儲け』と比較する必要がある様に、二つの評價を相互

に比較することが必要である。何となれば、この條件の存する場合に初めて、經濟の生産力が確保されることが出來、それと共に、經濟の合理化及び經濟の組織の能率の程度が確保され得るからである。要言すれば、經濟財の價值と效用とは、合理的な經濟計劃樹立のために、本質的な最も根本的な尺度である。」(傍點——山本)

以上のような言葉からでも明な様に、經濟計算の尺度として財の「效用」を必要と認むるに至つたストルミリンは決して生産に要する労働量を尺度とする見解を放棄したのではない。ただ經濟計算の遂行のためには、生産の犠牲と効果との兩者を知らねばならぬといふ事に留意し、効果は、一般消費者の財に對する效用の程度で測定し、犠牲は矢張り、その財の生産に要せし労働時間で測定するといふ譯である。「恰もすべての私經濟が出發と儲けとを比較する要ある如く、二つの評價を相互に比較することが必要である」といひ、また「經濟財の價值と效用とは、合理的な計劃樹立のために本質的な最も根本的な尺度である」と云つて居るのはさういふ意味に外ならぬ。ただ用語はマルクシスト特有のもので彼が經濟財の價值と呼んでゐるものは、經濟學者の普通に費用と呼ぶものに當り、效用と呼んでゐるものがむしろ(少くも壘國學派で)價值と呼ばれるものに當ることは、前後の關係から明瞭である。

以上私は、ストルミリンの到着せし見解を明にし得たと信ずる。然るになほ問題は、然らば所謂財の社會的效用を如何にしてこれを測定しうるか、又如何にして諸財の效用を共通の尺度に還元しうるか、又如何にしてその效用を犠牲たる労働量と比較することが出来るか等の問題である。ストルミリンはその第三論文に於てこれ等の點にある程度の言及をして居る様である。だがさきにもいつた様に、不幸にして私はその論文を見るの便宜を有しない。よつてやむなく、この點については、マルクスの徒たるライヒターと反マルクスの徒たるブルックスとの、批判的敘述をそのままに紹介するの外に道はないのである。而してそれは批判的敘述なるの故を以て項を改めて記すであらう。

## 二

(一) 先づ前項の最後に述べた問題、即ち經濟の尺度の一となす財の社會的效用をば、市場なき社會主義の社會で如何にして測定しうるかの點から述べよう。先づライヒターのそれを、次にブルックスのそれを述べるが、讀者は兩者が批判の根幹に於て相一致せるのを見出すであらう。

ライヒターはいふ。

「……今やストルミリンはチャヤノフの提案せしシステムの個々の部分を研究し、社會主義經濟計算の主たる問題を明確に把握せる重要な批判に到達した。すなはちストルミリンはいつた。

『社會主義社會、はそれがより富裕となれるか又はより貧乏となれるかを知らねばならぬ。ピラントのすべてこれ等の諸要素は労働價值單位に於て與へられ得るし、又與へられねばならぬ、然らずんばそれ等の諸要素は社會にとつて何等の價值をも持たぬ』と。斯様に彼は最初は問題を明確に把握したに不拘、労働價值の効用に對する關係並にこの問題のウエーバー・フヒナーの心理的根本法則に對する關係の研究に迷ひ込んだ。ストルミリンは、社會主義社會に於て労働價值と效用とは、ウエーバー・フヒナーの法則による計算によりて如何に結合すべきかの問題を解き得ると信じてゐる。その際は彼は、一聯の表式に耽けつて居るが、それ等の表式は問題の實際的觀察のためにはいふ迄もなく適用し得べからざるものである。」

またブルツクス教授は次の如く評してゐる。

「ストルミリンは……吾々とは反對に労働價值計算の客觀的意義の上に立脚しながら、而も吾々の見解と完全に一致して、社會主義生産にとつて労働價值計算だけでは全く不充分だといふ事を承認せざるを得なかつた。かくてストルミリンは、經濟財の效用の概念を導入することを必要と

考へる。即ち彼は、労働費用は種々なる経済財の生産の上に、その効用に應じて分配されねばならぬと考へる。かくして吾々の見る所では、近代経済學者が資本主義社會で作用しつつありとなす同じ機構をば、社會主義社會に再建を試みんとするものだと考へる。問題はストルミリンによつて正しく提起された。……今やストルミリンは、経済財を研究することによつて、経済學の風に發見濟なる一つの現象を發見した。それは即ち、経済財はその量を加ふるにつれて其の効用を減ずるといふ現象である。此の場合にストルミリンは、刺戟反覆に於ける反應強度漸減に關するフェヒナーの心理的法則を援用してゐる。實は正直の所、吾々はストルミリンのこの文章を見て、尊敬すべき經濟學者が、右の心理法則を經濟現象に適用した所の限界効用の理論を想起せざりし事實に驚かされたのである。……ただ經濟學で舊聞の眞理を、初めて見附けたと自稱するストルミリンの言葉が如何に奇異に響かうとも、社會主義經濟統制の問題は、彼によつて正しく認識されるに至つたことを承認しなければならぬ。

ただ彼の見解が吾々の見解と異なる所は、彼が、市場との接觸なくして經濟を統整（レギュレーション）することが可能だと考へてゐる點である。のみならず彼は、所謂道德的期待についてのダニエル・ベルマイの蓋然性理論の助けによつて、經濟財の効用をア・プリオリーに計算すること

を約束してゐる。彼はこの場合に、右ベルヌイの法則は貨幣に關するものだといふことを、即ちすべての經濟財の抽象的等價物に關するものだといふことを看過してゐる。彼の表現を利用してパン、ミルク、木材、マント、ゴム靴等の具體的な財の價値（效用）のその分量の増加による漸減を計算しうる者があらはれよう等とは、恐らくダニエル・ベルヌイの思ひも及ばざりしところであらう。すべてこれ等の諸財の消費を支配する法則の研究は最近に提起された問題であるが、併しまだまだ解決に到着してゐない。ただ吾々の確實に知ることは、各消費財に對する<sup>ベタルワインテンジテト</sup>欲求烈度はそれぞれが特有の法則を示すものであつて、彈力的需要を示す財もあれば、非彈力的需要を示す財もあり、従つて經濟財の效用と數量との關係をば一個の單純な表式に總括することが出來ぬものだといふ事實である。

加之、ストルミリンは如何なる方法で色々な經濟財の效用を一つの單位に還元しようとするかを示さなかつた。よつて、恰も有質労働の無質労働との比較の場合に於けると同様<sup>コエファイチエツト</sup>に係數を持つ込む外はなからうが、併し係數は不確定であるから、『若干の』といふのもあらう。

上述の如く、ストルミリンの社會的效用を一の經濟尺度とする見解に對して、マルクシストであるライヒターはこれに反對し、反マルクシストたるブルックスは賛成する。ただ兩者共に一致する

所は、彼の方法、——財の社會的效用測定——は、社會主義社會の實際に適用しうべからざるものなりと見る點である。思ふに財の效用と數量との關係について吾々は、數量の増加が效用の減退を伴ふこと、その減退の程度が財によつて異なることを知るのみならず、それが同時に極めて個人的、主觀的なることを知る。ある個人は、與へられたる諸の消費財に對してその自らに對する效用に順位をつけることは可能である。その故にこそ、消費選擇の自由の認められる社會に於て欲望充足均等の法則（限界效用均等の法則ゴッセンの第二法則）が實現せられるに至るのである。けれども、それはあくまでも個人についての法則であることを忘れてはならぬ。甲はBよりもAの效用を高く評價するに對して、乙は逆にAよりもBを高く評價することあるは何人も知る所であるのみならず、甲自身にとつても、Aは常に必ずしもBよりも效用大なりといふを得ない。故に、私は、「財の社會的效用」をある法則に遵つてア・ブリオリーに測定する方法があらうとは考へぬ。ブルックスの言葉によると、ストルミリンは、諸財の效用を一の單位に還元する方法を示してゐないといふことであるが、その方法が明でない限り、すでにその一事を以て、財の社會的效用を「經濟的尺度」とする彼の主張は、適用に堪へ得ない。蓋し經濟的尺度が一の共通の單位でなければならぬことは、彼自身がすでにチャヤノフへの批判に於て認めた所なるが故である。更に私の考によれば、たとへ財の

社會的効果が一の單位に還元せられたと假定して（事實は不可能と信ずるが）どうなるであらうか。社會主義社會の經濟が、合理的經濟的に行はれるためには、その犠牲と効果との比較が可能であることを要する。然るに犠牲がすでに、生産に要する社會的勞働量を共通單位として測定せられる以上は、それと比較さるべき効果の單位も亦犠牲と同一の單位たる生産に要する社會的勞働でなかつたら、兩者の比較が可能でないと考へられる。換言すれば、犠牲と効果とは共に同一の單位で測定比較するにあらざれば、ストルミリンの要求する「社會主義社會がより富裕になつたか、より貧乏になつたかを知る」といふ經濟計算の目的が達せられぬと考へるのである。だが如何にして、財の效用をその生産に要した勞働時間に還元することが可能であらうか。問題を斯様な純粹な形にまで押つめて考へる時、何人もそれを可能と思ふものはあるまいと思ふ。

(二) 以上の批判は、共產主義者ストルミリンに特有の見解、即ち財の生産に要する勞働時間と共に財の社會的效用を以て經濟計算の尺度となすといふ點に關する。然るにさきに述べた通り、彼は財生産の費用（生産費）の計算は、専ら其の生産に要する社會的に必要な勞働量（時間）を尺度として行ふといふ見解はあくまでこれを維持して居るのである。従つて吾々は、この生産費の勞働計

算に關する限りに於て、ヴァルガへの批判に際して述べたる諸の諸點をそのまま指摘することが出来る。即ちストルミリンの生産費計算の方法に於ても亦、第一、自然の寄與する生産要素を無視せざるを得ないといふこと、第二、異質の労働をば、尺度たる共通の單位労働に還元すべき合理的方法が存在しないといふこと、第三、打勝ち難き技術的實行上の複雑さの非難を免れ得ない。要するに、計算は全く計算者の任意恣に陥るの外なく、合理的經濟計算は不可能だといふ事になる。

×

×

×

さて既述の如く、ロシア革命後所謂戰時共產主義の下に、從來の資本主義的經濟計算方法がその用をなさざるに至り、經濟はヴァルガの言葉によれば「盲目的狀態」に陥り、それから脱出する必要上、上記の如き諸方法を提案するに至つたのであるが、その何れもがすでに理論上その適用に堪へ得ざることが明である。

ソヴェート・ロシアの中央部は、前記ストルミリンの提案を強制的に採用するに至つた。けれどもその方法による價值計算の效果を待つことなく、否生産すべき財の效用を決定するためにダニエル・ベルヌイの表式を一度も用ふることすらなくして、市場を規準に生産を行ふべき様、すなはち資本主義的經濟計算に従ふべき旨の指示を與ふるに至つた。それはレーニンの英斷による新經濟政

策（ネツプ）の布告に對應するものである。素より新經濟政策の下に再建されたところのロシアに於ける市場は、他の國々の所謂資本主義經濟組織の下に於けるが如き充分の機能を果しうるものではなかつた。けれども、完全なる暗中模索をつづけるよりも遙かに優つてゐた。ソヴェート・ロシアが、ヴァルガの提案を實行せず、又強制的に採用せしストルミリンの方法をすら實行するに至らずして、資本主義的の制度に退却し、資本主義的計算方法に救ひを求めた經過は、勞働價值計算方法の理論的難點を知るものにとつては、毫も異とするに足らざるものである。ロシアに於ける這般の事情についてはなほ本書第三篇に詳述するであらう。

### 第三節 ライヒターの勞働價值計算論と其の批判

#### 一

すでに第二章に一言せし如く、一九二三年ウキーンに於て、マックス・アドラーとルドルフ・ヒルファードの二人が監輯に係る『マルクス叢書』*Marx-Studien* 第五卷第一冊として、オットー・ライヒター博士の著『社會主義的社會に於ける經濟計算』が公にされた。それば、この問題に

關して、そのみを取扱へる單行本の形式を以て公にされた最初のものである。はじめて單行本として書かれたといふ關係もあらうが、全卷が著者獨自の見解を示すといふよりも、凡そ同問題に關する從來の諸説を回顧し、同問題の重要性を明にし、而して彼がマルクス主義の立場から問題解決の方法を附加せるに止まるものであり、従つて、書中彼獨自の見解は極めて少く、多くは先人の見解に合致し、ただ彼がそれを組織的綜合的に纏めたと評するを妥當とする。かくて全卷百九頁が第一章、經濟に於ける計算の問題、第二章、資本主義的價値、貨幣、價格計算、第三章、商品生産及び社會的生産に於ける計算、第四章、社會主義的計算(一)、第五章、他の諸の解決の試み、第六章、社會主義的計算(結び)の六章に分たれてゐるが、多少共從來のマルクス主義者の論述との差異をいへば、第一章に於て社會主義社會に於ける經濟計算の不可避なる所以を充分に明示せる點を除けば、第四章に於ける若干の積極的見解にすぎない。而も彼自らのいふ通り、ヴァルガの見解と大體に於て一致せるものである。

斯様な譯で、私は、理論の展開を主とする本文に於ては、ヴァルガやストルミリンの見解と一致せる點は能ふ限り叙述を省略する積りである。

先づ財の生産費は、「それを生産する爲めに社會的に必要とする労働量」を以て測定するといふのが彼の考へである。例へば「工場は一定の原料が供給され、電流其の他のエネルギーを受取る。彼は其に對して一定額を計算しなければならぬが其の量はこれを労働時間によつて計算しなければならぬ。この量は最初から其の生産費の中に這入る（原價計算に於ける所謂直接費——山本）。なほこの工場では、機械が用ひられる。それ故に機械、建物、道具の減價消却が必要である。この量も亦労働時間で把握される」（原價計算に所謂間接費——山本）。即ち生産費の計算方法に關するライヒターの見解は、その根本に於て、ヴァルガ及びストルミリンと全く見解を同じくする。

故に、ヴァルガ及びストルミリンの労働生産費計算に對して提起された二つの理論的難點、即ち「如何にして吾々は有質労働力をば無質労働力に還元し得るか。如何にして吾々が社會的平均労働力なるものを語ることを得るか？」の問題、並に「如何にして合理的に自然の生産要素を計上しうるか」の問題は、ライヒターの労働價值計算論に對しても亦同様に提起されねばならない。右第一の批難について考ふるに、ライヒターは労働價值計算に對する此の批難の存在及びその批難の重要性を意識して居る。それ故に彼自ら、「異なる商品に表現される、標準的な、社會的に平均的な労働力又は労働給付は決して存在しないで、異なる財に這入り込むものは、全く品質を異にする労働

力であるといふ事實は、社會主義の反對論者の最も得意とする、而して恐らくはマルクス労働價値理論への最も重要な非難である」と稱して居るのである。所でこの非難に對するライヒターの答へはどうであるか？

「マルクスが資本論の中で、『有質労働の單純労働への還元が毎日行はれることは、日々の経験の示す所』と云つてゐるのは正當である。彼がかういふ意味は、種々なる質の労働の種々なる貨幣量に、従つて種々なる勞賃に於ける評價は、……この還元のはれる何よりも明な證據だといふ意味である。吾々は同一労働を行ふ労働者例へば二人の旋盤工に就ては、勿論、一方が他方の倍だけ多く、又は倍だけよく働いたといふ事を容易く云ふ事が出来る。更に又吾々は、種々なる労働の重要さ(die Wichtigkeit)をば相互に比較することが出来る。吾々は極めてよく、大鍛冶工場の鍛冶工の重要さをば、汽罐小僧の品質と、例へば鍛冶工が汽罐小僧よりもそこにゐることが何倍重要であるか、何倍よりよく働か、如何に困難で緊張せる労働をするかといふ意味に於て比較することが可能である。工場技師、請負者、親方等の日々の経験は、マルクスの見解の正當なることを是認するであらう」云々と(Laibster, S. 62)。

これが彼の答へである。

要するにライヒターの考へでは、有質労働を無質労働に還元することは實際上困難なことではない、現に資本主義社會に於ても、日常それが行はれて居る。すべての労働は、單純労働の幾倍かに外ならぬが故に、現に等しく勞賃として、ただ量の差として表現されつつあるではないか、といふのである。

所謂資本主義社會に於ける價值理論としてのマルクスの労働價值説、並にその正當性の論證としての「日々の經驗」の援用、これ等の問題に對しては、ここに深入りすべきではあるまい。それについては、高田保馬博士の詳細な批判が存在するし（註、またすでにミーゼス教授の傾聽すべき批判がある。即ち、ミーゼス教授は次の様にいつた。

「交換流通の場合に、勞賃率に於て、單純労働と複雑労働との間に代替關係が形成せられてゐる。けれどもこの事實も亦この均質性（労働はすべて質を等しくするといふマルクスの見解——山本）の證據とはならない。單純な労働も複雑な労働も同じ様に勞賃として、同様に取扱はれるといふことは、市場流通の一結果であつて其の前提ではない。」

又曰く、

「いふ迄もなく、商品が、單純労働の生産物か複雑労働の生産物かの區別なしに、交換關係に置

かれて居ることは、經驗の示す所である。けれども、この事實が單純勞働の一定量が直接に複雑勞働の一定量と等位に置かれうるといふことの論證となり得るのは、交換價値の唯一の源は勞働なりといふことが確定された場合に限られる。然るに勞働が交換價値の唯一の源だといふことは未だ確定されてゐないことであつて、それはマルクスがその叙述によつて、これから證明しようとして欲してゐる事柄なのである。」

かくて市場流通の存在せざる社會主義社會では、複雑勞働の單純勞働への還元を行はんとすれば、必然的に「一の任意放恣な割合を決定せざるを得ず、故に經濟（合理的經濟）遂行に對して用をなさなく」といふのがミーゼスの見解である。

(註) 例へば『マルキシズムの經濟學的批判』第六二―六七頁。

素よりライヒターの勞働價値計算方法の公にされたのは、右のミーゼスの勞働價値計算一般に對する批判を知悉して後のことである。ミーゼスの批判を知りつつ、而もなほ、ライヒターが、勞働價値に於ける異質勞働還元の問題を、解決困難と認めなかつたかといふ理由は、要するに「資本主義社會での勞賃も市場流通の結果ではない。それは企業主が決定して居るのだ。だから市場流通の存在しない社會主義社會の中央部にその決定の出來ない理由はない」といふのであつて、畢竟いは

ゆる資本主義社會に於ける決定可能の事實を社會主義社會に於ける決定可能の論據とするのである。ここの論據は正しくライヒター特有のものと稱し得るであらう。即ちいふ。

「市場崇拜者たるミーゼスは、勞賃率は市場流通の結果だと稱して批判する。けれども、ミーゼスにして勞賃決定の實狀を知つて居るならば、……それに對して市場流通なる範疇は使用出來ぬ筈だ。なぜならば、この勞賃決定に於て普通の意味に於ける市場の値切り (Markteisen) は少しも行はれてゐないからである。 qualifizierter Arbeitskraft と weniger qualifizierter Arbeitskraft との勞賃の割合は、勞働市場の状態、失業者の當時の大きさは、殆ど全く (fast gar) 關係がなす。故に供給も需要も普通の市場流通の意味では、殆んど完全に (fast überhaupt) 何等の役割もしないのである。このことが……社會主義社會でどうして不可能な筈があらうか?」(Leichter, S. 63)

ライヒターの右の見解に對する批判は次項に譲るとして、彼自身の、所謂「異質勞働還元の困難」に對する見解はこれで明にされたと考へる。

以上は、ライヒターの生産物の生産費を決定する方法であつた。而して何人も知り得たであらう如く、それは、彼にあつては同時に生産に参加せし勞働者への報酬決定方法でもあつた。然らば次

に生産物の價值を如何にして決定するものと考へたか。この點の關係を明にするためには、彼の社會主義社會の構成をば、輪廓的にでも示して置くのが便利であらう。彼の社會主義構成は次の如く要約し得る。

「社會主義社會は、勞働者に對しては、平均的質の勞働にとつて要する勞働時間に従ふ社會的價値の單位を以て支拂ふ。社會は亦同様に生産物の價値をば、其の生産物が要したる平均的勞働時間に従つて決定する。而して勞働者は、その勞働によつて獲得せる勞働券又は價値券(ライヒターはこれを勞働貨幣といふ——山本)と交換に、公の店に於て生産物を受取ること出来る。」而してこの場合勞働貨幣の性質は、商品交換の手段でもなければ、資本主義社會での意味に於ける貨幣でもなく、單に國民所得に於ける實物割前の指圖書にすぎない。「それは勞働者に對してその生産せる價値に相當するだけの割前を國民所得から受取ることを得しむるための償還手段に外ならぬ」(Leichter, S. 74)。

右の文句は、ライヒターが其の著の七四—七五頁に、ブルギヤンの見解の要約として引用せる文句であるけれども、それは彼自身が、「恰も毛の如き嚴密さで吾々の考に一致する」と稱する所のものである。一體ライヒターの書物は、その量の割合に無用な記述が多くて、その要旨を把握する

に困難を感ずるのであるが、吾々は右のブルギヤンの引用句のお蔭で、著者の社會主義構成をその純粹な形で理解する便宜を得る譯である。

さて右の引用句によつて明なる如く、社會は一面に於て労働者に對し、社會的平均的労働時間に應じて労働貨幣を交附し、他面その労働貨幣と交換に引渡すべき生産物を政府の店に用意する。而もその生産物に對しては、それぞれその生産に要する社會的平均的労働時間だけの價值をつけて賣出す。労働者は、その得たる労働貨幣の範圍に於て、その消費財を自由に選擇する。自由選擇の結果は必然にある種の財は供給が需要に及ばず、反對に他の財は供給が需要を超過することを免れない。そこで彼の考へでは、供給が需要に及ばざる財は次の生産期に於て生産を増加し、逆に供給が需要を超過する財は次の生産期に生産を制限することによつて、生産を需要に適應せしめて行く、と考へる。

所が、ここで何人にも容易に注意されることは、人間の労働力を以て勝手に増加し得ざるが如き財で、供給が需要に及ばざる場合、需要供給の均衡を如何にしてとるかといふ疑問である。ライヒターは、かくの如き財を名附けて稀少財 (Seltenheitsgüter) と呼び、その生産に従事せる労働者に對してはその労働時間に應じて労働貨幣を與へるも、その價格の決定に際しては、所要労働よりもよ

り高く評價するとなすのである。つまり所要労働に評價したのでは供給が需要に及ばず、而も供給を増加し得ざるために、價格を所要労働時間よりも高めることによつて、需要を減退せしめて供給量との均衡をとらうといふのである。而して斯様な方法をとることによつて、彼の社會主義社會に於ては、資本主義社會に於ける地代（鑛山地代又は耕地地代）に相當するものが發生するに至ることは、彼の承認する所である。けれども「それは個人の懐に入らずして社會全體に屬するに至る場合、直ちにその資本主義的性質を喪失する」から一向差支ないと見て居るのである。

なほ注意すべきは、ライヒターの考へでは、「大部分の財の價値は、完全にその労働時間費用で評價しうる」のであつて、ただ例外的に彼の所謂「稀少財」のみが、右の方法によつて労働費用以上の評價が行はれるとするのである。而してライヒターは、ミーゼスの批難する「自然の要素を無視せざるを得ぬ」といふ點が、單に「稀少財」の評價のみに關するものだと解し、従つてミーゼスの非難に對しては、右の如き例外的方法を主張することによつて、完全に答へ得たものとなした。それがミーゼスの提出せる問題そのものの誤解に出づることについては、次項に述べるとして、兎も角ライヒターの労働價值計算の要旨は右の如くである。

二

先づ第一に、勞働價值計算方法の難點とせられる異種の勞働をば、共通の尺度たる單純勞働量に還元する點に關して、ライヒターの説明は、問題を解決するに充分なりや否やを吟味しよう。

ライヒターの見解を顧るに、資本主義社會でも現に異種の勞働は單位に還元せられ、従つて、すべての種類の勞働は勞賃として等しく取扱はれ、ただ量の差として等位に置かれて居る。而もそれは市場流通の結果ではない。換言すればそれぞれの勞働力に對する需要供給の影響で決定されて居るのではない。よつて市場流通の有しない社會主義社會で同様の還元が遂行され得ない道理はない、いふのであつた。要するに資本主義社會に於ける勞賃の決定が市場取引の結果行はれるものでない、といふ主張がライヒターの見解の第一の要點である。この主張の成否が、異種勞働還元の問題に關する限り、彼の見解全體の成否を決定するに重要な關係を有する。

いはゆる資本主義社會に於ける勞賃が、需要供給の關係、即ち市場流通の結果定まるものでないといふライヒターの見解が、今日の經濟學の常識から見て誤謬であることは改めて説く必要はあるまいと思ふ。要するにライヒターは、勞賃が決定せられる個々の場合に、勞働力の需要供給關係を

顧慮しての所謂「市場の値切り」(Markteisen)が行はれて居らぬといふ一事を以てその主張を打立てて居るのであるが、併し、市場に於ける價格形成、需要供給法則の作用のためには、必らずしも個々の需要供給者間の値段の掛引あることを要するものではない。この點については、ミーセスがライヒターに對する反批判に於て述べたる次の所説は、全然正當と認められねばならぬ。

「つまりライヒターのかかる誤謬の根源は、市場並に市場價格の本質に對する理解の不明瞭、不充分なる點に存する。彼の考へでは、需要供給の兩側に多數の人々があらはれて掛引をやること  
が市場の本質だと思つてゐる。けれども掛引は決して市場の本質をなすものではない。毫も掛引  
の行はれない所謂正札附販賣の場合に於ても、市場の機構は同じ様に作用して居るのである。た  
だ其の場合に異るのは、市場の状態が、直接に、需要者供給者の商議を通して價格に作用しない  
で、間接に、其の行動——たとへば買手があまり來ないとかどしどし押かけて來るとか、而して  
又其等に適應した賣手の行動——によつて價格に影響するといふ差あるのみ。市場價格が市場狀  
態によつて決せられるといふことに變りはない。……多數の人々が出て來て交換の際にシャベル  
といふ事は市場の認識にとつて無意義である。その行動が重要なのであつて、その言ふ所が重要  
なのではない。ライヒターが若しこの點に注意を拂つてゐたならば如何にマルクス思想に捉はれ

てゐようとも、勞賃形成に及ぼす勞働市場の状態の影響を争ひ得なかつたであらう」(Mises, Arch.

F. Sw. u. Sp. 51. II. S. 498—499)。

ミーゼスは斯く評したる後「職業組合や雇主組合の連中がこの關係を認識しないといふことは出来る。だがいやしくも勞賃形成の經濟問題を取扱ふ程の者は、少くとも事態をもつと深く觀察する様に努めねばならぬ」と附言して居るが、これも、亦正に同感せざるを得ない。

ライヒターの主張の第二のエレメントをなすものは、「吾々は色々な勞働の重要さをば互に比較することが出来る。吾々は極めてよく、大鍛冶工場の鍛冶工の重要さをば、汽罐小僧の品質と比較して、前者が後者よりも、そこに居ることが何程重要であるか、何倍よく働くか、又如何程より困難で、如何程より緊張した仕事をするかといふ意味に於て、互の重要さを比較することが出来る」といふ見解である。即ちかく主張することによつて、彼は所謂資本主義社會に於ける勞賃決定が市場流通の結果だといふミーゼスの主張を破り、同時に社會主義社會が市場流通を俟たずして、異種勞働の還元に苦しまぬといふ自らの主張を貫かうとして居る譯である。

だがライヒターの考は誤である。私はこの點についても、ミーゼスの次の反批判をそのままに認めざるを得ない。

「云ふ迄もなく、吾々は斯くの如き比較をやつて見る事は出来る。けれども其の比較の結果は比較する人の主觀的見解の如何によつて區々たる結果が生れるといふことを忘れてはならぬ。一體ライヒターがここで重要さといつて居るのは何の意味であるか。もしもそれが勞働生産物の出現にとつての重要さといふ意味とすれば、吾々は、槌と釘と、紙と筆との何れが重要かの質間に答へたソフィストの説明を引用せねばならぬ。其の所謂重要さの意味が、人類の欲望充足との關係即ち主觀的使用價値を指すのではまさかあるまい。蓋しライヒターはマルクス勞働價値説の忠實な使徒であるから。だが暫くこの點を別にしても、ライヒターの説明から四つの質間が生れる。即ちそこにあることの重要さ、よりよく働くことの重要さ、勞働の惹起する困難、勞働が惹起する緊張、この四つの何れを判斷者の前に提出する氣であるか。それとも亦、右二種の勞働について其の他の考へうべき凡百の點、例へば健康傷害の點、育成の困難等についても亦、比較しなければならぬのであらうか。これ等各の比較は恐らく異なる結果を齎すに相違ない。而も吾々が還元の鍵となし得るものはただ一つだけである。それとも亦還元の鍵を算出するために、色々な比較の諸結果を組合せよとでもいふのであらうか？」

第二に、自然の要素を無視せざるやといふ觀點からライヒターの見解を吟味してみよう。此の間

題に對するライヒターの答は、ミーゼスの提出せし問題そのものの完全な誤解、むしろ完全な無理解の上に行はれてゐる。ミーゼスの問題とする所は、「需要に比して稀少なる自然的生産要素は矢張り社會の犠牲として最初から相當の評價をすべきに不拘、勞働價値計算では、それが勞働の產物にあらざるの故を以つて無視される事となる」といふのであり、従つて云ふ迄もなくそれは、凡そ需要に比して稀少な自然的要素を含む限り一切の生産物の經濟計算に於てあらはれる問題である。然るにライヒターは、ミーゼスの言葉が、*Doch wenn es nur in einen solchen Menge vorhanden ist, dass es ein Gegenstand der Bewirtschaftung wird, muss es doch in irgendeiner Form in die Wertrechnung eingehen*とありし所から、それがライヒターの所謂稀少財 (*Seltenheitsgüter*) にのみ起る問題と解した。尤もライヒターはそのいふ所の稀少財の意味を充分には明確に示してゐない。けれどもそれが經濟財のうちの例外的なものにすぎないと見てゐることは、彼が所謂「稀少財」の評價のみ特殊の價値計算法を用ひ「大抵の財 (*die meisten Güter*) は完全に勞働時間で捕へうる」と稱し、又「ミーゼスは先づ最初はこの問題をば人間勞働の外に勞働生産條件の這入りこむすべての生産領域に關する問題であるかの如く誤認した」といつて非難してゐる所からも明である。かくして、ライヒターの案は、例外的にのみ、自然的要素を計算に入れようとすることによつてすでに、

「自然の要素を無視する」といふ難點を全面的に救ふことは出来ないといはねばならぬ。

更に吾々はライヒターの所謂「稀少財」の評價についてのみ見るも、次の缺點を指摘して合理的計算方法として適用し難き所以を明にし得ると思ふ。

(一) 所謂「稀少財」の生産物價格は、これを所要労働よりもヨリ高く評價するといふ。だがそのヨリ、高さ程度をば、如何にして知る事が出来るか。

(二) 彼の右の方法をとる時は、生産費用と生産物價格との間の連絡はたたれることとなる。この種の經營に於ては生産物量の如何は、經營の經濟性を比較すべき尺度とならぬ。如何にしてその經濟性を比較するか。

(三) 諸財のうち何を稀少財とし、何を稀少財とせざるか？ 評價の基礎を異にする以上それを明かに區別しなければならぬが、區別の合理的方法があるか？

私は右何れの問題についても、ライヒターの社會主義からは合理的解決を望み得ないものと考へて居る。

カウツキーの述べた、労働時間計算方法の技術的複雑による實行難といふ非難は、そのままライヒターの見解に對しても妥當するが故に再びここに繰返さない(第四章第一節)。

## 第五章 貨幣價格によりて計算せんとする見解

### 第一節 カウツキーの傳承價格・協定修正論と其の批判

#### 一

社會主義社會に於ける計劃經濟の存立のために、經濟計算が不可缺少のものであると見る點に於ては、凡そ社會主義及び經濟學に相當の理解を有するものの中に、異論の餘地はなかつたし、今後亦あるまいと信ずる。ただこの不可缺なる經濟計算の方法に關して異論が存するのであり、或者は實物計算を唱へ、他の者は勞働價值計算の可能性を主張した。然しながら、實物計算論と、勞働價值計算論の兩者は、上來のべ來れるが如き諸の理由に基き、私は之れを以て到底實行に堪へ得べからざるものとする。

然るに、ここにみづから社會主義者を以て標榜せる學者のうちに、實物計算論と勞働價值計算論

を、ともに否定し、而もこれを貨幣計算によつて解決せんと試みたものがある。かかる貨幣計算論者の代表者として、先づマルクス主義の碩學として知られた獨逸のカール・カウツキーと、宗教的、倫理的社會主義者にして、さきのハンブルグ大學教授たりしエドアルド・ハイマンの二人を擧げることが出来る。

素より、この兩者は、等しく貨幣計算論を主張するとはいへ、實物計算論及び勞働價值計算論を否定する證據に於ても、亦その積極的見解に於ても、共に甚しく異なるものである。この故に、吾々は兩者を一括して取扱ふことは適當でない。よつて私は先づここにカウツキーの見解を探り、且つこれを吟味し、ハイマンのそれは、これを次節に於て論究するであらう。

カウツキーの實物計算論否定の證據は、第三章第二節第一二四頁以下に引用した。又その勞働價值計算論を却ける理由は、第四章第一節一五八頁以下に述べた。よつてそれ等については、それぞれの項について讀者の參照を請ふこととしてここには繰返すまい。以下に説く所はただ彼の貨幣計算論の積極的部分に止まるのである。先づ彼の見解を示すに足る重要な文句の引用から初めよう。

(傍點——山本)

「流れをフルヒで測る如き勞働價值計算の望みなき仕事を爲す代りに、プロレタリアの制度は、

把握し得べきものとして、眼前に存在するもの、即ち今日金で測定されてゐる所の、すでに歴史的となれる諸價格を維持するであらう」(K. Kautsky, Die proletarische Revolution, 1922. S. 321)。

即ちカウツキーの考によれば、所謂資本主義傳來の貨幣價格を、そのままに、社會主義社會に持ち込んで維持して行くといふのである。而もその方法を以て唯一の可能なる計算の基礎なりと見たことは次の言葉によつて明であらう。

「含まれる労働量による商品の價值評價は、最も巨大にして且つ最も完全なる統計設備を以てするとも能はざる所であるが、この能はざる所のものを吾々は、長き歴史過程の結果として傳來の諸價格のうちに與へられてゐるのを見出す。それは不完全であり、又不精確でもある。けれども可及的圓滑に、容易なる經濟的流通過程運行のために、唯一の可能なる基礎として存在するものである」(p. 321)。

カウツキーの考は、資本主義時代に市場に成立したところの諸財の貨幣價格をば、そのまま社會主義社會に持込んで經濟計算の基礎とするにあることは、毫も疑ふ餘地はない。ただ斯様な傳來の貨幣價格が、組織の本質を異にする所の社會主義の社會に於て何時迄維持し得ると考へたであらうかは明瞭でない。生産關係や需要の狀況がたえず變化すべきことは、社會主義と所謂資本主義とに

よつて大差あるとは思はれない。従つて、いはゆる資本主義社會から傳來の貨幣價格が社會主義社會で差當り利用され得ると假定するも、それがいつ迄も用をなし得ないであらうことは容易に考へ得ることである。カウツキー自身が、

「斯様に、社會化は最初はこの點（價格をさす——山本）に就て何物をも變更しないけれども、價格の役割及びそれと共に貨幣の役割は、社會化領域の不斷の増加のうちに、程なく根本的に變革せられる」(S. 321)。

と稱して居る所を見ると、資本主義社會から傳來の貨幣價格が社會主義の社會でそのまま用をなしうるのは、當分のうちだけと解して居る様にも見える。けれどももしさうだとすれば、傳來の諸價格が、生産關係其の他の變化のために、そのまま適用し得ざるに至れる場合如何にする積りであらうか？ カウツキーは述べる。

「個々の商品の生産、並に價格の數字 (Ziffern) は、社會主義社會では、もし社會の利益が必要とする場合には、資本主義から譲り受けた數から離れて決定され得る。それは場合場合に企てられることであるから、労働貨幣採用のためにあらゆる商品の労働價值を、一度に計算するのに比べると、比較にならぬ程簡単な仕事である。そしてその際任意勝手に (willkürlich) それをやり得な

「ことばをこふ迄もなす」(p. 322)。

つまり、社會の必要の起る度毎に、傳來の價格に變更修正を加へて行くといふのであり、而もその變更修正は任意勝手にやり得ないと見るのがカウツキーの考である。更にその變更修正は、勞働價值計算方法によりて新しくすべての財について一度に全財産の價值を算出するよりも遙に簡單だといふのである。素よりその限りに於て、何人にも異存も疑義も存しないであらう。

ただ問題は、價格の變更に「任意勝手」を避けねばならぬとすれば、抑々如何なる合理的方法を用ふるのであらうか。不幸にして吾々はカウツキーの叙述の何處に於ても、「消費者の全體が生産者と經濟關係の洞察を基礎として生産の程度及び價格の高さを協定する」といふ極めて抽象的な言葉の外には、何等具體的な方法の説明を發見することは出来ない。即ち彼はただ次の如く述べるに止まるのである。

「今日にあつては、個々の私的企業者は市場を目的に生産する。……彼等が商品に對して要請する所の價格はその生産費によつて與へられる。けれども、彼等が現實に達成する價格はそれには依存せずして、需要と供給との關係によつて定まる。……更に生産の程度範圍は、價格の形成状態に依存する。即ち、價格が益々下るときは生産が制限せられ、益々騰るときは生産が擴張され

る。……社會主義社會に於ける生産統制の方法は全くこれと異なる。即ち生産の程度及び價格の高さは最早市場目的の無政府的生産の結果ではなく、……消費者の全體が各個生産部門の生産者と、初めから、經濟關係の洞察を基礎として、(auf Grund ihrer Einsicht in die ökonomischen Verhältnisse) これを協定するのである……」(p. 321—322)。

これを要するに彼の見解は、實物計算並に勞働價值計算を否認せる結果、いはゆる資本主義社會に於て「歴史的となれる價格」「傳來の價格」を、社會主義社會の經濟計算の基礎とするも、其の必要の起る毎に消費者の全體が、各部門の生産者と協定して修正して行く、といふのである。協定に際しては、「經濟關係の洞察」を基礎とするといふのみで、何等具體的な合理的基準が示されて居らぬのである。

## 二

カウツキーの見解のうち、その實物計算論並に勞働價值計算論に對する批判的部分は、何人も論據甚だ強固なるものとして是認せざるを得ないであらう。然しながらその積極的な貨幣計算方法提案の論據は甚だ弱いといはねばならぬ。すなはち一方に於て傳來の價格を基礎となすと稱しつつ、

他方に於てみづからそれが程なく適用し得べからざるに至るべきを認め、而もその場合に於ける修正の合理的基礎を示し得ないといふことは、ほとんど一個の提案としての價值がないと評されても仕方があるまい。私は次に、カウツキーの見解に對するマルクシストたるライヒターと、「資本主義」の最善を主張するミーゼス教授との批判を引用するが、吾々はそれに一言も説明を附加する必要がない様に思ふ。

(A) ライヒターの批判

「第一點、カウツキーは、『流るる水をフルヒで測る様な望みなき仕事をする代りにプロレタリアの制度は、商品流通のために、把握しうべき所の現存せるもの、即ち歴史的となれる諸價格を維持する』といふけれども、一體永く通用する所の歴史的となつた價格といふ様なものは實在するものではない。資本主義社會の不斷の動搖のうちに、即ち、生産方法の變化、人爲的變動其他による價格のたえざる變化の中に、如何なる價格も安定しては居ないものである。

第二點、所謂『歴史的となれる價格』をば、一體いつ迄の間社會主義社會で維持させようといふのであるか。又誰がその價格を吟味するであらうか、又如何様にして生産方法並に社會狀態の變化に適應せしめようといふのであらうか。資本主義から傳來の價格は、完全に變化せる新たな關

係には最早全く適應しない。資本主義社會の價格を化石せしめた社會主義の社會は、その價格が消費が實際生産によつて償はれたか否かの吟味の手段とならぬといふ事實だけですでに崩壊しなければならぬ」(Veitler, p. 72—73)。

(B) ミーゼス教授の批判

「資本主義社會の價格が差當り何等の變化もされなくて社會主義社會へ讓渡されるといふのである。『けれども社會の利益がこれを要求する場合には』『個々の商品の生産及び價格の數をば』『資本主義時代から讓渡けた數とは違つた様に決定され得る』とカウツキーはいつて居る。而して更に亦『その場合任意勝手にやり得ないことはいふ迄もない』と述べて居る。

けれども不幸にして、彼は、如何にして任意勝手以外の方法で行はるべきかを示さうとしない。吾々は彼の提案をばこれ以上説明し批判する値打のないものと決定すると、何人も不當とはなさぬであらう。傳來の價格は長い間は間に合はぬといふことは、彼自身が承認する所である。而も彼は如何にして如何なる修正を遂行しなければならぬかを説明し得ないのである」(Mises, Arch.

f. Sw. u. Sp. 51. II. S. 496—497)。

現にマルクシズムを信奉する人々にとつては勿論、長くマルクシズムの影響下に彷徨して來た人の目には、カウツキーの如くに、資本主義市場に成立して居た諸價格をば、搾取を排除した社會主義の社會に借用繼承するといふ提案をば、一顧の價値もないとして却けるかも知れない。けれども吾々の留意に値することは、輒近に於ける經濟計算を問題とする社會主義者たちの殆んどすべてが、カウツキーと同様に、資本主義最後の市場價格に訴へて社會主義社會の價格を定めんとの見解をとるに至つたといふ事實である。それは後に次第に明にされる様に、實物計算方法のみならず、勞働價値計算も共に實行し得べからざることが論證され、更に數學的其の他の色々な方法を考へて見た結果、何れの方法によるも無數の財貨の諸價格をば新たに計算決定する仕事が複雑で人力を越えるといふことが明瞭となつて來た結果である。

すなはち社會主義社會に於て無數の財貨の諸價格が新たに計算決定されることが、如何なる方法を以てしても實行に堪へられぬといふこと、従つて社會主義が獨特なる經濟計算方法を缺くと知つた瞬間に、一部の社會主義者は社會主義實現の希望そのものを放棄するであらうが、なほ社會主義實現の希望を放棄し得ない人々にとつては、不満足ながらも「資本主義」の市場價格を借用して社會主義で間に合せようといふ氣になるのであらう。而してさうしない限り、社會主義社會は最初か

ら非經濟の暗中摸索に陥らざるを得ないことを思へば、いはゆる資本主義の市場價格が、彼等の排撃する所謂搾取關係による所得分配を基礎として成立して居るといふ様なことを問題として居ることとは出来なくなつたものと見るべきであらう。ソ聯政權の如き、原理的には資本主義的貨幣計算方法を極度に排撃して勞働價值計算を主張して居りながら、すでに廿年以上になつた今日なほ、「過渡期」の口實の下に、歐洲大戰による市場攪亂の始まらざりし一九一三年の資本主義市場價格に訴へて、それを基礎に諸財の規準價格をあれこれと決定に苦心して居る實狀なのである。

## 第二節 ハイマンの傳承價格・歸屬計算論と其の批判

### 一

前節に述ぶるが如く、カウツキーの見解は、その積極的部分に於ては誠に根據の弱いものである。然るに本節に説かんとするハイマンの見解は其の理論の構成に於て遙に複雑でもあり、亦傾聽に値する點も少くない。私がその説明に可成り多くの頁を割かねばならなかつたのはそのためである。

ハイマンの理論もカウツキーのそれと同様に、實物計算論並に勞働價值計算論に對する否定から

出發したものであるが、その否定の論據はここにはこれを省き、其の獨特なる貨幣計算論の積極的部分のみを述べよう。

尤も吾々は、彼の特有なる貨幣計算論の構成そのものを述ぶる前に、その構成に到着する迄の思考の過程に注意を拂はねばならない。吾々はそこに彼の冷静な——社會主義者としては稀なる——學究的態度を伺ひ得るのみならず、少くとも彼にとつては、彼の理論はこの過程の當然の歸結と見られるが故である。

先づ彼の思考の過程に於て注目さるべき第一の點は、社會主義者として自他共に許す彼が、殆んど「資本主義」經濟を理念とする學者にも劣らざる程度に於て、貨幣經濟の機能の優秀性を認識して居たといふ事實である。この點に於て彼はマックス・ウェーバー並にフォン・ミーゼスの所論に、完全に承服せしものと思はれる。即ち彼はノイラートの實物經濟の批判に際して判然と次の如く斷定して居るのである（傍點は山本）。

「正常なる一經濟の下に於ては、貨幣計算は實物計算のなし得るすべてをなすのみならず、更に實物計算のなし得ざる多くの事をなし得る。この事はすでに Max Weber 及び Ludwig von Mises によつて、何人も異論の餘地なき迄に明示せられし通りである。」

更に同じ場所には次の様にも述べられて居る。

「價格制度は、極めて微細なる評價の變動と雖も、地震計の如き正確さを以て示し、而して直接それによつて、生産状態の新たなる状態への適合を可能ならしむるものである」(Heimann, Mehrwert. S. 169)。

斯様に、貨幣計算、價格制度の機能に對して、社會主義者とは思はれぬ程の尊敬の念を持つたとふことは、彼をして社會主義社會に貨幣計算を維持することの必要を感ずるに至らしめたものであり、而して價格の機能に關するこの冷靜な認識こそは「資本主義」側に立てるミーゼスやゲルハルト其の他の學者をしてすらも、ハイマンの科學的態度を賞揚せしむるに至らしめた所以である。この意味に於て、彼が貨幣計算價格制度に對して如何に高く評價せるかを示すべき言葉をもう少し引用して置くこととしよう。

「貨幣計算の下に於ては、……各生産財の稀少さ (Seltenheit) と評價 (Bewertung) の關係は需要と供給との中に綜合せられて、精確に價格の上に表現される。而して種々なる生産財の價格は合計せられて生産の總生産費となり、生産物の收益に對立せしめられる。かくて吾々は兩者の單なる數的比較を行ふことによつて、其の生産財の使用が、今日の價格制度及び購買力に應ずる制度の

意味に於て、經濟的に成功せしや否やを知ることが出来る。」

「ウェーバー及びミーゼスが、貨幣計算なくしては、經濟の合理性なく、技術的可能性の、最大なる經濟的效果といふ意味に於ける利用は、存在しないと云つたのは、全く正當である」(Ibid, S. 176)。

更にハイマンは、マックス・ウェーバーの言葉そのままに「西歐文化の基底に横はる貨幣經濟の作用を拒否するが如きは考へ得べからざる所だ」との結論に到達して居る。

„Ein Verzicht auf diese Wirkunge der Geldwirtschaft ist aber undenkbar; auf ihnen beruht jene ungeheure Vermehrung und Zusammenballung der abendländischen Menschheit bei gleichzeitigen Steigen des Versorgungsstandes, die Ausgangspunkt und Grundlage aller verantwortlichen Handelns in Politik und Wirtschaft bildet.“ (Heimann, Mehrwert, S. 170, M. Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, S. 56, Anm. 7)

彼が貨幣經濟の排除を以て、考へ得べからざるもの (undenkbar) となすことは、ただに實物計算のみならず、勞働價值計算の實現をも、共に考へ得べからざるものとなすことを意味する。

「國民を全體として其の經濟を指導し、直接に整頓出來るなどと考へるのは甚しい小兒病的見解である」(Heimann, Sozial-

「市場の破壊は無への飛躍である」(Ibid. S. 26)。

更にハイマンの思考の過程に於て注目すべき第二の點は、彼が貨幣計算を社會主義社會に持込む場合に於ける理論的困難を認識して掛つたといふ事實である。ハイマンは其の主張する社會主義の事を、或は「生産計劃經濟」(Erzeugungsplanwirtschaft)とも呼んで居るが、この生産計劃經濟に、貨幣計算——彼がその拒否を考へ得べからざるものとなせる所の——を行ふとすれば、およそ次の如き理論的困難が豫想されるが、ハイマンはこのことを充分に認識して居たのである。

「即ち貨幣計算は生産計劃經濟に於ては、今日の自由競争經濟に於ける程圓滑には行かない。何故といふに、競争經濟の下では、需要と供給との競争の結果、一義的に即ち一物についてはただ一個の價格が成立してくる。然るに生産計劃經濟を行ふものはそれが何人により、又それが如何なる名に於て行はれるにしても、獨占生産者たる事に疑の餘地はない。従つて生産計劃經濟の下に於て成立する價格は、廣義の獨占價格たる性質を有する。故に獨占價格に伴ふ困難は、あらゆる生産計劃經濟の下にあつては、大規模なる形に於て存在しなければならぬ。獨占價格の決定に

伴ふ困難とは何か。それは計算の基礎たる價格が一義的に決せられないで獨占者の主觀によつて決し得べき一の廣い餘地、巾 (Spielraum) が生ずるといふことである。」

かくして、ハイマンは、共同經濟に於ける貨幣計算の、起り得べき理論的的根本的の困難を要約して次の如く述べた。

「共同經濟的獨占者は、一の廣大なる Spielraum (餘地) の中で價格を決定し得る。……けれども正にその故を以て、如何なる形の共同經濟も自由なる競争經濟の下に於けるが如き、生産の範圍を需要に適合せしむることの確實さ (die Sicherheit, mit der der Mechanismus des freien Wettbewerbs dank der selbstigen und eindeutigen Preisbildung den Umfang der Erzeugung dem Bedarf anpasst) を持たないと思はれる。自由競争の下では獨立して一義的に定まる價格形成のお蔭で、確實に生産の範圍を需要に適合せしめ得る。……斯くて貨幣經濟を維持する本來の計劃經濟は、需要の方向と強さを指示すべき何等の羅針盤を有せず、欲望充足の迅速と精確さについては、遙に自由競争の利潤經濟に劣ると見られる」(Heimann, Mehrwert, S. 173)。

第三點上述の如く、先づ貨幣計算の優秀なる機能を是認し、次にその計劃經濟の下に於ける理論的困難を確めたハイマンは、特殊の構成を案出することによつて、この困難から脱出せんと試みた

のである。その特殊の構成が如何なるものであるかは後に説くこととして、一體彼は、是認せる理論的困難からの脱出の契機を何處で把へたかといふに、彼はこの契機を、獨占價格の本質たる任意の點に價格を定め得るといふ事そのものに求めた。これが注目すべき第三點と考へる。

即ちすでにシニペーターが指示せる如く、獨占價格の決定に於ては決定の巾スプレッドがあり、それが一義的に決定せられるためには、獨占者が與へられし條件の下で最大の利潤を追及するものとの一假定を挿入しなければならぬ。然るに社會主義の獨占者は、その價格の決定に於て最大利潤を齎らす所の價格即ち狹義の獨占價格を強制せられるものではなく、買手の利益を考ふることによつて、他の價格を決定することも充分に可能である。即ち獨占者は、その價格を狹義の獨占價格から引下げて、生産費を償ふだけの價格を決定する可能性をも有するものと、ハイマンは考へたのである。

即ちいふ。

「獨占の場合に於ては、競争の存しない爲めに、本來の獨占價格（最大收益價格）から引下げて、下の限界としては、自由競争の場合の價格迄下げることが可能である。自由競争價格以下に下げては、獨占者は損失を蒙るであらう。此の二點間に於ては獨占者は大小色々の利潤を得る譯であるが、最下限たる自由競争の場合の價格に決定すれば、その價格は、金利を含んでの生産費だけ

を償ふであらう。」

右の認識即ち、獨占者は、最大收益價格を「強制せられるものではない」といふ認識、換言すれば獨占者はその價格を「生産費を償ふだけの點にも決定するの自由を有する」との認識こそは、彼をして特有の構成を案出せしむる出發點となつたものである。そこで私は愈々彼特有の構成の説明に這入るが、先づ消費財の價格が如何にして形成せられるかを述べ、次に生産財の價格形成方法をのべ、而してその生産計劃經濟の下に於ける經濟計算方法の全貌を明にするであらう。

(一) 彼に於ける消費財の價格形成方法

「競争の行はれる場合 於ては、資本と労働との、各商品の生産に對する配分は、どこでも各部分市場で全體の需要が同じ高さ迄充足せられる様な具合に行はれる所の均衡點に落着かうとする。……共同經濟的獨占者も亦、かかる均衡點の實現に努め、この均衡點の運動に追隨しなければならぬ。……これが價格構成の一般的原则である (Mohrweh, S. 131-4)。

これがハイマンの示せる共同經濟での「價格形成の一般的原则」なるものであるが、要するにそれは、消費財の需要の強さに適應した生産を行はねばならぬといふことであり、而もさうした生産は需要者、供給者の兩側に自由競争の存する場合に實現されて居ることであるから、共同社會の生

産獨占者は、かかる自由競争の場合に落付かうとする均衡點の實現を目標に生産の範圍を決定して行けといふ譯である。これは一般的原則であるが、彼の説明は段々具體的に進んで行く。

「先づ社會化が一時に行はれたものと假定すれば、すでに自由競争の社會に於て、消費者の購買力の配分に應じた生産が行はれてゐたのであるから、新社會は、差當つては何物をも變更せずに、個々の生産物に對して自由競争時代からの傳來の價格を維持存續して行かねばならぬ。この時の價格は平均的生產費に相當する」(p. 186)。

吾々は右引用句の最後の言葉に注意しなければならぬ。需要供給の兩側に競争の存する場合に於ては、ただに生産が需要に適合して行くのみならず、價格は生産費に於て定まるものだといふ理解が、ハイマンの一出發點を形成して居るのである。この理解によつて彼は、消費者として買ひの自由競争を行はしめ、而もその競争の結果價格が生産費に定まる様な具合に生産を擴張乃至制限して行くといふ考に到達したのである。即ち、

社會化の當初は差當り傳來の價格(即ち生産費)を以つて賣り出し、消費者をして買競争を行はしむれば、恰も生産費に相當するその價格を以て品物は過不足なく賣れて行く筈である。然るに今需要に減少が起ると假定すればどうなるか、いふ迄もなく總生産物は所定の價格を以てしては其の

販路を見出し得なくなる。そこでそれを賣つくす爲めには價格を引下げねばならない。所で價格を引下げると缺損をすることになるから、その事實によつて、爾後生産の範圍を縮少し、買競争を強めて、再び單位の價格が恰も生産費をカバーする點迄生産を制限すべきことの指示が得られることとなる譯である。又反對に、需要が増加する場合には、買手は稀少なる品物に對して競争を行ふが爲めに、ヨリ多く支拂ふの用意をなし、それに應じて價格を引上げて行くから、計算所には一の利潤があらはれて來る。この事實によつて、生産の範圍を擴張すべく、而して單價が再び生産費をカバーする點迄生産を擴張すべしとの指示が得られると見るのである。

「自由競争が自動的に實現する所のものをば、共同經濟は意識的に遂行するのである」(The Hoag)と云つて居るのは、さういふ意味である。而して意識的に遂行するに當つての共同經濟の採るべき行動の原理とも稱すべきものを要約して、ハイマンは次の様に述べて居る。

「政府の店は、生産費を償ふだけの價格で賣出す。けれどもそれは、いはば試験的に、取引のいと口として提案して見るだけのこと、需要者が高いと考へれば下げるし、廉いと考へれば上げる。政府の方では少しもその云出し値段を固執しないで、全く需要者の支拂はうとする價格に追隨して行く」(p. 126)。

即ち、「商人の様な行動はとらぬ」(Fig) のであり、かくすることによつて、自由競争の存する場合に自動的に實現される所の價格、換言すれば平均生産費に落付く價格が實現される事となり、生産は需要に適應して、より強い需要にはより多くの生産が行はれることになり、どの需要も同じ高さに充されることになる、といふ風に考へたのである。

以上は、消費財に關してのみのことである。生産財はすべて社會全體の所有に屬し社會によつて運用せられる以上は、生産財の取引は、すべて一個の社會に所屬する獨占者同志の對立によつて行はれる。而して社會主義經濟計算の缺點は、何よりも生産財の價格形成の困難なる點に存すとされるのであるから、生産財の價格形成に就ての彼の説明に對しては、吾々は、その一言一句に充分の注意を拂はねばならぬ。

## (二) 生産財の價格形成方法

先づ彼が例説する所 (Fig 103) を、逐字的にたどつて見る。而して要旨は本項の最後に於て示すであらう。

「一つの経済社会に於て、ただ二種の商品のみ生産され消費されるものと假定し、而して各商品は共に三つの生産階段を通過するものと假定する。更に、全消費者の購買力は一二〇〇〇、それが兩商品に對して六〇〇〇づつ支出せられるものとし、なほ一商品は、單位生産費六〇づつ一〇〇個、他の商品は、單位生産費三〇づつで二〇〇個存在するものと假定する。更に兩商品、それぞれただ一個の原料體から (nur aus einem Rohstoffkern) なるものにて、その原料體が第一の生産階段に於て得られ、第二、第三の生産階段では單に加工を施されるに過ぎないものと假定する。價格が右三階段を通過することによつて次式の如く増加して行く。

$$A_1: 100.20 \quad = 2000 \quad A_2: 200.15 \quad = 3000$$

$$B_1: 100.50 + 200 = 000 \quad B_2: 200.5 + 3000 = 4000$$

$$C_1: 100.50 + 5000 = 6000 \quad C_2: 200.10 + 4000 = 6000$$


---


$$6000 \quad 6000$$

第一部門の商品一〇〇個を一個六〇の價格で、第二部門の商品二〇〇を一個三〇の價格で賣る場合に經濟が均衡を保つもの、即ち價格が恰も生産費をカバーするものとする。」

いふまでもなく右は、ハイマンの純粹な假定である。即ち自由競争の行はれる場合の均衡を想定してこれを出發點となさん

とするのである。要するに各商品の供給が、各々その生産費に於て消費者に賣ることによつて需要と均衡を保つ、といふことが重要なのであつて、一々の數は問題でないことは勿論である。以下の説明に注意。

「今、第一部門の財に對する需要が減退して、一〇〇個に對し、一個六〇ではなく五〇を支拂はんとするに至るものと假定しよう。このことは他の事情にして變化なしとすれば $C_1$ が其の生産物を最早やもとの價格六〇で賣つくすを得ず、賣つくすが爲には、價格を五〇迄引下げざるを得ないといふ事實によつて明となる。即ち $C_1$ の總収入は五〇〇〇となり、一〇〇〇の損失を蒙る。この損失は單位價格が再び生産費六〇を償ひうる點迄生産制限を行ふべき必要を指示するものである。」

この指示に従ひ次期の生産制限を行ふ譯であるが、この場合ハイマンは、生産の範圍如何が單位生産費に影響を與へないといふ極めて單純な假定の上に論を進めて居る。而してそれでも「問題の解決に必要な何物をも妨げぬであらう」といつて居る。妨げぬか妨げるかは別にして、兎に角、さういふ假定の上に立つといふ事を意識しつつ彼の説明のそのつづきを聞くことにしよう。

「相連續せる生産階段の規模の割合は技術的に決定されて居る。 $C_1$ が突然損失を蒙りし商品の完成に従事しつつある間に、 $A_1$ 、 $B_1$ は矢張りもとの規模で生産して居る。故に當分は、 $B_1$ は $A_1$ から一

〇〇の原料を、 $C_1$ は $B_1$ から一〇〇の半製品を受取らねばならぬ。労働と原料とが單純に棄てて仕舞ふ事の出来ない場合には、かうして、先づ $A_1$ から初めて生産の制限に着手しなければならぬ。

所で $C_1$ が $B_1$ から受取る半製品一〇〇は最早もとの生産期の一〇〇個と同一の價值を持たぬ。その間に完成品の價值が減少して居るが故である。完成品に於ける損失は半製品に傳播する。而も損失は總生産費の各部分の上に、總生産費に對するそれぞれの割合に應じて分配される。例へば完成品に對して、各生産階段に於てその最後の價值の三分の一が増加されたのであるから、 $C_1$ は全損失の三分の一を引受けて残り三分の二はその前階段に立つ $B_1$ に與へる。 $B_1$ は損失の残りの半分だけを引受け、他の半分を $A$ に廻すのである。即ち次の結果となる。

$$C_1 : (2000 - 333) + (1000 - 667) = 1667$$

$$B_1 : (2000 - 333) + (2000 - 333) = 3333$$

$$A_1 : (2000 - 333) = 1667$$

$$\frac{6000 - 1000}{\quad}$$

」

ハイマンは一〇〇〇の損失を生ずるといふけれども、實はその説明の如くんば三〇〇〇の損失である。なぜならば、現に $A_1$ の手にある一〇〇單位つつ合計二〇〇についても同様の損失を免れず、生産費を償ひうるのは、新に $A_1$ で生産制限をし

た生産が完成して後の事であるからだ。ハイマンはこの事について何もいつてゐない。又「生産費をカバーするため如何なる程度に生産を制限すべきか」については、ただ「市場の経験、即ち需要曲線の形態によることである」と述べてゐるにすぎない。次は第一部門に於ける右の變化が第二部門に及ぼす影響である。

「さて第一部門の商品がもとの市場範圍に於て一〇〇〇を失つたとすれば、第二部門の商品は、それだけ購買力を増加したに違ひない。従つて其の價格は三〇から三五にあげられるに違ひない。需要が増大せるにストックはもとのままであるから、需要者間の競争が強化して價格を引上げるのである。生ずる利潤一〇〇〇は先づ以て $I_2$ に入り、更に遡及して、關係者に分配される、即ち次の如くなる。

$$C_2 : (2000 + 333) + (4000 + 667) = 7000$$

$$B_2 : (1000 + 167) + (3000 + 500) = 4667$$

$$A_2 : (3000 + 500) = 3500$$

---


$$6000 + 1000$$

以上は、供給側ではなく需要側に變化の生ずる場合に於ける消費財の價格は、恰度供給された量の商品が、恰も需要者全體のその商品に支拂を用意せる購買力で買つてくれる高さ、ハイマンの表

式ではその商品に對する購買力總量を供給量で割つた高さに決せられる。生産財の價格は機械的にその生産財でつくられた最後の消費財の價格の動きに應じて、即時に、上げ下げされるといふのである。生産財の價格構成についての彼の右の見解は、上に紹介せる如き表式的説明の外に、彼の著書の至る所で明にされて居る。用語は必らずしも同一ではないが、その意味は要するに右の如く「消費財の價格の動きに順應して動かす」といふ一言であらはし得ると思ふ。念の爲めに彼自身のこの點についての説明の二三を引用して置かう。

(a) 其の著 „Mehrwert und Gemeinwirtschaft“ Dritter Abschnitt. II. Teil 169.

「消費財の市場に於て眞の競争の支配する限り、それによつて決定せられる價格は、……消費財から直ちにすべての生産階段を通して傳播する (pflanzen sich von dort ohne weiteres durch alle Erzeugungsstufen hindurch fort)。此の場合に二つの獨占者の間の價格協定に際して、獨占者の Spielraum の危険は存在しない。なぜならば、かかる危険は二つの獨占者が其の販賣を意識的に制限して、生ずる利潤を勝手に分配するといふ事を前提とするものであるが、斯くの如き危険は、嚴格なる規定の遵守によつて驅逐せられ、同時に各勞働行程に於ける經濟性の計算に對する基礎が得られなくてはならぬ」(S. 180)。

(b) 一九三〇年に公にせられし „Kapitalismus und Sozialismus“ より。

「所得の取得者（消費者—山本）は、其の欲する財を市場に買ひ、その購買力が諸種の財の部分市場に配分されて、偶々そこにあらはれた商品供給と對立する割合によつて、完成財の價格を決定する。而して、この完成財の價值との一致に於て、生産要素の重要度を測定することを得せしめる」(p. 47)。

「これ迄と同様に（資本主義の競争時代と同様にといふ意味——山本）一つの彈力帶が生産要素の價值をば、消費者によつて定められる所の完成財の價值に結付けて居る。これ迄と同様に、吾々は生産の各要素の財の生産に對する重要さは、完成財の與へられた價格に於て計算することが出来る。従つて亦これ迄と同様に、個々の生産要素をばその場合より高く評價される所へ使用することが出来るのだ」(p. 48)。

私は、ハイマンの例説のうち、需要に變化の起る場合の説明をとつて、彼の價格構成論の骨子をうかがつたのであるが、然しハイマンは、其の他の種々なる場合、例へば技術的改善の結果生産費を節約しうるに至れる場合をも想定して居る。骨子に於て變りがないが參考のためにその大體を附記して置かう。完成品生産者  $C_2$  の下で、生産費半額を節約しうるに到る場合、即ち六〇〇〇の總生産費が五〇〇〇に下り、單位生産費二・五となる場合、 $C_2$  はこの新生産費二・五といふ値段を試験的に市場に出して見る。然る場合に起る需要の變化に關して二つの極端な場合が考へられる。第一の場合には、値下げに

も不拘、需要の増さぬ場合、即ち需要曲線が從來の限界點の下に垂直線を描く場合である。斯様な場合にはこれ迄の生産規模がそのまま維持せられ、而して一方購買力の節約が行はれると同時に他方勞働力の節約が行はれる。第二の場合には、價格の下落に伴つて需要が増加する場合である。例へば二五に單價を下げると、品物は二〇〇より無いのに不拘、二四〇の需要があらはれるとせよ。斯様な場合には、新しい生産費から見ると價格を三〇迄即ちもとの値段迄引上げられる。而して一〇〇〇だけの利潤を生じ、更に既述の如き結果が生ずる。その際、餘力となつた購買力並に勞働力が兩種の消費財の間に配分される事は勿論である。右は完成品生産者 $C_2$ の許で生産費の節約が起る場合であるが、次に最初の原料生産者 $A_2$ の所で、生産費の減少を見る場合はどうするのか。原料生産者は、原料の生産費の減少によつて、規則を忠實に守つて、原料の受取人 $B_2$ に對して、これ迄より廉い價格を計算しなければならぬ。例へば $A_2$ は、二〇〇個をば、從來の單價一五の代りに一〇で賣り、 $B_2$ は更にそれを一五で賣り、かくして $C_2$ はそれを消費者に對して、從來の三〇の代りに二五で賣つて見る。この時、需要の形態に應じて既述せし二つの場合の何れかが起る。反對に亦、原料生産者の所で突然に生産費の増加を來す場合はどうか。その場合は、 $C_2$ は價格を例へば三五に引上げねばならぬであらう。而して生産制限を必要とするかどうか。又需要が減少せずして需要者が制限を他の商品の上に於て望むかどうかに注意する。最後に、色々な變化が同時に交錯して發生する場合、例へば原料生産者の所で五だけ値下りするのに、それとは無關係に、同時に需要が二〇〇個に對して單價を三〇から三五に高めねばならぬ程に増大することが起りうる。斯様な場合には、生産量はなほ二〇〇であるから、生産費の値下りにも不拘、今や完成財の價格は三五に値上げされる。故に總利潤は二〇〇〇に上り、それに適應して生産の増加を惹起する。この利潤のうち一〇〇〇は他の商品に於て需要の減少によつて失はれしものに當り、残り一〇〇〇だけが、 $A_2$ に於ける技術的進歩に基くものでそれだけ生活内容の増加を示すものである。かくして要するに供給側における變化は、直ちに、生産費變化に適應して、完成財の價格の上に表現せられねばならぬ。生産費の變化が如何なる階段に於て發生せしかに論な

く、生産費の變化は、全つ全階段を通じて最後の賣手に轉嫁されねばならぬ。最後の賣手が、その消費者に及ぼす影響を診察する義務を負ふからである。この最後の賣手の許に於て初めて利潤及び損失が公にされる。而してそれから、或は生産部門に於ける個々の階段へ遡及して轉嫁されて行くか、或は發生せし生産部門からは全く消失して消費市場から、他の生産部門へ這入つて行き、そこでそれに應じて處置されるかである。

以上かなり長く述べ來つたハイマンの見解を重ねて概括すると次の如くなる。

(1) 各消費者はその所得の範圍内で自由に消費財を選択購入する。買競争の結果消費財の価格は、偶々市場に供給されただけが買とられる高さに定まる。そのために供給者の側では、生産費を以て賣出すも、毫もその値段を固執せず、全然消費者の競争の決する所に追隨する。

(2) 消費財の動きに應じて、直ちに機械的にその生産財の價格を動かして行く。各生産者は法規に遵ひ、嚴格にそれを遂行する。

(3) 右の如くなすことによつて、消費財についても生産財についても價格が成立するが、その價格は時に生産費を超えて利潤を生ずることもあり、時に生産費に及ばずして損失を蒙ることもある。この利潤は生産擴張の指標となり、損失は生産制限の指標となる。即ち右の如くにして成立する財の價格をば、其の生産費と比較してあらはれる利潤と損失とは、いはゆる資本主義の生

産と同様に經濟生産の指標たる役目を果すのである。

(4) かくして、いはゆる資本主義社會で競争の結果自動的に實現されるのと同じ現象が、社會主義社會で意識的に再現される。即ち貨幣計算、價格制度の優秀なる機能をば、私的資本家の不勞所得なき社會主義社會に於て維持する事が出来る。

といふ譯である。

## 二

先づハイマンが、市場の機能、價格制度の價値を充分に認識せる科學的態度に對しては、私はミーズスやゲルハルトと共に、滿腔の敬意を表明しなければならぬ。而して「市場の破壊は無への飛躍だ」との見解に對しても、無を無秩序と解して同感せざるを得ないのである。然しながら、社會主義の社會に於て市場の機能を發揮せしめ、充分に貨幣計算を遂行しうるとなす彼の見解に對しては、以下述ぶる若干の理由に基いて、遺憾ながら、これを一個の幻影的解決と考へざるを得ないのである。

第一點、彼のシステムに於て、果して消費財の價格の動きを基準として「生産財の價格」——「生

産財に對する生産要素の重要さ——を確定し得るかといふ點を吟味して見よう。

すでに私が紹介せし通り、ハイマンがその價格構成の説明に當つて設けた假定は次の如きものであつた。批判の便宜上、重ねてその要點を引用する。

「一の經濟社會に於て、ただ二種の商品のみ生産され消費されるものと假定し、而して各商品は共に三つの生産階段を通過するものと假定する。……なほ一商品は單位生産費六〇づつ一〇〇個、他の商品は單位生産費三〇づつ二〇〇個存在するものと假定する。更に兩商品、それぞれ、ただ一個の原料體から成るものにて、その原料體が第一の生産段階に於て得られ、第二、第三の生産階段では單に加工を施されるに過ぎないものと假定する……。」

我々は、彼の「假定」が如何に單純なるかに注意を拂はねばならぬ。たとへ説明の便宜を思ふてのこととはいへ、かくの如き單純なる生産は、原始時代に於ても實際には有得べからざる所であらう。單位生産費を既知とする點は暫く置いて、ただ二種の商品、三つの生産階段、ただ一個の原料體といふが如き假定に比すれば、原始の孤立經濟を營める農民と雖も、遙に複雑な生産を營んだことであらう。私はハイマンがかくの如き單純な假定を選べるところに、無意識のうちに問題が回避されるものと考へる。周知の如く、屢々行はれたロビンソン經濟の假定が許される場合と雖も、そ

はただ一面の理論の發見乃至説明の限度内の事であつて、現實世界の縮圖としてではない。ハイマンは、現實の國民經濟社會化の問題に於て、即ち現實資本主義に續く社會主義國家の機構を説くにあたつて、斯様な單純な前提の上に研究を進めたといふ事は、たとへ彼自身意識してゐないにしろ、必然に問題の本質を逸する過誤に陥るものである。なんととなれば、彼以前に、社會主義社會の經濟計算を不可能なりとの問題を提起せる人々は、今日の如き複雑なる生産過程を對象とせるものであつて、ハイマンの前提せるが如き簡單な關係の下に於ては素より問題は起らぬといふ事を明言して居るからである。試みに、社會主義經濟計算の不可能を説くミーゼスの言葉を引用しよう。彼は、最初から次の様にいつて出發して居るのである。

「家長が全經濟領域を見通し得る如き、狭き封鎖的家族經濟に於ては、生産活動の變化の意義をば、彼の精神に與へる支柱なくとも、多少共に、嚴格に評價することが出来る。ここでは、生産行程は資本の比較的少い使用の下に完結する。資本の生産迂曲も少い。生産せられるものは享樂財からあまり離れない高次財にすぎない。分業はまだまだ初歩のもので、同一の労働者が、すべての生産行程の労働を初めから享樂財の完成迄やり遂げる。これ等すべては、發展せる社會的生産に於ては、全然事情を異にする。貨幣計算（生産者側にも競争のある貨幣計算の意味——山本）なき

經濟の可能性の論據を昔の簡單な生産の經濟に求めてもそれは役に立たぬ。なぜなら、封鎖的家族經濟では、人々は生産行程の初めからその完成迄の全道程を見通すことが出来、ある方法と他の方法とは何れがよりよく享樂財を與ふるかを、常に判断し得るからである。比較にならぬ程發展した今日の經濟關係の下に於ては、斯様な事は最早可能ではなす……」(Mises, Arch. f. Sw. u. Sp. 47. 1.)。

又社會主義社會の經濟的生産の可能性をば、小農的自然經濟を援用して主張する者に對し、ミーゼハと同様の立場に立つブルツクス教授は次の様に批判して居る (傍點——山本)。

「わが社會主義者達が、公然安んじて行ふ所のこの比較は、二つの經濟組織が其の範圍に於ても亦相近いものであるならば、慥に社會主義經濟の統制問題の解決に對して貢獻するといへるであらう。農民經濟は一人の健全なる農民の頭で見通され且つ掌理され得るものである。斯くの如き直觀は、ただに大ロシアの社會主義經濟といはず、一小國のそれを見通すにも、十分だといへるであらうか。斯かる場合こそ正しく量的差異が質的差異となるのである」(Brutzkus, Lehren des Marxismus, S. 37—)。

思ふに、ある一享樂財はある一の生産財のみよりなり、他の一享樂財は、ある他の一生産財のみ

よりなり、而もそれぞれの生産行程が短いといふ場合に於ては、我々はハイマンのいふ様に、享樂財（完成財）の價值價格の變動に適應して、遡つてその生産財の價值價格を決定し行くこと、即ち所謂歸屬問題の解決が可能であらうことは殆んど疑を容れない。けれども問題は生産の迂曲が極めて長く、且つ無數の生産財が一個の完成財に結合され、一個の生産財が無數の完成財に入込むといふ今日の極めて錯雜な網の目の如き生産過程の下に於ての事である。かりに彼のいふが如く最後の完成財價格の客觀的成立を承認すると、それから直ちに遡及してその生産財の價值價格を、それに適應して決定して行くといふが如きは到底考へ得べからざる所である。

ハイマンは、生産財の價值は、自由競争生産の今日に於ても最後の完成財の價格によつて決せられるものだといふ。素より、今日消費財生産のための生産要素の重要さが、根本的には消費財の價格状態に照應して決せられるといふ理論に對して何人も疑ふものはないであらう。ただこの重要さの決定が價格形成の意味に於て如何にして可能となるかが、ハイマンの説明に於て全く不明なのである。彼の所謂消費財の價值と生産財の價值とを結ぶ「彈力帶」をば如何にして發見するのであるか。如何にして、消費財價格の「反映」「遡及」「歸屬」をば、プラクチカルに實現しようとするのか。これ等の核心點に於ては、何等の指示も與へられて居らぬのであり、結局最初に述べた通り、

「一の幻影的解決」に止まると結論するの外はないのである。

所謂歸屬理論をば、社會主義の實際の價格構成に採用せんとする企に對して、ハルム教授は次の如く批評して居る。

「生産物の價值と生産要素の價值との關係を主張し、生産物の價值に於ける變化がその生産要素の重要性に變化を惹起しなければならぬ、と説く限りに於ては、吾人は毫も反對すべき理由をもたぬ。けれどもその限りに於ては、歸屬理論……は全く抽象的に止るものであり、間違ひではないが、具體的に驗證すること (Verifizierung) の不可能なものである」 (Halm, Die Konkurrenz, S. 59)。

第二點、ハイマンにあつては、消費資料の價格が資本主義競争市場に於けると同様に生産費に於て決定され得るものと豫想して居る。けれども果して其れは可能であらうか。資本主義市場に於ては、消費市場の需要者側に競争があるのみならず、供給者側にも亦競争がある。然るにハイマンの社會主義社會に於ては、需要者側には、競争が豫想されて居るけれども、供給者側には競争がないことが豫想されて居る。而して供給者側に競争のない場合に、價格が一義的に定まらぬことは彼自身も認める通りである。けれども果してそれを一義的に定むることが出来るであらうか。ある消費財の一定量を一つの市場ですべての消費者を一度にあつめてセリ賣をするならば、一定の價格が成立するであらう。但し最高需要價格を附した一人にすべてが買ひとられるであらう。而してハイマ

ンは暗に左様な方法を豫想して居る様に思はれるふしもある。けれども一國の中央部に於て生産せる財貨を全國の消費者に向つてセリ賣をするといふ様なことは考へ得べからざることであらう。然らば或る財を一定の價格で賣出して見て、品物が残りさうなら、段々と値下げをし、餘りさうなら段々と値上げをするといふことが考へられるかも知れない。而してハイマンは左様に豫想して居ると考へられぬでもない。けれども、私の考によれば、いやしくも國家の供給するものが、早く出掛けた者に高く賣りつけられ、遅く出掛けた者にやすく賣りつけられたり、またその逆であつたりするといふ様なことは、第一物議の種となるであらう。のみならず、斯様なことをすれば、生産物の過不足即ち物價の高低が事實上需要の強弱を表現しないことになつて、生産はその擴張又は制限の指標を失ふに至るであらうと思ふ。けだし過剰と見て値下げを、不足と見て値上げを行ふとすれば、消費者の注文は値下げされた過剰品に殺到して却つて品物の不足といふ現象を來し、値上げされた不足品に寄附かなくて却つて賣れ残るといふ逆現象をさへ見るであらうからである。

詳説すればかかる機構の下に於ては、過剰品に對しては次の生産に於て必ず生産制限を行ふことが約束されて居り、逆に不足品に對しては次の生産に於て生産擴張が豫め約束されて居るからである。換言すれば過剰品(値下げされた品)は次の生産期に値上げされることが、不足品(値上げされた品)

は次の生産期に値下げされることが約束されて居るのである。更に換言すれば値上げそのことが値下げの豫告であり、また逆に値下げそのことが値上げの豫告となる。今日の社會に於ては、値上げが必らずしも次期の値下りを約束せず、値下りが必らずしも次期の値上りを約束しないために、消費者は原則としてさうした投機的な購買をしないけれども、もしも値上りが値下りの前提、値下りが値上りの前提、となることになつては購買は投機的となり、現實具體化される購買要求の多少が國民の生活要求を眞實に反映しないといふことになるであらう。

かくしてかかる社會主義の中央部は、眞の需要の動きを知ることが出來ず、従つて生産増減の唯一の指標を失ふことにならざるを得ないこととなり、國民の要求に適應せる生産、即ち資源の經濟的配分は不可能とならざるを得ない。かくてハイマンの如き構成に於て消費財の價格を時の過不足によつて動かすことは、秩序を混亂に化するものと見るべきであらう。ソ聯邦に於ても、また資本主義下の專賣品に於ても、生産費に變化なき限り、需要に變化があらうとも、價格はこれを一定して、その一定せる價格に於ての過不足に従つて生産量を適應せしむるといふ事實は、恐らく右の如き事情の必然の結果と考へられる。然らば供給者が國家の獨占に歸する場合は、需要側に競争があつても、ハイマンの云ふ様に價格が需要の動きによつて定められるといふ事は事實不可能であらう。

第一點の批判に於て明にされた様に、たとへ生産物の價格が成立したところで、それから歸屬理論の適用によつて個々の生産財の價格を計算することは出来ないであらう。況んや第二點の批判に於て示された様に消費資料の需要に適應した價格が成立せず、また成立せしめ得ないといふことになれば、ハイマンの約束する様に、費用と生産物價格との比較による利潤と損失とを指標として生産を遂行するといふことは實現し得ないことが明であらう。

なほハイマンの機構に於ては、生産の指標は利潤と損失とであり、利潤と損失とは生産費と生産物の價格との比較によつて計算されるのであるから、生産費なるものが重大な役割を果すことになつてゐる。けれどもその生産費が如何にして算出されるかといふ點に就ては何事をも語らず、あたかも自明の如くにあらはれて来る。恐らく生産費は生産手段の價格の合計として算出するといふのであらう。しかしさうだとすれば、生産手段の價值を知ることが出来ないといふ以上費用の算出は出来ないといふことになることは明であるが、今かりにこの點を別にしても、生産財の價值が生産物の價值とは獨立に成立するのではなしに、生産物の價值から算出されるといふのであれば、費用は常に生産物の價格と並行的に動くことになつて、費用と生産價格との比較は意味を失ふことになりはしないであらうか。

なほ普遍的に競争の存しない而も動的な社會に於て、「費用」なるものは、行動の規範になり得る程明瞭に把握し得ないものだといふ事情については、後章(第二六五頁)述べるであらう。

### 第三節 テイラー、ランゲの傳承價格・試行錯誤法

#### の提唱と其の批判

ハイマンと同様の考方が、最近アメリカの學界で再生して居るといふことは注意すべきことである。それは先づ最初に、當時ミシガン大學の經濟學教授であつた故テイラー氏によつて發表された。すなはち、一九二八年十二月アメリカ經濟協會第四十一回例會の席上で「社會主義國家に於ける生産の指標」と題して報告され、翌二九年三月、同じ題目で『アメリカ經濟評論誌』上に掲載されたのである。その要旨は次の如くである。

「決定的な問題は、生産の本源的要素の比較重要度を決定することである。テイラーの見解によれば、各本源的諸要素の比較重要度は、生産行程の全複合から生れるところの無數の財貨の重要度から出るものだし、その重要度から決定される(is derived from and determined by the importances

of the innumerable commodities)。問題は、どうして具體的に各要素の比較重要度が決定されるかといふことである。テイラーの答へは、一つの假りの評價(a provisional valuation)が、貨幣の名目で各要素に決定される。社會主義産業のマネージャー達は彼等の仕事を遂行するに當つて、この假りの評價を絶對的に正確なものであるかの如く考へてやつて行く。そうすれば、もしも當局が何れかの個々の要素にあまりに高く、またはあまりに低く評價しすぎたとすれば、そのことは必らずあらはれて來るであらう。もし評價が高さに過ぎた場合は、當局をして當該要素の使用を不當に節約せしむるに至るから、生産期の最後に於て、要素が餘つてくるであらう(a physical surplus would show)。もしも評價が低さに過ぎると、當局をしてその要素をあまりに贅澤に使用せしむることになるから、不足があらはれてくるであらう。過剰と不足、兩者共に一要素のあやまれる評價から起るであらう。試行を繼續することによつて、各要素の比較重要度を示す正しい評價が得られる。換言すれば、各要素に對する計算價格は試行錯誤の方法によつて確められ得るのである」

(Lippincott, On the Economic Theory of Socialism p. 14—15)。

而してテイラーは、最初は、資本主義市場で歴史的に與へられた評價を以て出發するといふのであつて、試行錯誤といふ言葉が加はつて居るものの、其の考へ方はハイマンと同じ軌道を進んで居

ることは明であらう。テイラー自身が、「生産過程に於ける各本源的要素の比較重要度を確める問題」をば「いはゆる歸屬の問題を解決すること」と云つて居る。さきによつても知られる如く、ハイマンと等しく、生産要素の價値は生産物の價値から、出て來るのであるから、前者は後者によつて歸屬的に決定され得ると見るのである。而して上記の如くハイマンと同様に先づ資本主義市場から傳承せる評價を以て出發し、爾後は消費者の需要の變化に應じて、生産要素に過不足を生ずるから、過剰になれば値下げをし、不足なれば値上げをし、過不足のなくなるまで試行錯誤を繼續すれば、資本主義經濟市場に於けると同様の結果が競争の無き社會主義經濟に於ても、中央部の手で再現され得るとなすのである。而して「販賣價格をば常に生産費に一致せしめる様に生産を調節する」といふことも亦ハイマンと同じ構想である。ただ異るといへば、ハイマンが消費資料への需要や生産財に於ける事情の變化に應じて、その變化を生産財の價格の決定に反映せしむる方法を數字を以てこまごまと例説するに對して、テイラーは單に「試行錯誤」といふ一言で片付けて居る點であるが、それは兩者の考へ方の相違ではなくて、テイラーがハイマン程細かく具體的方法を追究しなかつたといふだけのことである。かくしてハイマンの見解に對する批判は殆んどそのままに、テイラーの見解への批判として妥當すると考へる。すなはち、結論をいへば試行錯誤法によりて歸屬的に

生産財の價格を計算するといふことは、小さな而して生産行程の簡単な自給自足の封鎖的家族經濟に於てのみ實行し得るものであらう。而して他の所で觸れる如く、今日の如き廣汎複雜の經濟での歸屬問題の解決は、所詮バローネの明にせし如き微分方程式に訴へるの外なく、而もその實行は明に人力を遙に越えるものと考へるのである。

テイラーの論文は、教授の學的名聲の高かりしと、アメリカのこの方面の經濟理論の水準の低かつたこととの兩方の理由から、可成大きな影響を學界に及ぼして居る。例へば一九三一年にハーバード大學から公にされたローバー氏の著書『社會主義國家に於ける價格決定の問題』の如きはテイラーの見解を根據としての發展であり、一九三八年ミネソタ大學の助教教授リップピコット氏によりて公にされたラング（カリフォルニア大學經濟學講師）の論文『社會主義の經濟理論に就て』の内容、（編輯者リップピコットはそれに同意してゐる）は、全くテイラーの前記の論文の見解をそのまま認して骨子となし、その上に若干の敷衍をなせるものにすぎない。私はローバーの著書に就ては、別に詳細な紹介と批判とを加へて置いたから、ここには繰返さない（附録第一「社會主義國家に於ける價格」参照）。尤もラングリップピコットの見解に就ては、それがアメリカの學界に對する重大な影響が豫想されるし、從つて亦海をこえて我國の學界に對しても若干の影響をもつことが思はれるから、獨立に徹底

した批判を加へて置くことに實際の意義なしと考へないけれども、すでにハイマンを批判し、ローバーを批判した上は、同じ書物で同じ批判を繰返すことは如何かと考へて省略する。而してただランダの見解がテイラー、ローバー（従つてハイマンの見解）と構想を等しくすること、従つて兩者への批判がそのままにランダに妥當することを明にするために、リッピンコットに従つて其の主張の要旨を引用して置くことに止めよう。

「この論文（ランダの論文）の目的とする所は、競争市場に於て資源の割當が試行錯誤によつて行はれる方法を明にし、而して同様の試行錯誤法が一の社會主義經濟に於て可能ではないかどうかを發見することである」(p. 55)。

これはランダ自らの言葉であるが、以下はリッピンコット助教授が序文に於て要約せるランダの見解である。まことに手際よく要領をつくして居るのでそれを借りることにする。

「ランダはいふ、『正しい』計算價格を發見するためには數學も要らなければ、需給函數の知識も必要ではない。正しい計算價格は、ただ、需要される量と供給される量とを見守つて、需要が供給を越える貨物並に給付の價格を引上げ、反對の場合に引下げ、試行錯誤によつて、需要供給が均衡するまでそれをつづけることによつて簡単に發見されるのである。この『正しい』價格に

到達することが、少くとも近似的にそれに到達することが、生産者（供給）側に於て資源の誤用と浪費がなく、消費者（需要）側に於て欲望の誤れる分配の起らぬために重要であるといふことは注意されねばならぬ。

さきに述べた如く、ランゲは一の社會主義經濟は計算價格をば、本質的には資本主義下の競争市場で價格が決定されるのと同じ方法で決定することを示してゐる。彼は、社會主義の經濟は資本主義經濟の如くに、試行錯誤法を用ひるであらうと説明するのみならず、その方法も亦根本的に資本主義下で用ひられるのと同じ條件の下に用ふるであらうといふことを指摘して居る。彼はいふ。資本主義下に於て試行錯誤法は何より先づ彼が價格の媒介變數機能（The parametric function of prices）と呼ぶものの上に基礎をおいてゐる。即ち個々のビジネスマンが直面する諸價格は市場に於けるすべての個人の決定の結果ではあるけれども、各個人は現實の市場價格を、それに自らを調和せしむべき與へられたるデータと考へるといふ事實の上に基礎を置いて居る。各個のビジネスマンは彼が直面し、彼が統制し得ないこの市場状況を最善に利用しようとするのである。

ランゲは云ふ。一つの價格機構は……媒介變數的價格機能が維持されるならば、社會主義經濟に於ても得られ得る。社會主義經濟に於ては媒介變數的價格機能は、一の計算規則として強制せ

られるであらう。而してすべての個々の經營のマネージャーのすべての決定並に計算は、價格が決定とは獨立して居るかの如くになされるであらう。計算の目的のために、經營指導者達は、價格を固定的のものとして取扱ふであらう。恰も價格が競争組織下のビジネスメンによつて取扱はれるのと全く同様に。

吾々はさきに、競争市場のはたらきは、ビジネスメンが生産諸要素の結合に於て費用を最小ならしめる傾向をもつこと、並に販賣價格をして生産物の價格をカバーせしむる傾向をもつことだといふことを見た。この二つのことは社會主義經濟に於て如何にして達成されるであらうか？ ランゲの答へはこうである。その二つのことは活動規則として、すなはち經營指導者達が生産を遂行する必要條件として命ぜられるのだ、と。

斯くして社會主義經濟に於ける價格決定の過程は競争經濟に於けるそれと全く似て居る。中央計劃部は市場の諸機能を果す。中央計劃部が、同じ本質的條件をつくる。すなはち計算に於ける價格の媒介變數的使用、ならびに、生産諸要素の組合せのため、一經營の生産高を選ぶため、及び一産業の生産高を決定するために費用の最小化と生産物の限界費用と販賣價格との同等といふ二つの規則とを造る。中央計劃部は社會主義經濟をして、生産諸要素の比較重要度の確定を可能

ならしめ、而して資源の合理的割當をなすことを可能ならしめる。

中央計劃部は一番最初に最初の計算價格を全然アテ推量で決定するであらうかとの疑問が出るかも知れないが、答は否である。中央計劃部は吾々のよく知つてゐる歴史的に與へられた諸價格を以て初めるであらう。中央計劃部はビジネスマンよりも非常に多くのその知識をもたないにしても、同じ位の報告をもつであらう。

歴史的に與へられた價格の調整は不斷に行はれるであらう。従つて、ややもすれば想像される如く、全然初めから新しい價格システムをつくり上げるといふ必要はないであらう」(p. 16-18)。<sup>\*</sup>

\* なほランゲの見解については『經濟學論集』昭和十四年一月號に安井氏の詳細な紹介が出て居る。

## 第六章 合理的經濟計算を不可能とする見解

——ルードウツヒ・フォン・ミーゼスの所説——

前章まで紹介批判せし、實物計算論、勞働價值計算論並に貨幣計算論は、主張する人によつて立論の根據に相當の差異ありとはいへ、何れも社會主義社會の經濟計算の可能性を發見せんとする努力の結果であつた。然るに本章に述ぶる所のは、これを以て不可能となす見解である。而して私がかかる見解を代表するものとして、ウキーン大學のルードウツヒ・フォン・ミーゼス教授の所説を選ぶ。ミーゼス教授こそ、第二章で述べて置いた様に、社會主義に經濟計算といふ問題の巨石を投じた最初の人であり、恐らくは永恆に不滅なる寄與をなせるものと云はねばならぬであらう。彼の以前に於て彼の如く純粹な形で問題を提供したものはなかつたし、彼以後の理論や實踐は、彼の所論の補足にあらざれば、彼の見解の正しさを是認せる上での、何等かの迷路を見出さんとする努力と評して誤がないであらう。ミーゼス以後に於て、最も強く且つ執拗に、社會主義の經濟計算

の不可能論を主張しつつあるものは、ヴュルツブルグ大學のハルム教授である。年齒なほ四十を幾程を越えざるに獨逸の學界に不拔の地位を築くに至つた所以は、其の社會主義經濟計算不可能論にありといふも過言ではなく、彼の論著は何れをとるも、多少ともこの問題に觸れないといふことは殆んどない。ハルムは、主として生産手段の私有を排除せる場合に於ける利子價格の成立の不可能といふ角度から、社會主義經濟の經濟計算の不可能なること、従つて其の「經濟的に」成立すべからざる所以を論證するのである。

ただハルムの見解は、ミーゼス教授の見解の上に立脚せるものであつて、いはば其の補足擴充に止まるものであるから、ここには其の紹介を略して、ミーゼスのそれを能ふ限り詳述することにしよう。

(註) ハルムの見解を理解するために最も適當なものは次の三者である。

- (1) Hayek, *Collectivist Economic Planning*, 1935. の中に含まれる、  
Hahn, *Further Considerations on the Possibility of Adequate Calculation in a Socialist Community*.
- (2) Hahn, *Ist der Sozialismus wirtschaftlich möglich?* 1929.
- (3) Hahn, *Die Konkurrenz, Untersuchungen über die Ordnungsprinzipien und Entwicklungstendenzen der kapitalistischen Verkehrswirtschaft*, 1929.

ミーズスの見解は、先づ一九二〇年、『社會科學及び社會政策誌』上に公にされ、一九二二年、大著『共同經濟』の初版中に繰返され、而して翌二三年、再び『社會科學及び社會政策誌』に於て諸家の批評への答へとして披瀝せられることとなつた。一九三二年公にされた『共同經濟』第二版に於ける増補に於ては、ただ其の所論を反覆せるに止まる。かくてミーズスが現に抱懷せる見解そのものは、すでに、最初の論文に於て完全につくされて居ると見てよい。この意味に於て、私は彼れの最初の論文を土臺として、他の論文を参照しつつ、其の見解の要旨を明にしたいと思ふ。

因にいふ。ミーズスの右の第一論文は、全文三六頁、序文と結語とを除いてなほ五節よりなる。即ち

第一節 社會主義的共同經濟に於ける消費財の分配

第二節 經濟計算の本質

第三節 社會主義共同經濟に於ける經濟計算

第四節 共同經濟的經營に於ける責任と創造

第五節 最近の社會主義學說と經濟計算の問題

題目が『社會主義的共同經濟に於ける經濟計算』といふのであり、従つて全文が經濟計算問題に何程かの關聯を有すること

第六章 合理的經濟計算を不可能とする見解

勿論であるが、併し特に彼自身の見解の本質を示すものは、第二節及び第三節である。第一節は、批判せんとする社會主義の構成を確定せるものと見るべきであり、第四節は、本問題と直接の關係を持たぬ。序文はただ本問題を研究することの重要な所以を強調せるにすぎない。

さてミーゼスの見解を一言にして盡せば、「客觀的に成立する市場價格なくしては、經濟計算はその基礎を失ふが故に合理的に遂行され得ない。而して社會主義（又は社會主義共同經濟）に於ては、生産財の市場價格が客觀的に成立せず、よつて合理的經濟計算の遂行は不可能である」といふ事に歸する。けれども、ミーゼスの見解を誤解なく把握するためには、先づ以てその所謂社會主義又は共同經濟の意味を明にして置かなければならぬ。今日の如く社會主義なる言葉が區々に用ひられつつある時代に於ては、社會主義に對する如何なる論議も、先づその意味を確定してかかることを必須の條件とするであらう。彼が社會主義の本質をなすものとして、指示する所は次の如くである。

「社會主義の經濟に於ては、あらゆる生産手段が共同體の所有に屬する。共同體のみが生産手段を處分することが出來、共同體のみが生産手段の生産への使用方法を決定することが出來る」

(Archiv f. Sw. u. Sp. 47 I. S. 87)。

さふ所の「共同體」(Gemeinwesen)は、普通の用語に従つて「社會」又は「國家」と呼んで差支な

い。即ちミーゼスは、生産手段の所有が社會又は國家にのみ所屬し、従つて其の處分が社會又は國家にのみ所屬するといふ點に社會主義の本質を求めたのである。

素より、共同體は一定の機關の手を通してのみ、生産手段の處分權を行使し得るものである。而してかかる機關が如何様に構成せられるか、又社會の總意思が機關によつて、又は機關に於て、如何様にして表現せられるかといふ様な點は、彼の社會主義にとつては毫も重要なことではない。例へば機關を選擧するといふことも考へ得られようし、又機關が多數よりなる場合には、機關の多數決に従ふといふ風なことも考へ得られよう。だがそれ等のことはミーゼスの社會主義にとつてはどちらでもよいことなのであつて、要は生産手段が共同體によつてのみ處分され得るといふ點に存する。彼が「生産が社會的中央機關の單一なる意思によつて決せられる點を除いては、他の何處にも、社會主義を資本主義から嚴に分つものは存在しなす」(Arch. f. Sw. u. Sp. 51 II. S. 493)と云つて居るのもさういふ意味に外ならぬ。

社會主義が右の如く解せられる結果、生産手段の處分權が共同體にのみ所屬せずして、各生産團體がその生産手段を自由に處分し得るが如き社會は、「サンディカリズム」と呼ばうが「ギルド社會主義」と呼ばうが、それはミーゼスの意味する社會主義ではない。生産手段の名義上の所有權

だけが共同體に所屬し、その實際上の運用處分が、個人又は生産團體に屬するといふが如き組織が、彼のいふ社會主義にあらざることは勿論のことである。

更にミーゼスは、同じ生産手段の所有權が社會に屬し、その處分權が個々の生産團體に屬するといふが如き組織を以て、實在し得べからざる一個の幻想と見る。蓋し彼は、所有權とは處分權のことであり、處分權なき所有權は存在し得ないと考へるからである。「處分權を有するものは即ち所有者なのである。處分權が社會に屬して居れば社會主義であり、それが個々の生産團體に屬して居れば、サンディカリズムである。而して二者その一のみがあり得るので兩者の間はあり得ない」(Ibid., S. 491) として居るのは即ちその意味である。

社會主義の本質を右の如く見る必然の結果として、生産物の價値の生産要素への分配は、社會主義にあつては、生産行程の間に自然的に行はれるを得ず、よつて、生産物の生産參加者たる労働者への分配は、何等かの形に於て社會の指令をまつの外はない。而して其の指令が如何なる原則の上に行はれるかといふこと、換言すれば所謂分配の原則が如何にあるかといふことは、ミーゼスの社會主義にとつては重要な點ではない。故に彼はいふ。

「その場合のために、如何なる原則がとられるかは、吾々の見地からはさまで重要な事柄ではな

い。個々人を其の欲望に従つて測定し、欲望の大なる者へは、欲望の小なる者へよりも多くを分配するといふ風に分配することも出来よう。又個々人の徳性を顧慮して善良なる人間には、不良なる人間に對してよりも、多く分配するといふことも出来よう。或は亦、平等の分配を理想として、各人が出来るだけ等量を受取る様に分配することも考へられよう。更に亦勤勉なる者へは怠惰なる者へよりも多くを分つことも出来よう。だが如何に分配しようとも、事態はいつでも、各人が社會から、一の指令を受けるといふ事になるであらう」(Arch. f. Sw. u. Sp. 47 I. 8)。

生産物の分配は、常に社會の指令に俟つの外はないといふけれども、この事は、消費の自由の完全なる喪失を前提せるものと解してはならない。たとへ平等分配の原則がとられる場合と雖も「各人は其の指令された割前を全部自分で消費せずに、腐敗せしむることも出来るし、他人に贈與することも出来るし、又財の生産と兩立し得る限度に於ては將來の欲望のために貯へて置くことも出来る」のである。ただミーゼスの社會主義では「どうしても出来なう一つのこと」として居るのは、消費者に消費物の自由選擇を認めるといふことである。「選擇權を許すことになれば、一方では生産されたよりも、ヨリ多くが……要求されることになり、他方では生産されたよりも、ヨリ少くが要求されて、引とられずに供給所に殘留することとなる」からといふのが其の理由であるが、此の

點に於ては、消費者の消費物選擇自由を經濟の不可缺條件と見て社會主義の構成を考へたハイマンやレデラーとは、全くその趣きを異にするものである。社會による分配の指令は、個人間の交換の完全な否定を意味するものでもない。「各人は若干を交換することも出来る。ビール好きは、ヨリ多くのビールが得られるならば、喜んで割當てられた鑛水を放棄するであらう。……美術を理解出来ないものは、より容易く理解出来る享樂のために、美術館の入場券を與へるであらう」といふ所であつて、交換を以て必らずしも社會主義と兩立し得ざるものとは考へない。而もかかる交換は常に必らずしも、直接物々交換の形をとる必要はなく、一般的交換用具即ち貨幣を以てせられることすらも是認するのである。

「交換交通も亦社會主義的經濟秩序の許す狭い範圍に於ては、媒介を経て行はれ得る。交換流通は常に必らずしも直接交換の形で行はれるを要しない。曾て他の場合に間接交換を發生せしめたと同じ理由で、社會主義の社會でも、間接交換が交換者の有利となるであらう。其の結果社會主義のもとに於ても、一つの一般交換用具即ち貨幣の使用せられる餘地が存する」(p. 80)。

ただミーゼスの次の言葉は注意せられねばならぬ。この言葉こそは、ミーゼスの全理論の根柢に觸れるものである。

「交換の目的物は常に消費財にのみ限られる。社會主義社會に於ては、生産財は絶対に社會に所

屬するのである。それは讓渡すべからざる財であり、*res extra commercium* (賣買の外に横はる財)である」(p. 30)。

種々なる社會機關の構成を認め、種々なる分配原理を認め、更にある程度まで贈與や、蓄積や、交換、貨幣までも認めて來たミーゼスも、生産手段の賣買だけは絶対に認めなかつた。それは社會主義の本質と兩立し得ざるものと見たからである。正にこの事實こそは、ミーゼスの理論の唯一の大前提をなすものである。ミーゼスの社會主義經濟の何たるかは以上の説明によつて明かとなつたであらう。

凡そ何人と雖も、二つの欲望に面して、其の一を選ばねばならぬ場合には、價值判斷を行ふ。而して人は一般に、第一次財(消費財)に對する評價は、これを直接の判斷のみで遂行し得るし、又關係の極めて簡單な場合には生産財に對しても、その彼に對する重要さを判斷するにはさまで苦慮を要しないものである。然るに事情が複雑で關係の見透しの困難な場合に於ては、生産手段の評價を正當に行ふがためには、より綿密な考慮即ち計算を必要とする。然るに、計算の可能なるためには、必ず共通の單位を要する。然るに主觀的使用價值の一單位といふが如きものは、存在するものではない。限界效用は決して價值の單位たり得るものではない。何故ならば、周知の如く、一定の財

の二單位の價値はその一單位の二倍の大きさの價値を有するものではないからである。それ故に昔の孤立の經濟人と雖も價値判斷が直接明白にあらはれざる所で、而も多少共嚴密な計算の上に判斷しなければならぬ様な場合には、主觀的使用價値だけではやり得なかつたので、直接明白な價値判斷で捕へ得る様な財、從つて第一次財又は勞働苦に還元しなければならなかつた。ただかかる還元の可能なのは極めて簡單な場合に限られるもので、複雑な長い生産行程に對しては、決して充分ではない(233-234)。

交換の行はれる所にあつては、客觀的な交換價値が經濟計算の單位となる。交換のたえず行はれる所には、交換價値が成立するに至るものであるが、この交換價値の單位は三つの重要な長所を有する。第一の長所は、計算をばすべての流通交換參加者の評價の上に打立つる可能性を與ふることである。個人の主觀的使用價値は純粹に個人的な現象であつて、直接には他の個人の使用價値と比較することを得ないものである。その比較は、交換に参加するすべての經濟者の主觀的使用價値の綜合作用からあらはれる所の交換價値によつて初めて可能となる。第二に、交換價値による計算は、諸財の合目的な使用につき一の統制を可能ならしむる長所を有する。即ち一の複雑な生産行程を計算せんとするものは、市場を支配しつつある交換割合に照して、自分が他の者よりもヨリ經濟的

に仕事をなせるか否かを直ちに判別することが出来る。第三に、交換價值による計算は、諸價值の一の單位への還元を可能ならしむる。諸財は、市場の交換比率によつて相互に代替し得るものであるから、任意の一財を選択してそれに還元することが出来る。この場合貨幣經濟では、貨幣が選擇されるのである (S. 97)。

尤も交換價值による計算、例へば貨幣計算の可能性には一の限界が存する。それは、交換關係の中にあらはれ、従つて貨幣によつて交換され得る財以外のものは、如何に價值ありとも、計算の目的物たり得ないといふことである。例へば水力工事を起すべきか起すべからざるかの計算をなさんとするに當つて、それによつて毀損せられる瀧の美觀の如きは、貨幣計算の中には這入るを得ざるものである。其の他土地又は建物の美觀、人間の健康、満足、個人又は國民の名譽といふが如きものも、其の價值如何に大きくとも交換關係の外に横る限り、貨幣計算に這入るを得ない。尤も斯くの如き交換外に横るもの、即ち普通に經濟外の要素と呼ばれるものも、固有の意味に於ける經濟的な財と同様に、合理的行動の動機として、考慮の中に入り來ることには争がない。健康美觀等の毀損は、常に貨幣收益と共に比較考慮せられる事實は何人も知る所である。ただかかる精神財が貨幣を俟たずして直接に其の價值が把握され、従つて、それを考慮するにさまで困難を感じないのはそ

れが常に第一次財であるからである。それは兎も角、忘れてならぬことは、交換關係の外に横る財の貨幣計算は不可能だといふ一事である。國民財産又は國民所得を貨幣計算で評價せんとしたり、又は海外移民や戦争による人間の損失を貨幣で計算せんとする試みは、極めてすぐれた國民經濟學者でさへ往々行ふ所であるけれども、斯くの如きは要するに *diletantische Spielereien* (物好きの遊戯) に過ぎなうものである (p. 57)。

以上は、貨幣計算の限界に關するミーゼスの見解であるが、彼は更に貨幣計算によつて一社會の經濟計算を遂行するための條件として、二つの事實を指摘して居る。第一は、ただに第一次財(消費財)のみならず、高次財(生産財)も亦、交換流通の中に立つて居なければならぬといふこと、然らずんば生産財の交換價值が成立せず、交換價值なくしては其の評價が不可能に陥るからである。第二は、生産財の交換に於ても亦、一の共通に使用せられる交換手段即ち一の貨幣が用ひられて居らねばならぬといふことである。然らざればすべての交換關係をば、一個の單一なる分母に還元するを得ず、單一なる分母に還元せずしては比較計算が不可能なるが故である (p. 58)。

以上述べたる見解の必然の結果として、ミーゼスは社會主義社會に於ける經濟の貨幣計算を全然

不可能と斷じたのである。即ち重ねて要言すれば、社會主義社會に於ては生産手段はひとり國家社會に屬するを以て、生産手段に關する限り交換が行はれず、交換が行はれざるが故に貨幣計算を適用し得ないといふのである。かくして彼は、社會主義の經濟を次の如きものと結論した。

「經濟計算なくしては經濟はない。社會主義共同經濟に於ては經濟計算の遂行は不可能である。従つてそこには吾々の意味する經濟は全然存在しない。瑣末なこと、附屬的な個々の事柄ではなほ合理的に行動し得るかも知れない。だが全體として最早合理的生産は存在し得ない。そこでは何が合理的であるかを意識する手段が無い。従つて生産をば意識的に經濟計算の上に遂行することは不可能であらう」(S. 100)。

「社會主義に於ては、物資の供給が無政府的 (anarchisch) でなくなることは確實である。欲望充足に役立つすべての行動について、一の最高機關の命令が支配するであらうからだ。然しアナルキッシュな生産方法の經濟の代りに、理性なき機關の無意味な行動があらはれるであらう。車はまふであらう、だがそれは空轉カッタヒをするであらう」(S. 100) (Die Räder werden sich drehen, doch sie werden leer laufen)。

以上を以て、ミーゼスの社會主義經濟計算不可能論の要旨を明かにした積りである。素よりこれに對しては、色々の疑問が生じ得るであらう。今豫想し得べき若干の疑問につき、ミーゼス自身の説明を補足的に附加して置かう。

第一は、自由經濟數千年間の經驗の助けによつて、社會主義の合理的な、少くとも秩序ある生産を遂行し得ずやとの疑問に就て、彼は次の如く答へて居る。

「幾千年に亘る自由經濟の間につくられて來た經濟の記憶の助けによつて、暫くの間は、經濟技術の土崩互壞を免れ得るであらう。昔からの傳統は維持される。併しそれは合理的だからといふのではなくしてむしろ傳統の力で神聖化されて見えるからである。だがかかる古き經驗は新たな關係に適應し得ないが爲に、非合理的なものとなつて仕舞ふであらう……」(p. 100)。

第二に、第一の疑問とも關聯を有するものであるが、新しい關係をつくることなく、常に同じ事を繰返すといふ經濟、所謂「靜態經濟」に於ては、社會主義は經濟計算なくしてやつて行けぬであらうかといふ疑問である。これに就てのミーゼスの考は次の如くである。

「靜態經濟といふものは、經濟計算なくしてやつて行くことが出来る。そこでは常に同じ事が繰返されるのであるから、若しも吾々が、自由經濟の最後の効果を基礎として社會靜態經濟の最初

の建設に成功するものと假定すれば、経済的合理的に遂行せられる社會主義生産が實現され得ると思はれるかも知れぬ。けれども斯の如きは、單に頭惱の中に於てのみ可能なる幻想にすぎない。蓋し靜態經濟なるものは、經濟認識にとつて如何に必要であるにしても、實際には絶對に存し得べからざるものである。事實 (Daten) が不斷に變化しつつあるからである。次に暫く右の點を措いて問はぬとしても、社會主義による所得差異の排除、それに條件づけられる消費に於ける變化、及びそれ故に起る生産の變化等すべての事實が變化を免れないから、自由經濟の末尾に社會主義を結びつけることは不可能である」(p. 113)。

第三に、今日何れの文明國に於ても公營國營の企業が存在して居り、而もそれ等が通常合理的計算の上に經營を行ひつつある。この事實は往々世人をして社會主義社會に於ける經營の技術的改善や經濟計算の可能を聯想せしむることは事實であるが、この點に就てのミーゼスの見解は、要するに「それはある程度に貨幣流通を有する自由市場經濟の中に立てる社會主義的オアシスにすぎない」といふにあるが、なほ次の説明によつてその意味は明白となるであらう。

「それ等の社會主義的經營は、其の經營に於てそれを圍繞する自由流通の經濟組織によつて可能となるもので、社會主義的經濟組織の本質的特徴が毫もあらはれ得ざる程度に於てのみ存在し得

るものである。國營公營の事業で技術的改善が行はれ得るのは、其の改善の効果をば、國の内外に於ける同種私企業に就て識別し得るからである。又私企業が刺戟を與へるからである。吾々がそれ等の經營に於ける改善の利益を確實に知り得るのは、それが生産手段の私有及び貨幣經濟を基礎とする社會に取巻かれて居り、從つてそれを計算し、簿記することを得るからである。この計算及び簿記は純粹なる社會主義的環境の下に於ける社會主義的經營のなし能はざる所である」

(『39—100』)。

私がかつて拙著の中に、毫もミーゼスの暗示を受くる事なくして、同一の場合を問題となし、今日の國營公營の成果を授用して社會主義經營を辯護する論を評して「この考はある前提の下に成立せる一の現象をば、その前提の除かれた場合に當嵌めようとする一の誤謬である」といつた事がある。それは恰もミーゼスの此の考とその着眼點を等しくせしものである。

(拙著『マルクスシズムを中心として』一八〇頁)

第四、現に同一企業の内部に於て、個々の經濟又は經營部門は、貨幣の授受なくして、互に相殺を行ふことによつてある程度迄それぞれ獨立を保つ。即ち彼等は相互に材料や勞働を相殺し、而していつても、各々の經營のために別々の貸借對照表を作製し、その活動の經濟的成果をば、計數的に把握し得てゐる。而してそれによつて、現存各經營の改造、制限、廢止擴張につき、又新設備につき、決定を行ひ得る様になつて居る。この同一企業内部の各部門の獨立計算と類似の方法によつ

て、社會主義經濟の下に於ても、個々の生産經營の獨立せる勘定を行ひ得ないものであらうか。この疑問に對してもミーゼスは、「それは全然不可能である」と答へる。その理由は、

「同一企業に屬する個々の部門の獨立勘定は、専ら、使用せられる財及び勞働のすべての種類のものに市場で市場價格が成立して居り、それが勘定の基礎として、採用され得るといふ事實の上に成立するものだ。自由なる市場流通の缺除する所には價格形成はない。價格形成なくしては、經濟計算は存在し得ないのである」(p. 104, 105)。

といふのであつて、ここでも亦前の疑問の場合と同様に、成立の條件たる周圍の世界の變化が問題とされるのである。

曾て私が、日本に於ける計劃經濟の主張者によつて見落されて居る一つの問題として「經濟計算」の問題を指摘したるに對して、直ちに有名な某教授から「滿洲國內の經營でも經濟計算をやつて居る」とか、「曾て複式簿記のやれる様になつたのと同様に計劃經濟になれば、またそれに應じた經濟計算が出来るであらう」といふ批評を受けたことがある。經濟計算の問題の性質についての無理解に基く此の種の質問に對する答へとして、ミーゼスの右の説明はそのままに役立つであらう。

最後に、勞働價值計算によつて、社會主義經濟計算を遂行せんとする提案に對しては、ミーゼスは自然の要素の無視と異質勞働還元の不可能を理由として實行すべからざるものとなすのであるが、すでに詳しく述べたるが故にここには繰返さぬ。又、社會主義社會に於ける個々の生産部門の間に

自由なる交換賣買を許容し、かくしてそこに生産財の交換價値を成立せしめ、その成立せる交換價値を經濟計算の基礎として用ひんとする提案(例へばボラニーのそれ)に對しては「もしも各團體に生産手段の所有權を附與するとすれば、それ等は最早社會化ではなくて、勞働者資本主義であり、サ  
ンディカリズムである」(H. H. H.)と答へる。而してかかる社會の經濟計算の可能性を認むるも、それを社會主義の外に置くこと、すでに、本章の冒頭に詳述せし所であり、従つてこれまたここに繰返さぬ。

これで私はミーゼスの見解の如何なるものであるか——また如何なるものでないか——を、ほぼ明瞭にし得たと信ずる\*。

\* 本書の校正中に、佛蘭西の『經濟誌』(Revue d'Economie Politique) 一九三八年七月八月號に、經濟均衡方程式を用ゐて經濟計算を解かんとする見解に對するミーゼスの批判が掲載せられて居ることを發見し、第二章にも附言して置いたが、詳細の内容については別に取扱ふの外はない。

## 二

さてミーゼスの見解に對する批判をなすべき順序に達したが、實は私はミーゼスの見解を是認す

るのである。といふよりも是認せざるを得ないといふのが正當であらう。生産手段の私的私有制が排除せられた社會に於ては生産財の交換市場が存立し得ず、生産財の交換の行はれ得ざる集權的社會主義經濟の下に於ては、生産財の價値が客觀的に成立しない。客觀的に成立する價値なくしては、貨幣計算は適用するを得ず、合理的經濟計算はその基礎を失ふが故に不可能に陥り、生産は任意放恣となるといふ論理そのものには、異論を挟む餘地はないと考へるのである。

X

X

X

尤も私がミーゼス教授の「經濟計算」の論理を全面的に承服するといふことを以て、私が教授の經濟學や世界觀人生觀に對して承服するものと誤解されてはならない。教授の「經濟學」に於て需要を問題とする場合、あまりにも國民個々人の生活欲望のみを問題として、國家の直接なる需要の重要性を看却して居るといふことには同意し難い。また國民個々人の生活欲望を問題にする場合にも、個々人は常に家計に於てのみその地位をしめるといふ點も看却されてゐるのは一つの缺點であらう。更に國民個々人の需要に關して單に消費者の欲望の最大満足を以て經濟の理念として居ることとは到底賛成し得ざるところである。消費者の單なる欲望の最大満足を以て經濟の理念とする點に

於ては、教授は社會主義者と同じ立場に立つものとさへいへるであらう。當時に於ける奥國民としての教授として左様な立場は無理からぬことであつたであらうが、吾々日本人としての國民經濟や家計の理念は、決して單に消費者の欲望の最大満足といふ様なことであつてはならない。「國家の隆昌」と「臣民の慶福」と仰出されし 天皇統治を翼賛しまつることが臣民の理念であり、而も皇國の隆昌のうちに日本臣民の眞の慶福が存するのであるから、需要の充足は重大ではあるが、需要は單なる人間欲望ではなく皇國の隆昌といふ見地から價值判斷の行はれた需要でなければならぬ。而して皇國の隆昌といふ見地から價值判斷が行はれた需要に適應して生産手段が配分せられることに經濟的生產の理念がなければならぬと考へる。私がミーズ教授とは反對に、消費生活、消費道徳の指導と企業者教育とに重要な意義を認めるのは、かかる理由に基くのである。これ等の點は直接首題に關することではないから、別に詳説する機會を持つであらう。

## 第七章 競争導入による問題解決の試み

——競争的社會主義の吟味——

### 一

一九二〇年ミーゼス教授がはじめて、中央集權的な社會主義の下に於ける經濟計算不可能の理論を學界に投げかけてこの方、十數年に亘る激しい論争の結果は、決して無收穫ではなかつた。それは何よりも先づ實物計算 $\parallel$ 實物經濟の主張に存在の餘地なからしめた。今日世界の何れの國に於ても、經濟學者ばかりでなく社會主義者にも、實物計算 $\parallel$ 實物經濟の可能性を信ずる者は一人も居ないであらう。

また經濟計算論争の結果として、勞働價值計算の主張に就ても、ソ聯の公認學者達が、今もなほ遠き未來社會に於ける其の妥當性を約束して居るのを例外として、爾餘の國々ではいやしくも此の問題の論議に多少共注意を拂つて居る人々のうちには、其の支持者の跡を絶つに至らしめた。ソ聯

學者の勞働價值計算論は、恐らく政治的理由から主張されて居るものであらう。蓋しこれまで多少でも異論を公にせる經濟學者は盡く處刑せられて居る事實によつてさう考へられるのである。

斯くして社會主義經濟は、もし存在し得るとすれば當然貨幣經濟でなければならぬといふ見解は一般に認められるに到つたのである。しかし生産手段の私的私有制の失はれた社會主義の下に於て、果してよく財貨、殊に生産財の適當なる貨幣價格形成が可能なりや否やに就ては、議論の分れるところであり、均衡理論の基礎の上に方程式の操作によりて價格を算出せんとする試みは、一般に少くとも實行不可能なることが認められてゐる(第四二九頁参照)。「資本主義」市場に成立せし價格を傳承し、試行錯誤の方法に訴へて歸屬的に生産財の比較重要度を測定せんとする提案は、資本主義の競争制度の下に於ける價格をそのままに競争なき社會主義下で意識的に再現せんことを企つるものであつて、かかる見解については今なほ熱心な支持者が存在するが、「馬鹿らしき一の思付」にすぎぬとの批判もある(第四二六頁参照)。私自身は資本主義市場價格を受ついであとは試行錯誤に訴へんとする提案を以て、問題の解決ではなくてむしろ問題の回避だと考へるのである。

さてハイエーク教授のいふ所によれば、輓近の英國に於ける齡若き社會主義者達の傾向は、社會

主義社會のなかに競争の要素を再導入せんとの構想に集中して居るといふことである。思ふに最近のソ聯邦に於ても、「過渡期」の名に於てではあるが、能ふ限り資本主義の諸形式、殊に競争の要素を導入せんと努力しつつありといふことが出来る。マルクス社會主義が公式的に廣く信奉せられて間のない我が日本の思想界は、なほ中央集權的な計劃經濟への希望をすて難く、従つて競争的社會主義の主張は未だあらはれて居ない。けれども中央集權的な、競争なき計劃經濟が經濟計算に於て行詰ることが明となる時期が來れば、必然に社會主義Ⅱ計劃經濟と競争との結合が企てられるであらうことが容易に想像される。かくして、社會主義への競争導入がどこまで可能であるかにつき吟味をして置くことは、理論的のみならず實踐的にも重大な意味をもつであらう。

周知の如く、我が國の現在には統制經濟又は計劃經濟の名の下に、「資本主義」的私有制の上に國家の生産計劃を遂行せんことを期待する人々がなほ少くない。社會主義經濟への競争導入の試みに對する本章の批判は、ある程度まで、「資本主義」的競争經濟への計劃經濟的要素の導入の試みに對する批判として妥當するであらう。

さて社會主義者たちの社會主義と競争とを結合せんとする傾向は、要するに次の如き共通なる根本觀念の上に成立せるものの如くである。すなはち、

- (一) 全然生産競争を認めざる中央集權的な社會主義機構——すなはちミーゼス教授が批判の

象とし、また久しく社會主義の代表的な型と考へられて來たもの——は、價格形成の不可能の故に經濟問題を解決することが出来ないといふことを是認し、

(二) 従つて經濟問題を解決し得る社會主義機構は、經營の指導者の間に市場と競争とが存在しなければならぬことを認め、

(三) 其の結果、社會主義社會もまた「資本主義」社會に於けると同様に、半製品たると完成品たるとを問はず、總ての財貨に貨幣價格が存在すべきことを是認し、

(四) ただ經營の指導者は今日の「資本家」の如く生産手段の所有者ではなくて、あくまで國家の有給官吏であり、國家の指令に従つて行動すべきことを主張し、

(五) 而して經營の指導者は「利潤」を目的としてではなく、むしろ「費用」を基準としてそれをカバーするだけの價格で販賣する様に生産を指導すべきこと、といふのである。

かくの如き社會主義構想の實現可能性を吟味する前に、留意に値することは、それが久しく社會主義經濟と呼ばれて來たものとは甚しく距るといふ事實であらう。社會主義は久しく「資本主義」の無計劃性(無政府的生産)を非難して來たのであり、従つて自らを何よりも先づ「計劃經濟」として規定して來たのである。然るに今競争の導入によつて、社會主義制度のもとに競争的資本主義經濟

の意識的再現を企圖するとは如何なることであらうか。思ふに社會主義が専ら「資本主義」の攻撃を事として居た間は、何等困難な問題はなかつたのであるが、自らの組織につきて積極的に何等か具體的な提案乃至實踐を行ふの必要にせまられるや否や、所謂經濟計算の問題に直面せざるを得ず、而して理論上實際上其の解決の道を追及することによつて、つひに競争的社會主義といふが如き、窮窟な矛盾の體系の中、いや應なしに追込まれたと解するのが適當であらう。

## 二

さて生産手段の國有を保持する社會主義構成への競争の導入には二つの型が考へられる。第一は各生産部門はそれぞれいはば一つの國家的獨占企業に總括され、ただ生産の部門相互間、即ち國家的獨占企業相互の間のみ競争と市場を認めんとするものであり、第二の型は、國家的獨占企業を形成することなく、各生産部門間のみならず、同一産業部門の内部に於ても競争をなさしめんとする場合である。

先づ第一の型、すなはち各産業部門をそれぞれ一個の國家企業に總括し、その相互間のみ競争を導入せんとする場合の検討から初めよう。

何よりも明なことは、ある財貨の生産が獨占されて居る場合、すなはち供給側に競争が存しない場合に於ては、その財貨の價值が一義的に、需要供給の一致點に定まるべき保證が失はれて、諸財の價值は極めて不安定なものとなることである。すでに古典的となれる價格決定の説明が示す如く、價格がその需要供給の一致點に一義的に所謂安定均衡點を見出し、それ以外の點では不安定であるといふことは、需要及び供給の兩側の内部に於ても、競争が作用するといふことによるのである(第四五二頁参照)。ここに問題となれる如き機構に於ては、財の供給側の内部に競争が存しないといふ一事によつて、すでに價值は一義的な安定均衡點を失はざるを得ない。

然るに多くの財貨に對する需要は他の財貨の價格によつても影響されるものであるが、左様な財貨の價值は他の財貨の價格の動搖によつて動搖せざるを得ない。かくして需要供給の兩者のそれぞれ内部にも競争が存するといふ條件を缺くところのこの種の社會は、諸價值が不安定であり、一般的な價值の均衡が存し得ないといふことは疑ふべくもないであらう。

斯くの如く諸價值の間に一般的な安定均衡の存せざる場合には、經濟計算は不可能に陥るを以て企業がその生産資源を最も有利に使用するなどといふことは凡そ考へ得べからざることである。恐らくはかかる場合に於ける企業者の實際の努力は、企業の存続のためにも、生産要素の價格とその

一定の生産物の價格との開きを最大ならしむる方法で生産量を調節することに集中されざるを得ないであらう。かかる現象は「資本主義」の社會でも價值の安定を失ふ場合にはある程度まで見られることであるが、ソ聯の國營企業の場合にも、事實一般にあらはれた傾向である。

かかる機構のもとに、かかる利潤追及の傾向は必然の傾向であるから、たとへ價格の不安定が少数に止まり、従つてある程度の均衡を實現し得る場合に於ても、それは供給側の内部にも競争が存する場合の如く、生産費に於ける價格の一般均衡ではなくて、各企業がその獨占者としての搾取の可能性を思ふ存分に利用せる如き一の均衡状態を意味するものであり、従つてそれは生産資源の經濟的配分利用の表現ではなくて、非經濟的な配分利用の表現に外ならないであらう。

或は云ふかも知れない。社會主義の國家に於ける獨占化された國家企業の指導者は、「資本主義」下の獨占企業のその如く、利潤を目標とすることは許されない。それは初めから國家の嚴格な指令によつて、費用をカバーする價格を以て供給することを目標として生産を指導する様に規律されるから、左様な心配の必要はないのだ、と。けれども需要供給の内外に普遍的な競争が存しない場合に於て、「生産費用」なるものは、しかく明瞭に行動の規範たり得るものであるか、といふことが反省されなければならぬ。

いふまでもなく、靜態經濟（靜態均衡）なる假定の下に於ては、費用一般なる概念は精密明確なる量としてあらはれる。けれども度々いへる如く、靜態均衡なるものは、如何に研究の便宜として用ひられ得るにしても、それはあくまでも抽象的假定に止まるものであつて、現實の世界には存在し得ないものであることを忘れてはならない。また普遍的競争を前提とする場合に於ては、生産費なるものは實際にかなり正確な意味を持つことが出来る。然るに一度産業内部に於て競争の存在しない經濟、而も靜態ではなくて動態の經濟を假定するとすれば、一生産物の費用如何はどうして確め得るであらうか。

すなはち技術に不斷の變化があり、持久的な生産手段の價値の多くが、その生産に要した費用とは關係なく寧ろ將來につくられると豫期される其の給付に依存して決定される様な動態の經濟を考へるならば、一生産物の費用如何は、個々の産業部門や個々の經營内部で行はれ得る如何なる方法に基いても確答され得ないものであらう。例へば、他と置かへられることもなく、獨占的事業以外では使用されず、従つて市場價格をもたない獨特な生産要具を用ひて生産する生産物の費用に就て考へて見れば、「生産費用」が生産物價格の決定規準として適用に堪へ得ない次第は明白となるであらう。

いふまでもなく、かかる用具がある期間の使用によつて消耗されるものとすれば、この消耗分は生産物の眞實の費用として計算されなければならない。けれどもかかる生産用具の價值は、生産物の價值に依存するものであるから、會てヴァルガが勞働價值計算に於ていふ如く、

「吾々は工學の教科書によつて、可成精密に各種の機械装置の平均壽命を知る、加之……一定の機械の生産のために幾程の勞働時間を要したるやを決定することが出来る。斯様にして得られた數に消耗係數を乗じ、而して直接用ひられし勞働時間に加算せられ財の單位に割當てらるべき一ケ年間の時間數を得る……」(上掲一三七頁)。

等といふ簡單な方法が、役に立たぬことはいふまでもない。かかる用具の給付の價值は、同一の生産物を生産するための、これに次ぐべき最良の方法に要する犠牲の度合によつて決せられるものであるから、同一の生産物を生産する他の可能なる方法との間に競争の存する場合以外には決定され得ない。即ち同一生産物の生産部門に於てもまた競争の存する場合にあらざれば、かかる生産用具の價值を定むることは出来ないのである。従つて生産物の費用を知ることが出来ないといふはねばならない。要するに現實の競争を缺くところの獨占體をして競争價格に等しい價格(費用價格)を課せしむる企圖は失敗に終らざるを得ないであらう。「國家がそれを命令する」と云つたところで、何

の役にも立たぬことは論ずるまでもない。出来ないことは矢張り出来ないであらう。

なほ生産物の價格をば費用をカバーする點に定めるといふ主張は、次の如き難問に逢着するであらう。すなはち各財貨が唯一の企業によつて獨占的に供給される場合には、恐らくは費用が變更せぬ限りは、生産物の價格を變更せずして、單にその生産物量を増減して需要に適應せしめんとするであらうが、然る場合、増大し行く需要に供給が追附くまでのあいだ、誰が生産物を受取るべきかを如何にして決定し得るであらうか？ 恐らく合理的な解決方法を見出し得ないであらう。而もそれは實際に於て輕々に看過出来ない重要事といはねばならぬ。

またより重要な問題は、企業が附加的要素を生産の場所に齎すための「最初の費用」を負擔して差支なきや否やを、如何にして決定し得るであらうか？ 例へば勞働その他の要素の移動費の多くは、所謂回収投資の性質を有するものであつて、其の費用の市場利率での利子が、利潤の上に永續的に收得される場合にのみ正當とされるものであるが、しかし此等の投資が一旦なされた後は最早如何なる意味に於ても費用とは見做し得ないものである。かかる性質の最初の費用を負擔してよいか否かは、費用原則をとる場合恐らくは如何ともすべからざる難問となるであらう。

かかる組織の下に豫想せられる難問は決してこれだけに盡きる譯ではない。企業又は經營のマネ

「シャー」の成績を判定する方法や、各産業部門の範圍限界を如何に決定するか等はなにかんづく重大な問題となるであらう。

### 三

會て「産業合理化」または「統制經濟」の實現といふ名の下に、各産業内部の競争を禁止する強制カルテルの結成が、政府當局によつても主張された時代があつた。而してその場合その擁護のために論據とされたところを見ると、同一産業部門内で激しい競争が行はれるために甚しく價格が下り、その結果新しい技術的設備の採用が不可能となるといふのが大きな理由であつた。かかる理由による競争の排除の企が、多くの場合實は全體的に見て經濟とはならなくて却つて浪費となるといふことを明にすることは、産業を獨占的に統括し、同一産業内部に競争を認めない社會主義の機構が、今日の如き普遍的競争の機構に比較して、如何に資源の不經濟となるかといふことを明にする一助となるであらう。

ある生産設備がすでに設置され終つて居る場合には、その設備を運轉、使用するための費用が同一の給付を、新しき他の方法で生産するために要する總費用よりも少くありさへすれば、舊設備を新

しい方法の設備に換へないことの方が、國民經濟的にヨリ望ましいのである。すなはちその場合既存設備の運轉費と比較せらるべきものは、未設新設備の運轉費ではなくてその供給總費用（運轉費の外に新資本の利子及び償却費を含む費用）でなければならぬ。かかる比較に於て新設備の導入が舊設備の存在によつて妨げられるとすれば、新式方法でその生産物を供給するに要する資源が、他の方面に於てヨリ有利に使用され得ることを意味する。従つてかかる場合は、新式設備の運轉費が舊設備の運轉費よりも安くつく場合でも新式設備を導入しないことの方が、資源のより經濟的な配分を實現する所以となる。

以上は舊式設備がすでに設備され、新式方法は未だ設備されて居ない場合の比較の問題であるが、新舊設備がともにすでに設備されて競争して居る時、而も新設備が舊設備の殺人的な競争に脅かされて居るといふことがありとすればどうなるか。それは次の二つの場合の何れかを意味するであらう。

第一の場合には、新式方法の導入が全く誤算に基いて行はれた場合である。かかる場合、新方法による運轉費（作業費）が實際に舊方法による運轉費よりも高價につくといふ様な甚しい誤算に基いた場合には、たとへ技術的にはある點で新設備の方が優れて居ようとも、新設備を閉鎖することがむ

しる國民經濟的に適切な救濟手段といふべきである。

第二の場合には最も普通に起る場合であるが、新しい方法による運轉費は舊方法によるそれよりも若干低廉であるが、ただ舊設備の運轉費をカバーするのみならず、新設備に要せる費用の利子及び償却費をも支拂ふに足る純利益を残す程に低廉でないといふ場合である。この場合にも新方法の導入は誤算に基くものであつて、元來それを導入しないで、それに要する資源を他の方面に投ずることが、より經濟的であつたのである。

けれども誤算にもせよ、すでに新方法の設備をして仕舞つた上は、この誤用された資本から幾分なりとも出来るだけの需要者の利益を生み出させる方法を發見しなければならない。かかる方法は競争を許して價格を競争の水準まで低下せしめ、而してこの新設備の資本價值の一部を切棄てさせることである。かかる場合に萬一にも新設備の資本價值を人為的に維持せんが爲めに、強制的に舊設備を閉鎖せしむる様な方法をとるならば、生産の増加をも改善をも招來することなくして、ただ新設備の所有者の利益の爲に消費者に重荷を課することになるであらう。會ても屢々經驗されたことであるが、今後に於ても、兎角インフレ時代に建設された企業の所有者達は、其の後に於て、その資本價值を維持せんが爲めに國家の權力に訴へて競争を排除せんとする虞がある。かかる場合は

競争を排除して強制カルテルを結成せしむる方法を選ぶべきではなく、上述の如く競争を認めて價格を下落せしめ、むしろ資本價値の切下げによる整理をなさしむる方法を選ぶべきである。斯様に舊式設備と新式設備とは、單に技術的見地から簡單に優劣が決せられ得ないものである。産業内部の競争を禁止して一の獨占體を結成せしむることによる經濟の「合理化」は、實は「經濟」ではなくて「浪費」である場合が多いのである。

社會主義の下に於ける指導者は「資本主義」下の獨占指導者と異なる精神に於て行動することを是認するとしても、舊い設備が單に技術的の見地から新設備によつて置換へられることに基く資源浪費の危険性は極めて多い。ソ聯はそのよい實例を示して居る。同一産業の内部に於ても新舊兩設備の經濟競争の存しない機構の場合には、如何なる場合に新設備を導入することが經濟的であるかを決定すべき合理的方法は存在しないであらう（なほ附録「經濟計算の立場から見たギルド社會主義並にサンディカリズムの批判」參照）。

#### 四

次に第二の型の競争的社會主義、すなはち産業部門の相互間のみならず、各産業部門の内部の經

營間にも普遍的に競争を導入せんとする社會主義の構想を吟味して見よう。かかる機構に於ける問題は、それが經濟計算の側からの非難を免れ得るかどうかといふ點にあるのではなくて、ただかかる社會主義がよく「資本主義」に墮することなしに眞實に機能し得るかどうかといふ點にある。若しかりに社會主義下で全面的競争が充分に機能し得るといふ假定を許すならば、經濟計算の問題は立派に解決され得るであらうことは、いふまでもないところである。

かかる機構が眞に機能し得るか否かを吟味する爲めには、かかる機構が社會主義制度として、事實上「資本主義」組織に墮しないために、國家の中央部が少くとも如何なることをなさねばならぬかといふ事の考察から初めるのが便利であらう。

生産手段の所有者たる國家が、其の所有が單なる名目に止まらないために——それは「資本主義」に墮しないための要件であるが——少くともその所有する「生産資源の配分と統制」といふ任務だけは自らの手に確保しなければならぬであらう。資源の配分統制をまで各企業各經營の指導者の自由に委すならば、生産手段が國家に屬すとはほんの空名となり、基督教に於て一切は神に屬すといふと同じく、かくては今日の私的分有制と區別し難いものとなるであらう。

さて然らば資源の配分統制とは具體的には如何なる意味内容をもつものであらうか。いふまでも

なくそれは單に貨幣の形に於ける自由資本の再配分や土地の再配分といふことに限らるべきものではなく、更に設備又は機械の一部分をも、それを從來使用せしめた企業者に引續き附托すべきか、それともヨリ高き收益を約束する他の企業者に托すべきかの決定をなさねばならぬことを意味することは明である。いふまでもなく國家資源を附托さるべき企業者は、今日の企業者の如く物的財産をもつものではなくて、自らは財産を有せざる有給官吏であり、従つて企業經營をあやまれる場合に、彼に對して、國家が受けし損失の補償を求め得ざるものである。このことを思ふならば、資源附托の問題は今日の銀行が資金を諸々の企業に貸附ける場合の如くしかく簡單なものでないといふことは、容易に想像し得るところであらう。

資源の配分統制は如何なる原則の上に遂行せられ得るであらうか。百歩を譲つて、差當りは「資本主義」社會に歴史的に與へられた個々の企業をそのまま受繼ぎて國家の任命せる者に經營せしむるとし、従つて從來の資源配分をそのまま繼承すると假定してもよい。けれどもそれがそのまま實行し得るのは當分の間のことであつて、供給側並に需要側に於ける事情の變化によつて、程なく中央當局による完全な資源の再配分が行はれねばならぬに至ることは明である。ただその場合再配分は抑々如何なる原則の上に遂行され得るであらうか？

一定量の資源を何人に托すべきかの決定は、將來の収益に就ての當人の個人的約束を信じてなされうであらうか。或はこれこれの収益がこれこれの方法によつて得られるといふ當人の説明を用いて決定せられるのであらうか。如何なる事業にも危険（リスク）は避けられないことは明であるが、リスクを冒すに足るや否やは、何人が如何にして決定するであらうか。この場合中央當局としては、恐らく企業者の過去の実績以外に決定の根據を求め得ないであらう。けれどもそもそも企業者達が過去に冒せる危険が正當であつたか否かを如何にして決定し得るであらうか。また企業者がこの危険な企業に對する態度は、彼等が自己の財産を賭する今日の場合と同様であると豫想し得るであらうか。

如何にして企業者の成功と失敗とを確め得るであらうか。第一に考へられる標準は企業者が附托された資源の價値の維持に成功したかどうかといふことであらう。けれども最も優れた企業者と雖も時に大きな損失を免れないといふことを思はねばならない。當局による新發明の採用や、需要の變化に基いて資本の價値が減少せる場合に、企業者を非難することは出来ないであらう。常にリスクを回避することによつて損失を招かぬ企業者も居るであらう。だがかかる企業者は國家社會の利益のために最もよく行動したものといひ得るであらうか。

社會主義の社會にあつても危険な事業、否純粹に投機的な企業でさへも、「資本主義」社會に於けると同様に、重要な意味をもつと考へられる。また職業的投機家による危険負擔の機能分化は、社會主義社會でも今日と同様に望ましいと考へられる。然らば如何にしてかかる投機者の資本の大きさを決定すべきであらうか。またかかる危険に當る投機者の報酬を如何に決定すべきであらうか。從來好成績をあげ來れる企業者は一度ぐらい損失を招いたからといつて、直ちに免職させるといふ譯ではあるまいが、然らばいつまで損失を續けさせて置くべきであらうか。若しも損失の招來によつて企業者を其の地位から退かしむることとすれば、恐らく企業者達は危険な仕事の企圖を回避する傾向をとるに至るであらう。「資本主義」の下に於ても損失は企業者としての地位の喪失を意味するものである。けれども「資本主義」の場合に於ては危険の反面に儲けの誘惑の存することに於て、損失による地位の喪失は重大な障害とはならないのである。然るに社會主義經濟の場合に於ては危険の反面に儲けの誘惑が存しない（それを認むればそれこそ「資本主義」に墮して仕舞ふ）から、損失による地位の喪失は、必然に危険回避の傾向を誘致し、未だ試みられたことのない新しい方法が企業者によりて自發的に採用されることは極めて困難となるであらう。

現に活動中の事業が其の資源を最も有利に（經濟的に）利用しつつありや否やを短期間に決定する

方法があるであらうか。利得しつつありや、損失しつつありやの問題さへも、其の設備から今後に期待される収益に就ての人の評價によつて定めるの外はあるまい。しかしこの事が可能な爲にも現存の經營に一定の價値が與へらるる事を必要とするであらう。萬一他の企業者が、その經營又は機械から現在の利用者が其の評價の基礎となせるよりも、ヨリ高き収益を約束する場合には、如何に處置すべきであらうか。この設備又は機械は、在來の利用者の手から取上げられて、單に約束をなせるに過ぎない者に附托されるのであらうか。

「資本主義」の經濟にあつては、無能な企業者から有能な企業者への資源の移動は、前者が損失を齎し、後者が利潤をもたらすといふ事實、そのものによつて遂行されるのである。誰が危険を賭して資源を運用する資格があり、また幾程の資源を彼に托すべきかの問題は、資源の獲得及び維持に成功した其の當人によつて決定される。社會主義の社會も亦、これと同一の原則によつて決定し得るであらうか。すなはち經營の指導者が其の得たる利潤を、時と場所をとはず、自ら適當と信ずるものに再投資することが許されるならば、正に同一原則によつて決定するといひ得るであらう。ただかかる社會の經營指導者は、事實上「資本主義」の企業者と化せるものであり、其の組織を最早社會主義といふことは出来ないであらう。

要するに資源の經濟的配分統制とは、具體的には、個々の企業者に對する資源額の決定、及び個々の經營の規模に關する決定を意味するものであるが、生産手段の私有を否認する社會主義でも、少く共この決定は中央當局の決定事項として残されねばならない。而してそれに伴ふ上述の如き諸問題の決定が中央當局の手で決定せられねばならぬとすれば、如何に競争を普遍的に導入するといつて見ても、中央當局は、自ら企業を經營する場合とほぼ同様の規模に於て、みづから決定を行はねばならぬことが知られるであらう。一の經營の指導が一定の期間だけ、契約によつて個々の企業者に自由に托されるといふ位のことは可能であらうが、少くとも新投資は必然に中央から指令されねばならぬし、また契約満了毎に中央による資源の再配分が行はれねばならぬであらう。

かくて次の如く結論することが出来る。たとへ個々の企業又は經營が指導者の自由と競争に委ねられようとも、同時に資源の配分といふ生産の根本的條件が國家中央官廳の手に握られて居るがために、結局中央當局も各企業指導者も、兩者共に、計劃することも出来ず、従つて失敗に對する責任を負擔することも出来ないといふ結果を見るであらう。そうして計劃決定者をして失敗に對する損失を負擔せしむるといふ條件を伴はずして完全な競争を創造することは出来ないであらう。社會

主義の下に於ては、即ちあくまでも資源の配分が中央官廳の手に屬せしめざるを得ない制度の下に於ては、如何に競争を導入せんとし、「獨立採算制」を強調し、「企業者の責任」を云爲して見たところで、實際の責任者は企業指導者ではなくて、むしろ計畫を認可し資源の配分統制に當るところの中央の官吏であるとするべきであり、従つて通例「官僚主義」と結付くところの創意の自由と責任の負擔とに關するあらゆる困難は、この場合にもまた避くべくもないであらう。

次章に於て詳述するごとく、共産ロシアは革命後集權的社會主義を實行して生産の盲目状態に陥り、所謂新經濟政策のもとに資本主義諸形式を採用した。五ヶ年計劃に着手するや再び集權的社會主義をとつて拾收すべからざる危機に陥り、この危機を脱せんとして一九三一年の夏以來、スターリンの命令によつて「留レインによる統制」と企業の「獨立採算制」とが強調せられるに至つた。かくしてソ聯に於ける新經濟政策と、一九三一年夏以後の經濟とは、意識的に、生産手段の國有下に市場と競争とを導入せんと試みて居る譯である。吾々はそれ等の分析吟味の上からも、競争的社會主義の機能に就ての右の結論にあやまりなきを信するのである。

競争的社會主義の企圖が成功し得るや否やに就て最後の斷案を下すことは暫く差控へるとしても、かかる組織を構想する場合、かならずや次の諸點に注意を要するであらう。

第一は、中央集權的な社會主義の實現を斷念して競争的社會主義を企圖せんとするものは、同時に社會主義が久しくスローガンとして掲げて來たところの、恐慌現象又は失業現象を克服清算するといふ希望をもあはせて斷念せざるを得ないといふことである。集權的社會主義は價格形成の不可能に基く經濟計算の喪失や、其の他計劃の技術的誤謬等に基づいて、「資本主義」下の恐慌にも比すべき、否それ以上の重大な失敗をさへ避け得ないことは豫想に難くはないであらう。けれども、法令による一般的な勞賃引下げといふ方法によつて、其の損失を國の全成員の間に分擔せしめることが出來るであらう。また強制的な勞働配分や勞賃の引下げ等の方法によつて、欲するならば失業現象を清算することも不可能ではあるまい。然るに競争を導入せる經濟は、最早恐慌及び失業を防止することによつて、「資本主義」よりもよりよき條件を有するとは考へられない。またそれを緩和するためにとられ得る諸の方法は、一資本主義一組織の下に於ても亦採用され得るものばかりの様に思はれる。

第二に、競争的社會主義は、他の方法による貨幣計算を主張する社會主義とともに、競争的經濟と同一の結果をば、あるひは競争の導入により、或は歸屬問題の數學的乃至試行錯誤方法による解決によりて、社會主義下に再現せんことを期するものである。従つて久しく社會主義者が傳統的に

主張して來た様に組織の變革によつて資本主義以上の生産性を實現せんとする主張は、集權的社會主義の斷念とともに、何時しかせいぜい資本主義競争經濟に近い生産性を維持せんとする消極的な希望に代へられて居るといふ點が反省さるべきであらう。

第三、勞賃制度の排棄についても亦同様のことが注意さるべきである。勞働選擇の自由の存する限り勞賃制度を排棄し得るや否やは問題であるが、しかし兎も角も從來の集權的社會主義者達は資本主義の攻撃に際して、「賃銀鐵鎖からの解放」といふスローガンのもとに、勞賃制度（勞働報酬が勞働力の需要供給の一致點に定まるといふ制度）が社會主義の下に克服されるかの如く揚言して來た。然るに社會主義が企業の競争を認めて資本主義競争を模せんとする場合には、あきらかに勞賃制度を容認せざるを得ないであらう。

最後に重要な一點を指摘して置かう。所謂「資本主義」經濟に反對して社會主義計劃經濟（其の他に一般に新たなる經濟）を主張するものは、ややもすれば無反省に、自らの提案する經濟機構が、從來の「資本主義」經濟のもつ缺點を免れ得ると同時に、其の長所はそのまま持續する如く自惚れる傾向があることである。それと同様に集權的な社會主義計劃經濟に反對し、また「資本主義」競争經濟にも反對して競争的社會主義や折衷的統制經濟を主張する人々も、往々にして、自らの提案する

經濟機構が社會主義計制經濟と「資本主義」經濟との兩者の缺點を免れ得るのみならず、兩者の長所を合せ保持するかの如く思ひ込む傾向がある。まことに警戒を要するところであらう。競争制をとれば競争に伴ふ長所と短所とを認めねばならない如く、計制制をとれば、またそれに固有なる長所と短所とを承認しなければならぬのである。

第三編 經驗の吟味



## 第八章 ソ聯邦の經驗と經濟計算

は し が き

共產治下のロシア經濟は、大規模なる國民經濟の領域の上に社會主義計劃經濟を樹立せんと試みられた最初のものである。歐洲大戰後、獨塊に於ても社會民主主義政權下に社會主義社會實現の努力がなされたのであるから、ソ聯經濟を以て社會主義化の試みの唯一の事例とすることは出来ないであらう。けれども獨塊のそれは程なく失敗中絶されたのであり、ひとりソ聯のみは、革命以來ともかくも今日に至るまで二十年のあいだ、不斷にして異常なる努力を社會主義のために捧げて來て居る。かくして凡そ社會主義Ⅱ計劃經濟の實現の可能性を論ずるものは、好むと否とに拘らず、不可避的にソ聯の經驗を問題としなければならぬのである。

この意味に於て私は以下をソ聯經濟の研究に當て、社會主義下の經濟計算に關して從來行はれた諸見解の正否を検討すべき一つの資料を提供するであらう。

なほソ聯に於ては革命とともに土地は名目上すべて國有とせられたけれども、農業は今なほホルホーズを主とし、而してホルホーズは組合經營であるが社會主義の原理の上に立つものと見ることは出来ない。それゆゑに便宜上別個に取扱ひ、卷末に附録として收めたが、いふまでもなく農業は爾餘の諸部門と不可分に聯關するものであるから、合せ讀まれんことを希望したのである。

### 十月革命直後に於ける一聯の措置

十月革命の直前に於けるレニンの見解は、次の如くであつた。

資本主義は必然的に發展して帝國主義の階段に達する。所謂帝國主義とは、自由競争の體制が既に本質的な點に於て止揚されて獨占的となれる所の資本主義の一形態である。世界大戦前のロシア資本主義は、他の西歐諸國のそれと同様に、すでにこの階段に屬し、世界大戦は、かかる獨占主義の資本主義をば、より高度の一形態なる國家的獨占主義の資本主義（國家資本主義）に轉化せしめ、勞働力並に重要な食料品の分配をば國家管理に服せしむるに至つた。戦時中ドイツに行はれた所のもの、即ち一般に「戦時社會主義」と呼ばれたものこそ、國家資本主義の標本であ

る。この國家資本主義の階段と、次の社會主義の階段との間には、最早中間の階段は存在して居ない。かくして革命直後のロシアに於て實現せらるべきものは社會主義である。而して社會主義が國家資本主義から本質的に區別されるのは、後者の諸施設が、ブルジョア國家の手からプロレタリア國家の手にもぎ取られ、從つてそれ等の諸施設が最早資本家達の利潤慾に奉仕するものでなく國家全體の用に供せられるのであり、且つはその限りに於て何等資本主義的獨占を形成しないといふ點に存する。尤も社會主義の經濟指導計劃の確立されるためには先づ以て一聯の措置が遂行されなければならぬが、其の重要なものは、(一)銀行の國有化、(二)シンヂケートの國有化、(三)すべての未加入なる經營の強制的なシンヂケートへの結成、(四)全人口の消費組合結成、(五)労働者の工場管理である。而して、これ等の一聯の措置の後に、ブルジョア社會から殘された所の經濟學者、技師、農業専門家を、諸々の労働者組織の管理の下に置きて計劃の完成と吟味の爲に使用するであらう。彼等をして集中による労働節約の道程を發見させ、又彼等をして、最も簡単な、最も愉快な、最も金のかからぬ、そして最も一般的な管理を實現せんが爲の手段と方法とを探究せしむるであらう。

以上簡単に述べた所は、革命直前に於けるレニンの見解の要旨であり、ボルシエヴィキー本來の綱領でもあつたが、十月革命の遂行につづいて、多少の先後はあるが、大體右の綱領に相應した一聯の處置がとられたといひ得る。

すなはち一九一七年十一月十四日發布の労働者管理に關する命令によつて、生産は舊來の所有者の手に、但し當該企業の労働者代表達の管理のもとに、續行さるべき事が規定された。いはば一種の産業委員會制度を採用したのである。而して労働者による管理の爲めの地方委員會が結成され、この委員會の決議が經營の所有者達に向つて拘束力を有することとされた。然るにこの規定の効果はどうであつたかといふに、勿論これによつて労働者の政治勢力は伸長されたけれども、經濟的に見れば大失敗で、第一に地方委員會の打ちづく干渉と無理解な命令とは、生産の増進を促さずして却つてそれを妨げ、終には労働者管理委員會そのものが、産業の集中的指導にとつて妨害となるまでに立到つた。といふ所以は委員會の中にサンディカリズムの潮流が旺盛となり、各委員會がそれぞれ自己の工場にしがみついて、その存立の爲めに必要な生産手段を奪ひ合ひ、互に經濟的闘争に奔走して、それこそ工場と經營とを、半ば無政府的な型の自治聯合に轉化させたからである。更に各工場内部に於ける使用人、官吏及び多くの企業者達はプロレタリアの管理に服することを好ま

す、或は武装抵抗をなし、それが鎮壓されて後は主としてサボタージュ（怠業）によつて身を護つた。労働者管理委員會の命令を遵守せざる者に對しては、刑罰としてその所有工場を沒收する旨が定められたのであるが、事實一九一八年六月一日迄に沒收された企業のうち、約七〇%はこの種の刑罰として沒收されたものである。銀行國有化の命令は一九一七年十二月十四日、廿七日に公布され、すべての銀行を國營となし、國立銀行に統一する旨を規定した。かくて一切の銀行業務の指揮は國立銀行に集中され、すべての企業は、専ら國立銀行からのみ信用を受け、且つ一切の勘定は國立銀行を通してなさるべきことが規定された。水運の國有化は一九一八年一月二十六日の命令により、外國貿易の國有化は同年四月二十三日の法令によつて遂行された。なほこれより先き一九一七年十月五日附の命令によつて最高國民經濟會議が設立された。經濟全般の指導と組織化の任務を果すためには、舊來の各省やその官廳は不適當と認められたからである。

これ等一聯の措置の結果として、如何なる状態を呈するに至つたかといふに、一言にして盡せば經濟は愈々益々混亂への過程を辿つたのである。農村に於ける混亂については別に詳述したから（附録第三参照）此處に繰返さぬが、工業方面に於ても亦、ルイコフの言葉に従へば、それは「労働者階級とブルジョア階級間の接戦、即ちバリケード戦が個々の工場や經營の中に移されたといふ事

實」によつて特徴づけられるものであつた。労働者管理委員會が工場の主人公となつたものの、その故にまた生産は混亂と衰退をつづけ、レニン、トロツキー、其の他の主腦部が、聲を大にして採算と管理の必要を説き、労働の規律と秩序の維持を強調しつづけなければいけません。其の效果はなかつた。

### 狹義の戰時共產主義への移行

右に述べたレニンやトロツキーの諸警告の中に、明に危機的状態が看取され得る。而してこの危機的状態はつひに、一九一八年五月の最高國民經濟會議第一回全露大會に於て暴露された。即ち同大會に於て到達せる確信を要約すれば、労働者管理委員會による無計劃的な占領と、諸企業の個別々の偶發的國有化とを以てしては、これ以上やつて行けないといふこと、而して經濟の秩序のためにはむしろ比較的重要な産業部門（鑛山、石油、化學工業、纖維工業）をば、全體として一度に社會主義化することが不可避であるといふこと、これである。大會の右の決議は、翌六月に至つて法律として實現せられた（かくして窮乏の中に於ける具體的必要に促されて、政策は所謂戰時共產主義政策へ移行し

ていつたのである。戦時共產主義時代は廣義に於ては一九一七年の十月革命から一九二一年三月の新經濟政策公布迄を意味するけれども、狹義に於ては一九一八年六月から、一九一九年十二月内亂の鎮定による戦時状態の解消まで或は一九二二年三月の新經濟政策の公布迄を意味する。）

すなはち一九一八年六月二十八日、最初の包括的な工業國有化令が公布された。この國有化令は純粹に計画的な經濟的考慮から發せられたものといふよりも、寧ろ、無組織にして生産を著しく害する様な、地方機關の從來の遣方をば秩序立てるといふ、具體的の必要に餘儀なくされたのである。それは兎も角、この命令も工業の衰勢を喰ひ止める力はなかつた。運輸及び燃料の危機は繼續し、加ふるに内亂と外國軍の侵入とに對處するためには、工業をば再び軍需品の製造に振向ける必要も起つたし、他面食糧供給の劣惡化の爲めに、一九一七年以來工業労働者は續々農村へ逃げ歸り、都市の工場は何れも労働者殊に熟練労働者の大缺乏に直面した。一九一九年に這入ると共に、食料品、原料、燃料の不足は更に尖鋭化した。といふのはこれ迄の貯藏品はすでに使用し盡されて、而も新しい輸入は杜絶したからである。

労働の規律を保つて生産力を維持するために非常な努力が拂はれたにも不拘、生産力は日々に低下して行き、一九一八年十一月三十日に新設された労働國防會議(ワボコ)は終に一九一九年十一

月二十一日附で、木材供給労働の軍事化（木材供給のための労働義務令）を敢行した。これによつて、舊支配階級に屬せし人々に對して形式的に存してゐたに過ぎなかつた労働義務制は、廣く労働者にまで一般化せられることとなつたのである。労働者の労働選擇の自由はマルクス主義が元來確保を約束して來た所であり、一九一八年四月頃には、なほ左翼共產主義者は労働義務が労働者の上に擴張されることに反對してゐたのであるが、今や「計劃經濟は強制經濟である」といふ社會主義批判者の見解の正しさを現實の上に示して來たのである。右の義務令は其の後、一九二〇年一月二十九日の命令によつて更に擴大され、十四歳以上のすべての労働に堪へ得る住民は「労働兵」と呼ばれて、燃料の供給、農業労働、生活資料の供給労働、建築労働、運輸労働、雪や氷の排除、傳染病豫防戰等の、一回或は周期的に繰返しての遂行の爲めに徵發召集されることとなつたのである。

物價は騰貴した。而も勞賃の騰貴は到底それには及ばなかつた。殊に一九一八年末以來は、商業資本が國有化せられ私的商人は祕密取引をするの外はなくなつたがために、労働者は自由市場で物資を手に入れる望を失ひ、従つて一九一八年の末には、労働者側からすすんで、勞賃を實物で支拂ふ事を要望するに至つた。食料品の缺乏のために所謂切符制度が採用され、工場労働者、其の親族及び以前の支配階級の三種に分類して、實物による配給（切符と取替に一定量の貨物を交附する制度）が

行はれたが、最も好遇された工場労働者ですらも、受くる配給量は、漸くにして饑餓的生存を保證する底のものに過ぎなかつた。

一九一九年の秋、ソ聯は軍事的には勝利を収めて、内亂は終結し、聯合國は媾和の締結を宣言してゐた。かくして今こそは、全國力をあげて經濟戰線に集中することが可能なる状態に置かれた。そうして一九二〇年は、一箇の計劃に導かれる所の市場なき集中的管理經濟樹立の爲めに未曾有の努力が捧げられた年である。上記の如く労働は軍事化されて戰爭計劃の代りに一個の經濟計劃があらはれ、そしてこれが遂行の爲めに、労働軍が各方面に派遣された。最早や市場とその法則の爲めには、毫も存續の餘地が残されざるに至つた。上述の如く、市場撲滅のためには、意識的闘争が敢行された。元來共產主義者の見解に於ては、市場こそは「資本主義」の支柱と見られたのであり、従つて市場廢止の法律は、すでに形式的には、一九一八年（五月九日附及十一月二十一日附の命令）以來公布されてゐたのであるが、それが内亂の鎮壓と共に益々強化されて行つた譯で、一九二〇年四月に開かれた第三回全露労働組合大會におけるレニンの演説は、彼等が市場と如何に積極的に戦つたかを示すものである。すなはちレニンは云つた。

「すべて自由取引での穀物の販賣は、商品經濟の復興を、従つて資本主義の再建を意味する。農

民達は依然その居住地の所有者に止つて居り、そして新なる資本主義的諸關係を創造して居るのである。吾々は階級闘争を遂行する……」と。

いふまでもなく自由市場の絶滅につれて、これまで市場が果して來た諸機能、即ち生産物の分配のみならず、生産の指導も亦、諸々の中央管理機關の手によりて意識的に擔當されねばならなかつた。切符制度は漸次擴張されて、一九二〇年四月卅日の命令では、貨銀は盡く實物で支拂ふべきことが定められた。ついで十月十一日には「電話、水道、下水装置、電氣の利用」及び運輸機關の利便にすべての國家經營の労働者と使用人及び労働不能者、赤軍の家族等に於ける燃料の供給と家賃とは無料とするといふ命令が發せられた。この命令は、十一月四日に至つて、消費財は専ら給養人民委員部により配給され、且つ諸々の國家經營の労働者と使用人に對しては無料で交附されるといふ規定によつて補足された。この事は都市住民の大部分の給養が給養人民委員部の配給に依存する事を意味する。即ち物資は貨幣なくして動かされた。國家企業間の關係も貨幣ぬきで規制された。租税は拂はれず、市民は無償で勤務し且つ必要品は主として實物で與へられたのである。

## 破局と其の原因

かかる共産主義政策の究極する所は、實に破局と荒廢以外の何物でもなかつた。破局は先づ以て都市を襲ひ、ついで農村に及んだ。多數の人々が都市から逃出した。例へばレニングラードの住民數は一九一七年に比して三分の一に減少し、モスクワの住民は半數に減じたのである。農村はその收奪の強化に抗して立上つた。而してそれが鎮壓せられるや、生産放棄の消極的な抵抗をつづけ、終には經濟的危機が政治的危機をはらみ、共産政權そのものが危殆に見えた。レーニンをして、大膽卒直に、戦時共産主義の失敗を是認せしめ、所謂新經濟政策への大轉換を世界に聲明するの餘儀なきに至らしめた。這般の事情に就ては別に述べたから参照されたい（附録第三、第四六八頁以下）。常にソ聯に同情ある筆致を用ふる點でマルクシスト達から喜ばれるポロツク氏すらも一九二〇年の狀勢を「工業の崩壊」と題して次の如くに叙述してゐる。

「戦時共産主義時代の終には、形式的には二百萬以上の労働者を擁する三萬七千二百十六の經營が最高國民經濟會議の下に立つてゐた。かく多數の經營であるのに、國民經濟の徹底的組織化と

いふ集中的管理装置の形成に就ての一切の措置が、結局不成功に終つたのである。……全産業に就て算定するに、生産總額は一九一三年の状態の一八%迄低下してゐた。だがこの數字は單に總額平均を示すにすぎぬもので、その石腦油に就ての四二・七%、石炭採掘についての二・四%といふ如き諸矛盾を含んでゐるのである。……」

同じくボロツクの擧げてゐる所によると、纖維工業の最も重要な部門たる木綿工業についていへば、一九二〇年は戦前生産の辛じて二十分の一を生産し得たにすぎない。而もこの僅に二十分の一を生産するがために要したる燃料は、戦前の四分の一、労働者は四分の一餘を費してゐる。而して一人當りの生産力は僅に八分の一弱に低下したのである。纖維工業の重要部門たる羊毛工業に於ても、木綿工業程ではないまでも大體同様に成績は悪化してゐる。

吾々にとつて重要なことは、何故戦時共產主義政策が破局と荒廢に終つたかといふ根本の理由を明かにすることである。人は往々にして、ロシア工業が未だ充分に集中化してゐなかつたが爲めに社會主義に適しなかつたのだといはうとする。併しそれは事實に反する。又「原料や燃料の輸入の杜絶、労働者達の生活必需品調達のための日常闘争、無數の集會やデモンストレーション等が、一九二〇年の多くの月に於て實際の労働日數を少くした」事を一の原因と見るボロツクの見解は、確

かに誤りとはいへない。けれども何よりも大きな原因は市場の破壊による經濟計算の喪失、従つて起る生産手段及び消費財の非經濟的な配分乃至分配に歸せねばならないと思ふ。

所謂「資本主義」組織の下に於ては、各企業はその必要とする生産手段をば、各々獨立して市場に求めるのであり、而して其の調達の可能性は、企業の成績に適應する。言換へれば生産手段は成績のよき企業を求めて自ら移動するのである。然るに戰時共產主義の場合の如き實物社會主義制度(Natural Socialism)の下に於ては、生産手段の配分條件は甚しくそれと異なる。各企業の生産物は、當該部門の管理委員會の處分に委ねられるが、諸の實物があつても、その價值を表現すべき尺度が存しないから、何人と雖も、生産の犠牲もその効果も共に計算するに由ない。而して犠牲も効果も測定し得ずしては、經濟的な生産と分配とがあり得る道理がない(實は當時どれだけの生産手段が、何處に如何なる質と量に於て存在するかといふ事さへも管理委員會には判つてゐなかつたので、生産手段はいはば勝手に配分されたのである)。一九二〇年の秋、生産費計算方法の發見を中心として大論争の展開されたのは決して偶然ではない。「ロシアは現に陥つてゐる盲目の状態から脱出せねばならない。生産費計算を行ふために、すでに全く用をなさざるに至れる貨幣計算の代りに一の價值尺度が發見されねばならぬ」と叫んだ經濟學者のヴァルガこそ經濟混亂の眞因を把握し得たものといはねばならぬ

（第一四七頁参照）。又消費者自身に消費物の選擇を許さぬ實物配給が如何に需要に適應し難く、財貨の效用を減殺するかは多く説明を要せぬであらう。

かくして戦時共產主義の失敗はその制度に内含する所の缺陷に素因するものであつて、戦争の妨げ其の他は第二義的なものにすぎない。それ故にこそ戦争終熄後の四ヶ月間に於ても、工業生産に於ても消費生活に於ても毫末の進歩が見られなかつたばかりか、益々混亂の度を深めたのである。市場を失へる戦時共產制は都市に窮乏と衰退とを齎したが、その間農業の方は内亂と農業革命、剩餘の強制收奪と怠業とによつて荒廢せしめられた。かくして結局新經濟政策の布告によつて、市場の復活に救ひを求むるの外危機を脱する方法は無かつたのである。

### 新經濟政策の本質

新<sup>ネ</sup>經濟<sup>ツ</sup>政策<sup>プ</sup>は、政策轉換に際してのレニンの聲明によつても知り得る様に、市場の復活をその本質とする。換言すれば、賣買による、個々の企業間の横の連絡の再建であり、市場價格といふ共通なる價值尺度の出現である。この意味に於てそれは所謂資本主義組織への退却であつた。だがこ

れによつて、經濟計算は漸く可能となり生産は秩序と復興への道を辿り始めた。經濟的生產及び分配に於て、市場が如何に重要な役割を果すかといふ事に就て、戰時共產主義が消極的な證據を提供したものとすれば、新經濟政策はその積極的證明を與へたものといはねばならない。

ネップの本質は上述の如く、市場の復活であり、社會主義の所謂資本主義への退却であつた。けれどもソ聯當局は、それによつて決して社會主義の實現を終局的に斷念したのではなく、それは要するに窮餘の策としての一時的讓歩にすぎない。その終局目標として把持してゐたものは、終始一貫して社會主義計劃經濟の招來といふことであつた。ただ彼等の多くは戰時共產主義失敗の直接原因をば、農民の反抗にありと見たるが故に、新たな經濟政策を以て農民の不滿を緩和し、農民の大多數をして少くとも好意的中立に立たしめ、出來得べくんば「同盟」にまで誘ふ事を以て社會主義建設の前提と解し、而してかかる社會主義建設の前提をつくるがためには、實に市場の復活てふ犠牲を拂ふも敢て高きに過ぎないと考へたのである。つまり社會主義への前進の爲めの戰略的退却に外ならない。これがネップの根本思想である。このネップの本質とその根本思想とを理解せずしては、ネップ時代の諸政策は、恐らくは了解し得べからざるものとなるであらう。新經濟政策が以上の根本思想に立ちたればこそ、なほ大工業、銀行、運輸、外國貿易の國家獨占、立法上及び行政上

の權力手段をもつ國家裝置を變更しようとはしなかつたのである。

世界革命の必然を信じた時代に於ては、彼等はロシアを以て世界的共產社會の農業部面を形成するものと理解してゐた。然るに世界革命の歩みが彼等の豫想の如く進捗せざるを認めた共產黨は、漸次一國社會主義の實現に傾いて來た。而してその爲めには何よりも先づロシアを工業化しなければならぬ。黨を武装するためには勿論、共產政權を敵視せる個人農を驅逐するためにも、急速な工業化が必要であり、殊に重工業の建設による農業機械の供給が必要である。然るに重工業の建設のためには差當り外國から多くの機械の供給を仰がねばならぬが、その爲めには農産物の輸出を必要とする。而も穀物輸出による機械輸入を確保するためには、外國貿易の國家獨占を手放してはならなかつた。兎も角も、思想に就いて見る限りは、ソ聯當局の政策は革命以來、戦時共產時代、ネツプ時代はいふまでもなく、五ヶ年計劃期以後の今日迄一貫して變更を見ないといふべきであらう。

かくて一九二二年の春三月、即ち新經濟政策への轉換後僅かに一年にして、レニンは「退却は停められねばならぬ。而して經濟政策の指導的地位に自らを確保しなければならぬ」と宣言してゐる。上記の如く大規模工業、運輸、信用、外國貿易は引續きなほ國家の手に残されてゐたが、政府は更に、農産物の充分なる供給を得んがために新に商業機關を創設した。即ち協同組合を復活して、

政府の手に其の指導權を握つた。素よりこれ等の諸機關は或程度まで資本主義的組織の形式を採用したものである。ただこれ等の組織は充分な機能を果すことは出来なかつた。といふのは、國營事業は主として政治的利益の爲めに動かされ、利潤を規準に經營されたのではなく、企業の獨立性も甚しく限定されたものであり、而して官僚的性質が當時の國營企業の特徴であつたからである。

ネツプの下には所謂社會主義部門と私的部門とが並存し、形式的には市場で相互に連絡を保つことになつてゐた。小規模の私的企業の地位は、色々な點で大規模の特權的國有企業よりも不遇に取扱はれたにも不拘、その國營事業との競争力は極めて強く、私的商人は常に大規模工業に對して、政府の國營商業機關よりもより高き代價を支拂ふ用意をしてゐた。かくして私的部門は法律的にこそ不利な條件の下におかれたが經濟的には常により強靱な力を示したのである。

一九二二年の終には民法が制定されたといへ、ロシアでは共產黨の權力が絶對的である爲めに新經濟政策發動後僅に二年半を経た一九二三年の秋には、早くも新經濟政策が私的部門にとつて法的安固を保證するものに非ざる事を示した。即ちレニンの病臥以來黨の内部に其の指導的地位を占めてゐたトロツキーを指導者とする所謂反對派が起つて來た。トロツキーは、新經濟政策の下に於ける經濟的復興の顯著なりし事實はこれを承認したけれども、彼は、それこそは亦實に、社會主

義の將來を脅かすものと見たのである。即ち彼は農民の影響力の成長しつつある事、大規模農民の一階級（クラーク）がソヴェート政權の危険物となりつつある事を指摘し、速に農民に對して斷乎たる壓迫を行ふべき事を強調した。この見解は、勞農同盟の基礎の上にのみソヴェート國家の直接の將來が建設さるべしとせるレニンの見解とは甚しく矛盾せるものである。トロツキーはやがて排撃せられて沈黙を餘儀なくせしめられた。だが彼の宣傳煽動は黨の政策の上に少なからぬ影響を及ぼし、翌二四年の初頭には、新經濟政策の公布後三ヶ年間に粒々辛苦して蓄積された私的資本の大部分は政府に沒收された。私的商人は大規模工業の生産物を取扱ふことを禁止せられ、その代りに、政府の指導下にあつた協同組合がそれを引受ける事に決定された。富裕農に對してかなりの斷壓が加へられた事は勿論である。

然るに一九二四年の凶作と一聯の農民壓迫後に、トロツキー主義への反對派が再び勢力をもり返して一九二五年七月に開かれたソヴェート聯邦會議に於ては、農民に關する限りに於ては、自由政策が勝利を占めて、富裕農との妥協が考へられた。ブハーリンが黨の指導的見解を代表して、農民に向つて「致富せよ！」とさへ呼掛けたのはその時のことである。いふ迄もなく、それに應じて私的商業への斷壓の手は緩められた。

## 一九二四年の恐慌——ネップ末期の行詰

國營企業は獨占組織なるが故に、勢ひその生産物について高い價格を要求する傾向をもち、而もその經營は利潤性に關心を有せざるが故に、生産費を引下げる努力を缺くことも當然の傾向であつた。一九二三年の終から二四年初にかけての工業製品の販路恐慌（生産過剩）は、こうした傾向の必然の結果である。この恐慌について特に注意せらるべきことは、當時の生産高が大戦前のそれの僅に三分の一にすぎなかつたに不拘、早くも生産過剩に陥つたといふ事實である。

この恐慌の原因の一是、工業品の購買者たる農民が一九二三年秋のインフレーションで甚しい損失を蒙つてゐたといふ事であつたが、一九二四年二月に通貨は安定して、停頓のこの原因は除却された。所がもう一つの原因が残されてゐた。それは工業製品の價格が甚しく高かつたといふ事實である。一九二三年十月、工業製品の卸賣指數は一九一三年を一〇〇として、二七五七を示したのに對して、農業産物の卸賣指數は僅に八八八を示したので兩指數の比は正に十對三であつた。事態かくの如くあるから、農民達は取引に於て大規模工業を相手とせず小規模の私的工業を相手にしよ

うとつとめ、私的工業が必要品を供給し得ない場合には、農家はむしろ自給自足に甘んじて、敢て買はうとはしなかつた。かくて國營工業の製品が賣れないに不拘、國營企業自身は價格を引下げようとしなかつた。そこで政府が價格の引下げを命じたが、國營事業に對する政府の價格干渉は成功して、一九二四年四月一日から一九二五年七月一日に至る間に、工業製品の價格は三一・二%方引下げられた。この事實は吾々にとつて極めて教訓的である。即ち獨占企業なるものは、それが國營なる場合に於ても、政府の上からの指令なくしては、自ら進んでその經濟的操作をしないものといふこと、即ち政府がそれを監督し、その賣價を決定しその生産費減少を強制する必要があるといふことをば、私は右の事實から教へられる。それは一般に企業の國有化を問題とするものにとつて、看過すべからざるところの一點であらう。

ソ聯にあつては、政府は自らの豫算をつくるだけでなく、重要な産業部門——大規模工業、運輸、外國貿易、農産物の徵收等の爲めに數多の計劃を認可確定しなければならぬ。而して一九二一年二月に創設された國家計劃委員會ゴスプランはこれ等の諸計劃の吟味に従事して居たが、やがて必然的に、みづから一般的經濟計劃を樹立しようとする考が起つた。といふのは、一般的經濟計劃をもたないでただ各部門の提出せる計劃を別々に吟味し認可するといふだけでは、個々の計劃の間に相互に矛

盾衝突を免れないからである。

それ故に新經濟政策は、決して一般的經濟計劃の希望を放棄したのではなく、寧ろこれまで以上にこの問題を黨の任務となす條件をつくるものでさへあつた。といふのは戰時共產主義の時代に於ては、頻りに一般計劃といふ事が叫ばれたけれども、少しもそのために眞面目な努力がなされたのではない。そのための必要な條件を缺いてゐたからである。一般的經濟計劃の樹立のためには、貨幣で表現された貸借對照表を必要とするが故に、貨幣なき經濟組織に於ける一般的經濟計劃とは一の内的矛盾を包含するものである。貨幣なくして一般計劃を樹立することは、不可能であつた。新經濟政策の公布後三ヶ年、一般的な何等の計劃も樹立し得なかつたのは、根本的條件としての安定せる貨幣價格が存在しなかつたからである。さきに云へる如く一九二四年二月に通貨が安定して、初めてこの一般的經濟計劃樹立の具體的條件が整つて來た。そこで一九二五年の夏、初めて一九二五—二六年度（當時は會計年度は十月一日にはじまり九月三十日に終つて居た）に對する經濟的統制數字（一般的經濟計劃のアウトライン）が、國家計劃委員會によつて公にされたが、このことはソ聯經濟のその後の進行に對して、決定的意義を有つものであつた。統制數字を云々するものは多いが、而もその樹立の條件が通貨の安定に存した事實を注意するものは少く。

勿論當時の國家計劃委員會に於て、指導的立場を取つてゐたものは非黨員の専門家連であつたがために、一九二五年に公された統制數字はなほ極めて謙遜な目的を持つたにすぎず、統制數字は決してこれまでもあつた個々の部門の計劃に代るといふ筋合のものではなく、従つて各個の部門はなほ各々その計劃をたてねばならぬが、ただ發展の一般線と矛盾しないために、この統制數字を考慮に入れて、各自の計劃を作らねばならぬといふ事になつたのである。詳しくいへば一九二五年に作られた第一回の統制數字は私的産業、殊に大規模の個人農業の發展を豫想することを主たる目的としたものである。畢竟國家計劃委員會は、大規模個人農業の發展を妨げたく無かつたのであり、この豫想に基いて國營企業の管理者は、指令を受けとつたのである。勿論各企業はその指令に盲目的に服従するといふのではなく、市場の状態に適應して工作しなければならなかつたのであるが、併し指令の基礎に個人農業の發展が前提として豫想されて居たのである。元來國家計劃委員會の考によると、市場に於ける需要供給の均衡を保ち、私的部門と社會主義部門との市場に於ける自由な連絡を保證することを以て、經濟政策の最も重要な任務の一つと看做してゐたのである。然るにかかる計劃委員會の見解は黨中央部の見解と一致することは出来なかつた。黨中央部の目的とする所は何よりも「工業の急速なる再建と發展」とであり、この目的遂行に要する資金は、個人農から提供さる

べきものと考へられた。即ち工業労働者の食糧と工場の原料とを、個人農から豊富且廉價に提供させようと考へられたのである。そればかりではなく、農民は農産物の剩餘、殊に穀物の剩餘を外國への輸出のためにも供給しなければならぬ。蓋し工業の再建の爲めには莫大な機械と原料との輸入を必要としたからである。

かくの如くにして、黨中央部の壓力の下に、國家計劃委員會は、結局一九二五—二六年度の統制數字を作製したのであるが、彼等は、未だ通貨の安定してゐなかつた一九二三—二四年度の經驗に基いて、穀物をは、當時と同様に廉價に買ひ上げ得るものと想定した。といふのは、一九二三—二四年度に於ては、ソ聯政府は戰前の二倍乃至三倍も廉價に、農民から穀物を買上げ、而も狭いながらも國內市場の需要をも充した上に、二七〇萬噸といふ輸出を行ふことに成功したのであつた。一九二四—二五年度に於ては、政府が想定した程安く穀物を買ふ事も出来なければそれ程の分量を輸出することも不可能であつたが、政府は、その不成功を、専ら一九二四年の不作といふ偶發的の原因によるものとなし、従つて一九二五年度に對してはすばらしい收穫を豫想したのである。かくして國家計劃委員會は一九二五年度に就ては、一九二三—二四年度のそれに似た狀勢が穀物市場に現出するであらうと豫期し、國營の商業諸機關は、戰前よりも廉價に大量の穀物を買上げるべく、着

着準備を進めて居た。

ところが彼等は、この二ヶ年間に發展した自由商業の著しい進歩といふ重大な要素を看過して居た。自由取引進歩の故に、政府は思ふ値段で買ふ事が出来ず、戦前に比してさへも若干高價に穀物を買上げざるを得なかつた（一九二三年を一〇〇として一一八・九。而も分量からいつても計劃によると一三〇〇萬吨の買上を豫期したのに、事實は九六〇萬吨を、而して穀物の輸出は五―六〇〇萬吨の計劃であつたものが、僅二一〇萬吨が可能であつたにすぎない。即ち一九二三―二四年度のそれよりも更に少量にとどまつた。國營商業機關が如何に穀物市場に壓力を加へて見ても、自由市場の發展して居るために、農民に價格を指令することの出來様筈はなかつたのである。

然るに穀物市場に於ける、この部分的失敗はソ聯政府にとつて由々しき政治的困難を惹起した。蓋しトロツキーの左翼反對派が「それ見た事か」といふ譯で、再びその勢力をもり返し、レニンを支持してゐた知識層の殆んどすべてが、トロツキーの陣營に走つたからである。勿論時の黨書記長たりしスターリンの斷乎たる一撃を喰ひ、ついで一九二七年十二月第十五回黨大會に於けるトロツキーの除名によりて、政治的には一時解決せられたが、併し、スターリン自らは段々と反對派のプログラムを己れのプログラムとするに至つた事は注目されるべきである。

上述の如く、一九二五—二六年度の經濟計劃は失敗した。けれどもそれによりて黨は素より計劃經濟への希望を放棄したのではない。統制數字は、其の後も年々引續いてあらはれた。且つ其の意義は益々強調されて、その代り、各産業部門の個々の計劃の樹立は遂にやめられる事となつた。而して黨の見解では從來の舊い工業が再建せられて後は、計劃經濟の主たる目標は「新たな重工業の創設にあり」とされた。尤もなほ多數は非黨員専門家であつた統制數字の作製者達の見解は、相變らず、私的部門と社會主義的部門との間の形式的な自由連絡を維持することに存し、經濟計劃の最も重要な仕事は、市場に於ける需要と供給との均衡を保たしむるにありとの信念を變へなかつたのである。

だが國家計劃委員會のかうした努力にも不拘、農民の上になされた穀物買上數量の要請があまりにも大に過ぎたがために、穀價は必然に騰貴し、私的自由商業の存在する限り、計劃による價格が強制され得ないものだといふ事が明瞭となり、遂に私的商業の排除が決定された。私的商業排除の手段としては、何よりも先づ、行政的手段によりて、地方相互間の穀物取引の私的資本が排除され、ついで商業のすべての部門から、任意の課税と徴發とによる私的商人の排斥が企てられた。更に又、大規模國營工業と原料を競争する所の小規模なる私的工業の多くは種々なる口實の下に驅逐された。

かくてソ聯政府がその豫め決定せる價格を強制し得たといふ事だけをいふならば、かくの如き私的商業の絶滅によつて、一九二六—七年度には其の目的を達したのである。國營商業諸機關によつて買取られた穀物の價格指數が一九二五—二六年度に一一八・九なりしものが翌一九二六—二七年度には一〇五・八へと低下したのはそのためである。

併し同時に市場は農民に對する魅力を喪失し、穀物の蒔付面積は一九二六年まで（一九二六年も含めて）引續き増加され、且一九二六年の收穫は良好であつたにも不拘、市場に提供された穀物の比率は、戦前には二二・八％に達したのが一九二四—二五年度、一九二五—二六年度、一九二六—二七年の三ヶ年度に於て一四％乃至一五％の間を往來して、毫も進歩の跡が見られなかつた。農民達はその穀物を市場に出さうとはせず、自ら貯藏するか、若しくは家畜の飼料としたのである。動物性産物については當時なほ市場に於て、私的商業が重要な役割を占めてゐたが爲に、國營商業も亦、その方面では、それに應じた高價な價格を支拂はねばならなかつた（指數は一六三・一）。一九二六—二七年度の穀物輸出は二百二十五萬瓩でなほも一九二三—二四年度の二百七十萬瓩には遙かに及ばなかつた。十億に近い投資と二十五％の通貨膨脹（一九二五年十月一日の十三億四千三百三十萬ルーブルから一九二七年十月一日の十六億七千八十萬ルーブルへ）とは、インフレーションの徴候を示し初めた。

價格の統制と比較的高い勞働賃銀との關聯に於て、インフレーションのこの状態は、地方に於ける工業製品の供給を少くし、従つて農民は愈々その生産物を賣つて金に代へる事を嫌つた。ソ聯政府は屢々農産物の強制徵發への誘惑を感じた。當時經濟研究所は一九二六—二七年の經濟的發展についての見解に於て、この危険を豫告し、戰時共產主義の經濟的方法の再現する恐れあること、否すでに或種の戰時共產主義的現象のあらはれてゐることを警告した。

戰時共產主義を去ること未だ遠からず、當時は恐るべき記憶のなほ新たなるものがあつたがために、上記研究所の警告は、黨内に憤怒の嵐を捲起して、直ちに研究所は閉鎖を命ぜられた。けれどもその豫見が誤りでなかつた事實がやがてこれを實證した。すなはち一九二七年は天候に恵まれたけれども、曾て見なかつた程の農民壓迫が行はれ、その爲めに穀物耕作の再建は停頓するに至り、同時に穀物の收穫は、再び農民の關心を惹かざるに到つた。かくて農民が新經濟政策の下に稍恵まれたのも僅に二ヶ年にすぎなかつた譯である。

私的商業の排撃の結果として、地方では「取引の荒廢」がその姿をあらはして來た。蓋し農民は信用の置けない紙幣を手に入れるために廉い値段で穀物を賣らうとはしなかつたからである。而も今や私的商業を排除した政府としては、當然に國民への食糧供給の全責任を自ら負擔せねばならず、

一九二八年一月には、餘儀なくも地方に於ける市場を閉鎖して、穀物及び或種原料の強制的徴發に訴ふる事を決定し、ネツプの最後の支柱はここに全く崩壊して仕舞つたのである。

尤も一九二八年一月を以てネツプの支柱が崩壊したと見る事は吾々が批判的にいふ事であつて、當時ソ聯當局の意識に於ては、右の強制徴發はただ一時的偶發的の現象であると解し、同年（一九二八年）の春には再び穀物の自由販賣に復歸しやうと企てて居たのである。けれども最早農民から國定價格で大量の穀物を自由に買上げることは不可能であつた。自由價格との間には餘りにも大きな溝渠があつた。ネツプは完全に死滅してゐた。ソ聯は最早あとに戻る事は出來ず、五ヶ年計劃への突進はかくしていはば不可避的に行はれたのである。

以上の敘述に於て吾々の注意すべき事は、ソ聯當局がネツプの末期、即ち五ヶ年計劃の着手以前に於て、すでに行詰りに達してゐたといふことである。而してその行詰りの本質は、ネツプの本質たる市場取引（市場經濟）そのものの行詰りではなくて、その上に企圖された經濟計劃の試みによつて惹起されたといふことを銘記しなければならぬ。即ち計劃化の試みは、その第一歩に於て、すでに經濟生活の私的形態の破壊を招き、農産物の強制的收奪に導いた。計劃經濟は權力の經濟をその本質とするといふことを明白に示現しつゝあつたのである。このことはすでに一度、戦時共産時

代が經驗した所であつたが、それが再びここに證明されたのである。

## 五ヶ年計劃の由來と其の本質

すでに折にふれて述べた様に、「市場」が經濟の指導者たることの代りに、全經濟過程の恐慌なき進行を保證すべき「一個の一般的總括的計劃」が出現しなければならぬといふことは、マルクス社會主義の根本思想であり、従つて亦ボルシェヴィキ理論の基本思想の一つである。このことはマルクスを信奉するものとして當然の事であるが、すでに一九一九年三月のボルシェヴィキ黨綱領は「國家全體の爲め統一的に作製された一計劃に基き、我國の經濟活動全般を力の及ぶ限り統轄すること」を以て「緊急なる任務の一つ」と明言してゐる。一九二一年二月二十二日夙に國家計劃委員會が樹立されたのも敍上の目的遂行のために外ならない。かく見るときは、所謂五ヶ年計劃なるものもその起源は古いのであり、或意味に於ては社會主義思想の發生と共に初まるといつても過言ではない。ただ現に立案され、遂行された所の所謂「五ヶ年計劃」なるものに限つていふならば、それは上記の國家計劃委員會が、黨議に基いてなせる、數年に互る努力の所産であつた。所謂「五

「五ヶ年計劃」の最初の草案が出来上つたのは、一九二七年三月の事である。ただその吟味に二年以上の日子を費したがためにそれが最終的にソヴェート聯邦會議で裁可確立されたのは、一九二九年三月二十八日であつた。尤も計劃が最終的に確認される以前から實行に着手されてゐたのであつて、従つて第一次の「五ヶ年計劃」の所謂五ヶ年とは、周知のごとく一九二八年十月一日より一九三三年九月三十日に至る五ヶ年間をさしたのである。最後の確定を得る一年も前から着手してゐるといふ様な事は、一見不可思議に思はれようけれども、ソ聯の現在では敢て珍らしい現象ではない。一九二八年十月一日より翌年九月三十日に至る第一年度に對しては、同年度の「統制數字」が充當せられて來た。「五ヶ年計劃」は「統制數字」による計劃の經驗の結果生れたものであり、五ヶ年分の長期の計劃であつて、次年度に對する一年毎の「統制數字」は、五ヶ年計劃樹立後に於ても一應は引つづき作製されて來てゐるのである。従つて一九二九—三〇年以後の年度に對しては、五ヶ年計劃數字の外に統制數字が並び存する譯であり、従つて計劃と成績との比較を行ふ場合には、常に五ヶ年計劃數字の外に當該年度の統制數字をも問題としなければならぬ。

五ヶ年計劃の立案について、今一つ忘れてならぬことで、而も我國では一般に注意されて居らぬことは、立案より確定に至る迄の國家計劃委員會内部に於ける共產黨員と非黨員専門家との間の意

見の對立である。非黨員専門家達の多數の見解では、あく迄も過去の發展率を基礎として、自然の發展を見積つた案を作製しようとするに對して、黨員の方では、先づ目的を定める事を主張した。黨員で指導的立場にあつたストルミリンが「計劃の技術は現在世界に妥協するものではない。その目的は世界を知る事にあるのではなくて世界を變革することである。それは積極的に一つの新しい世界を創造するのだ」(Strumilin, the Theory of Planning, 1929. [Brutzkus, Economic Planning, p. 124])と豪語してゐるのは、最もよく黨員側の見解を代表するものである。非黨員専門家の見解は「自然派」と呼ばれ、黨員の見解は「目的派」といはれた。ソ聯で優位を占むるものは政治であり黨であるから、非黨員が強壓を加へられて、黨員の見解に順應した立案を餘儀なくせられたことは云ふまでもなう。

斯様にして一九二七年の春には二通りの案が出来上つたのである。何れも黨の意志に従つたものであり、従つて非黨員専門家達の内心賛同し得ざるものであつた。第一案と第二案との間には豫定數の上に約二〇%の開きを有し、第一案では、五ヶ年に於ける實現條件を内輪に見積つたに對し、第二案に於ては何もかもが順調に行くものと豫想しての數字である。故に第二案は普通「樂觀的豫定」と呼ばれる。而も最後に五ヶ年計劃案として裁可認定されたものはこの第二案であつた。

五ヶ年計劃が非黨員専門家の力を俟つて出来上つたといふ事の外に、今一ついつて置きたい事は、この案はゴスプランが全部獨創的につくり上げたものではなくて、舊帝政時代に「帝國ロシア技術協會」の手によつて行はれてゐた數多くの研究の結果を大いに利用したといふ事實である。帝國ロシア技術協會は、戦前すでに有名な専門家ゴヴァレフスキーとルチュギン教授との指導下に調査研究したのであつて、五ヶ年計劃もそこまで遡れば着想は随分古いものといはねばならない。

五ヶ年計劃の主たる目的とする所は、既に統制數字の目的とせし一般的經濟計劃の樹立であつた。ただ相違する所は、その豫定せられし發展率が比較にならぬ程大きくなつたといふだけの事である。それはただに經濟の見地で決定されただけでなく、甚しく黨の政治的並に軍事的考慮に支配せられてゐる。政治的考慮といふのは、元來共產黨はプロレタリアの前衛であつて、農民のそれではない。農民は共產黨に反感を有し、うるさい問題といへば農村から起るのが常であつた。而も左様な人間が總人口の八割も占めて居つては、共產黨の政權は實に不安定といはねばならない。そこで總人口のうちプロレタリアの占むる割合を増加することによつて、共產黨の階級的地盤を擴大しなければならぬ。これが五ヶ年計劃に於て、巨大な工業化を決意し、而も工場が國の邊境地方にまでも建設せられるに至つた所の、隠された政治的理由であつた。また輕工業が比較的輕視されて、重工業殊に機械工業の發展に重點の置かれたのは、主として軍事的考慮からである。

從來の如き、工業のドネツ炭坑地方への依存を避けて、水力の發展と新坑區の開發が努力せら

れた事も注目に値する。南ウラル（マグニットゴルスク）と西シベリア（クズネツク）間の二千四百キロメートルを連絡する金屬コンピナートの建設が決意せられしも、主として軍事上の見地からなされた見なければならぬ。

五ヶ年計劃の目標を數字的に示すならば次の如くである。

○重工業（A群）二二一%の増加

○輕工業（B群）一二二%の増加

○農業生産 五五%の増加

○國營農場及集團農場ソホィーズの形に於て、社會主義的農業の發展

○個人農達は、トラクター及び其他の農業機械をそれに供給し得る限り、自發的に集團化せられること、市場に提供し得る農産物の二五%、市場に提供し得る穀物の四二%が五年後に社會主義的農業から得られる事。かくして市場の個人農業への依存を甚しく減殺することが企圖された譯である。

## 資金調達の方法——貨幣經濟の前提と市場均衡の考慮

さて上述の目的を遂行するには素より莫大な資金を要する。國家計劃委員會の計算によると、總資本額の變化は流動資本を加算して、一九二六—二七年の價格で表せば、一九二七—二八年の八四八億ルーブル（主たる資本七〇二億留）に對し、一九三二—三三年の一六一四億ルーブル（同、二二七八億留）で、即ち八二・七％の増加であり、新投資は舊資本の九〇％の増加である。

この莫大な資金を如何にして得るかが第一の問題であつた。周知の如く、從來これを諸外國に求めて得ざりしソ聯當局としては、右の巨大な資金を、いや應なしに、年々國民所得の内より節約蓄積して行かねばならぬ。そこで五ヶ年計劃は、先づ勞働生産力の増加により、詳言すれば、西歐殊にアメリカの最新式の機械をロシアに移す事によつて、國民所得は五ヶ年後には倍加するもの、正確にいへば一〇四・一％の増加をなすものと豫定し、而して斯くの如く國民所得が年々急激に増加するものと豫想せるが故に、國民生活に對し何等の犠牲をも要求することなしに、よく國民所得の三〇・五を投資し得るものと考へた。國民に犠牲を要求するどころか、四年後には所得が一人當り、

約三分の二だけ増加するものとさへ豫想したのである。

耕作面積増加 二〇%

土地一單位當り生産増加 小麥  $\frac{1}{6}$

綿  $\frac{1}{3}$

フラックス  $\frac{1}{2}$  以上

工業に於ける生産費引下げ 三五%

建築費指數の減少 四・三%

五ヶ年計劃を問題とする者の第一に注意すべきは、それが「實物經濟」を基礎に作られたのではなくして、「貨幣經濟」を基礎として樹立されたといふこと、而も通貨の膨脹が最初から極度に警戒されたといふ事實である。マルクスの著述を讀む者の誰もが知る如く、貨幣や價格といふ概念は元來資本主義社會のものであつて、資本主義死滅後の社會には存立し得ないものといふのが、マルクス學派本來の見解であつた。従つて我が日本の學者のうちには、今なほ、社會主義社會に於ては、貨幣、價格、價值等が最早不必要な概念と考へてゐるものが少くない。然るにロシアの社會主義「五ヶ年計劃」は、上述の如く、貨幣經濟を基礎として樹立されたが、それは決して偶然の事實ではな

い。戰時共產主義の經驗で明となつた様に、ほぼ安定せる貨幣價格が存在せずしては如何なる經濟計劃も樹立することは出来ないのである。元來異質の財は實物のままでは絶対に加減が出来ない。例へば鐵一噸と木材十本とは實物のままでは合計することも引算する事も出来ない。この事は算盤の上手下手の問題ではなくて、論理的絶對的に不可能なのである。經濟の計算に必要な不可缺の條件は、價値の單位である。マルクス信奉者たるボルシェヴィキも、自ら社會主義實行の局に當るに到り、戰時共產時代の苦い經驗を通して、今や否應なしに、貨幣なくしては、如何なる社會經濟計劃もあり得ないといふ事を覺つたのである。時たま、若い黨員から、公式的に、貨幣の全廢を主張するものが出て來たが、その度毎に主腦部は、これを左翼小兒病として斷乎斥けて來た。ただ、ロシアの如き經濟の一元統制の下に於て、その貨幣や價格が充分に豫期の機能を果し得るか否かといふ所に、經濟の大きな問題が残されてゐるのである。通貨膨脹が警戒されたといふ事は、五ヶ年間の通貨の發行額豫定を見れば明である。一九二八年十月一日現在の十九億七千萬ルーブルから、年僅に二億五千萬ルーブルづつ、五年間に十二億五千萬ルーブルの新發行、即ち六三%の増加が豫定されたにすぎない。而も國家計劃委員會ゴスプランの豫想では、これだけの通貨の膨脹があつても、同時に生産増加に伴ふ財貨の流通の著しい増加を見る結果として、貨幣價値は却つて高まり、卸指數は一

七・六%の低下、生活費指數は二二%を低下するものとさへ考へてゐた。

第二に五ヶ年計劃の中には市場均衡の問題も考慮せられてゐるといふ事に注意を要する。この點についても、往々にして「ロシアでは經濟均衡は初めから無視されてゐる」等と考ふるものがあるが、左様な見方は誤で、市場の均衡を確保せんがためには計劃樹立の初めには、随分苦心が拂はれてゐる。ただ經濟計算を理解するものにとつて明らかなき様に、そこにこそ計劃經濟の超え難き根本的難點が存するのであり、従つて苦心が拂はれたに拘らず解決され得なかつたまでのことである。計劃の樹立に當つて、均衡の問題が如何に必要な而も解決の困難な問題として現はれたか、而してこの經濟問題が黨の政治的恣意的解決によつて糊塗されたかを知るためには、一九三〇年一月に書かれた時の財務人民委員長グリニコの言葉を見るのが便利である。吾々はその言葉の中に、必要にして而も解決されてゐない大問題を看取し得る。而してかかる政治的恣意的解決、一時的糊塗の結果が、如何に經濟の發展を妨げたかは五ヶ年計劃の遂行過程の分析に於て、事實の上に明瞭ならしむるであらう。

「方法的見地からすれば國民經濟五ヶ年計劃を、詳細な國民經濟バランスの形で出し、そしてその際マルクスの擴張再生産の公式をその基礎に置くのが勿論極めて重要且つ興味ある事であら

う。この思想はすでに立案活動の多くの役員の注意を喚起してゐる。……然しこの活動はまだ最初の階段にひつかかつてゐる試みの性質を有しそれが若干の確信を得て實際の計劃草案の基礎とされるまでには、恐らくなほ、研究家や研究組織の全共働の永い期間と大きな努力とを必要とするであらう。國民經濟家は皆、この問題が如何に複雑してゐるかを理解するであらう。……所でバランス思想、均衡化の思想、換言すればそれ自身極めて重要であり、且つ社會主義的計劃活動の體系の中で適當な經濟的均衡の思想は、時として、方法的性質の表現ではなくして政治的性質を持つた表現にとつて極めて有利な蔽ひである。現在とられてゐる急速な工業化テンポの反對者がその活動に於て經濟的均衡、バランス破壊等の議論を極めて亂用してゐることは争はれない。疾風のな社會主義的改造の時代に於ける國民經濟建設の可能な割合の正しい理解の爲めの鍵を與へる唯一のものであるところの革命的辯證法なしに、機械的に考へられた、この經濟的均衡の赤裸々な公式は、計劃立案の思想やその方法を豊富にしないばかりでなく、革命計劃活動の反動的障害となるであらう。」

三年後には所謂「商品饑饉の現象」は完全に克服されると宣言された。農業生産の激増によつて、農民は喜んで作物を市場に出すものと考へてゐた。「鉄」（第四八三頁参照）は大いに閉ぢられる事が豫想された。蓋し工業品の小賣価格は二二・

九の引下げに對して、農産物は僅かに五・四%の低下が豫想されたからである。私的商人は小賣に對しては全然絶滅しないが甚しく減少せしむること、即ち一九二七—二八年私的商人の取引高は總小賣高の二五%であつたものを、一九三二—三三年には八・九迄減じようと考へられた。

兎も角、五ヶ年計劃の立案者は何等かの方法によつて、市場に於ける需要と供給の均衡を保つ事が可能だと信じてゐた。グリンコによつて「我々の計劃に於ては、充分な豫備があり、計劃組織は充分な弾力性があつて全體を變へる事なしに部分の不可避な訂正を行ふを得しむる。かくして吾々は終局に於て吾等が必要とする市場の均衡を確保するであらう」と述べられてゐることによつても明であらう（なほ此點に就ては第九章の最後の附記を参照せられよ）。

上述の如く、全計劃は、貨幣經濟の基礎の上に作製されてゐる以上、何よりも先づ重要なことは、さきにもいへる如く、投資の資金を如何にして調達するかといふ點にある。計劃によれば總投資額七四二億ルーブル（ブルツクスに據る。アウハーゲンによれば七八〇億留とあり）のうち、五一億ルーブルは社會化部門から、二三億ルーブルは私的部門から、調達する豫定になつてゐた。私的部門から二三億留をどうして得るかは、五ヶ年計劃の作者はあまり深く考へてゐなかつた様である。社會化部門からの五一億ルーブルのうち、三一五億留即ち六二%は、國營事業の利潤と國營事業の

減價償却資金から得られることに豫想された（即ち前者は二三億留、後者は八二億留である）。かくして、資金調達の可能性は畢竟國營事業に於て豫定の利潤をあげ得るや否やにかかり、従つて結局國營事業が豫定の利潤をあげ得るや否やが五ヶ年計劃成否の重大な分れ目となる譯であるが、就中重視されたのは工業の利潤である。例へば家屋建築と電化を除外して工業への投資一六一億ルーブルであるが、そのうち一五七億ルーブルはその利潤と減價償却資金から出る豫定であつた事を見ても、工業利潤の重要性を察知し得るであらう。

かくして國營工業の利潤が豫想通り得られるか否かが重大な決定點となることを理解し得るのであるが、工業利潤の成績に最も重要な關係を有するものは、三五%といふ生産費引下げの成否如何であつた。三五%の生産費引下げのうち二四%だけは價格引下げのために用ひられるが、残り一%は追加利潤として工業に加へられると豫定された。このコストの引下げから出る追加利潤の額は總額七十八億ルーブルであつて、工業の總利潤の略三分の二に當る。

財政計劃を遂行する主たる機關は勿論國家豫算である。然るに國庫が國民經濟の投資をも引受け居るが故に、他の諸國のそれに比して遙かに大きな割前が、國民所得のうちから國家豫算のために要求された。而もその割前は次の如く年々増大する事になつてゐる。即ち一九二七—二八年度、國

民所得の二四・四％、一九三二—三三年度、同じく三一・一％、五ヶ年計劃によると、國庫收入は五百十億留で、内二八七億留は租税から、百三十億留は國家企業の利潤の割前から、六七億は内外債によると豫定され、なほこの社會主義豫算の他の諸國のそれとの著しい差異は全豫算の約半分（二五六億ルーブル）が國民經濟への資金として用ひられるといふ點に存する。なほ社會主義國家は、この豫算を實行するといふことだけに満足することは出来ない。一般計劃を成功させようとするならば、國家豫算が正しく實行されるといふだけに止らず、國民の全生活を計劃に服従せしめねばならない。例へば國家企業に残されたる利潤の完全な利用、協同組合の活動、信用組織及び社會保險の仕事等すべてが政府によつて監督されなければならぬと考へた。綜合財政計劃はかかる思想を前提として出來上つたものであり、國民所得の略半額に當る八百六十億留といふ實に巨大な額を包含したのは其のためである。

### 前提せし實現條件の缺除

上記の如き五ヶ年計劃は、その數字のあまりにも巨大なりしがために、發表された當初諸外國に

於ては、例の單なる宣傳と見て嘲笑したものが多かつた。然るに其の後共產黨が愈々本腰で實行に着手するや、何時しか嘲笑の聲は驚嘆の聲と代り、終には、各國の政治家の一部に、これを模倣せんとする風潮をさへも生じたが、それには五ヶ年計劃の成果に就ての重大な誤認が與つて影響してゐると考へる。計劃遂行の結末を示すことは後に廻し、先づ以てその出發から到着に到る迄の推移を檢討する事にしよう。それはよかれ悪しかれロシアの經驗から教訓を汲み取らうとする吾々の立場からは、最も重要な事である。

五ヶ年計劃遂行の爲めには資金を要し、資金調達のためには差當り穀物の輸出を必要とし、穀物輸出のためには農業の生産力を高めねばならぬ。然るに元來農業なるものは、よき政治の下に於てさへも、さまで急激な發展を見る事は出來難い性質のものであるのに、況んや少しでも繁榮すれば直ちに壓迫に會ふといふ條件の下に於て進歩のおこるべき筈はない。個人農排除の方針の爲めに、五ヶ年計劃の第一年度たる一九二八年には、一九二二年以來初めての穀物耕地反別の縮少を見た。一九二八年度を前年と比較すれば次の如くである（一九二九—三〇年の統制數字より）。

年 度

耕地反別

收穫反別

一九二七

九七一〇萬ヘクター

九六四〇萬ヘクター

一九二七 九四九〇萬ヘクター 九二一〇萬ヘクター

二二萬ヘクター減 四三〇萬ヘクター減

即ち五ヶ年計劃はその出發の年に於てかくの如き事態に面し、従つてかの歴大なる計劃の遂行は、食糧の蓄積なくして着手せられねばならなかつた。勿論一九二八年には穀物は輸出され得なかつたが、穀物の輸出なくしては、豫定された工業建設の資金を手に入れる事は出来ない。社會化された他の諸企業に於ても亦、五ヶ年計劃は最初から困難に當面した。蓋し計劃遂行の爲めには最も高き質の勞働が必須の條件として豫想されてゐたに拘らず、それが實在しなかつたからである。例へば工業の建設計劃は所定の時期までに、正確に行はれること、合理化の過程も滑らかに行はれて工場内の仕事も停頓せざることが前提され、更に又最新式の技術が輸入利用される事が豫想されてゐた。五ヶ年計劃はかくの如き諸條件の上に樹立され、従つて、かかる條件の充される場合に初めて、同計劃に見積られた如き巨大な投資が可能となるべき性質のものであつたのである。

然るにかかる條件は全く幻想にすぎず、五ヶ年計劃着手以前、即ち工場の建設が小規模のものであつてさへも、建設勞働が充分に遂行され得ず、のろくて、高くついて而もその出來榮えは充分でなかつたのである。かくして、五ヶ年計劃はこれを遂行するに足る如き専門家と熟練勞働者の充分

なる準備なくして着手されねばならなかつた。

その結果として多くの仕事は、着手に當つて何等の確定的な設計を持たなかつた。計劃なき計劃經濟！ 實にあり得べからざるが如き悲劇的事實であつた。計劃着手後一ヶ年半を経過した一九三〇年の四月一日に到つても尙、確定的設計を有したのは建設計畫の僅かに半分（五一％）にすぎない。六分の一は粗雑な未確定の設計を有し、三分の一は全然設計を持たなかつたのである。一九三一年の初春に開かれた工業指導者會議の席上に於て、勞農檢察人民委員部のオルゾニツキツゼは、這般の事情を次の如き峻烈な言葉によつて指摘してゐる。

「吾々は莫大な費用をつかつてゐる、けれども吾々は、どの程度まで仕事が實際に遂行されたのかを正確には知らない。……概して見積りといふものが無いのだ。吾々は減多無性に建設してゐる。……その結果建設費が嵩み、餘計な勞働者が使はれてゐる云々。」

一九二八—二九年度の「統制數字」も亦「燃料原料及び工場建設の能率は殆ど全工業にとつて大戰前よりも遙かに低級であつた」と述べてゐるが、已に大戰前からロシアの勞働の質は低かつたのに、それが社會主義政權の下に十年以上を経過しても、逆に低下してゐたといふことは、容易ならぬ事である。而もそれは右に述ぶる如くロシア當局自らの明白に是認する所であれば是非もない。

生産費指數を比較すると一九一三年を一〇〇とすれば一九二七—二八年は一八五を示す。一九二七—二八年といへばインフレーションの結果は未だほんの僅かに現はれ初めたに過ぎぬ時代であるから、右の數字は大體生産力の低下、即ち生産費の騰貴を示すものと見て差支へあるまい。

五ヶ年計劃に豫定された急速な生産の増加は、新工場の建設と舊工場の擴張とに期待せられたのみならず、更に二交代三交代の労働による工場設備の無休息制と最新式の技術の適用の上に期待せられてゐた。然るに先づ最新式の技術に絶對の望みをかけた事も大きな誤りであつた。最新式の機械は外國の援助で設置せられ得たけれども、これ等の機械を使用する事はそれを設置する事よりも遙かに困難な仕事であることがわかつた。複雑な機械には絶えず故障が起つて、古い粗末な機械によるよりも却つて質の悪い生産物を作り、而もその生産費も更に高くつく場合の少くない事を證明した。一國に現はれた技術は、單に機械的に他國に移植する事の出來難いものである。加之途方もなき急速なテンポの生産が指令せられる場合に於て、機械破損率の高まる事は不思議ではない。五ヶ年計劃はかくの如き質の労働を以て着手されたのであるが、労働の質を離れて單に生産設備や機械の優秀をのみ誇つたソ聯當局の態度は、一個のナンセンスといはなければならぬ。而して労働の品質の向上が容易に行ひ得ないといふ事實は、一九三五年春の共産大學に於けるスターリンの演説

が、機關を動かし得る人間の缺除を訴ふることを主眼とせるによつても明である。

工業の指導者達は、生産費の引下げ並に生産物品質の向上（質的課題）と、生産物量の急速な増加（量的課題）といふ、二つの任務を課せられた。けれどもすでにその使用する労働者の品質が上記の如く低級なものであつたが故に、右二つの任務は到底兩立することが出来ない。かかるディレンマに際して指導者達の選りし道は、質的課題を慮外にして専ら量的課題の解決に當ることであつた。蓋し質的成果は統制が困難であり、従つて比較的その成果を誤魔化し易いからである。ソ聯當局が五ヶ年計劃第一年度の工業生産を以て、遙かに豫定を突破したと報告するのも、單に量の上だけの事であつた。質に至つては却つて逆退し、生産費の騰貴と生産物の品質悪化とは、跛行の擴大ととに蔽ふべからざる事實であつた。

本編の執筆に當りて最も多く利用せられたる参考書は次の如くである。

B. Brutzkus, Der Fünfjahresplan und seine Erfüllung. 1932.

B. Brutzkus, Economic Planning in Soviet Russia. 1935.

F. Pollock, Die planwirtschaftlichen Versuche im der Sowjetunion. 1917—1927, 1929.

O. Auhagen, Die Bilanz des ersten Fünfjahresplanes der Sowjetwirtschaft, 1933.

ユスソラン編『ソヴェート聯邦第一次五ヶ年計劃遂行實績』（日露協會發行）

## 第九章 ソ聯邦の經驗と經濟計算 (つづき)

### 計劃遂行途上に於ける動搖

#### 一 生産計劃の修正と國民消費の強制的縮少

生産費が豫想以上に高まつた結果は、必然的に資金の缺乏を來したが、いふ迄もなく、資金が缺乏しては手がつけられない。そこでとり得る道は豫定の投資額そのものを減少するか、それとも國民の消費を押へる事によつて資金をしぼり出すかのいづれかよりなかつた。ソ聯當局は同時に兩方の道を選ばうとした。

はじめに一言して置いた様に、ソ聯當局は計劃された工業のいづれの部門に對しても同程度の關心を持つてゐたのではなく、重きを置いてゐたのは重工業の發展である。それゆゑに先づ輕工業及運輸の方面に於て多くの豫定された投資計劃が放棄された。重點を置いた重工業（動力、鐵、及び機

械工業)の發展については、計劃を縮少するどころか、その擴大をさへ決議するに至つたのである(一九三〇年六一七月に互れる第十六回黨大會)。資金の缺乏にも拘はらず重工業の擴大が決議せられるに至つた理由は、一部は軍事的考慮に出づるものであり、一部は農業の豫定以上の強制集團化に伴つて農業機械増加の必要を痛感するに至れるが爲めである。

抑々五ヶ年計劃によれば、一九二七—八年より一九三二—三年度の間に年産額に於て、銑鐵を三百三十三萬吨に増加し、鋼鐵及び展延鐵もそれに應じて増加する豫定であつた。然るに最初の二年間の經驗によつて、右の豫定をさへ實行の不可能な事が明となつて來た。然るにも不拘、前記第十六回黨大會は銑鐵の生産目標を一千萬吨より一千七百萬吨に引上げ、加ふるにマグニットゴルスクリクズネットワークコンピナートの規模を五年計劃の豫定の二倍乃至三倍にまで擴大すべしと決議した。而も右は、生産の最も困難で生産費の最も高價につく極東方面の鐵工業に關する事實だといふことを記憶しておかねばならぬ。更に注意すべきは、同じ十六回黨大會は、五ヶ年計劃の四ヶ年完成を決議したといふ事實である。後に三ヶ月の補充年度の挿入によつて、結局四年と三ヶ月の完成となつたとはいへ、兎も角、右の如き事情で、投資額は全體として縮少することが出來ず、資金の調達の爲めに殘された道はただ國民消費の強制的縮少あるのみであつた。勿論政治的理由から、國民消

費の縮少による資金調達を、正面から公然決議する様な事は出来なかつたけれども、ソ聯の全經濟政策は、必然的に左様な方向に進まざるを得なかつたのである。

國民の消費を縮少する方法として採用されたものは、先づ政府の販賣する工業生産物の價格を引上げることであつた。尤もこの方法も、社會主義計劃經濟の下に於ては、今日吾々の國家で想像せられる程の效果をもつことは出来ない。何となれば、社會主義社會に於ては生産手段たる生産物は國家に所屬するが故に、その價格を引上げるとも賣る者も國家なれば買ふ者も亦國家なるが爲めに、單に右手の資金を左手に移すといふだけの事で、結局何等の資金をも増加するものではないからである。ただ生産物のうち國民が買取る所の消費資料について見れば、その價格を引上げる事によつて若干の資金を得る事が出来た。かくして五ヶ年計劃の、工業生産物の價格二十三%引下げの豫定は實現されるどころか、逆に工業品の價格は幾度か引上げられた。

消費者は消費財の價格騰貴によつて苦しんだだけではない。消費財の品質の劣悪化と、その標準化による種類の減少と配給の混亂もまた消費者の苦痛を加重するものであつた。この點については更に觸れるであらう。

兎も角も、消費財の販賣價格の引上げによつて、輕工業部門に於て相當の利潤をあげ得た事は事實である。けれどもその利潤だけでは到底重工業の方面に於ける缺損を補填するに充分ではなかつた。

た。重工業の方面に於ける缺損の如何に大きかつたかは、左に示すレールの一例によつても推測され得るであらう。

一九三二年、レールの價格と原價の比較（噸）

鑛山用、價格一〇四留 原價一八七留

鐵道用、價格一一二留 原價一九二留

かくして、一九三二年度に鐵工業によつて要求された補助金は、四億五千萬ルーブルに及んでゐる。元來五ヶ年計劃の豫定によれば、工業で百二十億の純利潤をあげる筈であつたに不拘、事實は五十六億を得たに止つたので、豫定の半分にも達しなかつた。しかも斯様な不成績は單に工業だけでなく、社會化された經濟部門に共通の現象であつて、凡そ勞働の質と利潤とに關する限りでは、計劃の豫定に達した事は、ただの一度もなかつた。かくして消費資料の價格引上げによる手段も、財政計劃に於ける收入の不足を充すものとしては、ほんの部分的役割を果し得たにすぎない。資金の不足を補ふが爲に残された國民消費縮少の他の手段は、紙幣の増發即ちインフレーションであつた。此の點に於けるソ聯邦の經驗は、經濟學徒にとりて實に興味あり、且つ有益なる資料を提供するものである。

## 二 紙幣の増發と私的部門に於ける收奪の強化

すでに述べたるが如く、資金の調達手段として通貨の増發を行ふことは、戦時共產主義時代の苦い經驗によつて、これを極力避けようとするのが、五ヶ年計劃樹立當初の支配的見解であつた。されば急速なテンポの生産増加が豫定せられたにも不拘、新たな紙幣の發行は年々僅に二億五千萬ルーブルを豫定し、従つて通貨は一九二八年十月一日現在の約二十億から、一九三三年九月三十日の三十二億五千萬ルーブルまで、合計十二億五千萬ルーブルの新發行が見込まれたに止る。この事も亦すでに述べた通りである。斯様に通貨の發行が控へ目に見積られインフレーションが極力回避されんとした理由としては、通貨の安定が經濟計劃の不可避の前提であるといふ外に、當時のロシア特有の狀勢もまた考慮されねばならない。といふわけは、周知の如く當時ロシアの生産は、社會化せる部門と個人的な部門とに分れてをり、前者は大體工業を、後者は大體農業を意味して居た（コルホーズは國有化せられてゐないから、私的性格を失ふものではなかつた）。而してソ聯當局の主たる目的は國有化せる重工業の急速な發展であるが、若しもインフレーションを行ふとすれば、自ら食物をもつ私的農民は大した苦痛を受けないで、勞働者が最も生活に困難を感ずることは明である。然

るに労働者は共産黨の社會的地盤であるから、それを困難に陥れる事はあくまでも避けなければならぬ。かかる政治的考慮こそは計劃に於てインフレーションが極力回避されんとした大きな一面の理由である。

尤も後に述ぶる如く窮餘の策として、事實通貨は豫想の四倍も發行されざるを得なかつたのであり、一九三二年の七月一日現在で六十二億留に達し、第一次五ヶ年計劃の最後の時期には、七十億留にまで及んだ。即ち豫定を越ゆること正に三十七億五千萬ルーブルである。

年々の發行數量をあぐれば次の如くである。一九二八―二九年には六億七千百萬ルーブル。

一九二九年―三〇年度には十六億二百萬ルーブル（これだけで全部かどうかは疑はしい）。

一九三〇年夏には銀貨が流通界から姿を消して、G・P・Uが出勤した。

工業に於ける缺損を農民に轉嫁する爲めには、農業生産物を強制的に安く買上げねばならない。農民への課税も益々加重されて行つたが、更に私的商人への農産物の販賣を禁壓して、農民をして剩餘の盡くを安く政府機關へ賣渡さしむることに決定した。尤も農民はその剩餘を政府機關に賣渡しても、その得たる貨幣で工業製品を自由に得られるなら堪へ得られたであらうが、事實は、工業品の地方に配給せられる量は極めて少量であつたがために、恰も戦時共産主義の時代のそれと同様

に、益々加重せられた賦課は、農民のあらはな收奪に近いものであつた。私的家用工業者の運命も亦農民と等しかつた。彼等は共同組合に集められ、監督委員會の監視の下に、その製品は極めて低い固定價格で組合に強制的に買取られた。原料生産に従事せし大規模工業と競争する所の家用工業も簡単に廢滅せしめられたが、この事もまた農民にとつての大きな打撃であつた。

私的部門の生産物殊に農民の生産物を、強制的に安價に買上げ、更にそれを規定價格で賣出すといふ原則は大體維持せられた。所が貨幣發行の増加するにつれて、消費財の市場に於て所謂「商品饑饉」といふ社會主義制度に特有な現象があらはれて來た。通貨は膨脹するに不拘、僅かな消費財が政府の手で固定價格を以て賣られる以上、當然に起るべき現象なのである。これが自由市場の場合ならば物價は騰貴するが、そのことによつて需要は自から供給と均衡を保つに至るのである。

既述の如く、政府は農産物の私的市場を破壊した以上、自ら大衆の生活資料の配給に當らねばならない。然るに商業配給の事たるや、官僚の手で滑らかに遂行されるには餘りに複雑であつた。かなり多量の農産物が政府の手に收奪されたに不拘、穀物の如き相當長持ちのする性質の貨物でさへも、夥しく腐敗に委せられざるを得なかつた。一九三〇年の收穫に際して二千二百二十一萬噸の調達量のうち、廿五%既ち五百五十萬噸は汽車の驛迄も届かなかつた。勿論腐敗と盜奪の結果である。

工業製品に至つては初めから生産が絶對的に稀少であつた。工業化政策の結果として、工業人口は一九二八年の三千二百四十萬人から一九三二年の四千七百四十萬人に、即ち四六・三%の増加を見た。然るに、一般に工業労働者の工業品に對する需要は農民のそれよりも幾倍も多いのが常である。されば一九二七—二八年に於て、工業生産物の消費は地方住民一人當り三五ルーブルと見積られ、工業労働者については一人當り一二八ルーブル、即ち四倍に見積られてゐた。それは五ヶ年計劃そのものの中に、ソ聯當局の明記してゐる所である。然るに同時に國營輕工業の發展せし程度は私的小規模工業の排除せられただけの程度に止つたし、のみならず工業品の品質は悪化し、消費財の輸入は完全に杜絶したといふ事を考へるならば、消費財の缺乏が、農産物に止らず、工業製品の上にもあらはれたといふ事は何等不思議とするに足らぬ。

### 三 商品飢饉と配給制の出現

斯様に五ヶ年計劃の下で、消費財の生産に於ける絶對量の缺乏が存在したといふ事實は争ふべくもない。けれども所謂「商品飢饉」の現象のあらはれし根本的原因はこの消費財の生産に於ける絶對的缺乏にあるのではない。それは既述の如く、價格が政府によつて固定せしめられたために市場

經濟に於ける様に需要と供給が價格の變動を媒介として均衡を保つといふ事がないといふ所に根本の原因がひそむのである。所謂資本主義の社會に於ても、時に、商品の量が大衆の必要に及ばぬといふ事はあり得る。殊に天災や戰時やインフレーションの場合にそれが起る。けれども左様な場合には自然に價格が騰貴し、それが自ら需要をおさへるが爲めに、決して事態は商品饑饉といふが如き狀況にまで進行する事はない。所謂資本主義社會では金が不足すると感ぜられるとも、物が不足するとは感ぜられないのである。社會主義社會のインフレーションの場合——國家企業の經濟的な無能は通常インフレーションを餘儀なくせしむる——では、逆に貨幣の不足としてよりも商品饑饉として感ぜられるのである。「商品饑饉」といふ事態の下では、最早商品を消費者の欲する儘に賣ることには非常な不都合の結果がともなふ。何故ならば若しも自由に賣ることになれば、財貨は一部の消費者の手に買集められて、他の消費者達は全然消費し得ざるに至るからである。五ヶ年計劃着手後僅かに半歳を経た一九二九年の春に、早くもバン切符制度が再現したのはそのためである。切符制度は一度戰時共産時代に採用され、新經濟政策による市場の復活と共に廢せられてゐたものである。いふ迄もなく、かくの如き「配給の制度」は五ヶ年計劃の毫も豫想せざりし所であつたのだ。然るに同じ二九年の秋迄には切符制度はあらゆる種類の食糧品と、あらゆる種類の工業製品と

に擴大されるに至つて、すべての品物は一度國民から取上げられたうへに、更に上から配給されるといふ手續をとることとなり、計劃經濟は一般に消費自由の喪失に傾向するといふ、計劃經濟の本質を示すに至つた。

配給制度はただに消費財に適用されたに止らず、生産財にまでも及んだ。この事は元來計劃經濟の當然の結果であらう。周知の如く生産手段の私有を認めないで、中央の計劃に基いて生産手段の使用を決する所に計劃經濟の本質がある。従つて生産手段に關しては、その使用は中央當局の計劃に従ふもので、所謂「資本主義」社會の様に企業者の自由な決定によるものではない。故に生産手段の賣買市場は計劃經濟の下に喪失すべき宿命をもつて居るのである。もし生産手段の賣買市場をもつて居るとすれば、計劃經濟はその限りに於て計劃の遂行を斷念してゐるものといはなければならぬ。

新經濟政策時代には、すべての工場は仕事と地域とに従つて數多のトラストに結合されて居つた。而して各トラストは相互に密接に連絡して、生産手段に對してさへも、ある程度の市場が發展してゐた。然るに其後計劃活動が重視されるにつれて、この市場に於ける相互の連絡は失はれて、それ等のトラストを上から掩ふ所の中央機關が、生産部門に於けるトラストへの生産手段の供給と、そ

のトラストの生産物の處分との責任を負ふこととなつた。斯様に於て、五ヶ年計劃の下に、經濟機能の中央集權化と市場の破壊とは並行して進行したが、それは遂に一九二九年十二月五日の黨中央委員會の決議によつて公然と確認せられるに至つた。即ち同會議によれば全工業企業は仕事の種類に従つて、工業コンバイン（結合）に集められ、而してこれ等の工業コンバインの權能は、「生産の計劃、資本蓄積の指導、技術的指導、賣買組織、商業的財政的工作の指揮、勞働問題及び技術家に熟練工の訓練と支配」といふ實に廣汎なものであつた。

これ等の仕事がすべてこの工業コンバインの責任となると共に、その下に立つトラストはその重要さを失つて、文字通り工業の中央指導制が確立された。曾て戰時共產主義時代に「グラヴキスム」と名附けて激しく批難された制度が、今や「工業コンバイン」と名稱を改めてここに再び登場し來つたのである。

#### 四 信用制度の改革と幣制の崩壊

工業に於ける嚴格な中央指導制への發展は、信用の組織の上にも亦反映した。勿論信用制度の集中化の傾向は五ヶ年計劃と共に初まつたものではなく、それはすでに社會主義的理想の中に初めか

ら内含せられる思想ではある。けれども五ヶ年計劃の初まるまでは、なほ「資本主義」的な一つの制度、即ち所謂商業信用なるものが残存して、各企業は相互間に信用の授受を行ふことが許されて居り、従つてそれは、ソ聯の經濟にある程度の弾力性を附與してゐたものである。然るに國家の諸企業が相互に信用を授受するといふ事は、それだけ中央部の信用計劃を下から遮斷する可能性を有するものであり、それ故に、計劃經濟を貫かんとする限り廢止せらるべき筋合のものであつた。一九三〇年一月三十一日の信用改革の法律（同年四月一日より實施）は正にこの廢止を斷行した所にその本質を有する。

即ちこの法律によつて、短期信用もすべて國營銀行の獨占する所となり、國家企業は、相互間の手形を發行して信用を授受する事を禁ぜられた。爾後は國營銀行が賣手と買手との中間に立ち、先づ賣手は送狀を銀行に持參すると、銀行は彼に對して同額の信用を與へる。同時に同額だけを買手の借方勘定中に記入される、といふ仕組となつたのである。工業コンバインは、その信用計劃を、規定の時までに間違ひなく國營銀行に提出しなければならぬと規定され、而して個々の經營の信用要求は、この計劃の中に明確に記載されてゐなければならなかつた。斯様に信用を中央銀行に集中したのは、中央銀行をして、信用を媒介として各工場に於ける計劃の遂行を監督せしめんとする意

圖に出たものである。

一九三〇年の右の信用改革は、當時ソ聯當局によつて計劃經濟の完成への決定的進歩の表象と見られたものである。然るに實は右の信用改革こそ五ヶ年計劃の基礎であつた貨幣制度の崩壊を齎した直接の原因であり、従つて經濟の混亂に拍車をかけたものであつた。一九三〇年の二月、三月といふ二ヶ月の與へられた準備期は疾くに過ぎて、實施期たる四月に這入つても、工業コンバインの提出すべき信用計劃はなほ正式には提出され得なかつた。辛うじて提出されたものに就ても、國營銀行が無數の企業の内部活動の真相を究め得る道理がないから、國營銀行は一つのデイレンマに陥らざるを得なかつた。といふのは計劃の遂行を監視する事が事實上不可能であるために、企業の要求する通りルーズに信用を授與するか、それとも嚴格に信用を抑制することによつて巨大な計劃の遂行に停頓を來さしむるか、二途其一を選ぶの外はなかつた。而して事實銀行は前の道を選び、爾後信用は企業の要求するままに、無規律に授與されるに至つた。公報によれば、五ヶ年計劃の最初の二ヶ年間に新に發行された貨幣高は、二十二億七千三百萬ルーブルとなつてゐるが、そのうち八億七千二百萬ルーブルだけが初めの一ヶ年半に發行されたもので、残りの十三億八千八百萬ルーブルは信用改革實施後の半ヶ年間、即ち一九三〇年四月一日より十月一日迄の間に發行されたもので

ある。この半ケ年間だけに就ていへば、事實發行された通貨量は五ケ年計劃の豫定數量に比較して正に十倍以上に及んだのである。

インフレーションも物價が必要供給の自動調節作用によつて定まる機構の下で行はれる時は、必然に物價の騰貴を來し、貨幣はその價値の一部を失ふだけの事で、根本的にその力を失ふことはなく、引續き商品の運動を規定して行く。然るに、ソヴェートの如く物價が國家によつて動かぬ様に固定されてゐる場合に於ては、價格は全然商品の運動を規定する機能を果し得ない。計劃が先づ以て商品の運動を決定し、その計劃の背後に政府が無制限な權力を以て控えてをり、而して貨幣はただかくして決定された商品の運動に追隨するのみである。随つて當時のインフレーションは、いはば市場流通の終焉を意味し、貨幣經濟の最後を意味するものであつた。かくして貨幣經濟、市場流通を前提としてその地盤の上に樹立された所の五ケ年計劃は、その遂行の過程に於て、今や計らずも、その地盤たり前提たる貨幣經濟そのものの崩壊を呼起したのである。

尤も當時多くの若き共產黨員達は、貨幣制度の崩壊を以て寧ろ完全社會主義に近づきたる證據と看做し、インフレーションを以て、毫も意に介するに足らずと號した。前年度末以來の強行政策によつて農業の集團化が意外に進涉せる事實と相俟つて、社會主義は愈々完全の域に到達したりとの

印象を與へたものと見える。國營企業と言はず私營企業と言はず、その生産物はすべてがソ聯政府の處分に委ねられることとなつた。上述の如く、生産手段は政府の手により、計劃に従つて、諸種の企業に割當てられ、消費財は消費者に對して定量で配給された。生産財の割當を決するものは當局——工業コンバン——であり、消費財を得るためには、消費者の有する貨幣は大して重要ではなく、重要なのは寧ろ彼が如何なる階級に屬するかといふ事であつた。蓋し勞働は、國家によりて階級の異なるに従つて様々に評價されてゐたからである。祕密に行はれた私的取引も絶滅はしてゐなかつたけれども、極度の彈壓によりて、最早極めて僅かな役割より演ずる事は出来なかつた。

この如き似而非社會主義への進化が、外國貿易の領域に如何なる影響を及ぼせしかを考察する必要がある。一言にして言へば、輸出商品の國內に於ける價格は、最早外國貿易によつて得らるべき物の見積りの基礎とはならなくなつて終つた。一般に、ロシアの貿易組織は、國內で甚だしく缺乏せる商品をも輸出することを可能ならしめ、従つて外國貿易と國內市場とは無關係に存在するものとなつた。即ち或種の財貨のある量は輸入せられねばならぬが（五ヶ年計劃の下でかかる財は専ら工場建設に用ひられた）、これ等の輸入品の價格は外貨で支拂はれねばならぬ。従つてその額に相當するだけのものは兎も角も輸出されねばならない。而してその際國內市場の狀況から見て當該商品が輸出

さるべきものであるかどうかといふ問題は全く考慮されない。諸外國に於てロシアはダンピングを行ふといふ非難の起つたのはそこにあるのである。併し實際は一般にダンピングと呼ばれるものは稍性質を異にするもので、實はそれよりも更に惡質のものであつたのだ。といふ譯は所謂ダンピングに於ては、なほ國內に於ける生産費と外國で得られる賣上金との比較が可能であるけれども、ロシアの場合には國內での生産費は全く外國での手取金と比較され得ないのである。

ロシア國內の價格は毫も價値を表現するものでなく、政府當局が勝手に固定的に公定せるものであつて、全く比較の對象となし得ないのである。従つて何をどれだけ輸出されるかは、國民の生活要求とは無關係に、全く政府の恣意によりて決せられて居る。それより外に何等合理的な基礎を發見し得ないのである。國民の生活上不可缺なもの、例へば穀物や燃料が、飢と寒さとに苦しむ國民生活を尻目に掛けて、どしどし輸出せられたといふ事實は、かかる經濟機構のいはば當然の結果であつて、従來用ひられた意味に於けるダンピングではなかつたのである。

斯様な暗中模索の經濟は、一九二九—三〇年度の統制數字にも明に反映してゐる。この年の統制數字は、非黨員専門家の援助なしに若い黨員だけの手になつた統制數字の最初のものであるが、作者は最早市場の均衡に意義を認めないで、ただ農産物の強制收奪とその定量配給制とを基礎として

立案した。而もこの分配は嚴格に階級原則の上に行はるべきものとの見解を固持した。彼等は云つた「國民所得の價值（價格）形態に於ける表現はその意義を失ひ初めてゐると。尤も多少の危惧の念はあつたと見え、續いてかう述べてゐる「このことは一般に經濟的分析に對し、殊に分配狀態の分析に對して、新たな問題を提起する。この問題はソヴェートの經濟學の理論によつても解けないし、吾々の統計によつても解決されない」と。若い黨員達は、ソ聯の經濟學も、ソ聯の統計も解決し得ない實物社會主義のこの新たな問題をば、やがて何とか解決し得るものとの信仰を失はなかつた様である。けれどもこの統制數字を最後として、幣制の破れて後は、よくも悪くも財政計劃を樹立する事が出来なくなつた。これこそは一九三〇年十一月の補足年度を挿入せざるを得なかつた、隠された理由であると考へる。一九三一年一月の共產黨首腦部連の演説の中に「統制數字」といふ言葉は用ひられてゐるが、それは何等の根據をも持たぬものである。屢々繰返す如く安定せる幣制、從つて安定せる價格を前提する事なくして、財政計劃を樹立することは絶対に不可能である。

非黨員學者の非難された一九三〇年に於けるソ聯の經濟文獻に支配的な見解は、「すでにネップ制は克服されてソヴェート經濟は最早完全な社會主義の段階に到達した」といふにあつた。「貨幣は心配せずにとどしどし發行して差支へない。何故ならば元來貨幣なるものはやがて死滅すべき一つ

の勘定符號にすぎないから」とか「吾等は財を實物で取扱ふことに慣れねばならない。もしもソヴェート經濟が價値の尺度を必要とするならば、貨幣でなくて勞働日が役立つであらう」とか叫ばれた。これ正しく戰時共産期に於ける經濟イデオロギーの再生である。讀者願はくば一九二〇年秋のエコノミーチエスカヤ・ジーズニ紙上に行はれた經濟計算に關する論争を想起せられよ。

一九三一年一月に開かれたソヴェート同盟中央執行委員會に於ける、グリンコの第三年度の財政計劃に關する報告は次の文句を以て始まつてゐる。

「極く最近開かれたソ聯共産黨中央委員會及び中央統制委員會總會が強く『財政計劃を嚴格に守らなければ國民經濟のすべての部門に於ける經濟計劃の實現は不可能である』と強調したとしても決して偶然ではなう」と。

そもそも斯くの如き自明の事が、何故に特に「強調」されねばならなかつたか。吾々は一九二九—三〇年度に於ける幣制の破壊と財政の混亂といふ事實を想起する事によつてのみ、かかる自明の事が特に強調された理由を了解し得るであらう。

同じ報告演説の終に臨んで、グリンコは次の如く叫んでゐる。

「吾々は公然と明言せねばならぬ。——我國の社會主義的建設の成功（？山本）が多數の者の頭を

混亂させてゐる。彼等は貨幣や金融機關はブルジョア社會の、舊くなつた時代遅れの範疇だ、それは兩足で社會主義建設の道に立つてゐる吾々の用ふるに適せざるものであり、貨幣を儉約する必要はない、等と信じ初めてゐる。我國の若き學者の二三は理論の上で貨幣を死滅せるものに數へ初めてゐる。しかし吾々は最も嚴格な金融規律を遂行せねばならぬし、また吾々は遂行するであらう」と。

また一九三一年三月二十二日のイズヴェスチヤ紙の卷頭論文には、一九三〇年の信用改革に伴ふ幣制混亂に就て次の如く書かれてゐる。

「經濟組織體（企業）への斯様な信用の授與は、その本質上、企業と企業結合間の契約原則の完全な排棄に導く。而して不可避的に、生産に於ける、品質と種目選擇への努力、節約と利潤に就ての計劃遂行への努力、生産費引下げへの努力を弱めた。企業の商業活動と財政活動とは留意されない様になつた。經濟の指導者達は金融の問題に對してほとんど無關心である」云々。

吾々は右に引用したグリンコの報告、並にイズヴェスチヤ紙の論說を通して、一九三〇年（昭和五年）に行はれたインフレーションと其の結果としての幣制の破壊及び經濟の混亂、それに就ての若き黨員達の樂觀的見解を知ると同時に、更に「これではならぬ」といふ財政専門家や黨幹部の見解

に注意を拂はねばならぬ。

すでに述べたるが如く、一九三〇年に於ける若き黨員達の支配的見解は、貨幣なき實物社會主義發展への展望と期待とであつた。けれどもその結果はこれまた既述の如く、通貨の膨脹、幣制の混亂、商品飢饉、經濟の暗中摸索であつたが爲めに、當局は若き黨員達の意見を却けて、「斷乎として」<sup>ルツェ</sup>留による統制」(グリッコの言葉)を宣言するに至つたのである。すでに一九三〇年末に特別會計年度三ヶ月の挿入を決定せられた時、ソ聯當局は、同時に同期間中は新たに通貨を發行せざるべき事を決定した。けれどもすでに自由なる資金調達にならされた工業の指導者達は、信用が制限せられる事によつて、勞働者への勞賃支拂さへ不可能に陥るものが少からず、勢ひ通貨増發の停止も、その後豫期の如くには實行出來なかつたのである。三一年一月の中央委員會の席上、グリッコが「この三ヶ月毫も貨幣を發行しなかつた」と誇らしげに語つてゐるけれども、それはすでにそこでグリッコ自らが洩してゐる所でも判る様に、「農産物の調達戦」<sup>カシス</sup>を強行したお蔭であつて、つまりそれだけ農民搾取を強化する事によつて、通貨を發行せずすんだのだ、といふ事を忘れてはならぬであらう。

同年二月モスクワに開かれた工業指導者會議に於て、専門家達の口から叫ばれたソ聯の經濟狀態

の報告は、實に暗愴たる印象を與へた。即ちソヴェートの經濟組織は、正に一般的崩壞の危機に臨んでゐるといふ事實が、それによつて明瞭となつたのである。

### 經濟危機の實相——經濟計算の喪失

最も重大事は各經營に於ける經濟計算の喪失（採算無視）といふ事實であつた。先づ指導者達から資源を節約する觀念が失せた。ネップ時代にあつては、どの企業も何留の支出何留の收入といふ風に、貨幣を以て收支の計算を行ひ、出来るだけ節約して多くの利潤を擧げやうと努めた。然るに今や生産手段の調達が貨幣に依存するよりも寧ろ當局の決定によるといふ事になつたが爲めに、一度計劃が政府によつて認められさへすれば、その實行に要する貨幣はいつでも國立銀行から與へられる。勞農檢察部のオルゾニツキツゼが上記の工業指導者會議の席上に於て「我國ではどんなものも國立銀行が支拂ふので、企業は物質的には毫末も責任を負はぬ。……勞賃は諸君（工業指導者達）とは無關係に支拂はれる。財は品質を問題とせず支拂はれるし、人々は諸君の生産物を持つて行つてそれを分配する。實に素敵だ！」と皮肉を混へて述べてゐる。徹底せる計劃經濟の下には個々

の獨立せる企業活動は存在しない。それ故に各企業の經濟計算は其の意味を失ふのである。一九三〇年十二月十九日のザ・インダストリアリサーチの冒頭論文にも次の如く記されてゐる。

「どんな財政的缺損が大きとも、いつでも國家がよくしてくれろといふ考が經濟指導者の中に共通に存在してゐる」と。

人民委員會議の議長モロトフも亦上記指導者の會議で、經濟計算の喪失を歎じて次の如く叫んだ。「資本主義的生産の下では一般に完全な無政府狀態が支配してゐる。だが企業者は自身の企業に就ての計劃を持つてゐるぞ」と。

すべての企業が經濟性を無視する場合に國民經濟の經濟性が維持されると言ふことがあり得やう筈はなう。

第二の重大な誤謬は生産資源の非經濟的な配分である。貨幣の過剰が存するがために生産物は飛ぶ様に賣れる。そこですべての製造者は能ふ限り多くの供給をなさうとつとめた。かくして資本主義の社會に於ては見られない現象であるが、當時ロシアは或工場には巨大なストックがあり、他の工場には必要な同じ品物が少しも存在しないといふ現象が常態であつた。勿論工業コンバインはこれを統制すべき地位にある。併し斯様な事情の下では、充分統制する事は出来ない。元來當局が個

個の工場で要求する生産財の量を判断しようといふ考は社會主義の中央部が全知全能であるといふ誤れる假定の上に立つものである。かかる全知者の存在し得べからざる事は、抑々生産財なるものが相互に補足的なものであつて、どの一が缺けても忽ち生産を躓つかしむるものだといふ事實を考へれば明白であらう。すべての生産手段が適應せる分量に於て存在する場合にのみ生産は可能となるのであつて、ある生産財が不足するといふ事はとりも直さず他の生産財が餘るといふ事を意味するのであり、ある生産財が餘るといふ事が即ち他の生産財の不足することを意味するのである。

第三に擧ぐべきは計劃の過度の發展が消費財の分配の上に不都合な影響を齎したといふ點である。如何程多く生産されても適當に需要者の所へ分配されないならば、實は生産せられなかつたのと變りがない。當時ロシアでは、從來分配を掌つて來た私的商人が彈壓せられたばかりでなく、分配の組織が新しく計劃的なものになつた。即ち從來地方の協同組合に供給してゐた卸賣店は、漸次に閉鎖されてゐた。併し地方の協同組合は工業コンビインと直接に取引する力はなかつたので、工業コンビインは消費協同組合中央部（コントロニューズ）と取引をなし、而してこの中央部がモスクワの机上で分配計劃をつくり、生産工場は右中央部から受取つた指示通りに、小荷物にして直接各地の消費組合にむけて送りつけたのである。斯様な組織もコントロニューズが全知にして全能なる事の

假定を許すならばうまく行くと考へられやう。ただ當事者は人間であり、人間は全知でも全能でもない所に混亂が生ずるのである。一例を示さう。

一九三一年一月七日のイズヴェスチャ紙でコントロールソユーズの議長ツェレンスキーは云つた。

「小賣商業に於ける、消費組合と國營商業との占むる特別の主要度は九五％に上る。だがこの驚くべき量的成功は決して同様の質的成功を誇り得る事を意味するものではない。……吾々は『缺乏商品』に屬せざる一聯の生産物の供給さへも、中斷した。吾々は二重の困難に遭遇した。時に不十分な輸送か、時に商品が有り餘つて商品取引が緩漫に陥るかどちらか……。生きた熟練せる勞働の缺除、商品供給上の不注意、そのよりよき分配に就ての不注意は、常に商業官僚化の現れである。商品の質は低下した。品質符號は役に立たぬ。黨の中央委員からなる統制部隊は商品の種目の選擇については何等の要求をもやらない。絹糸や編物品やそれに類する商品を片田舎へ送致することは、普通の現象となつた。バスクリエンの製材所に向つて五千個の犬の口輪と把手四貨車が（それも附屬の桶はなしに）送りつけられた。ベレンフスクの管轄消費組合へは佛蘭西語の字引が送られた。すべてこれ等の事實は『妨害行爲』に似てゐる。けれども商人が非人格化し注文が排除せられた現在の組織の下では、どこまでが不手際で、どこからが意識的な妨害であるかを

決定することは困難である。消費者の平等化、卸賣の排除、前註文制度の廢止の結果は、消費組合がその必要とするものを要求し得ざる事となつたのだ。」

價格公定の下に於ける通貨の膨脹の結果としての「商品饑饉」の事は先に述べた所であるが、その爲めに消費者は金を持つてゐても仕方がないから、貨幣を蓄へ様とはせず、財はどんなに品質が悪からうとも、如何に買入に困難があらうとも、兎も角大部分の種類の商品は賣れて行く。従つて品質や分配方法についての不注意が修正されないとといふ事にもなる。少數の商品は値段が高すぎて賣れ残るといふ場合があつたが、その際はよく賣れる種類の商品の買手に、その商品と同時に強制的に買とらせる所の「強制選擇」といふ方法がとられた。價格が需要供給によりて定まる機構の下に於ては、商品饑饉も強制選擇も想像も出来ない現象であらう。

かくの如くにして一九三一年のロシアに於ては、經濟の暗中模索的混亂狀態が、各方面から指摘せられ、一般的崩壞の危険がしきりに警告せられた。同年六月、工業指導者の會議は再びモスクワで開かれた。會議の内容は全く祕密にせられたが、ただ、六月二十三日の席上でなされたスターリンの演説のみは、七月七日に至つて公にせられ、やがてその英譯迄もモスクワで公にされた。このスターリンの演説こそ、黨首腦部の政策轉換を表明せるものとして注目に値するものである。素よ

り彼の演説に於ても、計劃經濟の理想は放棄されなかつたし、私的商業も許されはしなかつた。けれどもスターリンの演説に於ける新たな調子は、半年以來の工業指導者達の希望を要約せるものであつて、即ち或種の資本主義制度、殊に貨幣經濟の維持は計劃經濟の遂行のためにも不可避の前提條件であるといふ信念の表明に外ならない。スターリンは、當時貨幣なき經濟の主張をなす者を以て「トロツキー主義者」と斷定して強く非難してゐる。而して「經濟計算」(獨立採算制)はソ聯經濟の主たる原則として承認せられ、「留ルンによる統制」といふ言葉が、爾後のスローガンとして掲げられた。一九三〇年の金融制度の改革の大失敗も大膽卒直に承認された。而して其後一聯の信用制度改革によつて、經濟計算の細な方法が指導者達に強要せられる事となつたのである。

而してこれ等の方策は、若干の効果を齎して、ソ聯の經濟を一般的崩壊から救つた事は認められねばならない。けれども同時にその効果は大したものであり得なかつたといふ事も忘れてはならぬ。經濟計算の強要は、幾度か嚴達せられたにも拘らず、その後も引續き今日に至るまで、なほ常に不充足として指摘せられてゐる。而してソ聯當局はそれを以て、經營の直接指導者たちの惡意、無智又は怠慢に歸して居る。けれども、私見によれば、それは社會主義計劃經濟そのものの本質的な缺陷と見なければならぬものである。この事を確めるために、ソ聯政策の内容を、もう少し立入つて

検討して見よう。

一九三〇年の信用改革の失敗につづいて行はれた一九三一年の新立法の内容と成果とについて概観するに、これまでは計劃に従つて自働的に信用が與へられてゐたものを、今後は計劃遂行の具體的結果に基いて信用を與へる事となつた。これが三一年の信用改革の要點である。企業相互に手形を發行する事はなほ許されず、短期信用の授與權が國立銀行のみに限られる事もそれまでと變らぬが、ただ銀行が買手に相談なしに賣手に對して資金を供給するといふ事はやめられた。手形には購買團體の引受を要する事となつたからである。かくして銀行は單に一個の金融機關たる職分に歸つた譯であり、買手の見た事もない商品が買手の知らぬ間に賣付けられてゐるといふ様な弊害は除かれ、生産者の活動は買手によつて統制せられる事となつた。又各企業は貸借對照表の提出を要求せられ、その信用の要求額を豫め正確に決定する事を命ぜられた。各企業自身の有つ資金と、銀行から借りた資金とは嚴密に區別することを命ぜられた。銀行の短期の信用は限定された目的に對してのみは認められるが、併し、期限には相違なく返済しないと爾後信用を停止せられる事とされた。これによりて買手と賣手との間の直接關係を復活させやうと考へた譯であり、すべての國家企業は爾後相互の間に先づ契約を締結して、計劃の遂行を監督する當局の認可を受けねばならぬ。この契

約の中には引渡さるべき財貨の種目、品質、價格、分量が明確に一々記載されてゐなければならぬ。國立銀行はそれに従つて、買手が荷物を受取つた場合にその財貨の價值だけを賣手に對し金融する事が出来る。劃一的金融計劃であるといふ點では、なほそれまでと變化はないが、それでも、これによつて生産者の活動が銀行によつてではなく買手によつて統制せられる事となつただけに、經濟崩壞の傾向を幾分緩和した事は事實である。

一九三一年には、「工業コンバイン」の官僚的性質を緩和する爲めにも、若干の手段が講ぜられた。尤もトラストは曾て存したるが如き重要な地位を復活することは出来なかつたけれども、コンバインそのものが、集中をやめて産業部門と地域に従つて細分せられることとなつたのである。

企業の規模もあまり大きくては統制の困難なる事が認められて、數年來讚美せられ來つた「ギガントマニア」(巨大主義)は排斥せられ、而して大規模企業を次々に分割することが企圖せられ、それが不可能な場合には、大規模企業のそれぞれの部門毎に、別々の「經濟計算」(獨立採算)を行ふべきことが命ぜられた。

利潤を残りなく國庫に集中する事も亦有害と認められ、一九三一年五月三日の人民委員會議の決議によつて、利潤の約半分は當該企業に残されて、固定資本の爲めに、または流動資本の増加の爲

めに、乃至は労働者の文化的要求を充がすために、用ひられる事と定められた。

消費財の分配に關しては、スターリンによつて「ソヴェート商業」が主張され、從來の「社會主義的分配」に代るべきものとされた。かくして消費者との接觸が再び求められて、地方に卸賣店が復活され、上部からの指示による小荷物直送の制度はやめられた。財を消費者に強制する事も、能ふべくんば定量分配を行ふことも、宜しくないとせられた。即ち明らかに缺乏せる商品の外はなるべく定量の分配を行はぬ様に、といふ事になつたのである。

労働組織についても亦改革が行はれた。労働の品質及び量に就いて、個々の労働者の責任感が喚起せられる事となつた。一週五日制並にそれに伴ふ工場の不休運轉制は停められた。蓋し右の制度の結果は機械や道具の取扱について労働者の責任感を消磨せしめたからである。労働の能率を高める爲めに、出來高勞賃が一般に採用せられる事となつた。劃期的の成功として世界に放送された不休運轉や週五日制が、日本の左翼學生たちを昂奮させてゐた頃、現地ではすでに其の弊に堪へ得ずしてやめられて居つたのである。

企業經營の指導者の選擇に際しても、單に共產黨員であるといふ事だけでなく、その業務への能力をも考慮に入れねばならぬといふ事が警告された。

## 諸の企圖の效果

社會主義的機構の内部に於ける資本主義的諸制度の復活の企ては、さきにも一言せしが如く、若干の効果を収めて、ソ聯經濟を一般的崩壊から救つた。信用はこれ迄の様に自由に得られなくなつたが爲めに、工業指導者は貨幣の節約に留意せざるを得なくなり、生産に若干の秩序が回復された。生産財のストックも、必要な流動資本を得る爲めに分せられた。

けれどもかかる企ての效果はさまで大きくはなかつた。といふ譯は何故であらうか。理由を一言にして言へば、資本主義的諸制度は、社會主義とは根本的に異質なる經濟機構に所屬するものであつて、社會主義がそれ等の制度を同化し得ることが困難だといふ事に盡きるであらう。計劃經濟は、企業に對して、經濟計算を要求し利潤をあげることが命じてゐるけれども、而も同時に計劃經濟の本質に發する所の、經濟計算や利潤をあげることと相背反せる任務を課してゐる。嚴に採用を命ぜられた資本的諸制度が社會主義の中に深く這入り込み得なかつたのは、正にその故であると考へられる。

例へば、國營銀行は國營企業に對して、嚴格な信用規律を強制する適切な手段をもたない。技術的には國營銀行は國營企業の財産を差押へる事も出來やう。併し現實的にそれを遂行し得ない理由は、差押へを行ふ事によつて生産計劃の遂行を妨げざるを得ないからである。トラストに生産費引下げの強制的命令が與へられる場合に、トラストは「非經濟的な計劃そのものがやめられねばならぬ」といつて命令に服しない。而も當局は社會主義の立前上利潤を齎らさぬといふ理由で事業をやめるといふ譯にも行かぬのである。

工業の指導者にとつて最も重大な問題は、計劃の量的な實行である。蓋し指導者の地位の將來はその計劃の量的遂行の如何にかかつてゐたからである。建設活動は重要な役割を占めてゐたが、その領域に於ては、利潤性に對して如何なる注意も拂はれてゐない。一九三一年十一月十五日イヅヴェスチャ紙も指摘してゐる様に、「多くの場合建設を托されてゐる人々は、見積をする知識を持たず、又見積がどの程度迄超過遂行されたかをすら知らない」。期日までに計劃を完成する事が重要なのであつて、どれだけ費用を要するかは殆んど問題でない。彼等は一般に、急速な建設と低い費用とは兩立し得ないと考へてゐる。所が費用と収益とを對比し得る工業生産の領域に於てさへも、事態は本質的には建設の場合と異らなかつた。そこでも亦指導者達の第一の關心事は計劃の量的遂行

であつて、利潤性でもなく生産物の品質でもなかつた。何となれば、この見地こそは、本質的には又ソ聯當局の見地でもあつたからである。

消費財の社會主義的分配を商業によつて代らしむるといふ望も亦充分には達せられなかつた。貨幣の分量と財の固定價格との間に大きな距離が存続してゐたからである。實際に社會主義的分配を商業に代へ様と思ふならば、固定せる價格の制度をやめなければならぬ。

労働者の能率を高める爲めに労働者の實質的收入に差別を設けるといふ事も、ソ聯政府がより大量の食糧及び住宅等を貯ふるならば別として、事實さうでなかつたが爲めに、一人の労働者の實質賃銀を増加する爲めには、それだけ他の労働者の實質收入を減ずる外はなかつた。かくして賃賃の間に、労働を刺戟するに充分なだけの差別を設ける事も出来なかつたのである。

經營指導者の選擇に際して政治的考慮よりも經濟的能力を考慮するといふことも、充分には實現し得なかつた。蓋し社會主義は、政治の優位を前提として成立せるものであるのみならず、社會主義の支配下では經營指導者の經濟的能力の認定が極めて困難なものだからである。

貨幣の發行も亦色々の種類の手段が講ぜられたに不拘、充分に制限する事を得ず、一九三一年一月一日から二ヶ年の間に、即ち第一次五ヶ年計劃の最終期までの間に、貨幣量は四十三億から七十

億へ即ち二十七億留の増加を見た。而も政府はそれ以上の貨幣の發行を欲しなかつた爲めに、必然的に建設プログラムの縮少を餘儀なくされた。前に一言せし如く一九三一年九月十二日のエコノミーチエスカヤ・ジーズニ紙に公にされた所によれば、同年中に完成の見込なき建設は當分停止されて、其の建設材料は同年中に完成の見込ある建設へ廻されねばならぬといふ事が、最高經濟會議によつて決定されてゐる。かくして半途でやめられたものが随分出來たが、未完成の建設に投ぜられた莫大な資本はそれだけ不經濟的に誤用されたものと云はねばならぬ。

此處で注意を喚起して置きたい事は、マルクス主義者が資本主義的計劃經濟又は資本主義的統制經濟を非難する場合の根據である。周知の如くマルクス主義者は資本主義機構の上に國家的計劃統制の經濟を樹立する事は、資本主義的私有利益の追及と國家的統制との矛盾を來すが故にすべて成し得ないと主張する。即ち彼等は資本主義的な眞の計劃經濟はあり得ないと主張するのである。私は右の限りに於てマルクス主義者の批判には傾聽すべき點があると思ふ。所が吾々は彼等の批判の方法をそのまま一九三一年以後のロシアに向けて、資本主義的諸制度を採用して社會主義を貫くといふ事が果して可能であるか否かを問ふことが出来る。ソ聯に於ける少くとも今迄の經驗はそれ

が不可能である事を示してゐる。而してそれが成功しない責を經營當事者其の他の惡意や無智や怠慢に歸し、而して社會主義の敵といふ刻印を押して、所罰につぐに所罰を以てして居るのは、無知にあらざれば虚妄である。若し左様な言譯を許すとすれば、資本主義的計劃經濟も亦本質的に可能とは斷じ得ないこととなるであらう。

### 一九三二年以後に於ける混亂の兆候

種々の防止策によつて、一時全般的崩壞の危機を脱し得たにも不拘、一九三二年以來再びソ聯の經濟組織には激しい混亂が現はれた。それは一部は過大な速度で經濟的計劃が施行せられる場合に避くべからざる齟齬の結果でもあつた。重工業の急速な建設、殊に非常に遠隔な極東地方に於ける建設は、ロシアの鐵道にとつて五ヶ年計劃の豫想せし以上の負擔を負はしめた。主なる用具が重工業に費されたが爲めに鐵道は適當に裝置されることが出來ず、ために車輛はあまりにも集約的に、使用されねばならなかつたのである。

軌道其の他の鐵道諸設備の消耗にも拘はらず、修繕は遅々として進まず、例へば一九三二年六月

一日現在に就て見るに、鐵道線區の根本修繕半ケ年計劃は僅にその一五%しか遂行されなかつた。即ち幹線に於てすらも軌道改善の計劃は二〇%しか行はれず、轉轍機の修繕は僅かに一六%に過ぎなかつた。

鐵道設備の成績が如何に不充分であるかは、日々の積載貨車の數字に最も明瞭に現れる。計劃によると一九三〇年十月には一日の積載量六萬三千貨車以上を要求してゐた。然るにこの要求は一九三二年に到りても猶遂行されざるのみならず、一九三一年に比して著しく減退さへした。一九三二年十一月十六日のブラッダ紙によれば、ソ聯鐵道の一日平均積載量は次表の如くである。

	1931年	1932年
6月	54635	52513
7	52422	48307
8	51129	47245
9	53694	51174
10	55004	52450
11	55384	50098

因に一九三三年度の成績は更に悪化し、一九三二年の各月に比して一月には八七・九%二月から六月迄は九五・九%乃至九七・八であつた。

もう一つ注意すべき事は、工業生産の増加の外に國民經濟の變革そのものが、運輸事業の非常な

増大を必要ならしめたといふ一事である。例へば以前は農民自身の手で生産された品物も、家内手工業の壓迫された後は、工場にその供給を仰がねばならぬ。この事はこれ迄以上の運輸機關を必要とするに至つた事を意味する。又數多く建設された大經營と工業中心地への人口集中も亦、交通運輸の需要を著しく増大した原因であつた。斯様な増大せる需要は五ヶ年計劃の中には充分計算されてゐなかつたのである。さうした結果起つた特徴的な不都合の事例を擧げて見よう。

トウラ地域の鐵鑛を充分利用する目的で、大熔鑛爐が火を吹き初め、それに續いて次々に操作が行はれる筈であつた所が、熔鑛爐に對して火室の數は少きに過ぎ、而も現存の火室も勞働者の不足の爲めに充分なる生産を行ひ得なかつた。勞働者が不足した理由は、その住宅が不完全で、鑛山勞働者の文化的、物質的な欲望に對する顧慮が拂はれてゐない爲めである。その結果ドネツ盆地のコースのみならず遠隔のクリポイログの鑛石迄も供給せねばならぬ事になり、一吨の銑鐵製造の爲めに約三吨の材料をつくらねばならぬこととなつた。この報告の作製者も次の疑問を以て結んでゐる。「我國の運輸はかかる浪費を許し得るであらうか？」と。

經濟計算の喪失は、鐵道の非經濟的な運輸の原因をなした。同種類の品物が、遠方迄反對の方向に運ばれた。價値の少い嵩高の荷物が幾日も要する遠方迄運ばれた。一九三一年に於て、一五一九

億トンキロメートルが運ばれ、鐵道の仕事は二五%も豫定を超えたに不拘、經濟の需要に適應し得なかつた。この事は、殊に鐵工業の上に好ましからぬ影響を及ぼし、それ故に同年の鐵工業は板鐵が一九三〇年の四九九萬吨から一九三一年の四〇六萬吨へ、即ち一八・六%の生産減退の現象を見た。一九三一年、一四一萬吨といふ巨大な板鐵の輸入にも不拘、この工業に於ける立遅れは經濟のあらゆる部門の發展の妨げとならざるを得なかつた。農業に起れる非常な困難については、ここには略するが、工業生産の減退について、これを數字的に觀察すると、次の如くである。五ヶ年計劃によれば、工業生産の増加は、最後の年に於て最大に達する事が豫想せられてゐた。即ちそれぞれ前年度の生産額に對する増加率の計劃を示せば、

一九二八—二九	二二・四%
一九二九—三〇	二一・五%
一九三〇—三一	二二・一%
一九三一—三二	二三・八%
一九三二—三三	二五%

而して最後の年に生産増加が二五%といふ最大率に達するといふ豫想は、新設工場の運営が、同

年に於て最大の割合に達するであらうとの推定を基礎に得られたものであつた。即ち國家計劃委員會の報告を見ると、五ヶ年間に運轉せられるに至る工場設備は一五三億ルーブルの價値で、その中一九三二年度に新に運轉せられるに至る分は五七億ルーブルの價値に當る工場設備である。かくして當然同年に對しては驚くべき生産増加が豫想せられて居た譯である。然るに實際の成績について見ると、工業生産の増加率は、殆んど停止状態であつた。規格工業の一九三二年度に於ける生産は、前年度のそれを超えること僅に八・五にすぎず、而も、一九三二年第一四半期七六億（一九二六—七年度の價格で）第二四半期六九億、第三四半期六七億といふ風に漸次低下してさへゐるのである。それでもなほ一九三二年度の工業生産は、前年よりも六六億ルーブル増加してゐるが、次の年は僅かに二一億ルーブルの増加にすぎない。一九二八—二九年には二三・七の生産増加を以て計劃を凌駕した。「五ヶ年計劃四ヶ年完成」のスローガンによつて翌年度の計劃數字は三二・一増加といふ統制數字に置換へられた。然るに事實現されたものは二二・四であり、決定年度と呼ばれた一九三一年は統制數字が四四・三％で實現が二一・七％、即ち最初の計劃數字にも及ばず、一九三二年は更に成績不良で、統制數字三六％に對し、實現は僅かに八・五％に止つた。かかる餘りにも大きな當外れが經濟發展の非常な障害とならない筈はない。

斯様な事實を説明するものとしては、労働者の能率の低下と若干の重要工業に於ける失敗とに原因を求めねばならない。一九三二年末に於て未完成建設に投下された資本は當時の價格で八十一億八千三百萬留であつた。尤も一九三三年一月の會議の席上に於て黨の指導者達の述べた報告によると、「計劃は成功的に遂行された」といふことになつてゐる。けれどもそれは斷じて事實ではない。右の報告が事實とすれば一九三二年一月、既に第二次五ヶ年計劃の案が出来てをり、その後數ヶ月度の會議で論究されてゐたに不拘、三三年一月の會議に於て、なほその確定を見るに至らずして、終に確定を延期せられるに至つた事が不可解千萬となる。第一次五ヶ年計劃が果していはれるが如く成功的に遂行され得たものならば、一九三三年一月には直ちに第二次五ヶ年計劃案を確定着手すればよい譯で、何も延期する必要はない筈である。

第一次計劃によると人口一人當りの消費に充つべき實収入は、三分ノ二だけ増加する豫定であつた。もしもそれが實現されて居たものならば、國民はより以上の致富を約束せる第二次計劃には喜んで參加した筈である。第二次計劃に對して國民が熱意を有しなかつたのも、政府が第二次計劃の確定を延期したのも、要するに、事實上、第一次計劃が成功的に遂行されてゐなかつたがためと解する。かくして一九三三年度の主要目標は、單に前年末迄にすでに着手されてゐた建設の完成と、

新工場のより能率的な運用といふことに止つたのである。

而してさきにも云へる如く經驗の結果は、工場の建設よりもその利用の方が遙かに困難な仕事であるといふ事を示した。かくして形式的に云へば、第一次五ヶ年計劃は一九三二年の終で終結したることとなつてゐるに不拘、實際的には翌三三年度をも、その内に含める事がより正確であらう。

## 難局突破の窮策

——テロの強化と資本主義諸制度の復活——

第一次五ヶ年計劃の末期に逢着せる經濟的危機を克服する爲めにソ聯當局のとれる手段は大體二通りに分ける事が出来る。一つは意氣沮喪せる大衆の規律を振作して、労働者をそれぞれの職場に固着せしめ、其の激しい移動を防がんがためにとられたものである。既に度々述べた様に、工業労働者は少しでも良好な食物と住宅とを探し求めて、他國では勿論ロシアでも曾て見ざりし程の高い労働者の移動率を示したが、それが労働能率の上に悪影響を及ぼし、計劃の遂行を妨げた事はいふまでもない。そこで當局はこの移動を防止せんが爲めに、あらゆる手段をとらうと決心した。強制

は計劃經濟の有つ宿命である。社會主義計劃經濟の實現の爲めにはすべての生産要素は當局の手になければならぬが、ただに物的生産手段のみならず、人的生産要素も亦、當局の自由なる處分に委ねられてゐなければ、計劃を遂行する事は出来ない。この事は少しく考へれば誰にでも判る事であらう。ソ聯の十月革命以前に、マルクシスト達が、物的生産手段の國有だけを主張して、勞働選擇自由の喪失に思ひ及ばなかつたのは、元來社會主義思想の源泉が勞働者の解放にあつたが爲めの認識不足と見るべきであらう。ロシア革命以後の経過を見れば明白な様に、社會主義計劃經濟を實行せんとすれば必ず勞働の強制を隨伴してゐる。戰時共產主義時代にそれを見た。ネップによる市場の復活によつて強制がなくなつたが、五ヶ年計劃の遂行は再び強制勞働採用を餘儀なくせしめた。かくして計劃經濟の遂行下に於ける強制勞働を以て偶然の事實と見てはならないと考へる。

一九三〇年十月九日の決定によつてすべての失業手當の支拂が停止されたのは、勞働力に對する當局の支配力を保證せんがための第一着手であつた。雇傭局の權限が擴大されて、失業勞働者に對しては、その住所や職業をとはず、當局の任意に勞働を課する權能が與へられた。更に現に就業しつつある勞働者に就ても、その現住所如何に不拘、他の勞働に従事させる權能が當局に附與せられた。それは同時に、勞働者の意志による頻繁な移動を防ぐ爲めのものであつた。併しかかる方法

によつて政府は労働者を充分その支配に従屬せしむる事を得たかといふに、實は思ふ様には行かなかつたのである。労働者は相變らず自由に移動をつづけた。何故ならば、あまりにも急激な建設と工業の擴張とのために、熟練工が甚しく缺乏し、何處の工場へ行つても大いに歓迎せられたからである。又不熟練労働者の多くは農村出身であり、従つて農村に家庭をもつて居る。彼等は具合が悪ければ農村に逃げ込んで時を待ち得るがために、なかなか當局の自由にはならなかつたのである。けれども前にも一言せし様に、計制遂行の爲めには、計制されただけの物的生産手段を調達するのみならず、計制だけの労働者を得なければならぬが故に、純粹な自由労働制の上に計制經濟を樹立することは出来ない。かくして創設を餘儀なくせられたものが、かの龐大な「強制労働軍」の編成であつた。強制労働軍のメンバーに編成されたものの多くは「トラック退治」の犠牲となる農民と諸種の政治的容疑者とであつた(第四九八頁参照)。斯様な強制労働軍によつて遂行された大事業は頗る多いが、白海とバルチック海をつらねる運河やモスクワの地下鐵道の如きは、全くその所産であつた。更に強制労働軍を補ふものとして、地方住民による強制奉仕の労働も忘れられてはならない。なほまた斯様な強制労働者の労働の組織や監督は、例のG・P・Uに所屬し、戦慄すべき死の鞭を以て驅使されたといふ事實も、同時に記憶されねばならぬことであらう。

労働者の移動を防止する爲めには、一九三二年の秋には、更に厳格なバスポート（通行券）制度を採用せざるを得なかつた。この制度は曾て帝政時代に採用されてゐたものであり、十月革命後この制度を廢止せし事を以て黨の輝かしい勝利を意味するものとして誇示してゐたものである。然るに今や再びそれを採用した。否採用せざるを得なかつたのである。先づ大都市から着手して、漸次小都市へと、その住民はバスポートを強制された。この方法によつて最後に略々労働者を統制し、その仕事場に労働者を縛りつけることに成功した。

更にこの方法によつて都市の住民を減少せしめる事が出来、都市に於ける食糧問題をも幾分緩和する事が出来た。蓋し一九三二年秋の減收穫の結果、全国的に食糧難に襲はれたが、都市の食糧難は田舎のそれと違つて共產政權にとつて厄介な問題を起す危険があつたからである。

労働者の規律の維持の爲めに、一九三〇年の春には、トラクター、汽罐車の如き重要な作業に従事するものの不注意なる労働は犯罪と規定せられた。然るに一九三二年十一月十五日の政府の訓令によれば、賃労働者にして、正當の理由なしにほんの一日でも仕事を離れた者は、その食券及び室券を沒收せられる事となつた。そればかりではなく、同時に、かかる労働者は爾後六ヶ月間は他の如何なる仕事にも従事するを得ない、といふ事に定められたのである。

以上述べた所は労働者の規律維持の爲めに採られた手段であるが、農民のそれに關して採用されたものも、その苛酷なる點に於て、勝るとも劣るものではなかつた。元來農民からの徵發量があまりにも多かつたが爲めに、農民は食つて行くことが出来ない。その結果として、收穫時の前になると、農民達は暗夜密かに彼等の集團農場に潛入し、麥の穂を摘んで自らの袋の中につめ込み、それによつて辛うじて口を糊するといふ方法を選ばざるを得なかつた。彼等はさうする者を以て、俗に「散髮屋」と呼んだが、この種の現象は可成廣汎に行はれるに至つたものである。そこで一九三二年八月十七日の法律は、この種の所謂「散髮屋」を以て、社會的財産を害する者として死刑を以て處斷することに決定してゐる。

つひに一九三三年一月以後は、すべての集團農場とM・T・S(農業機械駐屯所)にも、G・P・Uの部隊が設置せられる事となつて、その目的の爲めに、一萬五千人の共產黨員が都市から各地方に差遣せられた。これ等の黨員は集團農場並に私的農民を監督する事に於て、無制限な權力が與へられた。即ち不注意なる労働者や計劃遂行の失敗者に對してさへも、最高死刑に至る迄の峻嚴な處罰を行ふことが許されたのである。

ソ聯當局は、第一次五ヶ年計劃末期の混亂を脱せんが爲めに、一面に於ては上記の如き、吾等日

本人には想像に餘る如き峻嚴慘酷な手段に訴へたのであるが、同時に他面に於て、それとは矛盾するが如き傾向の政策をも辿つた。前にも度々述べた様に、一九三二年の春の農民は實に悲惨な運命にあつた。一九三一年の收穫が不作であつたに不拘、農作なりし三〇年度よりも多量に政府に調達されたといふ事がその主たる原因であつた。かくて農民の間には自暴自棄の氣分が漲つて來た。働かざる者食ふべしといふ勇氣を失つて來た。この氣運を見てとつたソ聯當局は、一九三二年度に對しては穀物調達量の減額を行ふと同時に、次年度に對しては、公定價格を以て穀物を買上る事に規定を改正し、而もその數量も耕地反別を基礎に豫め決定された數量を買上げる事に定められた。家畜についても甚しく低い價格ではあるが兎も角家畜のストックを基礎に豫め定められた數量を買上げる事にした。これまでも政府の調達量は、實際の收穫量を基礎に決定せられ、従つて多く作ればつくる程多く調達される事になつて、如何に努力しても自らの収入を増し得ない事情にあつたものが、その後は計劃よりも餘分に作れば、それだけは自らの増收となる譯である。また従來は少しでも多くの課税をする事が役人の功績の様にいはれてゐたものが、今後は農民の餘剰を收奪するために買上量を増加すること、當局者に對して固く禁止せられる事となつた。豫定の買上が完全に遂行された後に殘る餘剰は、すべて農民の所有とせられ、農民はこれを市場に於て自由な價格で販賣してもよろしいとされた。

斯くの如くにして、假借なき禁壓の幾年かの後に、農産物の自由取引は再びその姿を現すに至つたのである。

それのみではない。ソ聯政府は、集團農民が私的個人的に家畜を養ふ事を奨励しだし、又工業労働者の中に私的の榮園が發展する事をも奨めた。かかる手段は必然に労働者の間に、所謂ブル精神を養成する事になるであらう。ロシアでもさう見たものも多かつた様であるが、それを意とするには餘りにも狀勢が急迫を告げてゐたのである。

更に一九三二年七月二十三日の政府の決定によつて、手工業協同組合は、その生産品を公定價格で中央消費組合に引渡すべき義務を解除せられて、今後は自由市場に製品を賣出して差支ないことに改正された。また手工業協同組合は、大規模の國營工業と競争せざる限りに於て、所要の原料を獨立して買ふ事が許された。なほも個人的手工業者にかなりの重壓が課せられてゐるとはいへ、その重壓はこうして幾分は軽減せられたのである。

農民をしてその餘剰をなるべく市場に賣出させるが爲めに、政府は重工業に向つても、レールや汽罐車やトラクターだけでなく、一般大衆の直接消費の財貨をも生産して市場に出す様にとの警告を發した。さうでない限り農民はその餘剰を金に換へた所で、欲する工業生産物を買ひ得ないし、

従つてその餘剰を市場に賣出さぬ傾向をもつからである。

何人も氣付くであらう如く、以上の傾向は正に新經濟政策を彷彿せしめるものである。けれども吾々は一九三二年夏以後のかかる政策の傾向を以て、ネツプと同視する事は素より誤りであらう。兩者の間にはなほ著しい差異が見られる。その主たる差異は、ネツプの場合には私的商人の商業が許されたけれども、この場合にはただにそれが許されなかつたのみならず、最も嚴重に禁壓されたといふ點にある。されば生産者は直接消費者を相手に賣るか、然らざれば國營組織を相手に賣る外はない。また國營組織は相互の間にその生産物を「豫め契約せる」價格で賣買するのである。

尤もネツプの下に於ても、二つの異なる小賣商業があつたので、異なる二つの價格系統が存在してゐたといふ點をいへば、五ヶ年計劃末期の經濟はネツプに通ずるものがある。即ちネツプ時代消費組合や政府商店は多かれ少かれ固定せる價格でその財を賣るのが常であり、その財の種類はあまり消費者の必要に適合しなかつたが、私的商業に於ては、價格は需要供給の關係で動き、消費組合や政府の店よりも高價ではあつたが、買手の要求には、よりよく適合したものを提供した。この兩種の商業に於ける價格の開きはネツプの初めには大してひどくはなく、一九二三―四年に於ける開きは約十一％にすぎなかつた。然るに其の後私的商業を驅逐するにつれて、漸次價格の開きは擴大

し、一九二六—二七年には三五%にも及んだ。而してネップの廢棄は、政府の公定價格と自由價格との間に完全な分離を齎し、やがて五ヶ年計劃着手後には、私的商業は、公式に全く禁ぜられて所謂祕密取引による暗黒相場となつたが爲に、とるにたらぬものとなり、五ヶ年計劃の第二年度には専ら政府の固定せる公定價格のみが支配することとなつた。然るに所謂商品饑饉の現象が起つて以後の物價の狀況は如何に推移したかを見るに、國民は紙幣を有するも買ふべき商品がない、といふ狀況の下に於ては、値段を引上げても品物は飛ぶ様に賣れるのが常である。そこに唯一の賣手たる政府にとつて價格引上げによる利潤増加の機會があり又誘惑があつた。政府はその機會の利用を忘れはしなかつた。先づ大規模工業に従事せる勞働者と勤務者のみは、所謂工場附設の「閉鎖分配中央部」に於て、安價に定量配給を受ける事が許されたが、消費組合のメンバーたる權利を有する他の市民達は、かなりに高い價格で消費組合から物資を購入せねばならなかつた。更に市民權を奪はれた所謂「ブルジョア」の子孫たる民衆に至つては、僅かに祕密に残存せる私的商業に訴へねばならない。外國に在留せる親戚知友より品物の仕送りを受けてもすれば兎も角、外國に出る事も許されないロシアにあつては、非合法な私的商業に助けを求めざる限り餓死する以外に道はなかつたのである。かくして前にも述べた様に、分配はループルに依存せずして如何なる階級に屬するかとい

ふ事が決定的役割をもつたのである。この状態は一九三〇年の終迄つづいた。

一九三〇年の終に至つて、かかる社會主義的分配に一條の龜裂を生じた。定量配給の外に政府によつて「外貨販賣商店」(トルグシン)の創設された事がそれである。トルグシンに於ては最早定量配給が行はれるものではなく、そこでは自由に購買が許された。ただ購買は單に外貨を有するもの又は金を有する者に限られた。トルグシンの創設は、何よりも外貨吸収の爲めの窮策である。蓋し五ヶ年計劃の遂行に要する輸入品の代價や外人技師の俸給支拂の爲めには留紙幣は用をなさなかつたからである。

然るに一九三一年以來は、ロシア貨幣に對しても自由に販賣せられる所の「國營商店」が設けられた。そこに於ける物價は甚しく高價であつて、一般労働者の容易くは手の届かぬものであつた。國營商店の創設は通貨の收縮(回收)によつて「商品饑饉」を緩和せんとの意圖に出たものと解される。一九三二年以後は農産物を「協定」價格で買ふ事が許されたが、この事はまた商店網の擴大に刺戟を與へた。蓋し協定價格で買入れられた農産物が所謂「商店」で賣捌かれたからである。一九三三年になると、工業製品までもかかる商店で賣られる事となり、而もその割合も漸次に多くなつて行つた。

これ等諸々の店々に於ける價格は減多に公表されなかつたけれども、實はその開きは非常なものであつた。一九三二年八月一日のモスクワ地方の價格表を基礎として調査せるプロコボヴィツチ教授の報告によれば定量配給の品物(閉鎖店)十二種の平均物價指數は、一九一三年を一〇〇として、一九二七—二八年には二〇七であつたのに對して三〇七であり、國營商店の品物の指數は一九六を示してゐる。同じ時に政府が農民から買上げる穀物の價格指數は僅かに一五〇であり、消費者によつて市場で農民に直接支拂はれる農産物の自由價格は商店のそれよりも遙かに高價であつた。これによつても政府の農産物買上げが、殆んど無償收奪に近かつた事が知られるであらう。

斯かる商店網の發展が、氾濫せるルーブル紙幣の回收に役立てられし事は、前にも觸れて置いた。これ迄も同じ目的の爲めに強制的に公債を買はせてゐたのであるが、その方法が全然やめられた譯でないが、それに比して商店による方法は遙かに有效であつた。所がこの新たな商店の方法は、ある程度迄ソヴェートの計劃經濟と矛盾するものであつた。從來勞賃の大部分が定量配給品の購入に用ひられてゐた場合に於ては、勞働者の貨幣賃銀額の上では永い間に非常な差が出来てゐたに不拘、實質收入の上ではさまでの相異は起らなかつた(といふ譯は定量配給の物品代を支拂つて残つた紙幣は、少少残つた所で高價な祕密取引の私商人の商品の前には物の數ではなく、ほんの僅かな物を購ひ得るに過ぎなかつた

からである。

然るに商店網の發展した後では事情は異なる。そこでも價格は相當に高いには違ひないが、併し私人のその如く高くはなくて、而も公然と可成の品物が手に入るのであるから、勞働者の名目勞賃の差は略々實質勞賃の差を意味する事となる。而も定量配給は漸次減少せられて、市場及び商店のみが、貨幣所持者に開かれる傾向を辿り、一九三五年一月からパン及麥粉の定量配給は形式的には廢止せられるに至つた。

さうなると必然の勢として勞働者は少しでも多くの貨幣所得を得る事に關心を持ち出した。勞働者達は、所屬の工場指導者に向つて、陰に陽に勞賃の引上げを迫つた。五ヶ年計劃の最後の二ヶ年間に勞賃額の増加が、豫期されてゐたよりも遙かに急速であつた事實の裏には、さうした勞働者の勞賃引上げへの關心と壓力とが横たはつてゐたのである。

一九三一年の鐵工業の勞賃について見るに、三〇年に比して一五・七%増、一九三二年の勞賃は三一年に比して二九・八%増、而して五ヶ年計劃では工場勞働者全體について、勞賃は四七%増加の豫定であつたものが事實は五ヶ年間に七〇%増加した。この貨幣勞賃の豫定以上の増加を以て勞働者の生活の改善を意味するものと同視してならない事は勿論である。

兎も角、右の如き貨幣勞賃に於ける豫想以上の増加にも不拘、生産力の發展が殆んど見られな

つたが爲めに、必然的に、財政計劃に一の龜裂を生ぜしむるに至つた。一九三三年に至つて勞賃昂騰に對する反對闘争が開始されたのはそのためである。一九三三年二月二十一日の政府の決定によれば、工業の指導者は勞賃基金の使用に關して、高等法院の嚴重な統制に服する事とせられた。また同年十二月三日の政府の決定に於ては、工業指導者が自らの發意で勞賃を上げた場合は、嚴重に處罰せられる旨が規定せられてゐる。

これ等の規定の結果どれだけの實效をおさめ得たかは素より疑問である。第十七回黨大會（一九三四年一月）に於て財務人民委員部のグリーンコは、一九三三年の一年間に十五億ルーブルの節減をなし得たと誇らしげに語つてゐる。若しもそれが事實とすれば、國營商店網の發展によつて達せられたものであるといふ事は疑の餘地なき所である。然るに斯様な方法が財政を調整するに役立つたとしても、それは元來計劃經濟本來の目的とは矛盾するものといはねばならぬ。何故ならば、計劃經濟は巨大な投資を企ててゐるのであり、そのためには國民の需要充足を延期せしめねばならぬものであること、並びに労働者の實質賃金に甚しい差異の生ずる事は計劃經濟の元來希望しない所である事を考へれば明であらう。

農民がその課せられたる賦課分を出して後の餘利を賣り得るに至つたといふ事實、家内工業の需

要がある程度迄満足せしめられたといふ事實、個人農に於て家畜飼養が、また工業労働者に於て菜園耕作が、それぞれ獎勵せられた事實、これ等すべての事實の中に吾々の看取し得る事——また看取しなければならぬこと——は五ヶ年計劃の末期に於て、またしても計劃經濟の上に更に一つの上部構造を築く企てがなされつつあるといふことである。

これ等の上部構造は、本質的に自由經濟組織のものであり、従つて、度々述べた様に嚴格に組織された計劃經濟との内的矛盾の故に、どこまで成功的に發展するかは素より疑はしい。思ふに計劃經濟實現の目的を棄てない限りそれ等の諸經濟制度は發展しないであらうし、それが發展を期する限り、計劃經濟實現の目的を放棄せざるを得ないであらうと思ふ。

### 計劃の齎せる民衆の經濟狀態

以上述べて來た所と多少重複するきらひはあるが、第一次五ヶ年計劃の齎した民衆の經濟生活の狀態を要約しよう。

ソ聯經濟政策の直接の目標は「民生」を厚うする所にあつた。然るに大規模な工場や巨大な農場

に世界第一を誇るソ聯當事者の報告の與ふる印象は、建設そのものが目的であつて、毫も「民生」が顧慮されてゐないといふ事である。曰くドネツプロ發電所の完成、曰くウラルコンピナートの完成と、次々に傳へられる彼等の聲に想起せられるものは、萬里の長城やピラミッドの建設を想起する時のそれである。すでに新經濟政策の下に於ても、市場の状態は、農民にとつて決して芳しいものではなかつた。けれども、當時はまだしも私的商人の存在せし事によつて、社會主義部門による農民の收奪は、ある限界に止まらざるを得なかつた。一九二四年の如き大凶作の後に於てすらも、農民が饑餓に陥るといふ事のなかつたのは、偏へに私的商人による配給の故と見なければならぬ。五ヶ年計劃の下に於ては、農民からの調達が甚しく増加し、而もその調達は強制收奪の力で完全に遂行された。一九二八年の穀物の總收穫からは一四・七%が、而して一九三一年には、同じく總收穫量の三二・九%が政府によつて調達されたのである。吾等は一九三二年八月十八日のエコノミーチエスカヤ・ジーズニ紙(ゴスプランの機關紙)の次の言葉を如何に讀むべきであらうか。

「ヴォスネセンスク(ウクライナ平原)地方の集團農場の多くにとつて穀物調達計劃量は總收穫量の八〇%を占むるものであり、而して或場合には實際にすべての收穫量が調達された。ゴーウイニエカ及びキエフ(ウクライナ)の多くの集團農場に於ては、調達計劃は略々全收穫量を占めてゐた」と。

而も更に注意すべき事は、右の記事が出て間もなく、同じウクライナの港からは、大量の穀物が外國に向つて輸出されたといふ事實である。なほ家畜飼養の破局的減退にも拘らず、動物性産物の調達量は、卵を唯一の例外として、何れも却つて増額された。國外に於ける家畜用としての食糧品の輸出も停められなかつた。かくして農民達は一九三二年—三三年の戦慄すべき飢餓（餓死者五百萬と傳へられて居る）に追込まれたのである。

工業労働者の生活といふ見地から、五ヶ年計劃を觀察するものの注意すべき事は、彼等の生活状態は、五ヶ年計劃の前、即ちネップの打切り以前に於ては、かなり恵まれてゐたといふ事實である。一九二六—七年に於ける労働者の個人當り實質賃銀を、大戰前のそれと比較すると一〇—一百分之高かつた。その上に社會施設による所得を加算すると戦前に比して三分ノ一位も高かつたといへるのである。五ヶ年計劃に這入つて後も、ソ聯當局の希望としては、農民からの莫大な調達の助けによつて、労働者の利益を維持したかつた。ただそれが成功しなかつたのである。

國營商業の組織は、その調達せる巨大な農産物を如何にして保管すべきかを知らず、多量の農産物の腐敗や變質を生じた。彼等は又如何にして適當に分配すべきかを理解しなかつた。さらに多量の農産物は、輸入機械の代金支拂の爲めに輸出せられた。労働者は急速に殖えるし、農民のうち政

府の配給すべき部面の人數も急速に殖えた（技術的栽培を農民に強制したが、その方面の農民は普通の農民と違つて政府の配給で生活したからである）。斯様な、配給せらるべき労働者農民の激増は愈々政府の配給をまごつかせるに至つたのである。

第一次の強制的農業集團化の後には、動物性産物の市場が消失したが、それによつて最も打撃を受けたものは労働者であつた。更に一九三二年—三三年に南部地方で起つた飢餓は、都市労働者の生活にも悲惨な影響を齎さずには濟まなかつたのであり、既記の如くそれがバスポート制度復活の主たる理由となつたものである。

労働者の住宅状態の悪化は言語に絶するものがあつた。革命は住宅のかなりの部分を破壊したが爲めに、労働者の住宅状態は、すでに五ヶ年計劃前から随分悪かつたのであるが、それが五ヶ年計劃の着手と共に益々悪化した。ソ聯邦では元來住宅面積は一人當り八平方米を最低限と認められてゐたに不拘、ゴスプランの報告から計算してみても、都市住民の一人當り住居は五・八平方米にすぎない。一九三二年にはそれが更に落ちて一人當り平均、四・八平方米となつてゐる。尤もゴスプランの報告そのものは、都市住宅面積の増加した事ばかり述べ立てて、一人當り面積の變化は示してゐないが、他方で人口の増加が示されてゐるから、それから吾々が計算すると上記の如くなるの

である『ソヴェート聯邦第一次五ヶ年計劃遂行實績』(二八一頁)。

勞働者と云ふも素よりその中には自ら差別がある。大都市の勞働者には最も注意が拂はれるので比較的ましであつたが、最も悪いのは鑛山及び建設方面に働く勞働者、就中建築勞働者の生活がひどかつた。雨の漏るバラックの中に雜居して、飲料水もなく其の汚い事は言語に絶するものであつた。而も斯の如きは單なる例外ではなかつた。重工業人民委員部のオルゾニツキツゼが、有名なマグニットゴルスクの金屬工の住宅に關する報告の中で、「信じ得べからざる程に劣惡な住宅狀況だ」と述べてゐる。建設中の建築勞働者達は地下に住んでゐるといふ事も一九三三年八月十四日の重工業機關紙ザ・インドストリアリサーチュに明説されてゐる事實である。當時ロシアから歸つた或る旅行者が「大震災直後の東京の狀況を想起すれば大體間違ひない」といつたといふ。ただそれが天災でなくて人災である所に一入の苦痛が偲ばれ、その苦痛を外部に洩し得ない所に勞働者農民の遺瀕ない憤懣が想像されるではないか。

勞働者農民の生活狀態が、第一次五ヶ年計劃の遂行によつて、忍び難き悲慘なものとなつた事は、上記の如くであつて、ソ聯の實狀を多少共知る者にとつては、争ひの餘地なき事實であり、「五ヶ年間に著しく向上した」といふ國家計劃委員會の報告の如きは國外のプロレタリアや知識階級を

目あての僞瞞的宣傳に外ならぬ。

而して斯の如き悲惨な經濟狀態を惹起するに至れる原因は多々あるけれども、特に忘れてならぬものは、市場の破壊によつて需要供給の均衡が失はれたといふ事實である。社會主義の目的とする所は、市場經濟に代る計劃經濟の樹立であり、従つて十月革命と共に着手せられたものは市場一般の意識的な撲滅であつた。けれどもその結果として陥つた戦時共產時代の「經濟的盲目狀態(ヴァルガの言葉)」に懲りたソ聯の幹部は、貨幣經濟を基礎として五ヶ年計劃を樹立すると共に、市場の均衡を維持すべきことを最初から深く考慮してゐた。それらの事は既に詳述せし所である。ただ五ヶ年計劃に入る以前に於て既に市場の機構は幾分壞れてゐたが爲めに、計劃委員會内の非黨員分子は「五ヶ年計劃」の遂行を其の時期にあらずと主張したのである。非黨員分子の主張が斥けられて五ヶ年計劃に入るや、市場均衡は希望に反して破壊されて行つた。遂に一九三一年六月二十三日のスターリンの演説に於て市場均衡の決定的重要性が承認され、強調されたが、ただ如何に強調されやうとも、終にこの問題は解決され得ずして今日に及んでゐるのである。私は市場に於ける需要供給の均衡を失ふ事を以て、計劃經濟の一元的統制に不 避なる現象と考へざるを得ない。

五ヶ年計劃は技術的な意味に於ける「生産」に於てすでに失敗してゐる。けれどもロシアの勞働

者農民の經濟狀態がかくも悪化した所以は、單に技術的意味の生産が失敗したといふ事にのみ基くのではない。賣の大半は配給流通の失敗に歸せねばならぬものである。たとへ同一の生産が行はれた場合に於ても、配給流通の如何によつてその經濟的效果は同一ではない。例へば同一量の消費財が生産されたとしても、配給の如何によつて社會の需要を充す程度は區々となるし、同一量の生産財がつくられても、その配分の如何によつては生産の發展は區々であり得る。かかる事は改めていふまでもない明白な事であるが、ソ聯の經濟的效果を見るものは往々にしてこの點を看過するから繰返すのである。數個の世界的建造物の完成や巨大な投資の遂行が、直ちに五ヶ年計劃の「經濟的」成功の如く傳へられるが如きは、多くこの點の認識不足に基くものと考へられる。

ソヴェートロシアの計劃經濟は、財のすべてを一旦國家の手に收めて、次にその財を一般的に國民の間に分配するといふことを立前としてゐる。社會主義經濟の理想からいへば、すべての生産財を國有とし、國家の計劃命令によつて豫定の生産を遂行し、これを一定の原則に従つて、國家の手により國民に分配するといふことになるが、ロシアの現状に於ては素よりそこまでは行つてゐない。工業方面にも個人的な家内工業がある程度迄許される事になつてゐるが、殊に農業の方面に於ては大部分を占むるコルホーズでさへも、政府は豫定計劃だけの農産物をそこから買上げるにすぎない。

農民は又政府から改めて分配を受けて生活するのではなくて、買上げられた殘餘の自己生産物によつて暮すのである。けれども労働者、官吏、其の他農民以外のものの食糧の如きは、政府が買上げたものを色々な方法で分配するのであり、農民でさへも麻やヒマハリの如き所謂技術的栽培に従事せるものは、既述の如く、工業労働者と同様の取扱を受けるのである。

先づ財の一般的調達(買上)といふ方法は經濟の見地から見ても、極めて不都合なものである。一九三二—三三年の饑餓年度は、單に收穫の不成績にのみ基いたものではなく、寧ろこの調達の制度に原因する所が多かつたのである。繰返す様であるが、一九二四年の穀物收穫は、一九二一年のそれよりも更に悪かつたのに、而も一九二四—五年には飢餓がなく、單に復興が遅れただけの事で、それも決定的に停止はしなかつた。然るに一九三二年から三三年にかけては廣汎な飢餓を現出したのみでなく、農業の衰退を見たのは何故であらうか。この差異を説明し得るものは、一九二四—五年に於ては政府が農産物を市場で買上げる事になつてをり、買上げの爲めの國家機關はかなり強力な権能を授與されてゐたといへ、獨占の一つではなかつたといふ事實である。従つて一九二四—五年に於ては政府は計劃しただけの調達の目的を達し得ず、その結果、素より穀物の海外輸出も出來なくて、寧ろ或程度まで都市の爲めに海外から穀物を輸入せざるを得なかつたが、このことは政

府の計劃遂行といふ見地だけからいへば失敗に違ひないが、民生といふ本來の目的からいへば寧ろ當を得た事といはねばならぬ。之に反して一九三一—二年即ち五ヶ年計劃下の凶作に際しては、強制手段化の故に、未曾有の調達を遂行する事が出来、莫大な穀物を輸出し得たのであるが、結果はいふ迄もなくロシア農業の破局であつた。前には民生が勝つて計劃が負けたに對し、ここでは計劃が勝つて民生が敗れたといふことが出来る。

調達は斯様に危険な手段であるが政府當局による分配も、これまた民生の立場から見ても實に非經濟的な方法であつた。皮相的に考へると政府の強力でやればうまく行きさうに思はれよう。併し實はパンの如き國民共通の、最も原始的な要求を充す消費財の分配でさへも、決して單純なものではなく、複雑廣汎な組織を必要とする。況や個人毎に興味の異なる所より高次の消費財の、役人の手による分配がうまく行く道理がない。いつでも財はその效用を發揮し得ず、すでに擧げた様に、山の奥へ佛語辭典を送りつけたり、桶の把手だけを幾貨車も田舎に送りつけたりした事は、決して例外的な事實ではなかつた。戦時でもないのに食券を手にして幾時間も行列をつくる生活の如きは、そもそも二十世紀に於ける人間生活と呼ぶに値するものであらうか。

政府當局の手による生産財の配分の結果はどうであつたか。周知の如くロシアに於ては他の諸國

と異り、無数の私企業が廢除されて巨大な企業に集中され、國家中央部の手中に統制せられる様に全工業組織が單純化せられてゐる。かかる前提條件の上に強力な當局が配分する事であるから、少くとも生産財の配分だけは成功し得るであらう、と想像するものがあるかもしれない。然るにソ聯に於ける經驗によれば、その方面に於ても亦打勝ち難き困難に面した。生産財の配分の機能から見ても、市場の機構は計劃經濟とは比較にならぬ程、勝れたものだといふ事を實證して居る。

一九三〇年の末期以來、工業指導者達によつて指摘せられた缺陷の中心をなしたものは、原料配給の遲延といふ事であつた。一九三一年六月二十三日の演説でスターリンが計劃經濟と市場組織との結合を強調するに至つたのは、當局による生産財の配分の堪へがたき困難を経験しての結果である。ただスターリンの強調にも拘らず計劃經濟に市場組織を組合せることには非常の困難が横つてゐたのである。

計劃經濟に市場の組織を組合せる事に成功しなかつた理由としては、素より計劃が過大にすぎたといふ點も考慮せられねばならないが、それは失敗の本質的理由ではない。市場機能の衰退が、五ヶ年計劃の着手以前に於てすでに初まつてゐた事からでも想像し得る様に、過大な緊張は必然に強制を擴大するといふ結果を齎しただけの事で、市場の衰退の根本原因は計劃經濟そのもののうちに

内在于るのである。計劃經濟と市場組織との結合が容易でないといふ事を理解するが爲には、單に五ヶ年計劃化の經驗を検討するだけでなく、ネップの經濟、殊にすでに計劃經濟の加味されて來たネップ末期の經濟を吟味することが参考となるのである。

ネップ制度の下でも、それが純粹に行はれてゐた間は、ロシアの經濟生活は戰時共產主義の荒廢から比較的急速に復興し得た。けれども吾々はその時代には固有の意味に於ける計劃經濟は存在しなかつたのだといふ事を忘れてはならぬ。即ちそこでは私的商業の市場が許されてをり、従つて計劃が切斷せられる事が認められてゐたのである。然るに計劃經濟が優位を占むるに従つて、市場は排斥せられ、それにつれて經濟は混亂と衰退への道を辿つたのだ。即ち計劃經濟の進む所常に市場が排斥せられ、市場の排斥せられる所必ず經濟計算を喪つて、經濟は混亂と衰退を免れぬといふ事が、殆んど法則的正確さを以て、ロシアの經驗に實證されて居ると考へる。更に、結局は徒勞に終るにしても、計劃經濟實現のための意思は、それが強固であればある程、大衆に對するテロの強行となる事實も亦、必然不可避の現象と見て差支あるまいかと思ふ。

## 結 語

吾々の目的はソ聯の經驗を分析して經濟計算の問題檢討のための資料を得んとするにある。而して以上を以て參考となるべき資料はほぼ出つくした様に思はれる。けだし其の後の事態は、一九三一年六月のスターリン聲明による資本主義的な諸方法採用の方針の繼續にすぎないからである。従つてそれを敘述することは徒に同じことを反覆することを意味するが故に省くであらう。農業の方面に於てはコルホーズの土地用役權の永久化や、制限附ではあるがコルホーズ員の宅地、菜園、家畜、家禽の私有の獎勵、勞働に應ずる差別分配の命令等々、其の他の方面に於てもスタハノフ運動の展開、獨立採算制の強調、大部分の商品における切符制配給の廢止等々、何れも一九三一年以來の集權的社會主義緩和と資本主義的方法採用政策のあらはれに外ならない。而もかかる政策採用の結果たるや、第一次五ヶ年計劃の遂行に於て採られたる集權的社會主義計劃經濟の齎せる破局的危機を免れ得て、若干の生産性と秩序とを維持し得たといふに止まり、決してソ聯當局の報するが如き思はしいものではなかつた。

すでに第二次五ヶ年計劃を終へて一九三八年からは引つづき第三次の五ヶ年計劃に着手したと報ぜられて居り、而も計劃は大體成功的に遂行されて、ソ聯の經濟は日一日と隆々たる向上發展をつづけて居るが如く宣傳せられて居る。けれども第一次五ヶ年計劃の遂行實績に關するソ聯當局の報告が虚構偽瞞の宣傳にすぎなかつたことを知れる各國の識者は、最早第二次以後のすばらしい報告を眞にうけなくなり、興味さへ持たなくなつた様に思はれる。「妨害者」だの「人民の敵」だのといふ刻印を押して、十月革命以來の功勞者までが、殆んどすべて清掃の血祭りにあげられて居る事實や、多數の國外逃亡者を續出しつつある事實については周知の如くであるが、かくの如き事實も究極するところ、元來無理な計劃經濟を強行せんとするのが原因であるといふことを見逃してはならない。無理な計劃であるから、その實行にあたる當事者が命令された如くに遂行することが出來ない。さうするとその當事者が「妨害者」、「人民の敵」の名を以て其の罪をとはれるのみならず、累はその親戚交友關係や、同情者にまで及ぶのである。計劃樹立に當つて見解を異にせる者がやがて所刑を免れないことは云ふまでもない。かくして近時ソ聯の青年が經濟や政治や軍事等の危険な方面を避けて、比較的無難な學者方面、而も古代史の研究などを志望するに至り、一時盛であつた技術者や軍人希望も著しく減退したといはれて居る。かかる容赦なき清黨運動の外に、最近のロシ

アからの歸朝者の報告や新聞の特電は、頻りに「未曾有の食糧と衣服の缺乏」を傳へて居る。

第一次、第二次の五ヶ年計劃の遂行がソ聯の公報通り成功して居るものならば、今ごろ清掃さるべき無数の階級敵が存在したり、また勞働者農民が衣食の缺乏になやむ筈がないではないか。「朝の六時から起きて雨の日も雪の日も百貨店の前に列をなして立たねば食糧が得られない」(『讀賣』十三年十一月十五日夕刊)と報告され、また最近モスクワから歸朝した某廳の官吏も「遇々午前四時頃町を通ると、まだ開かぬ牛乳店の前には、はや五六十名が列をなして待つて居た」と語つて居る。これがロシア民衆の今日の經濟生活なのである。

廿年に互るソ聯經濟の社會主義經濟實現のための曲折は吾々に何を教へるであらうか。それは第一に、市場を撲滅せる中央集權的な計劃經濟は經濟計算を喪失して盲目狀態に陥り、混亂と生産性の減退に堪へられぬといふことを教へる。第二には市場の復活は經濟の秩序と生産性の復活を意味するといふことを教へる。而して第三に生産手段の國有、國家的經濟一般計劃の遂行といふ社會主義の根本規定の下に於ては、獨立採算、留<sup>ループ</sup>による統制、出來高拂、スタハノフ運動、社會主義的競争等の遂行も部分的な若干の効果を收め得るにすぎず、全體として資源の經濟的配分、生産物の經濟的配給を實現し難く、従つて生産の結果の跛行、需要供給の均衡破壊を避くべくもないといふこ

とが教へられるであらう。人はややもすれば、ソ聯の計劃經濟遂行の失敗をば、打つづく清黨運動に原因すると説く。けれども經濟遂行失敗の原因を妨害者の罪に歸するソ聯當局の言分と合せ考へるならば、市場の自然的自動的な資源の配分をば、國家の意識的計劃による配分に變革しようとする社會主義經濟の理念そのものが究極の原因であつて、この理念が棄てられない限り、經濟の復興も望まれないし、清黨運動の繼續も避けられぬであらうと思ふ。ロシア經濟の分析の結果として、少くとも私には、その様なことが學ばれたのである。

## 追記

生産の「跛行狀態」は、換言すれば國民經濟の「局部肥大」であり、局部肥大を來したる所以は、一國總資源の非經濟的なる配分の結果である。すなはちそれは「不經濟」の端的なる表現に外ならない。所謂資本主義的生産の無政府性を克服して資源の經濟的配分利用を實現せんがために、革命の犠牲を賭して一元的計劃經濟制度を採用し、廿年の永きに亘りて其の完成に異常の努力を拂ひつゝあるソ聯邦に於て、他の何れの國に於てよりも激しく、生産の跛行狀態があらはれて居るといふことは、一見奇異に思はれるかも知れない。だが社會主義計劃經濟に於ける經濟計算の困難を理解

するものの目にのみは、それは毫も不思議な現象とは思はれないであらう。

いふまでもなく、ソ聯當局も意識的にはかかる跛行を避けんとつとめ、殊に五ヶ年計劃の立案に際しては、或は「市場均衡の問題」として、或は「國民經濟バランスの問題」として、かなり注意が拂はれたのである。ただ需要供給の均衡は、彼等の意圖に反して崩壊の一路を辿らざるを得なかつたのであるが、それは何よりも先づ市場の破壊による一般的價格形成過程の喪失に因るものと解せねばならぬものである。

ソ聯經濟の當面の最大のなやみは、生産の跛行性 $\parallel$ 資源の非經濟的配分といふことであるが、これに對應して學者の間にはバランスの問題が重大な論議の中心題目となつて居る。例へば、一九三六年にはストルミリンが、マルクスの「再生産の表式」を用ひて「國民經濟のバランス」を作製すべき旨の意見を提起し、翌三七年には、メンデルソンがストルミリンに對する批判を公にして、國民經濟バランスの基礎構造は、マルクスの再生産表式に拘泥することなく、(一)労働のバランス(二)社會的生産物のバランス、(三)國民收入のバランスより成るべきことを主張して居る。

また一九三八年に到つては、パシニコフが更に異論を發表して、國民經濟バランスの表示をば、靜態的に、國民經濟の要素及び諸契機、すなはち労働力、生産用具、労働對象物、生産物、労働時

間、勞働生産性、國民收入、輸出入等々の數量を示す第一表と、動態的に、需要、供給、流通、分配、再生産過程等の内部關係を示す第二表とに分つべきことを提案し、且つ計算の尺度として自然的表現と貨幣的表現との兩者を以てすべきであると主張して居る。しかし何れもが未だ模索的な抽象論にとどまり、すこしも具體的なバランスの作製に着手し得て居るのではないのである〔露西亞月報〕第五十九號參照。

今一つ注意すべきことは、一九三八年二月に國家計劃委員會の大改革が行はれたといふことである。ゴスプランはすでに一九三五年にも改組されたが、三年を経て再び改組されたのである。而して今回の改革によつて、同委員會の主たる任務として、國民經濟の不均衡なる發展を調整すべき新たな任務が加へられ、同時に機構の上にも大改組が行はれて、一般的な事務を取扱ふところの綜合部に、「綜合國民經濟計劃部」を設け、其の下に「國民經濟バランス班」を置いた。また製鐵、電力、燃料等の主なる産業別の計劃の中に、それぞれ「材料バランス班」なるものを置いて、材料の需要と供給との均衡を掌らしむることとなつた。

吾々はソ聯邦が革命後二十年の今日に到つて、なほも國民經濟のバランスを作製し得ずして、其の必要を論じたり、其の基礎構造を論争したりして居るといふこと、更にまた、國家計劃委員會の

手に立案計劃された綜合的經濟計劃の實行によつて生じたる跛行の是正を、國家計劃委員會自身の主要な任務に加へたりして居るといふ事實のうち、市場の價格機構を失へる計劃經濟の下に於ける資源の經濟的配分が、如何に困難なる問題であるかを學び得るであらう。

# 附録

## 經濟計算に關係した四つの論文



## 第一 社會主義國家に於ける價格

私がここに紹介し且つ批評せんとするは、一九三一年ハーバード大學より公刊せられた、クロスビー・ローパー (Crosby Roper) 氏の論文「社會主義國家に於ける價格決定の問題」(The problem of pricing in a socialist state) である。それは一學生の手になれるものであり、また僅に四六判六十頁の小冊子である。けれどもアメリカの學界に於て、比較的早く「社會主義社會の經濟計算問題」の重要性を強調せし勞作として (學界にどれだけの影響を與へたかは明かでないが)、テイラー氏の論文「社會主義國家に於ける生産の指標」(一九二九年三月號アメリカ經濟評論所載) と共に、注目すべきものであるのみならず、社會主義國家に於ける經濟計算問題をば、競争經濟下の價格形成に關する理論經濟學の説明手續をかりて解決せんとせし試みの一類型としても、また興味少なからぬ論文と考へるのである。

以下其の所説の要旨を紹介すると共に、検討を加へ、かねて社會主義國家の經濟計算に關する私

見をのべたいと思ふのであるが、吾々は其の以前に、彼が對象とする社會主義國家の意味内容を明にして置くことが明確な理解を期する上に必要であらう。けだし、社會主義なる概念は人によつてその内容を異にするからである。ロ氏は其の「社會主義國家」の經濟を次の如きものとして規定して居る。即ち

第一、生産の極大化を目的とし、

第二、すべての生産資源は國家に屬し、國家當局がこれを運用するものと假定し、

第三、消費財の私有及び消費者の自由選擇權を保持し、

第四、生産物はこれを恰も其の生産費をカバーする價格で販賣する原則を採用する（この假定は以上三つの假定の必然の結果であることは後の説明によつて明となるであらう）。更に

第五、社會の全成員は國家の採用する報酬制度の下で、少くとも資本主義企業の下にある場合と同程度の熱心さで働くものと假定されて居る。のみならず、

第六、其の社會主義國家は他の國家と依存の關係に立つことなく孤立して自給自足するものと假定されて居る。

以上數個の假定は、社會主義國家に於ける價格決定の問題の本質を理解する便宜のために彼自身

によりて設定されたものであるが、社會主義國家といふが如き、現存せざる一種の構想されは社會を問題とする此種の研究にあつては、ただに許さるべき方法であるといふのみならず、水掛論に終ることを避くるが爲めに缺くべから手續と云はねばならぬであらう。さてかかる社會主義國家は、價格決定の機構なくして經濟を營み得るであらうか、といふことが、彼の第一に問題とする所である。

## 一 社會主義國家に於ける價格決定機構の必要

「現代經濟學の直面せる最も重要な問題は、經濟活動の社會主義的組織が可能であるか、またそれが望ましさものであるかといふことに關する諸問題である。この論文の目的とするところは、社會主義社會が直面せざるを得ない一の問題で、而もこれまで論争の何れの側の論者からも、比較的觸れられなかつた一の問題を提出するにある。それは苟くも、社會主義經濟が經濟的成功を目指す限り、問題とならざるを得ない問題である。それは純粹に經濟的な問題であり、而して全く根本的な問題である。」

ロ氏はこの論文を斯様な言葉で書出して居る。ここに彼が「社會主義社會が直面せざるを得ない一の問題」であり、「全く根本的な問題」であるといふ問題とは、社會主義國家が生産物の量と價格とを如何にして決定し得べきかといふ問題、即ち經濟計算の可能性に關する問題を意味するのである。注意すべきは、彼がこの重大問題が、アメリカの學界に於てこれまで、何れの側からも殆んど問題にされずに來たといつて居る點であらう。我が日本の學界に於ても近年夥しく社會主義文獻があらはれ、ついで計劃經濟、統制經濟に關する數多の論著が出たけれども、世に名高き教授、博士の手になれる論者に於てさへも、二三の例外を除いて、其の存在さへ認識されて居ない様に思はれる問題なのである。

ロ氏によれば社會主義の國家と雖も、何等かの價格決定機構をもたずしては、經濟を遂行し得るものではない。而してその論理は次の如く述べられてゐる。

「生産諸要素の全複合體は、仕事の諸分野の間に配分されねばならぬが、それは出来るだけ最大な結果を齎すが如き方法に於て爲されねばならぬ。社會主義國家にとりて必要とされる各財貨の生産のために生産要素の如何なる組合せが用ひられるかは、これを偶然に任して置くことは出来ない（勞働のみを評價しようとし、而して土地及び資本を全然考慮の外に置き、經濟的根據よりもむしろ倫理的

根據の上に立つてあらうところのマルクスの體系は、この複雑な問題を決定すべき方法をもたぬであらう。

國家の管理者等のなす直接的判斷は、充分困難に對抗し得ないであらう。蓋し經濟財の直接的評價は極めて限られた程度に於てのみ可能であるからである。……近代的經濟活動の大部分は簡単な種類のものではなく、生産は複雑な形で多額の資本を要し、また極めて長い期間に亘るところの過程を其の特徴とする。……その過程が餘りに廣汎に過ぎて諸要素を満足に評價し得る様な綜合的觀察をなし得ない。單一過程に止らずに、無數の競争的及び附加的諸活動（その各々が國家の生産資源の割前を要求する）を指導しなければならぬ場合には、直接判斷の上に立つ合理的行動は考へられない。如何に賢明なる國家の官吏と雖も、各問題の諸要素を考量計算すべき精密な方法を使用し得ない限りは、最良の政策について非か是かと摸索する以上には、殆んど何事をも爲し得ないであらう。考量計算の方法は、必然的に、何等かの比較單位——その表はすままに過程を續行し得る様な——を必要とする。」

以上が、ロ氏の述ぶる所の、社會主義國家も亦、價格構成の過程をもたずしては經濟的生產を遂行し得ないとする理由である。要するに、各種の財貨の生産のために、生産要素を配分結合するといふ問題——經濟配分の問題——は、小さな自給自足の幼稚な經濟に於ては、管理者の直接的判斷

に訴へても解決し得るであらうが、今日の國民經濟の如き廣汎複雑な場合にあつては、直接的判斷のみでは如何とも爲し難い。必らずや生産要素の重要さを考量計算すべき測定尺度があつて、その計算に基き、その示す所に従つて經濟を遂行するのでなければやつて行けない。然るに勞働のみを評價する勞働價值計算——勞働を評價の測定尺度となさんとする提案——は土地並に資本といふ生産要素の評價を無視するが故に用をなさない。それ故に結局、今日の經濟に見る如き「價格計算」に訴へる以外の方法を考へることは出來ない、と主張して居る譯である。

尤もロ氏が、價格計算による生産を以て完全無缺と考へて居ると思つてはならない。「それは第一に價格表現にのみ還元することの出來ない様な道德的並に審美的價值には充分適用し得ないこと、第二に經濟的な範圍に於てさへ、精密な計算の出來ない事柄に關しては、價格計算は直接判斷に讓らねばならぬ」といふ缺點を認めて居る。ただかかる缺點あるにも不拘、價格計算なくて經濟的生産を遂行することは不可能だと考へて居るのである。

「價格形成過程が普遍的標準 (a universal criterion) を提供しなるといふことは、經濟上の諸決定に對する一の必要なる基礎としての其の妥當性を破るものではない。資本主義經濟の貨幣計算に似た何等かの貨幣計算が、苟くも社會主義的な企圖の成功のためには、一の必要條件をなすで

あらう。それは必要な場合には、價格では表現出来ない様な諸考慮を以て補足されることにより生産に關する諸判断の根據を與へるであらう。」

「純粹な統制經濟の社會では貨幣計算ではなく、噸、尺等の實物單位を以て綿密な計算が行はれる」等といふ某々學者の説との非常な距離を注意すべきである。

## 二 貨幣制度——地代の必要とその量の決定規準

さて社會主義國家が必要とする價格形成の内容は如何なるものでなければならぬか。

ロ氏のいふ所では「第一に、消費者に財を分配する手段ともなり、且つ全會計組織の基礎ともなるべき貨幣制度がなければならぬ」。而してその場合貨幣の種類に何を選ぶかは大して重要ではないが、ただ各生産期間に於て市場にあらはれる消費財を、其の生産費に等しい價格で購買するに足る貨幣數量を、所得として國民に分配することが要件であるといひ、「この仕事は簡單な仕事でない事は明であるが兎も角達成されねばならぬ」と考へるのである。

第二に國家の管理者が生産資源の價格を決定するに當つて従ふべき原則に就ては、土地の地代、

資本の利子、労働の勞賃の量をば、それぞれの限界生産力に應じて決定せねばならぬといふのである。而して「社會主義の國家は、地代や利子を考慮する必要があるまい」といふ様な、社會主義の幼稚な考へが、米國にも普及して居ると見えて、それ等の幼稚な考へを是正するために、こまごまと地代並に利子を計算することの必要を説いて居る。それは殆んどカッセル教授の説明をそのまま借りて居ると見るべきものであるが、現に我が帝大教授の近刊書にさへ「統制經濟での價格は勞賃だけを考慮すればよい」等と書かれて居ることを思へば、我國の學界にも亦、社會主義の國家も地代や利子を考慮しなければならぬ理由は、充分に理解されて居るとはいへない様である。先づ地代考慮の不可缺について次の如く述べて居る。

「地代は不勞所得であるといふ普及せる見解や、地代は生産費の中に這入らぬといふ經濟學上の聞きなれた教義の眼には、社會主義國家の管理者は地代を考慮するに及ばぬと思はれるかも知れなす。……」

「社會主義經濟の會計に入る費用として地代を無視することは、合理的生産を保たんとする限り、全く不可能であり、従つてそれは限られた意味に於て一の重要にして適切なコストを成すのである。……」

「限界以内のすべての土地は、限界地に使用された等量の労働及び資本と比較して、使用された労働及び資本に對する剩餘生産物を生ずるが、この剩餘たるや、土壤の肥沃なることに歸すべきであり、現今の社會に於ける地代に相當する。この地代はヨリよき土地の上に作られた生産物のコストの一要素、即ち市場に於けるその販賣價格によりてカバーすべき一の費用として、社會主義國家の帳簿の上にはあらはれる。限界にまで及ぶ土地は、恰も今日の社會に於けるが如く、その生産性に從つて價格づけられるであらう。

この方法は合理的生産の一要件である。それは、何時、もつと徹底的に耕作するのがよく、何時、新しい土地を使ひ初めるのがよいかを示すことによつて、労働の集約的使用を指導する。またそれは最も消費欲望の強い財貨を、最大の充足をもたらす様な割合で、生産することを可能ならしめる。かりに最上の土地に地代が課せられないものと想定すれば、かかる土地を、販賣價格がやつと所要の労働費用をカバーして地代の餘裕を與へない様な財貨の生産に使用することが可能となり、その土地をかかふる目的に用ふことは、……需要のより強い生産物を作ることが可能ならしむる。」

かくて「土地に投ぜられる資本及び労働の經濟的に見て完全なる使用法、及び耕作面積の範圍、

並にその土地の種々の生産物の相對價格の調整者としての地代の意義は、本質的には社會主義の下に於ても、今日の社會に於けると同様のものであらう」といふカッセル教授の言葉を肯定的に引用して居る。

### 三 利子の必要とその量の決定規準

次に資本利子の計算が、社會主義の下に於てもまた必要不可欠であるといふ點に關しては、「社會主義的管理者が利子を無視し得ないことは、勞働の生産性が、それと結合して使用される資本の量及び質によつて異なるといふことによりて、明白であらう。國家は土地の場合に云はれたと同じ理由から、資本の使用を一の重要な費用として記入することを要する。」となし、

「國家の指導者の目標は、所與の資本供給量が恰も價格を支拂ひ得る諸用途に吸収される具合に、資本價格を制定することであらう。資本の増加分の價格は、資本が實際に用ひられる最後の使用法に於て生産物總量に對してなす寄與、即ち、その限界生産性に等しくなるであらう。この價格が最も經濟的な生産設備をもたらしものであることは、容易く論證される。第一にそれは資本を、

最も資本の必要を感じて居る用途に配分する。もしも資本使用に對する代價が安きにすぎたならば、資本の一部分は、生産に於ける利得が支拂はれる價格に等しくなる様な所に使用し得るであらうが、他方寄與の方が多い様な用途は資本なしに濟まさざるを得なくなる。かくて資本は割合重要でない用途に這入つて行き、比較的重要な用途は充されずに残るであらう。」

「若しも資本使用の價格があまりに高く定められる場合には、供給量は完全に吸収され得ないであらう。蓋し限界に近い用途は、法外な代價をカバーし得ず、有效供給量の一部は、依然として遊資の状態に置かれるであらうからである。」

即ち利率は、自由に處分し得る資本に對する需要を有する諸欲望の中で選擇を行ひ、最も重要な欲望のみを充足し爾餘のものを暫時割愛するといふ明確且重要な職能を果さねばならない。即ちここでも亦ローバー氏はカッセルの見解に學んで居るのである。

「第二に、資本の使用に適當なる價格を決定することは、一定の結果を得るに諸要素を最も經濟的に結合するための決定の根據を提供する。……それは機械を以て勞働に代置することが經濟的であるかどうかを決定し、或は耕地面積の擴大に代ふるに土地の集約的使用を以てすることが經濟的であるかどうかを決定する。其他すべての生産技術の諸問題——産業社會で依然として決定

的な——を決定するのである。」

周知の如く、今日の經濟組織の下に於ける利子は、資本供給の刺戟といふ役割の外に、資本の諸需要を調整して資本の經濟的使用を確保するといふ機能をもつて居る。私的資本の蓄積を認めない社會主義の國家にあつては、資本の供給は個人的行爲によつて行はれず、國家の政策によつて遂行されるであらう。従つて利子の機能のうち第一のものは消滅するであらう。けれども第二の機能たる資本需要の統制といふ役割は、社會主義の下でも相變らず重要である、と考へねばならぬ。尤も第二の機能を果すための利子が、適當な高さである事を要することは、ロ氏の詳説する通りであるが、かかる適當なる高さの利子が、資本市場の存在しない社會主義の社會で、決定せられ得るや否やの問題は、一つの疑問であつて、それは後の検討によつて明にされるであらう。

#### 四 勞賃決定の規準

地代と利子の形成に次で問題となるのは勞賃の決定である。勞賃に就ては、地代や利子の場合と異り、如何なる社會主義者も勞働の報酬決定を必要とすること自體には異論はなく、ただ其の額を

如何に決定すべきかといふことのみが問題となる。而して周知の如く社會主義は一般に所得の平等化を理想とし、勞働報酬を抽象的な正義の原則に従はしめんとする傾向を有する。けれども、社會主義が一定資源を以て最大の國民福祉を達成せんことを期する限りは、勞働の價格もそれぞれの勞働の生産性に従ひ、經濟的根據から形成せられねばならないといふのがロ氏の見解である。

すべての勞働を平等一樣に評價してはならない理由は、社會主義の國家に於ても、人々の間に非常な天賦の差異があり、教育の差異があつて、其の生産性を異にするといふことである。天賦の差異の存在については説かずして明であらうが、教育の差異の存在に關しては若干の説明を要するであらう。ロ氏はいふ。

「社會主義の國家に於ても、天賦の差異に結び付いて、必然的に教育の差異も依然として存続する。すべての國民を一樣に同じ程度に訓練することや、すべての人を、例へば醫者や化學研究者として必要なコースを辿らせる譯には行かぬ。一定の最少限の教育は萬人に保證されねばならぬとしても、長期にして費用の多くかかる教養は、概して云へば、最も有能にして且つこの特權を得んとする希望の最も熾烈な人々に與へられるであらう。所でかかる方法の結果は、純粹に自然的な天賦に基く區別の上に、更に色々な人々に與へられる準備に基く區別を重ねることとなる。

其の究極の結果は、今日の狀態に似ては居るが、しかし人為的な機會の不同に基くよりも寧ろ甚しく能力とエネルギーに基くところの大なる勞働供給の階層を現出するであらう。即ち先づ最少限の教育を受けては居るが、殆んど特別な職業的訓練を受けなかつた程度の低い勞働者の多數の一群と、その上に一定量の職業的訓練を重ねた勞働者——機械工、工手、書記等——の一群があり、更に其の上に一層高級の訓練を受けた一群が存することになつて、結果から見れば、所謂資本主義社會のそれと類似して見えるであらう。」

社會主義國家の下に於てもかくの如き勞働者の質の階層を免れることは出来ないとするれば、社會主義の國家が、これ等の異なる職業に對して、賃銀の絶對的平等を原理とするものと假定する場合、結果はどうなるであらうか。

「かかる方法は、最も有能な一人の國家管理者の仕事を一人的平凡な書記の仕事と同列に置き、高い訓練を受けた技師の勞働給付を普通の職工のそれと同視することとなる。一の經濟指導としてかかる賃銀平等の方法は、訓練を受けた技師を單純な機械工の仕事に使用し、有能な管理者の限られたグループを、造作もなき帳付け仕事に使用することをも不合理とは思はしめないこととなる。即ち無訓練な多數のグループに屬する勞働者十人を省き得る一の機械が、高級訓練を経た

少數技術者群の十人を省き得る機械と同一の經濟的價值ありと認められることとなる。少數にして甚しく缺乏を感じて居る勞働を必要とする一の財貨と、同量の豊富なありふれた勞働を必要とする財貨とが其の費用に於て等しいと見られることになる。かくて斯様な方法は、明に經濟行爲を指導するための妥當な方法ではなす。」

賃銀平等の原理が經濟的指導の適當な方法でないとするれば、差別を原理としなければならぬ。けれども單に差別を設けるといふだけでなく、適當な差別を設けねばならない。適當な差別とは如何なるものであるか。それは各勞働の價格が其の限界生産性に從つて形成されることである。それは恰も供給量に制限があり、而も種々の性質を有する土地の價格形成の問題に類似する。

「勞働の評價について國家の守るべき原則は次の如きものでなければならぬ。即ち勞働の使用は、平等といふが如き標準を基礎とするものではなく、賃銀が經濟的根據の上に決定されたる計算組織を基礎とするであらう。國家管理部は、各々の種類の勞働に有效な人員數を考慮し、而して其の帳簿の上で勞働の價格を、恰も各等級の勞働供給が其の價格を支拂ひ得る諸生産部門に使用される様に決定すること、換言すれば、勞働の價格形成は限界生産性の原則に從つて行はれる。即ちすべての單位の同質グループの價格は、その勞働を最後に使用する仕事、即ち有效供給量がよ

り少い時は除去さるべき仕事を支拂ひ得る價値に等しく決定されるであらう。」

## 五 社會主義國家に於ける價格決定の可能性——價格決定機構の要件

生産要素の經濟的配分の問題を解決するために、社會主義の國家と雖も、價格決定の機構をもたねばならぬといふこと、その内容は資本主義下のそれと略同様でなければならぬといふことに就て彼の説明は以上の敘述で明かとなつたであらう。ところで次に起る問題は、今日の如く、私有財産の制度の下に於ける交換取引の市場に、いはば自然にすべての財貨に價格が形成されるといふことの不可能な社會主義の國家は、この問題を意識的に解決して行かねばならぬが、さてそれを解決するには如何なる要件を具備せねばならぬであらうかといふことである。經濟の本質として生産要素の配分問題の存在を認識することは何よりも先づ必要であるが、それだけに止まつてはならない。更に進んで配分問題の解決のためには價格決定機構の存在を必要とするといふことが認識されねばならない。この認識のためのグスタフ・カッセル教授の功績は不滅のものであらう。けれども經濟學の研究に従事するものは、なほそこに止まることは許されないのであらう。即ち價格形成の過程を

分析して、それが更に如何なる諸條件の上に可能となるかを明にしなければならぬ。そこまで行くのでなければ、經濟學は社會主義や計劃經濟の主張に對する眞の批判力を持つことは出来ない、と私は信ずるのである。カッセル教授の經濟學の最大の不備は、右の最後の段階に達して居ないといふ點である。我が日本の經濟學界を見ると、大熊信行教授の努力で經濟に於ける配分問題の存在が漸く確認されようとしてゐるが、それさへも經濟學者の一部に止まるといふ現狀である。歐米の學界に於ても、この經濟學の本質問題が充分に解明されて居るとは云へないが、其の進歩は我が經濟學界の比ではない。ローバーの如き一學生さへ、この問題をここまで突込んで問題にして居る處を見れば、アメリカの經濟學界でさへ、日本のそれよりも一步を先んじて居るといふことは、遺憾ながら承認せざるを得ないであらう。

×

×

×

ロ氏が、社會主義國家が價格決定を具體的に實行するための必要條件としてあげるところは、

第一に、管理者が、豫期さるべき消費者の需要に關して、其の量についても其の價格についても——この兩者は相關的のものであるから——一般的知識をもつて居なければならぬ、といふことで

ある。この知識にして不完全、不正確であればあるだけ、會計官の計算は益々誤謬の多いものとなるであらう、と述べて居る。

第二に、生産管理者は、其の處分し得べき生産要素に關してかなり正確な知識をもつて居なければならぬ。いふまでもなく一定期間のために一定量の生産要素のストックが存在するが、先づそれを知つて居なければならぬ。更に最初にとるべき生産技術が決定されねばならず、そのための諸要件を正確に知らねばならぬ。またそれ以前の經濟に就ての好結果の經驗が出發點とならねばならぬ。國家の管理者は、これ等の事に關する自身の經驗を基礎として、諸々の生産要素の評価をなせる表を作製しなければならぬであらう。この表の作製たるや、自然資源、資本、勞働といふ簡單な三要素を含むのでなくして、少くとも其のうちの二つには凡百の等級を含むものであるから、極めて困難な仕事であらう。「従つて恐らくは先行せる社會（資本主義社會）に於ての經驗を指標として用ひるの外はないであらう。」

ロ氏が生産要素の價格形式に當つて先行資本主義時代の價格を指標として實行するの外なしと見たことは、彼が、このことが如何に困難な仕事であるかを、かなり理解して居た證據である。この點に就ては、カッセル教授が、「まだ消費出來るまでになつて居ない總ての物に對する價格の決

定は單なる簿記の問題にすぎない」と云へるを評して、「慥に簿記の問題である。けれども實はこの簿記の問題たるや、最も複雑な資本主義的計算方法の遭遇する困難を遙に越ゆる、法外に錯雜した問題なのである」と述べて居るによつても知り得るであらう。

尤も止むなく先行資本主義の價格を出發點として利用するとしても、資本主義が社會主義に移行することによつて、「収入の均等化は極端な奢侈品需要の破壊、適度の奢侈品に對する需要の減少、必需品及び便利品に對する需要の増大を惹起するであらうが、それはすべての生産要素の地位に非常な變化を持來すであらう。のみならず労働者の全状態、即ち種々の労働者集團の大きさ、其の組織、及び其の世界觀に變化を來すであらう」から、先行資本主義時代の生産要素の價格が、そのまゝ社會主義社會の生産要素の價格として適當のものでないことは、ロ氏も充分承認して居るのである。ただそれ以外に方法がないから、一應、左様にして生産諸要素の價格表を作製し、これを會計の基礎とする。

「管理者が一旦生産諸要素の價格表を作製するならば、それは爾後國家の會計の基礎となる。生産物の費用は用ひられた諸要素の價格によつて計算される。財はこの費用價格で市場に供給され、需要が所與の財貨に對して、この價格で示す應答は、爾後の生産を調節するであらう。價格は必

らずしもキツチリと、計算された費用の位置に保持されるのではなく、需要と供給とが等しくなる様に變動せしめられる。而して生産に於ては、常にコストで賣れる丈の品を作る様に調節が行はれるのである。」

斯くいへば、生産要素の價格は不變のままに持續されて、ただ供給量を消費者の需要に應じて調節するのみと考へられやうが、實はロ氏の考へでは、國家の管理者及び會計官は、他方で、「すべて錯誤のあらはれる毎に生産要素の評價を變更する」といふのであり、而して「生産要素の評價に於ける錯誤は、生産要素の有效供給量とそれに對する需要量（この需要は先づ諸々の生産の單位から、而してそれ等を通じて消費者から來る）との均衡の缺除として明となるであらう」といふのである。

「若しある生産要素が過大に評價されて居るならば、錯誤はそれに對する需要の不充分なることのうちに見現するであらう。産業管理者は、有効ではあるが高價なかかる供給物の若干を使用するよりも、むしろコストに比べて大きな収益を齎す様な代替物を使用するか、若くは價格をばコストをカバーする高さに止め置くために消費財の供給を制限するに至るであらう。反對に或る生産要素が過少に評價されて居る場合には、有效供給量は、消費者の間接の需要を充たすに不充分となるであらう。過少に評價された生産要素は、費用の餘計かかる方法の代りとして用ひられる

であらうが、他の半面、より高い価格を支拂ひ得る若干の産業も、それなしに濟さざるを得ないこととなる。と同時にその生産要素によつて低価格で作られた消費財の供給の不充分なことの兆候は、其の生産を刺戟し、而して其の生産要素に對する需要を増大せしめることによつて、其の供給不足の状態を一層深刻化するであらう。指導者は、これ等の明かな諸兆候を基礎として、實質的な均衡状態に達するまで、試行錯誤法を行ふことによつて、生産諸要素の上に附せられた價格を訂正して行くであらう。」

## 六 實行の可能性に就て——ロ氏の見解

之を要するにロ氏の論文は、社會主義國家に於ても經濟的生産を期する限り價格決定を必要とすること、生産物の價格はその費用價格を以てせらるべく、生産要素の價格は其の限界生産性に於て決せらるべきこと、而してかかる價格形成は先行する資本主義時代の價格を出發點として利用し、爾後は試行錯誤の方法によつて修正して行くといふのである。

所がここまでの見解は、すでに一九二八年十二月に米國經濟協會第四十一回例會で發表されたテ

イラー氏の「社會主義國家に於ける生産の指標」と其の見解を等しくするものである。テイラー氏も亦「一定の社會主義國家が有する經濟資源から如何なる財貨が生産せらるべきかを決定する方法如何」を問題とし、「それは本質的には資本主義社會に於けるそれと同様でなければならぬ」と考へ、而も財貨の販賣は生産費により、生産費は生産要素の價格により、而して生産要素の價格表は、一應は従來の經驗に基いて作製されるが、あとはロ氏の主張と同様に試行錯誤法によりて、正しき生産要素價格が発見され得ると考へて居る。いふまでもなくテ氏といひロ氏といひ、共に所謂「歸屬理論」を根據とするものである。即ち生産要素の價值は最後の生産物の價值から得來するものであるから、生産要素の價格の過高、又は過低は、其の有效供給量と其の需要との不均衡としてあらはれるから、その不均衡の兆候によりて試行錯誤をやれば生産要素の評價のあやまりは是正されると見るのである。ただテイラーの考へは、ロ氏よりも素朴である。テイラーにあつては、其の説くが如き方法が果して實行に堪へ得るか否かに就ては、殆んど意を用ひて居ない。然るにロ氏にあつては、價格形成過程のより綿密な検討を経て、上述せる如く主張し、且つそれを「少くとも理論的には間違つてゐない」と考へて居るものの、實行的にはむしろ其の可能性を疑ひ、「精々のところ一つのほのかな可能性にすぎないといふのが安全だ」と結んで居る。

It seems safe to say that the pricing apparatus necessary for an efficient centralized collectivism is, at best, only a remote possibility. (p. 61)

詳しくは次の如く述べて居るのである。(傍點—山本)

「以上の記述から見ると、それ(試行錯誤法による生産要素の價格の修正)を、餘程單純なものと思はしめ容易に達し得るものと思はしむるかも知れない。それは外見上、最初二三の錯誤を訂正し、あとはジツト坐り込んで其の組織の作用を監視する問題の様に思はれるかも知れない。けれども若しさう思ふならば、吾々はまたもや、殆んど信じ難い程の經濟過程の複雑さを無視することとなるであらう。といふのは、或る一つの價格に變化が起れば、他の多くの價格に變化を及ぼし、而もある一部の財には本質的の變化を、他の一部の財にはそれ程本質的でない變化を、更に他の一部の財に於ては、重要でない變化を引起すからである。恐らく一つ乃至二つの相當な錯誤のみを犯して一の價格體系を樹立する場合(それさへ殆んど信じられぬ假定であるが)に於ても、それ等一二の錯誤は、廣く全組織のうちに變化を惹起するであらう。重大な錯誤の數がそれ以上に多ければ、生産諸要素が嚴密に限界生産性に於て價格づけられ、これ等の價格が能率を等しくする生産

諸要素に對して均等であり、また安定せる均衡状態の全理論的組織が實現される様な均衡状態に達するには、かなりの時間と、非常に綿密なる計算とを必要とするであらう。事實、かかる均衡状態は、到底實在し得ない所の靜態經濟に於てのみ達し得るであらう。

消費者の需要や、技術や、ある生産要素の有效供給量やに變化が起れば、組織を通じて其の反響を傳播し、生産の全領域でないまでもかなりの廣範圍に互りて價格の訂正を必要とするに至る。組織は絶えず變化の状態にあり、會計官は其の變化に追隨すべく努めねばならぬ。尤も……今日の組織と雖も完全な價格形成は一の理想であつて事實ではない。相當の不調整は日々經驗されて居るのであるから、社會主義國家も、今日の經濟の價格形成過程に近い程度を實現し得るなら成功と斷言して然るべきであらう。

所でその程度の成功に對してさへ見込があるであらうか、といふに上述の如くそれは經濟學的には全く考へ得られることではある。合理的に計劃され、能率的に管理される計算は、市場經濟の無統制、不完全なる諸過程よりも、一層完全にして正確な、財の價格形成方法の如く見えるであらう。今日の社會に於ける獨占的諸力によつて起される軋轢、知識の缺除及び惰性は、明かに合理的な國家會計方法によつて除去せられるであらう。ただ大きな障害は人間能力の制限にある。

國家的價格形成組織の複雑さは、今日の何れの計算組織の複雑さをも遙に越ゆるものであらう。中央集權的國家生産機構のマネイジに就て一般に認められた困難に加へて、これ等の（價格形成の）諸問題は、殆んど疑もなく、成功的管<sup>アドミニストレーション</sup>理に對する打勝つべからざる障礙となるであらう。かくて能率的な中央集産主義にとりて必要な價格形成機構は、精々のところ一のほのかな可能性にすぎぬと云ふのが安全であると思はれる。」

## 七 實行の可能性に就ての吟味（一）

ロ氏の見解の要旨は、以上を以てほぼ紹介し終へた。而して私は、社會主義の國家が價格形成といふ極めて困難な問題に遭遇するといふ彼の見解を正しいと思ふ。また社會主義國家が經濟的生産を期する限り、今日の社會に於てと同様に、生産諸要素の價格はその生産性に從つて形成せらるべきであるとする彼の見解もまた間違つてゐないと考へる。ただ私の直ちに同意し難い點は、今日の社會に於て自然に解決されて居る此の價格形成の問題を、社會主義國家の中央部が、知的・意識的に解決することの實行可能性如何に關してである。

素よりロ氏自身が、今日の社會に於て實現されて居る程度に近い程度の實現でさへも「精々のところほのかな一の可能性にすぎないといふのが安全と思はれる」と、かなり、悲觀的な見方を吐露して居るのであるが、それにしても、「ほのかな一の可能性」を云々するのは、價格形成過程の分析になほ不十分な點があるからではないかと考へざるを得ぬ。所謂試行錯誤法による價格形成の提唱に對して、ハイエーク教授は、これを以て「一つの馬鹿らしき思付」と難じて居り、ハルム教授も亦、ハイエーク教授と同様の見解を持して居る。然るに試行錯誤法を以て社會主義社會の價格形成の問題を解かんとせしものは、さきに一言せし如く、テイラー氏が然るのであるが、其他ランダウアー氏の如き、更にカウツキー、ハイマンの兩者も亦、ロ・テ・ラ諸氏と共にそれを主張して居るのである。斯くて價格形成方法としての試行錯誤法に就ては、學者の見解の分れる所であるから、吾々としても、結論を定むる前に充分な吟味を遂げる必要があるのである。

仔細に吟味して見ると、所謂歸屬理論を根據とする論者が、生産手段の價值を試行錯誤法で決定し得るとする場合、そのあるものは、社會主義經濟の中央當局も、自給自足の農業經營者と同様に、生産消費に關する考量をなし、何をどれだけづつ造り、而もそれ等を造るに何々を必要とするかと

いふ一切のことについて一の判断をなし得るであらうと想像して居るのではないかと思はれる。往々にして、社會主義者の中に、價值や價格は市場經濟に特有の範疇であつて、社會主義社會では其の必要はない等といふものの居るのは、さうした想定の上に考へて居るのであらうと思ふ。ロ氏の場合には、社會主義社會も亦價格構成過程を必要と認めて居るのであるから、廣汎複雑な社會主義社會と小規模で生産消費の諸條件の一目瞭然たる自給自足の經濟とを同視する程素朴ではないが、しかしその價格形成が單に試行錯誤法に訴へられるところは、社會主義國家の經濟の廣汎複雑性につき、暗黙のうちに過少評價に陥入つて居るものと思はれるのである。

諸財の價格の均衡の意識的樹立が如何に困難な仕事であるかといふことを理解するためには、從來諸國で、ほんの一部の財貨について經驗された「價格國定制度」の實施の困難を想起すれば充分であらう。從來の經驗は極く少數の財貨に適用されたにすぎない。而もそれによつて惹起された需要と供給との不均衡は、ほとんど如何ともすべからざるものであつたのである。それは經濟學の常識と申してよからう。社會主義の國家に於ては、それが少數の財貨にのみ適用されるのではない。完成財といはず、非完成財といはず、すべての財貨に適用されざるを得ないのである。また所謂資本主義社會に於て、毎日毎時に起る所の頻繁にして多様な價格變化が、社會主義の國家に於ても

減退すべき理由がない、といふことを忘れてはならないであらう。而もある一つの價格の如何なる變化も、他の數百の價格の變化を必要ならしむるであらうし、またそれ等の價格の變化の多くは、決して比例的になされるものではなくて、財貨の所謂需要弾力性の強弱や、代用の可能性並に生産方法其の他の相異に應じて異なる影響をうけるのである。

斯くの如き複雑な調整が、必要に應じて中央當局の次々に發する命令によつて行はれ得ると想像し、而してすべての個々の價格がある程度の均衡を得る迄、決定されたり變更されたり試行されると想像するが如きは、ハイエーク教授の言葉の通り「慥に一つの馬鹿らしい思付」であると思ふ。

なほ試行錯誤法の提唱者達が出發點として先行資本主義市場の價格を社會主義國家に持込むといふ場合に、一般に資本主義より社會主義への移行によつて生ずべき財貨價値の變化を、餘りにも少次數と見すぎて居ると思はれる。社會主義の所謂不勞所得排撃の傾向は、所得分配の状態に大きな變化を齎し、従つて各種の財貨に對する需要の變動を惹起するに相違ない。また企業組織の變更も亦、供給の側から同様に大きな變化を惹起するに違ひない。かくして一切の財貨に對して需要供給の變化を、従つて其の價格の變動を結果せずには濟まぬであらう。それ故に會てカウツキーがこの主張をなせるに對し、マルクシストの側からも、とるに足らぬものとして排撃したのは理由のある

ことと考へる。

## 八 實行の可能性に就ての吟味(二)

思ふに直接判断に訴ふるには餘りにも廣汎且つ複雑なる今日の經濟に於て、私有財産制度を基礎とする交換市場の自然的價格形成過程によらずして、意識的に價格形成を行はんとするならば、實行の可能性はしばらく措いて、理論上矛盾しないといふ意味での考へべき方法は、曾てイタリーのパローネが提示したるが如き、微分方程式の解式に訴ふる方法以外にはあり得ないであらう。けれども論理的に矛盾がないといふことは、それが現實に實行し得るといふことを意味するものではない。

社會主義國家の中央部の計劃指導が、名ばかりのものではなくて、實質的に現今の企業の創意に代り得るためには、極めて微細の點に至るまでも、中央部の計劃の中に計算考慮されて居なければならぬ。のみならず、計算考慮されたところは、説明として各經營の當事者へ明に通達されなくてはならない。社會主義の中央部は、各企業に對して、それぞれ幾程の原料又は新機械を割當つべきか、

又それが爲には如何なる計算價格を以てすべきかを決定しなければならぬが、その爲めには、同時に既使用中の機械及び器具がなほ使用をつづけ得るかどうか、或は如何なる所に使用され得るかどうか、をも同時に決定せずしては、決定されることは出来ない。而も忘れてならぬことは、其の場合機械器具、又は建物等はこれを單に物質的に同一種類の物體の一つとして取扱はるべきではなく、其の特殊の消耗状態、其の位置等によつて、其の效用を異にする一個體として見られねばならない。従つて現存せる生産要具をば、殆んどその個體的單位數だけの數の多くの異なる財の種類からなるものとして取扱はねばならぬ、といふことになる。生産財にあらざる非持久的な半製品や完成財たる普通の財貨の場合に於ては、技術的には同一の財貨も、其の存在する場所、其の包装、その年數等の異なるにつれて其の有用性を異にすべきを以て、其の技術的特徴によりて分類される場合よりも數倍も多くの財貨の種類として取扱はねばならぬであらう。

斯くの如き諸事項を瑣末なこととして無視し、技術的に同一種類のものを一括して同一視するといふ様なことがあつてはならぬ。蓋しその様な瑣末なことが重積して一企業の成敗を決するものなるが故である。またかかる事まで中央當局の計算の中に這入らなくとも、經營當事者の注意によりて計算考慮され得るであらうなどと考へることも、誤りである。蓋し國家の中央部によりて指導さ

れる經濟にあつては一種の財貨を他種の財貨と自由に代替せしむる裁量權を個々の經營の指導者達に與へられ得ないからである。

競争生産を否定して生産を中央部の計劃に基いて行ふ社會主義國家に於ては、すべての財貨に關する一切の技術的知識が中央當局の頭の中に集つて居なければ、既知の方法のうち最も適切な方法を選択することが出来ないであらう。けれどもかかることは事實あり得ないことであらう。といふのは、元來「存在する」といひ得る種類の知識に就てさへ、それが一人又は數人の頭の中に集中される事は不可能であらうが、更に實際に利用され得る知識の多くは、決して出來合の形で「存在して居る」といふものではなくて、新事態に處して敏活に解決する思考能力からなるものだといふ事を考へるならば、斯様な能力がすべて中央當局の頭に集中する等といふことは尙更不可能であらう。理論經濟學が競争制度の下に於ける均衡を説明する場合には、抽象的に一定の技術的知識を與へられたるものとして假定する。けれども、此の事はいふまでもなく、最善の技術的知識がある一個の頭腦に集中されて居ることを意味するものではなく、寧ろ、ある種の知識を有する人々が多數競争的に活動して居り、それ等の人々のうちで技術的知識を最も適切に利用する者が競争に成功するであらうといふことを意味するに過ぎないのである。勿論經濟學の説明に於ける假設——一定の技術

的知識が與へられたものと假定すること——は、競争制度を豫想する場合にのみ許されるのである。競争が自動的に淘汰選擇の作用を營む。然るにかかる作用を營む競争が否定された集産制の下にあつては、計劃を作製する中央部の一人又は數人の頭に、右の一切の技術的知識が集中して居る場合にのみ、必要なる最善技術の採用が可能となるであらう。ここにも亦、吾々は他の問題と同様に、集産制度の存立に必要にして不可能なる條件を見るのである。

妥當なる生産方法と生産物量とを決定するための實際的操作に着手する前に必要とする今一つの資料は、消費財の各種類及び量の重要度に關する知識である。この點に就てもロ氏自らが、漠然と「管理者が豫期さるべき消費者の需要に關して、其の量についても其の價格についても——この兩者は相關のものであるから——一般的知識をもつて居なければならぬ」といひ、「この知識にして不完全、不正確であればあるだけ、會計官の計算は益々誤謬の多いものとなるであらう」と述べて居る。然るに進んで考ふるに、前提せられる如き消費者の消費選擇を認むる社會にあつては、このデータはすべての商品の、各種商品の諸價格の可能なる組合せに於て買はるべき種々なる量の完全な表の形式をとるであらうし、またこれ等の數字は過去の經驗を基礎とする將來の豫測的評價の性質をもつ外はないであらう。

然るに説く迄もなく、需要者の嗜好は不斷に變化するものであり、従つて右の表の數字は不斷に變更されねばならぬが、さてその場合過去の經驗は充分に必要な知識を供給し得るものではないから、中央部に於て、需要せらるべき消費財の各種類及び量の重要度（又は價值）を知るといふことは、正確には明に不可能といふべく、近似的にさへも、恐らく不可能ではなからうかと思ふ。人の嗜好といふものは、自分の生んだ娘で、四六時中そばを離さずに、廿年以上もそだて上げた様な親でさへ、正確に知ることの出来ないことを思へば、幾千萬の國民の需要をば、一の中央部で知るといふ仕事が如何に困難な仕事であるかは、想像するに難くはないであらう。

以上述べた所の諸の要件、即ちすでに存在する一切の生産要具、機械器具等がなほ使用をつづけ得るかどうか、或は如何なる所に使用され得るかどうかの知識、一切の半製品や完成財の存在する場所、年數、包装等の知識、一切の財貨に關する一切の技術的知識、並に消費者に需要せらるべき財貨の種類と數量とに應ずる重要度の知識が、國家の生産計劃の中央部の頭に集中するといふ事は、社會主義國家が、生産すべき財貨の種類量及び其の價格を算出するための前提である。即ち資料にすぎないといふことを忘れてはならない。かかる資料を整へて前提を充すといふこと自體、すでに人間の能力を越えた仕事と考へざるを得ないのであるが、さてこれ等の資料がかりに蒐集され得た

と假定した所で、それ等の資料を操作して、生産さるべき財の數量と價格を算出するといふ仕事は、更に困難な仕事なのである。かかる資料を前にして試行錯誤で算出し得るものでない事は、さきにも述べた。而してまたそれが微分方程式に訴へる外はないといふ事も述べたが、この微分方程式の作製及び解式が容易ならぬわざであらう。

此の數學的操作の大きさは、未知數の數に依ることであるが、此の場合未知數の數は、實に生産さるべき財貨の數に等しいのである。其の數を幾種と數へあげるとは素より困難であるとしても、今日の諸國の國民經濟に於て云へば、恐らく幾十萬を以て數ふべきものであらう。而して諸決定のうち何れの一つの決定と雖も、これと同數の同時に存する微分方程式の解式を基礎とするにあらざれば不可能である。この事たるや、今日知られて居る如何なる方法を以てするとも、一生涯の年月を費してなほ完了し得ないものだといふことは、微分方程式を知るものにとつては常識だといふことである。

更に考へねばならぬことは、斯様な決定は一度行へばそれで済むといふ性質のものではなくて、不斷に繼續的に行はねばならぬと云ふこと、並にこの決定は其の都度これを生産經營の實施に當る當事者の許へ通達されねばならぬものだといふこととである。

斯く吟味し來るならば、社會主義國家に於ける經濟計算の問題を數學的に解決すると云ふことは、所要のデータを完全に知るといふ——事實あり得べからざる假定を許すとすれば、論理的に矛盾するといふ意味で不可能ではないとはいへ、ただ其の解決の實行と云ふ見地から云へば、明に「人力を越えた」不可能事であり、従つて其の意味に於ては考へ得ないことと云はねばならぬ。

勿論度々觸れた様に現實の經濟に於ても經濟計算は決して正確な均衡を實現して居るのではない。外界の變化のやまぬ以上、方程式の解式によつて表現されるが如き均衡を得ることの出來ないのは明である。従つて現存の經濟との優劣比較が問題とされる限り、現存經濟に比して何れがよりよく經濟性の要求を充すかといふことが問題とさるべきであつて、社會主義國家の經濟計算に文字通りの正確さを要求することは誤であらう。

ただ忘れてならぬことが一つある。それは現存經濟が文字通りの正確な均衡を得ないとはいへ、中央計劃經濟の計算では、どうしても意識的に無視されるの外はないと云ふ様な瑣末な變化も、現存組織の下ではすべてある程度までは作用をするといふ一點である。斯くの如き、計劃經濟の下には必然的に無視されざるを得ない様な瑣末なことが、實は累積して遂には生産的努力の成否を決するに至ることを思へば、生産競争を許す現存經濟を中央集權的な計劃經濟に變革せんとする主張は、

充分反省されて然るべきであらう。(一三・六)

附記

一九一八年にリッピンコットによりて公にされたランゲの見解は、ローパーの見解を素朴な形で再現せるもの、従つてローパーへの右の批判はそのままにランゲ批判とすることが出来る。ランゲの見解については本書第二二九頁以下参照。

## 第二 經濟計算の立場から見たギルド社會主義

### 並にサンデイカリズムの批判

#### 一 本文の目的——執筆の動機

書房について聞くに、ギルド社會主義やサンデイカリズムに關する書物は、昔もあまり賣れなかつたが、殊に近頃は賣れないといふ事である。この事は我が思想界を風靡したものがマルクス集産主義を中心とする國家社會主義思想であつたし、今もなほ大體に於てさうである事實を反映するものであらう。斯く考ふる時は、實際的意義から云へば、ギルド社會主義やサンデイカリズムを、今改めて検討するための努力は、無用の様にも思はれる。私がこれまでマルクス集産主義乃至國家社會主義の批判に力を傾けて、爾餘の社會主義を問題にしなかつたのも、主たる理由は、それ等が我が思想界に於て殆んど勢力を持たぬと考へたからである。

然るに近頃に至りて、私はギルド社會主義並にサンデイカリズムをも批判検討するの必要を感ず

る二つの事件に遭遇した。その第一は、マルクス主義に反對する自由主義的社會主義者、例へば東京帝大の河合榮治郎教授の如きは、ギルド社會主義を理想として居ることであり、其の他所謂人民戦線陣營の中には可成り多くのギルドメンが居ると傳へられることである。第二には拙著『經濟計算』の熱心な一研究者のうちから、同書が「消費の自由と生産の自由とを確保しつつ全生産手段を國家官廳の手に集中運用せんことを主張するところの集産主義」を批判の對象とせる事實に對し、「あまりにも批判に都合のよき社會主義の一類型を選んで居りはせぬか」との非難を耳にせる事である。

さきにも述べたるが如く、マルクス主義が獨り思想界の上下を風靡して居たが爲めに、私の批判も自ら集産主義に向つたのであるが、純粹のマルクス主義運動が、所謂人民戦線への傾向を取つて來た昨今、殊に「經濟計算」の問題に深甚の興味を有する學究の中から、拙著に對して上記の如き不滿の聲を聞くからには、集産主義以外の社會主義の類型に對する檢討を延期する譯には行かぬであらう。私は以上二つの契機に促されて、先づここにギルド社會主義とサンディカリズムとを問題とする。而してそれに對する從來の批判をも瞥見するとは云へ、主とする所は經濟計算の立場からの批判である。即ちそれ等の社會は、總生産力の生産各領域への配分を經濟的に遂行し得る

や否やを問題とするのである。蓋し人間の性情に基いて起るべき計劃實行上の障害を指摘するに止まる諸々の批判は、多くは水掛論に終る餘地があり、すでにハイエーク教授も云へる如く、經濟計算の見地からのみ社會主義經濟の科學的議論が可能であると信ずるからである。

## 二 サンディカリズムの主張

思想發展の順序に従つて先づサンディカリズムを問題とし、然る後にギルド社會主義の批判に移ることにしよう。サンディカリズムの特色とする所は、一つには其の運動の手段の上に見られる。即ち國家と議會主義とを却けて、労働者の所謂直接行動に訴へて目的を實現しようとするのである。他の一つの特色は、「資本主義」組織の革命後に實現せんとする未來社會に於て「當該労働者による産業の支配」といふ社會構成の上に見られる。前者を手段から見たサンディカリズムと呼びうべくんば、後者は目的から見たサンディカリズムと名付け得るであらう。手段から見たサンディカリズムの主張が明瞭であるに比して、其の目的とする社會の敘述は甚だ明瞭を缺くけれども、私の立場から問題となるのは後者であるから、一般に理解せられる所に従つて、其の社會構成を、より詳

言すれば次の如くである。

「各産業に従事する労働者の全部を網羅する一の労働組合を結成し、各産業は此等の組合をして經營せしめる。更に各産業の代表者が集つて『中央生産委員會』を構成し、國民の需要に關する統計的調査を行つて各産業に對して命令する。而して其の受けた命令を實行するため、如何なる方法を以て、如何なる労働條件を以て、生産を遂行すべきかといふ事は、労働者自らをして之を決せしむる」といふのである。彼等がかかる社會こそ命令服従の關係を脱して、契約結社協同の關係によつて結ばれる所の眞のデモクラシーの社會だと信ずるのである。素より國家を承認しない。而して常に「鐵道は鐵道従業員に、鑛山は坑夫に、工場は労働者に」といふ合言葉を掲げるのであるが、吾人はそれが、すでにルイ・ブランの組合社會主義の根本思想となれる「各産業は直接それに従事する労働者によつて指導される一般組織に統括されねばならぬ」といふ思想を根底として構想せられた一の社會であることを看取し得るのである。

### 三 サンディカリズムに對する從來の主なる批判

サンディカリズムに對しては、古くから權威のある幾つかの批判が下されて居る。第一には、あ基本的産業部門の組合は、其の有利なる獨占的地位を利用して、爾餘の國民を搾取するであらうといふ批判である。たとへば石炭が全國的坑夫組合の手に獨占的に支配せられ、其の價格が其の組合によつて一方的に定められるとすれば、坑夫が爾餘の石炭消費者を搾取するであらうことは必然だといふのである。かかる批判は殊に集産的社會主義者のツガン・バラノウスキーやシドニー・ウエップによつて強調された。第二には、各組合相互間の經濟的利害の鬭争が激化して、無政府的混亂に陥るであらうといふ批判である。この批判も亦、殊にツガンやウエップの指摘強調した所であるが、各産業が各々獨占的地位に於て對立し、而も勞働條件其他が各の組合中央部によつて決定せられるものである以上は、避け難い結果と考へられる。

尤も上記の如き批判に逢ふや、サンディカリストの側からは辯明があらはれて、「炭坑や鐵道は坑夫や鐵道従業員の所有に屬するのではなくて、サンディカリストの社會に屬する。而して様々の生産物の價格、其他組合と組合との關係を決定する爲めの機關として、各産業の勞働組合から選出された代表者を以て『全國中央委員會』を組織し、それによつて鐵道従業員又は坑夫組合をして獨占的地位の濫用をしない様に注意するのだ」と答へた。

けれどもサンディカリストの側からの右の辯明を其のままに受取るとすれば、生産物の價格其他を決定する所の中央會議は、實は彼等が極力排斥した所の議會と其の本質を等しくするものであつて、「鐵道は鐵道従業員に、鑛山は坑夫に」といふ本來の主眼點はいつの間にか喪失された事にならざるを得ない。各種組合の代表達の會議が決定し指導することになつては、當該産業の労働者の支配といふ事は出來ないであらう。

#### 四 サンディカリズムへの經濟計算の立場からの檢討

以上の批判はサンディカリズムに對して従來行はれて來た批判の主なるものであり、私も亦それ等を正しい批判と思ふのであるが、今特に強調したいのは、これまでの批判を繰返すことではなくて、新に經濟計算の立場から批判を加へようといふのである。

すでに拙著『經濟計算』の中で詳述した様に、人類の社會は如何なる社會組織を構想しようとも、生産諸力(土地・資本・労働)が有限であり、欲望は多様にして無限であるから、有限なる生産諸力を多様にして無限なる欲望のために如何なる割合で配分すれば最も効果的であるかといふ問題を解決

しなければならぬ。これが歴史を貫く所の經濟の本質的問題である。從來の社會はこれを自然に解決して來たし、集産的社會主義はこれを解決し得ないであらうといふ事情に就ては、上掲『經濟計算』の中に論證した所である。サンディカリズムの社會はよく此の問題を解決し得るであらうか。これがここでの主要問題である。

サンディカリスト自身の説く所は明確を缺けれども、今かりにサンディカリズムの社會に於て、それぞれの財貨の生産量、並に其の價格が當該生産組合によつて最終的に決定されるものと想定すれば、人口の増加や需要の變化や技術の變動に順應して、生産力の配分割合を變更し、ある生産部門を縮少して他の生産部門を擴大するといふことは不可能となるであらう。例へば石炭業の部門から資本や勞働力を引抜いて、鐵道部門を擴大することや、製絲業部門から資本勞力を綿絲や人絹の生産部門に廻すといふ様なことは全く不可能となり、従つて生産力の經濟的配分など思ひもよらぬことと云はねばならぬ。即ち各生産部門の組合が獨占的地位をもつて、自立的に群雄對立して居る場合に於ては、一國生産力の一部門から他の部門への移動が不可能となり、従つて生産力の經濟的配分問題はこれを解決し得ないであらう。

更にかかる場合に於ては、一部門の内部に於ける生産力の經濟的配分の問題も亦、非常な困難に

陥らざるを得ないであらう。抑々今日の經濟學に於て「生産部門」とか「産業部門」とかの表現が不用意に用ひられて居るけれども、この語は極めて曖昧な言葉で、決して一生産部門と云つても一定の財貨の生産部門を指稱するものではない。例へば纖維工業部門といふも、或は食料工業部門といふも、交通部門といふも、そこには極めて多様な種類の財貨を包含する。従つて所謂一生産部門の内部に於ても亦、如何なる財貨をどこで、どうして、どれだけづつ生産すべきか、従つてそれ等の間に如何に生産力を配分すべきかといふ經濟問題は、依然として不斷に解決を迫つて來る問題である。然るにこの問題の合理的解決のためには、それぞれの財貨間に生産の費用と効果との比較計算が可能でなければならず、其の比較計算が可能である爲には、計算の共通なる價值尺度として、生産手段と生産物のすべてに就て、需要供給の一致點を示す市場價格が不斷に成立することを必須の前提條件とするのである。

然るに當該生産部門で一方的に決定せられた價格は勿論のこと、獨占的地位を擁する組合間の交渉によつて協定せられる價格も亦、獨占的地位の故に、需要供給の一致點に落付くべき保證を失つて居る（獨占體間の協定價格が需要供給の一致點に定まる保證を失ふ理由に就ては第七項の説明を参照せられよ）。而して需要供給の一致點を離れた價格はその財貨に對する社會の價值判斷と遊離した符號にすぎぬ

ものであり、たとへそれを基礎に費用と効果の比較計算を行つて見た所で、其の結果はそれぞれの財貨の生産の比較重要度を指示するものではない。斯様な價格を基礎に遂行された生産の結果は、必然にある物は剩り、ある物は不足する。即ち各財貨の生産への生産力の配分は非經濟的に行はれざるを得ないのである。

若しまたサンディカリズムの社會が、「鑛山は坑夫に、鐵道は鐵道従業員に」といふ本來の目標を放棄して、各組合の上に總括的な會議を設け、そこで各生産物の量と價格の決定、即ち經濟配分の問題を決せしむるといふ構成をとる場合には、それは最早本質的に集産社會主義に轉化せるものであり、従つて其の場合問題解決の不可能な事に就ては、私が年來批判の對象として來た所であるから、此所に繰返す必要はあるまい。

## 五 ギルド社會主義の主張

ギルド社會主義の實現せんとする社會は、周知の如く、サンディカリズムの社會と國家社會主義（集産主義）の社會との折衷の道をあゆまんとして構想された一つの社會である。

即ち彼等はサンディカリズムから「労働者による産業支配」の原理を學び、而もフェビアン集産主義者のサンディカリズム批判の中に、單なる労働者の産業支配が消費者搾取に陥るの危険を學びかくて生産者を代表するギルドと、消費者を代表する國家とが相補足して理想の社會が實現されるものと期待するのである。

詳言すれば先づ今日の労働組合を改造して一産業に従事する全國の凡ての労働者を網羅する組合とし、これをナショナルギルドと稱し、賃銀制の廢棄による労働者の自治自由を其の原理とする。而して若しこのままに止まればサンディカリズムに外ならぬ譯であるが、併しそれでは生産者の專横に陥るの危険ありとして、別に消費者代表としての國家を認め、ギルドは産業の運営に當るけれども生産手段を所有せず。ギルドは社會の被信託者として生産手段の運用に當り、國家が社會の被信託者として生産手段の所有に當り、ギルドは生産手段の利用に對し國家に租税又は賃料を納める。而してこの租税と生産物の價格とは生産者全體と消費者全體とを對等平等に代表する聯合委員會——具體的にいへばギルド會議と國家との聯合委員會——に於て決定せられると。これが代表的ギルド社會主義者と目せられる、コールによつて描かれたギルド社會の構成の概観である。

ギルド社會主義は「労働者の自由」を希求するが爲めに、生産に對する國家の指令を能ふ限り避

けねばならぬとなし、其の意味に於て強く集産主義に反對し、「國家社會主義は國家資本主義である。ここでは資本主義が單に集産的基礎の上にあり、利潤收得者が無統制の私的資本家の代りに國家によつて代表せられる全體があらはれるだけの事である」といひ、「ギルド社會主義は社會主義的基礎の上に立つサンディカリズムと呼び得る」といひ、更に「吾等にしてサンディカリズムと集産主義と二者其一を擇ばねばならぬ時には、それに伴ふ危険あるにも不拘、サンディカリズムを選ぶことが、凡て善き人の義務でもあり、其の本心でもある」とまで極言するは、畢竟、勞働者を賃勞働の鐵則から解放せんとする希求のあらはれと見るべきであらう。

ギルド社會主義が國家社會主義を却けてギルドの役割を強調するに際しては、殆んどサンディカリズムを彷彿せしむるものがあり、一應は國家の參加なくとも、ギルドの自由なる活動の結果に全體の利益の實現を期待して居る様である。

「各ギルドは其の特殊の産業部門に於て全體を代表する。ギルドは政治家の介入なしに生産を指導する。かかる自由に對するお禮の意味に於て、ギルドが當該生産を命令し指導するに當つては、單に自己の利益のためのみならず、また單に消費者の幸福のためのみならず、實に總ての人の爲に行動する。其の場合如何なるギルドも全體を壓制する様な事になつてはならない。」

といひ、更に「ギルドが全體の搾取者とならぬ保證が何所にあるかと問ふものあらば」かかる疑問は當らぬ」となし、「ギルドは利潤のために働くのでなく、個人の所得は彼が生産せし所に依存しなす」と云ふ事を考へればよいと云ふ。所がギルド社會主義は、他の一面に於て、ギルドの自由なる産業自治の結果が、利潤の追及に陥り、其の獨占的地位を利用しての全體の搾取に陥るの危険を感じて、再び國家に救済を求めて居る。租税と價格の決定がギルドに委ねられないで、ギルドコングレスと國家との聯合委員會の手に委せらるべきを主張せるは其のためであるが、實に次の如くに明確に述べて居る。

「凡ての消費者と生産者との權利と人格とを承認する安固な社會は、國家と勞働組合とが新しい職分を引受け、それぞれの範圍で支配權を托せられる事によつてのみ實現される。有力な勞働組合によつて補はれざる集産主義は、大規模なる官僚主義にすぎぬであらう。また勞働組合にして有力民主的なる國家のこれに對抗するものなき場合には、壓制專制的なる點に於て、勞働組合の制肘なき國家に譲らぬであらう。」

かくして、ギルド社會主義の國家に對する態度は極めて曖昧である。否定するが如く否定せざるが如く、信するが如く信ぜざるが如く、殊に「國家と勞働組合とが新しい職分を引受け、それぞれ

の範圍で支配權を托される事によつてのみ安固な社會が實現される」と主張しながら、兩者の職能の分野は極めて不明瞭である。此の點に於てこそ先づギルド社會主義に對して非難のあらはれる所であらう。

## 六 ギルド社會主義への從來の批判と經濟計算の立場からの檢討

ギルド社會主義に對する批判者が、ギルドと國家との關係の曖昧な點を指摘するのは當然である。ギルド社會主義がサンディカリズムと異なる點が、ギルドの外に國家の參加を認むるといふ點にあり、而してギルドと國家との間に見解の相違や利害の衝突する場合を豫想して、兩者を「對等平等に代表する」聯合委員會を構成せしめるに不拘、其の對立を如何にして最終的に裁決するかに就て考慮を拂つて居ないといふ事は、ギルド社會主義にとつては致命的な缺陷と云はねばならぬ。

第二にギルド批判者が、あまりにも樂觀的に人間性の高尚に信頼を置く點を指摘するのも亦理由がある。例へば「利潤のために生産しないで消費のために生産され」また「所得はすべての労働者に其の生産した所を顧慮せずに分配される」といふがごとき考は、むしろ共產主義の原則ともいふ

べきであらうが、かかる生産及び分配の原理をとる組織は、能率の低下に堪へ難いであらう。また労働條件其の他が労働者の選出せる代表者によつて決せられる時、労働能率の低下のみならず、新設備の採用が労働者の抵抗によつて甚しく困難となるであらう。第三にギルド間の闘争とギルドと消費者との激しい闘争は、不可避的に國家官廳の干渉を誘致し、彼等が憧憬する様な生産者自由の境地は到底達し得られぬといふ批判も亦有力に行はれて來た所である。

さてギルド社會主義を經濟計算の立場から検討すればどうなるであらうか。即ち「人口の増加、需要の變化、技術の變動等に順應して不斷に個々の領域に生産力を經濟的に配分すること」が、ギルドの社會で解決し得るであらうか。ギルドメン自身は、この問題に殆んど言及して居ない。思ふに問題の所在をさへ氣附いてゐない様である。この問題は度々述べる様に、生産の個々の領域に於て如何なる範圍まで生産を擴張又は減少すべきかの決定問題である。この經濟問題の決定が、個々のナショナルギルドに委されようと、或は消費者代表を加へての聯合委員會の手に委ねられ様と、決して解決され得ないであらう。解決され得ない理由は、すでにサンディカリズムの批判に際して述べた所が其のままに妥當するのである。聯合委員會に需要者代表が參加するから、需要に應じた生産が行はれるであらう等と考へるなら、それこそ幼稚な幻想である。需要者代表は、たかだか生

産者側の横暴に對して需要者の利益を主張する位の事で、需要者代表自身が、國民の凡百の欲望の比較強度に就て知るものではない。蓋しギルドの社會は、サンディカリズムの社會と同様に、生産部門内部の競争が排棄されて、各個の生産部門は各々巨大な封鎖的單位として對立する經濟であり、其の故に需要供給の自働作用は存在し得ず、需要供給の一致點を指示する價格は成立しないが、かかる價格なくしては、經濟計算 $\parallel$ 經濟的生産 $\parallel$ 經濟的配分の問題は、解決の前提條件を缺くが故に不可能なのである。

## 七 分權的社會主義と經濟計算

「一切の生産手段が國家の手に集中される集産主義の社會に於ては、生産手段の賣買市場なく、従つて生産手段の市場價格成立せず、よつて經濟價値の尺度を喪失するが故に經濟計算 $\parallel$ 經濟的生産は不可能に陥る」といふ集産主義に對する經濟計算の立場からの批判に接する者は、ややもすれば一切の生産手段が國家の手に集中されることなく、多くの團體に分散せられる所のギルド社會主義やサンディカリストの社會の如き、所謂「分權的社會主義」(Der dezentralistische Sozialismus)に對

しては、其の立場からの批判は妥當しないのではないかと想像し易い。蓋し多數のサンディカーやギルドの對立競争のうちに價格の自働的形成過程が保存され得るのではなからうかと推測される結果である。現に獨逸でミーゼス教授が集産主義批判を公にした際にも、ギルド組織を持出して批判を免れんとするいくつかの試みがなされたのである。

けれども經濟的生産と經濟計算の問題が解決されるか否かの岐れる所は、單に集産か分權かにあつては、一に計算の基礎として需要供給の一致點を示す價格の形成過程の存否如何にあるのである。價格の決定が初めから、勞働組合の全國中央委員會や國家又はそれとギルドとの聯合委員會の手に委ねられる場合には、度々いふが如く集産主義に外ならぬし、さうでなく全國的勞働組合又はナショナルギルド相互間の交渉に委ねられる場合にも、さうした獨占體間に協定された價格には、最早需要供給の一致點に落付くべき保證が失はれて居る。それは今日の市場の價格が需要供給の一致點にのみ所謂「安定均衡點」を見出す理法を知る者にとつては説明を俟たずして明白なことであらう。價格が均衡點の上に於ては賣手間の競争が、均衡點の下に於ては買手間の競争が作用することによつて、價格は需要供給の均衡點にのみ安定均衡するに到るのである。サンディカーリズムやギルドの社會に

於ては、集産主義に轉化しない場合に於ても、賣手間にも買手間にも競争はあり得ない。それを意識的に排除することが、そもそもサンディカリズムやギルド社會主義の一つの動機をなして居る事を想起すべきである。

労働者の産業支配の理念を幾分でも實現しつつ、而も經濟計算の問題を解決し得るが爲めには、「労働者生産組合」の組織まで退却する外はないであらう。即ち個々の經營を（個々の生産部門ではなく）労働者の自由なる組合によつて計劃し運營し、相互に競争せしめるのである。かかる場合には、需要側にも供給側にも競争が存続するが故に、価格は自動的に形成される。労働者生産組合の組織は、最早社會主義ではなく、またそれはそれで重大な缺陷をもつて居る。例へば労働規律の困難や資本調達の困難等——それ故に従來あまり發展し得なかつたのである——の缺點はあるけれども、多少でも労働者の自治自由の望みが達せられる上に、價格の形成過程が喪はれず、經濟配分の問題が解決されて行くといふ點で、國家社會主義やギルド社會主義やサンディカリズムの何れよりも、比較的に幻想から脱却して居ると考へられる。

## 八 社會主義の幻想性と經濟計算の立場

ギルドメンは集産主義を「たかだか良心ある實業家の卑陋なる夢想にすぎぬ」と云つて居るけれども、私から見れば、集産主義も夢想であるが、ギルド社會主義も亦夢想に過ぎぬ。而して兩者共に個人を中心として考へられた自由と、物質的生活の平等をねらつて夢想された構想社會にすぎない。經濟問題を解決し得ないで、首腦者の非經濟的恣意の決定に委ねざるを得ないといふ意味で、自然の經濟組織に比し、労働者をより貧窮化するのみならず、またより不自由な境地に追込まざるを得ないと考へる。労働者が労働の自由・従つて住居移轉の自由を喪失するといふ事を考へただけでも其の點は明であると思ふ。集産主義（國家社會主義）の下で労働自由・住居移轉の自由を存續し得ない理由に就ては、すでに「經濟計算」の第七章にも述べて置いた所であるが、ナショナルギルドの組織に於ても、個々の労働者はギルド中央部又は聯合委員會の恣意的に決定する生産計劃や労働條件のみならず、其の決定命令する所の労働配分に服従するの外に道はない。もしも労働者に労働選擇の自由を承認するとすれば、労働の過不及の發生は必然であり、労働の過不及を解決して勞

働の需要と勞働の供給とを一致せしめる方法は二つよりない。勞働の自由を基礎とする「勞賃制度」か、首脳部からの「強制」か、然らざる第三の方法はあり得ないであらう。

集産主義と云はず、またギルド社會主義、サンディカリズムと云はず、凡そさうした構想社會制度の夢想なる所以を明にし得るものは、經濟社會の歴史を貫く本質的問題の發見と、それが解決される理法を把握することであらう。歴史を貫く經濟の本質問題とは、一國の有限なる總生産力が多様にして無限なる諸需要の間に如何なる割合で配分さるべきかといふ問題である。而して從來の社會に於ては、この問題は、根本的には、特定の人によつて「意識的計劃的」に解決されて來たのではなくて、すべての人の自由なる活動を媒介として、「自然に」解決されて來たのである。即ち Spontaneously に解決されたので、Deliberately に解決されて來たのではなう。而して自然的解決の根本條件をなしたものは、自由競争による市場價格の自動形成の過程であつた。

歴史を貫く經濟問題の發見と其の解決理法の把握とは、會てケネーやスミスの如き古典派の經濟學によつてかなりの程度まで成功的に達成せられ、其の後歴史主義（社會主義派を含めて）の流行と共に久しく見失はれて居たものである。而して世界大戰後の西歐諸國並にロシアに於ける社會主義實

現の試行を契機として、再び優れた經濟學の理論家達によつて新に發見され把握されて、爾來諸々の社會主義的企圖の夢想性を暴露するために、次第に確固たる承認を得つつあるものである。(二・八・二〇)

**附記** 本文の起草に當りて負ふ所多かりし二人の學者に謝意を表さねばならぬ。即ちギルド社會主義の主張そのものの説明に於て小泉信三博士の論文(三田學界雜誌第一四卷所載)「再論 Guild Socialism」に。また生産力の割當問題を意味するに「配分」なる語を用ひ、所得の割當を意味する「分配」なる語と明確に區別すべきことを學べるは大熊信行教授の名著『マルクスのロビンソン物語』——(勞働價值説を暗黙に承認せる點は賛成し得ないが)——に負ふものである。

## 第三 共産治下に於けるロシア農民の生活

は し が き

凡そ共産治下のロシア農民程、悲惨な運命を擔つて居るものはあるまい。豊富な森林と石炭とを有しながら寒さに戦慄き、廣大な牧場と豊饒な國土の上に食物を缺き極度の彈壓の下に餓死線を往來せねばならぬもの、これが共産治下に於けるロシア農民の生活である。

周知の如く、ロシア農民はツァーの帝政時代より、貧困と彈壓とに對しては相當馴れた國民である。而も曾て共産政權の下に見た様な、幾百萬と云ふ大量の餓死者を出したこともなければ、多數の國外逃亡者を見たこともない。銃殺者に就いても亦同様のことが云はれ得る。一體何故にしかく餓死せねばならぬのであらう。何故にしかく銃殺されねばならぬのであらう。又しかく祖國から逃出さねばならぬのであらう。銃殺や餓死に値する國民的性格を有するとは云へない。ロシア人のお人善しな性格は世界の有名な話題の一つではないか。天産に恵まれぬからとも云へない。世界陸地

の六分の一を占め、殆んどあらゆる天然資源を藏するといはれるあの廣大な地上に吾等日本人の二倍の人口を擁するに過ぎないではないか。

ロシア農民をして斯くも悲惨な運命に泣かしむる所以のものは、一言にして云へば政治の誤謬であり、政治の誤謬は根本的には、共產社會てふ幻想實現の努力に發する。即ち自然の經濟組織をば、頭の中で設計した根本的に異なる機構に組換へんとする共產政權の無理な努力こそは、國民の大多數を占むる農民をして、斯くも悲惨な運命に陥れたものと考へられる。斯くの如き私の見解の正當なることは、共產治下の農民生活をその政策との相互關聯に於いて仔細に觀察するもののみが承認し得るであらう。細かな敘述に這入る前に、讀者の便宜のために簡単な概觀を與へて置く。

共產治下の農民史を概觀するに、大戰が中止され兵士が歸郷を許されたことは、當時の狀況を思ふと、兵士にとつても農村の父兄にとつても恐らく喜びであつたらうと考へられる。又耕作すべき土地が細民に分配されたと云ふ事も差當り永年の土地所有の渴望を醫するに足りたであらうと考へる。だがその喜びは東の間であつた。やがて強制徵發——暴動——彈壓の連鎖の結果としての生産力の徹底的低下は、遂に革命後僅に三年餘にして、一旦共產政策の中止を餘儀なくせしめ、自然經濟組織の復活となつた。自然經濟組織の復活と共に、生産力も發展し、農民の生活も向上し、強制

彈壓も緩和されたが、そこには再び貧富の懸隔を生じ所謂富農の擡頭を免れなかつた。共產社會の實現てふ終局目標を固持するの故に、共產黨は再び自然の經濟を社會主義計劃經濟に組換へんことを決意し、所謂「五ヶ年計劃」の名の下に、農業の集團經營化を行ふこととなつた。斯くて農民に對する強制徵發は再び開始せられ、ここにまた暴動と彈壓の末、遂に農民のサポタージュ（怠業）となり、未曾有の餓死者と國外逃亡者とを見るに至つたのである。事態の拾收策として、計劃經濟への努力は再び緩和せられ商業取引を是認することによつて若干の秩序と生産力を恢復した。それが今日の現狀である。素より、ロシア農民にも何時かは平和な生活に落着くの日が来るかも知れない。ただそれは共產政權自體が崩壞した時か、或は共產政權が自然統制の力に目覺めて、自然的組織の變革を斷念し自然に即した農村對策をとるに至つた時であらう。

私は決して日本の現實に於ける個々の政策がすべて當を得て居る等と云はうとしてゐるのではない。事實幾多の無智や怠慢が見られる。ただ私が本研究の敘述を通じて看取して欲しい事は、有機的渾一體としての經濟の自然の機構を根本的に變革せんとするすべての企圖が、如何に大なる犠牲を隨伴し而も結局徒勞に歸せざるを得ぬかと云ふ一點である。

## 革命直前のレニンの認識と革命直後の農村對策——土地の分配

革命直後に於けるレニンの見解を、彼自身の筆になる諸種の文獻に徴するに、經濟機構が資本主義から社會主義へ必然的に發展するものと信じて居たことは、一人のマルクス主義者として勿論のことであるが、なほ革命直前のロシア經濟の段階に就いては、西歐諸國のその如く、既に資本主義最後の段階たる國家資本主義の段階にまで到達して居るものと見たのであり、従つて又革命直後に來るべきロシアの社會は、當然に社會主義ならざるべからずと考へて居た事は争の餘地がない。ただ各部分の發達に程度の差あり、商、工、金融等の高度なる發展に比すれば、農業に關する限りに於いては、資本主義的方法はなほ比較的幼稚の状態にあるものとの見解をもつて居り、従つて革命後、直ちに農村を社會主義化しようとするよりも、寧ろ差當つてとらるべき政策は多數を占むる小農層を、ボルシエビキの同盟者として味方の陣營に引入れることを主眼とせねばならぬと考へて居た様である。

この見解と方針に基き、一九一七年十一月七日ケレンスキー内閣が瓦解して政權が彼を主班とする黨の手に歸するや、ロシア領内の土地はすべて無償沒收されて國有とせられ、農具と共に國民會

議の召集あるまで暫く農民委員會の手に引渡さるべきことを規定する一の法律が發布された。この法律の發布は政權獲得後二日目のことであつて、長い潜行的準備期を經過して居たとは云へ、其の手廻しの早いことは實に驚嘆に値する所である。

勿論この法律發布後と雖も中農、富裕農の土地は、なほもとの所持者の手に其儘残されざるを得なかつたのであり、ただ領主寺院大地主の土地のみは、農民達自身の手によつて、かなり無秩序に分配されたのである。翌一九一八年二月(舊曆一月二十八日)「土地に關する法律」が發布せられたが、それは革命後その時まで無秩序に分配された土地分割が合法化せられたに止まり、土地が自ら耕作する農民の手に比較的平等に分配されたと云ふだけのこと、未だ農村社會主義化の片鱗さへも認め得なかつたのみならず、社會主義化への可能性をさへ放棄せし性質のものであつて、そこには數多くの個人的經營農が創設されたに過ぎない。

宗教的情操の豊かなロシア農民のことであるから、恐らくは斯うした無償による土地の獲得を以て、心の眞底から愉快とは思ひ得なかつたであらうし、かかる分配に免れない不公平に關しての不満はあつたであらうけれども、併し長年渴望して居た土地を持ち得たと云ふ利己心の満足だけは得られたに違ひない。ただその反面に、生命をさへ脅かされる地主やその家族を眼前に見る悲しさに、

多くの農民の心は憂鬱であつたと想像される。地主と小作人との關係は帝政時代にも決して反目ばかりしてゐたのではなかつたので、小作人が地主の家族を共産黨やバルチザンの手から身を以て救助した事實は數多く知られてゐる。

それは兎に角、農民は土地を與へられたけれども農具を持たぬ農民が多く、當時なほ農具は主として富裕な農民の手にあつたがために農村に於ける實勢力の中心は依然として比較的富裕な農民層から離れなかつた。かかる事情に加ふるに政府の工業政策は工業生産力の急激な衰退を招來し、農民はその農産物を賣つて錢を得た所で工業製品を手に入れることが六ヶしく、従つて農村から都市に送られる穀物量は革命前に比して著しく減退するに至つた。而も減少の傾向は日と共に激しくなつたのである。

#### 強制的な差押と徵發の開始——貧農委員會から武装徵發部隊まで

農村から都市に送られる穀物量が減退すると云ふことは、共産政權にとつては實に由々しい問題であつた。蓋しその結果は都市に於ける食料飢饉を招來し、斯くては都市のプロレタリア（貧勞働者）のことであつて農民を含まぬを主たる支柱として立つ共産黨はその政權を維持することさへも出來な

くなるからである。斯くして愈々強制的な穀物の差押へと徴發とが開始せられるに至つたのであり、起伏重疊たる農民の涙の歴史が始まつたのである。

一九一八年五月九日、即ち革命後半歳（土地法の發布から二ヶ月）、政府は給養人民委員部に對して農村に於ける貯藏穀物差押の權限を附與し、次いで同十一日には、更に穀物の國家獨占が決定されて、農民の所有する穀物の剩餘はすべてこれを強制的に、政府に徴發されることに確定せられた。プロレタリアの前衛として其の政權を維持するためには共產黨としては農民へのかかる強壓政策を萬止むを得ざるものと考へたのであらう。

ただ斯様な強壓政策を遂行するためには、政府は農民の抵抗力を克服するだけの實力を持たなければならぬに不拘、當時の狀勢に於いては政府は未だそれだけの實力がなかつた。そこで創設されたのが、「貧農委員會」なるものである。それは同年六月十一日の命令に基いて作られることとなつたのであるが、つまり政府は中農及び富農の貯藏する穀物剩餘の強制的差押や徴發をば、貧農の加勢を得て遂行しやうと云ふ腹である。穀物のみならず農具も亦或る程度まで徴發されることとなつた。

貧農委員會の助けによる穀物及び農具の剩餘の徴發はその目的を達成した。併し、その結果とし

て、土地農具の、貧農及び都市から歸村するプロレタリアへの細かな分割のために、農村生産力が著しく減退して行つた。加ふるに貧農委員會自體がその徴發せる穀物を都市に送るよりもこれを農村に留置して自分達の食糧に當てようとする傾向を生じた。他面差押や徴發に遭つた富裕農の反抗は益々激化して到る所で一揆の形にまで發展することとなつた。

斯くして再び貧農委員會も廢止せられざるを得なかつた。即ち一九一八年十二月、即ち同委員會の創設後僅に半歲にして、ウクライナを除くすべての地方に於いて、貧農委員會が廢止せられ、その代りに労働者の武装徴發部隊が編成された。労働者の武装徴發部隊と云ふのは最低數七十五人からなる労働者の部隊であつて、二挺乃至三挺の機關銃を携帶して、強壓的に農民の差押又は徴發に當るのである。これに對して農民は、一揆暴動と耕地の縮少とを以て對抗した。一揆に就いては説明する迄もないが、耕地の縮少とは、徴發せらるべき剩餘を残さぬ様に、耕地面積を縮少して、どうにか、かうにか一家を糊するに足るだけのものを作ると云ふとである。

### 農業生産力の漸減と農民搾取の強化

機關銃を以てする穀物徴發と農民の反抗とは繼續した、それに伴つて農業生産は漸次減少して行

つた。當局の發表する所によれば、穀物の收穫は世界大戰前十ヶ年の平均年産額を一〇〇として、次の如き割合を示して居る。

一九一七年……………	九三%	一九一八年……………	八九%
一九一九年……………	八〇%	一九二〇年……………	七〇%

家畜の如きも著しく減少し、同期間の間に牛馬の如き大家畜は約五分の一の減少、豚は二八%減、羊は約半減したと報告せられて居る。

一九二〇年度に於ける所謂技術的栽培の收穫高は次の如き比率を示す。(一九一三年の收穫高に對する百分比)

大麻……………	一〇%	亞麻……………	二五%	甜菜……………	一五%
棉花……………	一一%	煙草……………	一〇%		

注目すべきことは、生産力が右の如く年と共に激減せし反面に於いて、農村に於ける政府の徵發量は歲々増加を續けて行つたと云つたと云ふ事實である。「給養人民委員部」の手によつて都市及び軍隊に供給されし穀物の數量の變化を示せば次の如くである。(單位百萬ブード)

一九一七——一八年 四七・五

一九一八——一九年

一〇七・九

一九一九——二〇年

二二・五

收穫量の漸減と徵發量の激增——その間に於ける農民生活の苦惱は察するに餘りある。「剩餘分」の名に於ける差押が、實は農家の自家用穀物や、種子の貯藏分に迄も喰ひ込んで行つた事は、收穫量と徵發量との上掲の兩數字から何人の目にも明白であらう。

### 政策轉換論の擡頭と處置の混亂

斯様な事態の進行が必ず行詰ることは子供にでも判ることであるが、革命後共産主義を目指してぐんぐん壓して來た共産黨幹部の中に、時局拾收策に關して見解が分裂して來た。即ち一部の幹部の中に、剩餘の強制的徵發制度を止めて、現物稅制度に改め、よつて生じ得べき剩餘の一部は農民の自由處分に委ぬべしとの提案が現はれるに至つた。けれども斯様な政策がやがて所謂資本主義機構の成長を意味するといふ見解がこれに對立し、而も共産主義社會の幻を追ふ所の共産黨にあつては、凡そ資本主義へ道を開くが如き如何なる見解も、烈しく罵倒せられるの運命を擔ふ。農村に於ける生産力の減退と混亂に發したる黨内部の意見の對立と鬭争は、遂に一九二〇年十二月に開催さ

れた第八回全露ソヴェート大會に於ける、全農家千八百萬の經營を悉く強制的に社會主義化するといふ命令の決議となつて解消することとなつた。この提案は元來オシンスキーが唱道し來れるものであるが、右の大會に於ける彼の説明の一節を引用すれば左の如くである。

「農民達は既に廣汎に互り、勞働食糧供給及び擔税の義務を承認し、従つて國家社會主義の地盤の上に立つに至つた。最近の春期農繁期に於ける國家の干渉は成功を納めた。農業の社會主義的改造は、差當り單に模範農場でしかあり得ない所の國營農場、若しくは共營農場によつては實現されないで、ひとり全農業生産に對する國家の強制的規制によつてのみ實現される。生産物は過渡期の特定期間だけは私有財産として残されて、個人的な關心は割増制度によつて刺戟され得よう。けれども一般に社會主義經濟の第一階段に達すること、即ち農業の生産計劃に達することは、斯様な強制的規制によつてのみ可能であらう。徵發制から現物税制に移り、それによつて農民にその剩餘分の一部を自由處分に委ねようとする或る人々のなせる提案は自由通商の復活を意味し、『クラーク』への道を意味し、あらゆる形態での國家的供給の崩壊を意味するものである。」

上述の如く、この提案は一九二〇年の末に於ける第八回全露ソヴェート大會の採擇する所となつた。資本主義打倒のために立上つた共産黨としては、自由通商の復活、クラークへの道、即ち資本

主義機構への退却は意地からでも避けたかつたのであらう。而してこの決議の遂行のために「播種委員會」まで設立を見た。ただその結果は農村の強力な抵抗に一たまりもなく蹴飛ばされたので、成果は零であつた。歴史、傳統、經驗に基礎を有たざる「變革」が如何に斷乎として決議せられようとも、究極する所、儚なき結果に終ることを示す一の實例を加へたに過ぎなかつた。

### 資本主義への退却——新<sup>ホ</sup>經濟政策<sup>ツブ</sup>の採用

革命以來三ヶ年一路共產主義機構の實現を目指して強行して來たソ聯の政策——所謂戰時共產主義の政策——は、實行の上に行詰つた。これ以上進まうとすればソヴェト政權そのものが倒れる。生産力の減退と農民の反抗、即ち經濟的にも政治的にも、最早耐え難き事態まで押つめて來たのである。農民の反抗は日を経るにつれて激化したが、一九二〇年の穀物收穫は約二十二億ブードであつて、大戰前の平年作に比べると半分にも足らぬものであつた。當時の急迫した事態を最もよく説明するものは、一九二一年三月共產黨第十回大會に於いて行はれたレニンの演説である。今その一節を引用すれば、

「原則的には以下の状態が生じてゐる。——吾々は、中農階級をば經濟的に満足せしめて取引の

自由を認むる外はない。さもなくば、國際革命の速度の緩慢な今日、ロシアに於いてプロレタリアの權力を維持することが出来ない。經濟的に吾々はそれを維持出来ない状態にあるのだ。このことは明確に認識され、危惧することなく、公然と言明されねばならない。政府黨の大會は原則として割當徴發制を租税によつて代らしむること、而して……このことを通じてプロレタリアと農民層との間に強固な關係を結ぶといふことをば、今夕にもラヂオを以て世界隈なく報導せねばならない。」(傍點—山本)

即ちレニンは事態を斯くの如く判斷し、決斷を斯くの如く下した。而して政策は彼等の所謂資本主義へ大轉換をなし、新經濟政策(ネップ)の布告となつたのである。ネップの内容やその結果に就いては後述することとして、レニンの他の演説(一九二二年十月)の中からの引用を續けよう。蓋しこのレニンの見解こそは何よりも有力に戰時共產主義政策の本質とその成果を示して居ると考へるからである。

「一部分は軍事的な課題と、そして當時共和國がおかれてゐたと見えた絶望的な状態とに動かされ、これ等の諸事情及び恐らくは他の若干の事情にも左右されて、……吾々は直ちに共產主義的生産と分配に移り行くことを企てようと決意するの誤謬を犯した。吾々は徴發の方法によれば農

民達は穀物の必要な量を吾々に提供して呉れるであらうし、さすれば吾々はそれを諸々の工場や經營に配給するであらうし、斯くして我國に共產主義的生産と分配が出現するであらうとの結論に到達したのであつた。私は吾々自身が斯様な一計劃を明確に決定作製してゐたと主張することは出来ない。が併し、大約この様な意味に於いて吾々は活動してゐたのである。それは傷ましくも事實なのである。私は敢へて傷ましいと云ふ。何故ならば餘り長からぬ經驗は、……斯くの如き構成の誤れることに就いての確信を吾々に得せしめたたらである。一九一八年以後の理論的な文獻では……資本主義社會から社會主義的な採算と統制を超えて共產主義社會の前階段にまで達するのでさへも、長期間の、且つ困難な過渡期を必要とすると云ふことが明確に力説された。内亂の熱のうちに吾々が建設への必要な歩みを爲さねばならなかつた時、この事を吾々は或程度まで忘れてゐたのであつた。……一九二一年の春共產主義への過渡期に際し、吾々は經濟戦線で惨敗した。……この惨敗は、我が經濟政策の上部が下部から孤立してゐることが明かにされ、而して我が黨の綱領に於いて基本的緊急的任務と認められた生産諸力の躍進を實現しなかつたといふ點に現はれたのである。農村に於ける徵發と、都市に於ける建設の直接なる共產主義的遂行、この政策こそは生産力の發展を妨げたものであり、一九二一年春吾々の遭遇せし激しき經濟的政治

的危機の主たる原因となつたものである」〔傍點——山本〕

### 戦時共産主義の教訓

戦時共産主義時代の事實の進行と政策轉換に際してのレニンの演説から、吾々は色々な教訓を學びとらねばならない。

先づ第一に市場取引の廢除政策——一面には物資の商取引の廢除と他面には労働の市場取引の廢除——が如何に生産力を低下せしめ、且つ經濟の秩序を混亂に陥れたかと云ふ事實である。労働市場の廢除は必然に労働の強制を惹起し、物資の取引の廢除は強制分配を不可避たらしむる。そこには統制手段としてたゞ力が支配することになり、反抗はつきものである。即ち經濟的危機は政治的危機となる。レニンをして「取引の自由を認むる外はない。さもなくば……ロシアに於いてプロレタリアの權力を維持することは出来ない」と叫ばしめた所以はここにある。

元來マルクス主義者はロシアが政權を獲得するに至る迄は、社會主義の經濟をとることによつて生産力は行詰れる資本主義の桎梏から解放せられ、レニンのいふ通り「生産諸力の躍進」を遂げるものと確信して居り、また農民労働者はより以上の自由を獲得するし、消費者は消費物選擇の自

由を保持して行くものと考へて居たのである。このマルクス主義者の見解に對立して、多くの社會主義に反對なる經濟學者達は、社會主義制度の下に於ける生産力の低下と、勞働自由並びに消費物選擇自由の喪失を以て必然と考へて居た。戰時共產主義の「餘り長からぬ經驗」は、公平に見て、マルクス批判者の考への正しかつた事を立證した。勿論マルクス狂信者及びマルクス經濟を批判する力を缺くものにとつては、戰時共產主義の經驗から、私と同じ様な教訓を受取り得ぬであらうが、暫く止むを得なう。

第二に受ける教訓は、レニンの英斷に於ける共產主義理論の妨げに就いてである。多くの人々がレニンの人物の偉大さを語る時、往々にして「大膽卒直な自己批判」をその證左の一つにする傾向がある。勿論私はレニンの大膽にして包容性に富む性格を否定しようとするものではない。けれども私をして云はしむれば、戰時共產政策の慘敗を自認し告白したことは實は止むを得ざるに出でたものである。あの様な事態に陥つては、失敗の事實とその直接原因とは、何人の眼にも明白であつたに相違ない。更にレニンの所謂「自己批判」も亦決して徹底して居るとは云へない。蓋し彼の批判は常に資本主義打倒、——共產社會實現の手段、方法に關する自己批判に止まり、共產理論そのものに對しても、共產社會の實現性如何に就いても、毫末も反省された形跡がない。マルク

その經濟理論に把はれて、共產社會の幻想から一步も出ることが出来なかつた。鐵の意志を有つた偉大な主義者ではあつたが、決して偉大な政治家であつたとは云へない。理論の方面に於いても、哲學方面には可成りの造詣があつた様だが、經濟學の方面では極めて幼稚でブハーリンにさへも及ばなかつたと考へられる。政治家として豊かな性格を有つて居たに拘らず、無理を重ねて、下手な藪醫者の様に數百萬の善良な國民を射殺餓死せしむるが如き政策を強行するに至つた理由の第一は、彼が經濟學の知識に暗く、只管マルクス理論を盲信せし點にあつたと見るのが至當であらう。私が常に世の所謂「轉向」者に向つて、社會主義實現の方法手段に關してのみ、日本の特殊性を考慮するといふが如き不徹底なものに止まらずに、共產社會そのものの可能性に就いての深き考察を求むる所以のものは、彼等の折角の努力が國民にとつて悲しむべき運命を結果すると信ずるが故である。

### 新經濟政策の本質

上述の如く共產黨は共產主義社會實現の目的を終局的に放棄したのではない。けれども新經濟政策そのものの本質は市場取引の承認であり、資本主義への退却であつた。それが一時的のものであり、戰術的の一步退却であり、餘儀なきに出た政策であつたには違ひないが、資本主義への退却で

あつたといふ事實に變りはない。

退却の第一歩として先づ發布されたものは一九二一年三月廿一日附の有名な「現物税に關する布告」である。通常、新經濟政策がこの日を以て戰時共產主義時代と區劃せられるのはそのためである。此の法律により、農家は從來の如く剩餘分の全部が押收せられることが止められて、其の代り現物で支拂はるべき累進税が定められた。税額もこれまで押收されてゐた平均量よりも減ぜられようとして居り、而も經濟の復興に伴つて漸次に輕減されるといふのであつた。

方向轉換としての此の法律の決定的な意義は次の規定に存する。

「農民は、租税の納付後に殘留する生活資料、原料及び飼料の、貯藏、一切を自由<sup>に</sup>處分<sup>して</sup>、差<sup>支</sup>へなく、これをば、經濟の改善の爲めに使ふと、自家の消費を高めるために使ふと、また工場や家内工業並びに農業の諸生産物との交換のために使ふとも自由である。交換は地方的經濟取引の限界内では協同組合の媒介によつても、また市場やバザアに於いてでも、これを爲すことが許される。」(傍點—山本)

「貧農委員會」の設置にすらあきたらず、遂には、勞働者の武裝部隊によつて、農民の差押又は徵發に狂奔した戰時共產の時代に比して、大なる轉換と言はねばならぬ。吾々はこの轉換が市場取

引を廢除するといふ共產主義政策の根本的矛盾から生れたことを忘れてはならぬ。

### 所謂資本主義機構の復活——新經濟政策の教訓

「市場取引」の自然的な作用を廢除せんとした共產主義の政策が、經濟活動の根本法則を無視したものであることは、新經濟政策の短い實驗に徴しても明らかであらう。レニンの大英斷に依つて、新經濟政策が採用されるや、市場取引に對する堰の一部が切りはなされた。今や物は必然に商品として全國的に流通しはじめ、この自然的な力に對しては、如何ともすることが出來なかつた。最初當局の見解では、商品はただ地方的な限界内で、而も貨幣の媒介なしに物々交換だけを認めるに止めようとし、また危機を脱するには、それで充分と考へてゐた。然しながら今日の時代に、斯くの如き彌縫策の行はれよう筈がない。一九二一年六月、貨幣流通の諸制限が、共產黨政府によつて撤去されたのは、その第一の現れである。續いて八月には、國內的の商品取引が部分的に許されねばならなかつた。そして遂には同年十二月、自由商業に對する一切の制限が廢止されねばならなかつた。市場の取引が許されると共に、彼等の所謂資本主義的諸關係は、全く自然に成長して來た。ネップ採用後に於ける數年間の、ロシア經濟の進行過程を仔細に研究するものは、「市場の取引」

が如何に現存經濟秩序體制の根本的條件であるかを、如實に看取し得るであらう。而して、一方に於いて市場取引の自由を認めつつ而も他方現存經濟體制そのものの變革を期するが如き企ては、恰も樹に據つて魚を求むるが如く、全くの幻想に過ぎないことを、充分に悟り得るであらう。

新經濟政策の採用と共に、共產主義と云ふ人爲的な計劃や命令に代つて、自然の見えざる力が、ロシア經濟の秩序と發展を導いて行つた。有名なロシアの經濟學者スミルガは、一九二二年八月、新經濟政策採用後の經濟状態を表現して「今日、最悪の經濟（彼等の所謂資本主義經濟——山本）が、行政上、法制上の、そして、合計劃的な諸規則の一切よりも、一層立派に機能してゐることは、普ねく知られてゐる所である」と語つてゐる。彼等の所謂資本主義經濟が、マルクスの言ふ如く「アナーキー」であつても、それは決して無秩序混亂を意味するものではなく、却つて官僚と既成イズムの人爲的計劃から來る機械性を廢除するものであると云ふことが、共產主義經濟學者によつて、明確に自覺されたのである。共產主義は早急にも、肉眼には見ることの出來ない自然の力を「アナーキー」であると速斷し、彼等の思想の人爲的機械性を忘却したのである。ともあれ、既にスミルガも認められた如く、自然の力の作用する「市場取引」を復活させた新經濟政策が、彼等の計劃的經濟に對して一層立派に機能してゐることは、吾々に向つて重要な教訓を與へるものと云はねばならぬ。

## 政策轉換の遲滞——餓死する者五百萬

新經濟政策の下に於ける經濟、即ち彼等の所謂「最惡の經濟」たる、本質的には資本主義的なる經濟が、ソ聯の生産力を向上せしめ、經濟的政治的な混亂を秩序化する機能を有ち得たことは、この期間の大部分——正確には一九二三年秋より一九二六年十月迄——が、「經濟復興期」と呼ばれることに依つても知られる如く、既に周知の事實である。然しながら既に述べた如く、レニンのネップへの轉換は充分な見透しに據つて行はれたものではなく、過去の政策が何人の眼にも明かな程失敗したと云ふ、全くの行詰りからなされたものであつた。従つて政府の方向轉換は餘りにも遅かつたのである。

一九二〇年に於ける穀物收穫は、上來述べた如く農民の反抗があつたため、二十二億ブードに過ぎず、戦前の平年作に比較してその半ばにも及ばなかつた。而も翌一九二一年はまた運悪くも恐ろしい早魃に見舞はれねばならなかつた。穀物の減少は、八億ブードと云ふ悲觀的數字を示し、前年の約三分の二に過ぎない有様であつた。斯くて「餓死年度」が始まつた。一九二一——二二年度に於ける餓死者の數は、中央統計管理局の算定によれば五百萬とあり、第一回の國家計劃委員會の議

長クルイシヤノフスキーは、男子労働者の餓死だけで數百萬と報告してゐる。實はもつと高い數字すらも擧げることが出来るのである。諸外國(彼等の所謂資本主義諸國家)、殊にアメリカ及び西歐諸國からの私的救濟運動も可成り目覺しかつたが、云はば燒石に水の感があつた。日本に於いても、自由主義者の發起の下に若干の物資が送られた。それは私が學生時代の頃の鮮かな記憶の一つである。ソ聯に於ける當時の慘狀は、ただに數百萬の餓死者を出したと云ふだけではなく、ロシア研究に於ける世界的權威者のブルツクス教授は其の著述の中で、「この頃のロシアでは人を喰ふこと(Kannibalismus)が珍らしからぬ現象となつた」と書いてゐる位である。明治以後の聖代に生を享けた吾々にとつては、恐ろしい出來事に思はれるけれども、長い人間の歴史を省み、五百萬の餓死者の姿を考へ合せる時、この慘事も常識的に考へ得べからざることではない。大正十二年、私は徴兵検査場で軍の手になるポスターの一つにソヴェート・ロシアの現狀を描けるものとして、婦人子供が男の屍體に嚙りついてゐる繪を發見した。正直に云つて學生上りの私の目には、かかる無殘な光景が事實とは考へられず、従つて不快の念を禁じ得なかつた。それが何等の誇張でもなくデマでもない事實であることを確信するに至つたのは、後に一九二七年五月モスクワ訪問の際、二十數年を引續きロシアに過ぎた朴氏の口から、「事實私が見た」と聞かされてからのことである。

## 餓死の原因——政策の影響

吾等の注意すべき點は、ソ聯當局が斯くの如き餓死の慘狀を以て一九二〇年及び二一年の天候不順による凶作の結果なりと報告し其の政治的責任に關しては回避的態度に出でてゐることである。私は素より天候の影響を否定しようとするものではない。ただ、然しながら、天候不順による凶作は、必ずしも斯くの如き悲惨な餓死を伴ふとは限られてゐない。農村が幾年かの間隔をおいては凶作に襲はれるのは昔からの例のあることで、ロシアに於いても特にこの年が最初ではない。而もあの様な多數の餓死者を出し、そして無殘な餓死年度を現出するに至つたのは、ロシアに於いても嘗つて例のないことである。今迄、何れの凶作に際しても、斯くも悲惨な結果に立ち到ることの無かつたのは、ロシア農民が天候に基く凶作の襲來に對して、長い經驗の結果、それぞれ用意を忘れなかつたからである。然るに共産治下の農民に於いては、既に述べた如く剩餘は強制的に押收せられて、一物の残る物なき状態に置かれねばならなかつたが故に、凶作に對する何等の準備もなく、自然の暴威に對して全く無抵抗の有様となり、未曾有の餓死飢饉を齎すこととなつたのである。従つて凶作そのものは、人力の如何ともし難き天候の影響と見るべきではあるが、この天災に對する用

意を、傳統と歴史に抗つて強制的に放擲せしめ、かくの如き多數の餓死者を出すに至らしめたのは、一つに共產黨が標榜し實施した政策の誤りに歸せしめざるを得ない。ロシア農民の傳統は、長い體験の上から凶作に對する充分な抵抗力を持つてゐた。そしてこの抵抗力に就いては今迄の凶作に於いて、決して斯くも多數の犠牲者を出すことがなかつたと云ふ點で、充分の證明がなされたものと見ねばならない。然るにソ聯當局の政策は、この重要な傳統の力を破壊した。この凶作が共產治下のロシアでなかつたならば、斯くの如き瀕死的な結果を招くことはなかつたであらう。されば公平な見地からして、五百萬に上る餓死者の簇出に關しては、共產治下の政策が大半の責を負ふべきは言を俟たざることであらう。

### 復興過程に於ける農民の苦難——缺狀價格の開閉

新經濟政策の下に於けるロシア農民は、概して云へば復興の過程を辿つたものと云へよう。然しながら、ここに云ふ復興の過程も亦仔細に吟味すれば決して平安の大道ではなかつたのである。而して、その最大の障碍となつたものは、矢張り國家の誤れる政策に外ならなかつた。蓋し商業取引を承認せしとは云へ、それはソ聯當局にとつては止むを得ざる一時的、戰術的讓歩に過ぎないもの

であつて、共產主義社會の實現てふ彼等が本來の目標を、終局的に拋棄したのではなかつた。それ故に富裕農と私的商人の擡頭に對しては、不斷に壓迫の行政的處置がとられたし、又工業方面に於いては大工業の多くは猶國家の手に保有せられてゐた。商業取引を承認しつつ、而も所謂資本主義經濟の擡頭を押へて計劃經濟に移さうとする、矛盾せる政府の企圖が、如何に經濟の復興を困難ならしめたかは、新經濟政策下に於ける復興過程そのものの仔細な分析と共に、明らかにするであらう。よつて吾々は暫く、その分析を試みようと思ふ。然しながらこの復興過程に於ける農民の實狀を知るためには、ただに農業の分析に止まらず、市場、財政、工業の方面にまでも、關聯を辿らねばならない。かかる綜合的角度からすることなくしては、農業と農民の眞の姿を理解する事が出来ないであらう。

一九二一年の飢餓年度を経て、一九二二年の收穫は異常に良好であつた。穀物の總收穫高は前年に比して、五割以上の増收であつた。引續き翌一九二三年の收穫成績も亦良好であつた。他面ソヴェート共和國農業法は、一九二二年十月三十日附で、農民の土地私用權を確認し「勤勞によつて土地を私用する權利は無期限であつて、ただ法律によつて明定された諸原因（農民の自由意志による權利拋棄、自作の廢止、裁判所の決定等）に基いてのみ喪失することあるべし」と規定するに至つた。ここに

於いて永小作權が確認されたこととなり、農民は初めて安堵して自らの耕地に改善を施すことが可能となつた。斯くて農業の恢復にとつての主觀的、客觀的諸條件が整つたかに見えるはじめた。然るに農業の復興は、はからずも他の一方から脅かされるに至つた。即ちトロツキーの言葉に所謂「價格の缺」と云ふ現象が其であつて、工業製品の價格が、極度に高められて、農民達の購買や調達を殆んど不可能に陥らしめた、と云ふ事實である。かかる事實は、當然農業の復興に對する障礙となり、ひいては工業そのものの發展をも阻むに到つたのである。

價格の缺と云ふ譬喩は、工業製品の價格と農産物の價格とが、缺を開く様に向け離れて行く状態を圖表的に説明したものである。一方に於いて工業製品の價格が次第に上向線を辿つて行くのに、他方農産物の價格は次第に低下して行く。即ちここで缺が開く譯である。逆行運動の場合には、双方の線が再び相接近して、恰も缺の閉ぢる形に似てゐるからである。かかる農産物と工業製品の價格の乖離は、云ふ迄もなく農業の復興に對して躓きの石とならざるを得ない。かかる事態は何處から發生したものであるか。吾々は、單に斯くの如き現象の存在することを指摘するに止まらず、この缺狀現象の由つて來たる所以を明かにし、以てソ聯當局の採用する政策の矛盾を認識するよすがとしなければならぬ。而してこの目的のためには、以下少しく工業組織に就いての敘述をなすこと

が理解の一助ともなるであらう。

### 缺狀價格發生の原因

新經濟政策の採用によつて工業に齎された影響を大づかみに拾つて見るに、先づ一九二一年五月十七日附の命令によつて、以後私人の經營を沒收することが禁止せられ、且つ其れと同時に一九二〇年十一月二十九日附で發布されたところの工業の一般的國有化令が廢止せられるに至つた。この法律に就いては更に同一九二一年十月二十七日附で一つの補足がなされ前記發令の時日、即ち一九二一年五月十七日現在に於いて、事實上國營となつて居らず、單に形式的にのみ沒收されてゐた諸經營は、すべてこれをその所有者に返還することに規定されたのであつた。

斯くして中小工業の大部分は、再び私人の手によつて經營せられるに至つたのであるが、大工業の大部分並びに若干の中經營及び卸賣業は依然として國家の手によつて經營された。然しながら新經濟政策の當初には、國有化されたままでゐた大中工業の經營狀態は、實際の所無茶苦茶で亂脈極まるものであつた。この間の事情は、一九二一年九月十六日附で發布された新ソヴェート立法が、これ等總ての國營企業に對して「生産諸材料原料製品の價值等々の嚴重な、正確な記帳」を要求し、

且つ軍需工業を除く諸企業に對しては、「無缺損主義」に基いて組織經營すべきことを要求したことによつても、窺はれるであらう。更に各企業は經營を維持すべき手段、即ち先づ原料を、後には勞賃支拂ひのための貨幣をも、自ら市場で調達せねばならなかつた。然しながら國營工業はすべて、市場との聯絡を缺き、また全く無秩序に無數のトラストに結成されてゐた。従つて最初市場が確認されないうちは、市場によつて客觀的に成立する安定な價格がなかつたので、經營に於いて最も基礎的な原價の計算が不可能であり、かかる事情の當然の結果として製品も亦原價を無視して賣られると云ふ有様であつた。然るになほ、市場の狹隘のために、原價を無視しても製品を賣ることが出来なかつた。一九二二年八月スミルガはこの邊の事情を次の様に書いてゐる。

「吾々は根本的に、戦前の景氣に照應する物價を確定しようとして、昨年適用された様な方法を止めねばならぬ。吾々は是非共今日戦前の物價と戦前のルールが、現存してゐるので無いと云ふことを確認しなければならぬ。世界景氣並びに我國自身の國內諸關係は變化したので戦前の等價物で以て計算することは最大の誤謬であらう。……戦前の計算によつたことが、昨年の我が工業を不幸にも物價低落に驅りたてたのである。吾々の義務は今日國家豫算の範圍内で工業を存続するだけでなしに、發達し得るやうな基礎の上に持ち來たすことである。この場合、最も困難な

ことは生産費の問題である。固定した通貨單位の存しないことと、我國の諸經營に於ける計算制度のアジア的狀態とは、計算の仕事を極度に困難ならしめてゐる。吾々の全力は計算と簿記の改善に集中されねばならぬ」(スミルガ「復興過程」——傍點山本)。

尙同様な事情に關する報告をルイコフに聞かう。

「勞働檢察部の斷定に従へば、國營工業の經濟的狀態に關しては、正確な、否單に近似的にさへも材料を提供することが不可能である。と云ふ所以は諸々の報告書、決算書、統計及び何等かの形に於ける貸借對照表が存しないからだ。ゴズプランの諸調査はこれを實證してゐる。勞働國防會議に於いて、吾々は物價の測定さへも全く指先で虚構されるか、若しくは單純に行政的に處理され、而も報告者自身が何故に甲の數字であると測定して乙の數字と測定しなかつたかを知らぬことを曝露する場合を見た。……計算や報告作製上に於ける斯様な狀態の場合、眞の「經濟計算」(ホズラスチョート)などは問題となり得ない」(ルイコフ全集第二卷——傍點山本)。

スミルガやルイコフからの引用を讀む者は、ソ聯に於ける當時の諸經營が、最も原始的であり、且つ基本的なる、生産費の原價計算に就いてさへ、全く暗中模索の狀態にあることを知るであらう。私が戦時共産時代から以後、國營事業が無茶苦茶の經營を續けたと斷定するのは、右の如き實狀に

甚くものであつて、決して主觀を雜へたる誇張ではないのである。

然るに新經濟政策の實施後は、商業取引の自由と共に、漸次に市場が組織されて來た。而して一九二二年の秋には一時、工業製品の市場價格は略々安定を保つに至り、秩序も稍々恢復の兆があつた。然るにその後、工業製品の價格は持續的に騰貴を續け、他面農産物の價格は全く持續的に低落の途を辿つたのである。この事實が、工業製品と農産物との間に開かれて行つた價格の「缺」なのであるが、その原因は何處にあつたのであらうか？

農業の工業諸經營に對する關係は、一九二二年十月頃は稍々良好であつて、農民達はその提供する穀物に對して戰前よりも幾らか少量の工業製品を受取つてゐた。所が一九二三年四月には戰前に比して漸くその半分に過ぎなかつた。而して同年の秋になると、殆んど三分の一に減する有様であつた。而もこの場合これ等の數字は、主要諸都市に於いて要求されてゐた價格に基いて計算されたものであるから、工業製品が行商人の手をくぐる僻遠地方にあつては、この割合はなほ遙かに農民に對して酷なものであつた事を注意しなければならない。工業製品の價格が斯様に騰貴したのは國營事業のトラストが、その絶對獨占の威力を利用したからである。トラストの獨占到依る價格の騰貴は、所謂彼等の資本主義社會に於いてのみ現れる事實であると主張してゐた共產主義思想が、

その實際的に施行せられたソ聯に於いて斯くも顯著な蹟きの石となつたのは如何にも皮肉な運命と云はねばならぬ。とまれ當時の缺狀價格による農民の負擔に就いては、ヂェルチンスキーをしてその結論を語らしめよう。

「工業の苦境の影響下に、そして工業を出来る限り急激に復興したいと云ふ願望から、その當時即ち『缺』の期間には、吾々の定めた所の工業製品價格は、農産物の價格水準が低かつた結果、農民達には耐へ難きものとなつてゐたのである。」

### 工業品の販路恐慌——一九二三年秋の農業状態

けれども、既に新經濟政策で復活された自由取引の下に於ける經濟では「恐慌」と云ふ自動的なブレーキがある。國營トラストが如何に高く賣らうとして價格を引上げようとも、その價格で買ふか買はぬかを決するものは消費者自身である。一九二二年の好景氣に高められた消費者の購買力が盡く吸収されつくしてしまふと、一九二三年秋遂に激烈な工業製品の販路恐慌に陥つたものである。ソ聯當局はこの恐慌の原因を、充分によく理解したと見えて、ルイコフは次の様に語つてゐる。

「この恐慌は……經濟政策上狹隘な工業に中心を置くこと——それは工業の發達と農業の發達との

相互に就いての理解の除去を物語る——の全く不當なることを……眼前に證明した。都市と農村間の傳達装置の活動が極めて劣悪であつたので、工業が販路恐慌を経験した一九二三年の恐慌の與へし基本的教訓は、工業の發達は農業の發達と聯絡を保たねばならぬものだといふことであつた。

斯くして一九二三年秋、政策修正が行はれたのであるが、その修正に就いて語る前に、一九二三年秋に到達した復興の状態を示して置かう。かかる苦難の中にも、なほよく發揮し得たる市場經濟のもつ經濟復興力に對して、私は一種の驚異をさへ感ずるのである。

農業は殆んど戦前の生産の四分の三を恢復するに成功した(播種面積は一九一三年の七一%)。

大工業及び中工業は約三五%を恢復した。家内工業は一九一三年の五分の三を恢復した。

尤も市場と私人資本は執拗にその權利を通告し、經濟の國營圏は歩一步と私營圏のために敗退を餘儀なくされ、一九二三年十月には運轉されつつある諸經營のうちで、七二%が私人及び協同組合に貸貸されてゐた。小賣商業に至つては殆んど全部が私人の手によつて行はれてゐたのである。

## 農民生活の一時的平安

一九二三年秋の恐慌克服のために、ソ聯當局によつて採用された方策は、工業製品價格の引下げと、政府による穀物の買上げであつた。この政策の結果一ケ年の中に、工業製品の價格は平均三五%引下げられた。これによつて價格の「缺」は著しく閉ぢられることになつた譯である。政府による穀物の買上げは穀價の著しき騰貴を招來せしめ、斯くして工業製品に對する穀物の價格は上向し、農民の購賣力は一年間に二倍半高められることになつた。云ふ迄もなく農民の不平は一時著しく緩和せられた。

然しながら政策の修正によつて招來されたこの緩和も、殆んど東の間の喜びに過ぎなかつた。引續いて起つた諸種の出來事は、農民のたち不滿を再び勃發せしめることになり、共產黨は農民に對して實に徹底的な讓歩を餘儀なくせられるに至つたのである。其等の事情に關しては項を改めて説明を加へるであらう。

### 穀物最高價格の公定——農民一揆——政府の農民に對する大讓歩

一九二四年の凶作によつて、シベリヤを除く全國各地に於いて、穀物の收穫が減退した。ヴォルガ下流地方の如きは、殆んど大部分が全滅に近かつた。當然の結果として、穀價が騰貴した。政府

は都市住民の生活を緩和せんがために、穀物の最高價格を規定するに至つた。けれども需要が供給を超える場合、法定價格が長く維持され得る筈がない。小農の如きは、數ヶ月の後に賣つたよりも高い價格で買入れねばならぬ破目に陥つた。農村に於ける幾多の不穩状態、黨の腹心たる村落通信員の虐殺、ジョルジアの重大な農村一揆等々。事態は危急を告げた。而もそれに先立つて、工業製品の農村供給を擔當して居た私的資本への、政府の壓迫政策によつて、農村の經濟的困難は、相當に激化されてゐたのである。斯くて事情の逼迫を知つた共產黨は、農民に對して讓歩しなければならなくなつたのである。

私營小賣商に對する壓迫は緩和され、一九二五年の春には土地の賃貸借並びに農業賃労働者の使用に關する規定が修正され、且つ農業税の輕減が行はれた。その上に、農業上の蓄積の自由は公然と宣言せられた。ブハーリンが農民達に向つて「致富せよ！」と呼びかけたのはこの時である。それは單にブハーリン個人の意見ではなかつた。如何なる犠牲を拂つてでも、中農及び大農を満足せしむることによつて、農業生産を増進せしめんとすることは、當時黨の支配的方針だつたのである。加ふるに天候の恵みも伴つて、一九二五年と一九二六年とは共に素晴らしい收穫が得られた。播種面積も一九二三年の八千六百萬デシヤチンに對して、九千二百二十萬乃至九千六百七十萬デシヤチン

に増大したが、この點は讓歩政策の影響と見なければならぬ。

### 政府の穀物買附けの失敗

然しながら政府は意外に不快な出來事を経験しなければならなかつた。それは一九二五年、穀價の上騰によつて國家の穀物買附戰が大失敗に終り、全經濟計劃が破壊されたし、また一九二六年には前年に於ける物價政策轉換の結果、技術的栽培の著しい減退を來たし、ために多くの工業部門に於いて、原料の缺乏を來たしたことである。

政府は一九二五——二六年度に對し、三億八千萬ブードの穀物輸出を基礎として、國營工業に於ける優に十億ルーブルの新投資を豫定したのであつた。それは一九二五年の良好な收穫と、工業發達の疾風のテムボに自己の力を過大評價した結果である。然るに一九二五年九月、期待に反して穀價が上騰し、六〇%の工業生産増大が報ぜられしにも不拘「商品飢饉」が尖鋭化されると同時に諸種の困難が生じ初めた。何よりも先づ輸出のための豫定穀物量を用意することに失敗した。穀物調達計劃は、八億四千萬ブードから六億四千萬ブードに縮少されねばならなかつた。而も輸出するところが出來たのは、豫定の三億八千萬ブードではなくただの一億二千五百萬ブードに過ぎなかつた。

此處に於いてか全經濟計劃が崩れたのは云ふ迄もない。

一九二七年は豊作であつた。技術的栽培は二五%以上の價格の引上げによつて、生産も再び増大して前年の不足を取返して餘りがあつた。農業生産總額は一九二七年には殆んど戦前の數量に達したと報告されてゐる。けれども都市の市場に齎らされる部分は、殆んど戦前の七〇%にも達しなかつたし、農産物の輸出量に至つては漸く戦前數量の四分の一に過ぎなかつた。

### ソ聯當局のなやみ——集團化政策への契機（一）

ここで農業問題に關聯したソ聯當局のなやみを總括しておかう。第一に農村の人口は急激に増加して行つたが、農業技術がなほ極めて低いため、農村に於いては糊口の途を見出し得ざる者が増加し、毎年幾十萬の農民が都市に流入して失業者になつて行つたといふことである。都市に失業者が増大すると云ふことは、都市労働者の支持に基礎をおくソ聯政權にとつては放置しがたい事實である。この失業問題を解決するためには、一面農業技術の改善も必要であるが、他面工業の大擴張が日程に上らねばならぬ。

第二に農村の復興につれて、農村クラークが増加して來たと云ふことである。元來貧農を除いて

農民は共産黨に好意を有たない連中であり、共産政府にとつて面倒な問題と云へば大抵農村から起つて居るのが例である。殊にクラークの擡頭の如きは、ソ聯當局の頭痛の種である。一九二八年二月十五日のブラヴダ紙上には次の様に書かれてゐる。

「村落は發達しまた一層富んで來た。第一には搾取農<sup>クレーパー</sup>が發達し且つ富んだ。引續いての三ヶ年の良好な收穫は、影響なしには止まなかつた。穀類以外の農業生産物の賣却や、畜産物の賣却による農民層の収入の増加と季節的な勞働から得る収入とのために、工業製品の供給が比較的不足せる場合なので、一般に農民層をして、殊に搾取農をして穀價の上騰を實現せんがために、穀物を賣らずに手元に控へておくことを可能ならしめた。確かに搾取農は穀類生産物の主たる所有者ではない。けれども彼は村落に於ける經濟的主權者であり、且つ穀物に對し高價に支拂ふ所の都市の思惑業者達とグルになつて活動してゐるのである。更にまた彼は、吾等の調達組織の側から彼に對して抵抗がなされない限り、穀價釣上げの問題、ソ聯政府の物價政策の蹉跌の問題に於いて、中農を彼の味方に引附けることも出来るのである。」

云ふ迄もなく、農業に於いて最も生産能率の高いのはクラークのそれであつた。農業の復興がクラークの擡頭を意味すると云ふことはソ聯當局にとつては痛し痒しの現象であつた。それ故にこそ

黨の幹部の中にも農業の復興を重しとして、クラークの擡頭を放置しようとする、農科大學教授一派や、プーリン、レイコフ等の如きものと、クラークの擡頭を押さへるために農業に於ける個人經營を廢して集團化しようとするスターリン一派との對立論争を見るに至つたのである。

## 農村集團化政策への轉換の契機(二)

抑々共產黨はマルクス、エンゲルスの共產黨宣言の遺言に従つて、自らを工業プロレタリアの前衛と見てゐる。工業労働者こそは共產黨の社會的基礎を構成するものである。故にロシアの如き小農國に於いて共產黨の支配が安泰であるためには、國民總人口のうち、プロレタリアの占むる割合が急速に増加しなければならぬし、そのためには大きな新工業が起されねばならないと云ふことになる。而もただに従來の工業地方で新工業が起されると云ふに止らずに、國の僻遠地方に於いても亦新工業が起されねばならない。蓋し共產主義の意のままに動く所の共產黨の支柱たるプロレタリア層が全國的に散らばつてゐなければならぬからである。吾々はここに五ヶ年計劃に於ける全國的な國の工業化が施行せられるに至つた、一つの重要な、而も隠された政治的要因を看取することが出来る。

上來述べ來つた種々なる事情に加ふるに、一九二四年二月チエルヴオネツ貨幣の安定後、漸次に進捗して行つた計劃作業の結果として、一九二八年十月一日から五ヶ年間の經濟建設の計劃を樹立しようとの氣運が動いて來た。處が五ヶ年計劃案の主目的たる工業化のためには、巨大な資本を必要とするも、外國の信用を得ることの困難なロシアにとつては、農産物の輸出によつて資金をつくり出す以外に道はない。ただ巨大な資金を調達し得るには、穀物の輸出が必要であるにも拘らず、そのためには當時の農業生産力は餘りに低く、その發展のテムボは餘りに緩慢であつた。何としても農業生産力の増大を圖らねばならぬ。それが工業化の必須條件と考へられたのである。然るに農業生産力の増大を圖る方法に就いての見解は、主腦部間で對立した。農民に「致富せよ！」とよびかけて營利の刺戟によつて生産力を發展せしめんとするものと、個人農を集團化して、これに機械耕作を行はしむることによつて生産力を増さうとするものとの對立である。而して對立の結果はスターリンを中心とする後者の見解が勝利を占めた。スターリンの考は一石二鳥を目ざせるものであつた。蓋しそれによつて一面に農業生産力を増大し得ると同時に、他面クラークを撃退し得ると考へたからである。

集團化が決意されたに就いては、次の事情も考慮さるべきである。國營農場も共營農場も戰時共

産主義以來、ネップの下に於いてもなほ命脈を保つてゐた。而して一九二七——二八年重要な諸地方に於いて、各種の經營方法に就いて、その生産力の程度を試験的に比較した處によると、富農の能率は最も高く、中農これに次ぎ、集團農はその次に位してゐた。然しながら集團農は貧農よりも多少成績が上であつた。加ふるに革命後貧農の數が非常に増加してゐたために、富農中農貧農の能率の平均と集團農のそれとを比較して見ると、後者の方が幾らか上であつた。例へば中部黒土地方に於ける穀物收穫は、集團農場に於いて七四・六ブード、個人農の平均は五九・七ブードで、集團農の數字が遙かに高いのである。

#### 中部黒土地方一デシヤチンの平均收穫量

	夏小麥	燕麥
集團農	四六・三ブード	六八・〇ブード
貧農	三〇・〇ク	六五・〇ク
中農	五一・三ク	七四・六ク
富農	六〇・〇ク	一〇四・〇ク

社會化を決意せしむるに至つたより重要な他の一事情は、農業が個人經營に放任されてゐると云

ふことが國家經濟の他の方面に於ける計劃經濟の遂行を混亂せしむると云ふ事情である。如何なる農産物をどれだけつくるかと云ふことが、個々の生産者の自由な判断に委ねられ、その生産物をある一定の價格で賣るか賣らぬかが個々の農民の決定に委されて居つては、政府は豫定の價格で豫定の數量を買い上げることが出来ない。斯くてはその買上げた農産物の輸出によつて得たる資金をもととする經濟計劃の遂行が、豫定の如く行はれない。政府は特に、一九二五年以來、この點で幾度も苦い經驗を嘗めてゐる。政府は農業の社會化によつて、生産の方向の決定、剩餘生産の徵收が容易となり、斯くして五ヶ年計劃の目的遂行に必要とする、都市への生活資料の供給を保證し、工業への原料の供給を容易にし、農産物の輸出を確保し得ると考へたのである。

斯様にして農村の集團經營化（社會化）が決定された。廣大なる地域を有つロシアに於いては土地所有權の觀念が比較的稀薄であつたこと、貧農の生活條件が甚だ低くて、その多くは既に久しく副業的季節労働者として工場又は鑛山の賃仕事に慣らされてゐたこと等は、集團經營化遂行にとつて、日本などに於いてよりも遙かに好條件であつたと云へよう。また平坦にして廣茫たる土地の故に、機械耕作が容易であると云ふ事も、日本などに比較して、集團化を合理化せしむべきロシアの特殊條件と見ねばなるまい。

## 集團化政策と富農剷滅政策

私はここで少しく集團化政策と富農剷滅政策との關係に觸れておかねばならぬ。富農剷滅政策とは富農の集團經營參加を許さずに、滅亡せしめると云ふ政策である。併し元來集團化政策と富農剷滅政策とは論理的に必然の關係をもつものとは云へない。富農を剷滅しなくとも、それをも小農中農と共に集團經營に加入せしむると云ふ政策も亦考へ得るからである。然しながらスターリンは一九二九年の夏に至つて、集團化政策と並行してこの富農剷滅を遂行すべく決意するに至つた。富農の發生を喜ばなかつた點に於いては、共產黨内部に誰一人異論はなかつたけれども、この富農を如何に取扱ふべきかに就いては、古くから黨の内部に見解の相違があつた。行政的手段、即ちゲー・ペー・ウーの力で富農を退治すると云ふトロツキーやジノヴィエフ等の所謂左翼反對派に對して、スターリン一派は、富農制は望ましいものではないが數が少いから政治的に危険なものではないと主張して、久しく富農剷滅策に反對して來たものである。このスターリンの主張は一九二七年十月廿三日の黨最高委員會の決議にも反映して居り、同年十二月に開催された第十五回黨大會の決議にも充分に表れてゐる。然るに一九二七、二八、兩年に於ける穀物買附に於いて、農民の穀物抑留と

云ふ苦い経験を滿喫したスターリンは、一九二九年夏その見解を決定的に轉換した。即ち彼は一九三〇年一月廿一日のブラウダ紙上で、一九二九年夏を以て「轉換點」と稱し、一九二九年十二月廿七日、マルクス主義農業學者會議の席上では「今や富農剷滅の時は來た、社會主義的農業經營は最早富農の存在を必要とせざる迄に發展せしが故に」と説明してゐる。斯くして長き間黨の懸案たりし、農業集團化の政策と富農剷滅策とは相並行して遂行せられるに至つたのである。

### 富農剷滅政策實現の方法

富農剷滅は集團化の目標に對しても大きな役割を果した。集團化に反對する者を、富農又は富農の友と認めたからである。斯くして農民は富農として剷滅せられるか、集團化經營に参加するか、いづれかの途をとらねばならなかつたのである。さて富農の剷滅は如何なる方法によつて行はれたであらうか。また集團化政策はどうして豫想以上のテムボで遂行せられたのであらうか。

富農剷滅への政策轉換は先づ一九二九年七月の「穀物戰」法令によつて具體化された。即ち一九二九年夏、強制賦課の原則の上に同年秋の穀物賦課量を一千三百九十萬噸といふ未曾有の量に決定した。而して各地の村落會議に於いては、政府から要求されただけの穀物量を與へられた時期迄に

納入すべき責任を自發的に決議せしめられた。自ら納入すべき能力のない多數の貧農參加の下に會議されたのであるから、決議は簡單に片づけられたのは云ふ迄もない。更に一九二九年七月には「國家計劃遂行への協力に於ける出先官憲の權限擴張に關する法律」と云ふものが發布せられ、所謂農民の「自由意志」による穀物賦課の引受けがなされた以上、これを所定の期日迄に遂行せざるすべての農民に對して、賦課量の五倍迄の罰金を課し、又必要に應じ全財産を競賣に附するの權限が出先官憲に附與された。而して賦課に對する如何なる反對も刑事の追訴をうけることとなつた。

この方法はボルシエヴィキ式にぐんぐん遂行された爲めに、一九二九年と云ふ年は凶作なりしにも不拘、七月から十二月迄の半歲の間に、一千三百九十萬種は完全に徵收せられ、富裕な農民達はこの徵收によつて意識的に滅亡せしめられた。外國出身のロシアに於ける農民達が、その故國に向つて聲の限り助けを求めたのはその時である。けれども故國として結局如何ともすることが出來ず、ただドイツのメノニット教徒（新教の一派）の一部がロシアからの逃亡に成功したに過ぎなかつた。

この強制徵收が如何に激しく農民經濟を破壊せしかは想像に餘りあるところである。然しながら政府は毫もそれを意としなかつた。蓋し政府はそれによつて計劃以上により速かなテムボで個人農を國營乃至共營農場に追ひこみ得ると考へたからである。

ブラゾダから發行される『モスコウ獨語中央新聞』一九二九年十一月十三日號に「集團經營の中に於いては富農のための餘地はない。富農は死刑を宣告されてゐるのだ」とある。

さて富農が斯様な運命に逢つたのを見ると、中農としては自分達の經濟的向上が如何に危険なものであるかを知つたし、小農としては直接間接に富農に依存してゐたのであるから個人農業は全面的に萎縮の餘儀なきに立到つた。兩者共に今では集團經營に流れ込む以外に道はなかつたのである。又政府としても農業生産力の極度の萎縮から脱するためには、一層のこと集團化計劃を全面的に遂行して仕舞ふと云ふ考へになつた。然しながら中小農が自發的に集團經營に加入し來たるものとは、期待することが出来なかつた。これ等は從來、共同組合員の標札をかかげることによつて、單に國家から資金の融通をうけ、重い課税を免かれるための手段と考へてゐるのが例であつたからである。

一九二九年秋、政府は農民「全部の集團化」を目標とし、一村落若しくは若干の隣村を加へて集團經營を結成することとなつた。而して一九三〇年一月六日、共產黨中央委員會の決議によつて、ウクライナの草原地方、北コーカサス及びヴォルガ下流の農民の大多數はおそくとも同年春迄に集團化せらるべし、其の他の地方の農民は翌一九三一年の春迄に集團化せらるべしと決定された。黨は斯くの如き、南部地方の急速な集團化によつて、急迫せる穀物問題、即ち國內市場への充分なる

穀物供給のみならず、大規模の輸出を可能ならしむべき穀物量を收穫し得べしと期待したのである。而してこの急速な集團化遂行に採用せられた手段は、階級闘争とテロとであつた。この兩者は周知の如く、共産政權の常套手段である。一九二九年十二月二十七日の「政府はクラークの搾取を制限する政策から愈々その階級としての絶滅政策に移る」と云ふスターリンの聲明は、かかる傾向の表れであらう。

ここで注意を要するのは所謂「クラーク」なるものの意義である。元來クラークとは露西亞語で<sup>ゲンコツ</sup>拳骨を意味する。その隣人を搾ると云ふ意味から、古來田舎地方で富裕農のことを呼ぶにこの語を以てしたのである。而し富裕の程度は勿論明確ではなかつた。クラークと中農との區別が如何に曖昧なものであるかは、クラークの定義に特別委員會を必要としたことによつても窺ひ知られよう。ラーリンは一九二七年十一月九日、ブラヴダ第二五五號所載の一論文の中で、左記の表徴の一つを具備するものを以てクラークを定義してゐる。

- 一、二人の繼續的労働者を使用してゐること、その内一人は半ケ年以内でも構はぬ。
- 二、三頭以上の役畜を使用してゐること(コサック地方では四頭以上)。
- 三、普通以上に大なる播種地——夫々地方により一〇、一二、一四、一六、デシャチン以上。

四、一個の製造工場を所有してゐること——唯一人の労働者しか使用されてゐなくても構はぬ。  
五、商事經營——全然他人の労働力を用ひなくても構はぬ。

六、單獨又は少數の人達と共同に、高價で複雑な農業機械を使用してゐるか、乃至は比較的澤山の高價な農具を所有してゐること。

このラーリンの記す所のは、一九二七年に於けるクラークの定義である。一九二九年の夏から秋にかけての穀物カンパを経て後に残つた農民と云へば、云ふ迄もなく遙かに貧しいものであつた。それ故一九三〇年春のクラーク退治に於いては、收穫時に一人の労働者を賃雇ひしても、農具を隣家に賃貸しても、否一般に農具に不足しないと云ふだけでもクラークと認められた。つまり平素官憲の感情を害してゐる者や、集團經營に反對する者などは、中農でもクラークと認められた譯である。

### 祕密廻章と富農剝滅の實相

ソ聯當局は全農民層の暴動化をおそれ、電光石火的に一撃の下にクラーク退治を遂行しようとして決意し、一九三〇年一月六日、共産黨の祕密廻章によつてその命令が發せられた。然るに「全集團

經營化の領域に於ける農業の社會主義的改革の確保並びにクラーク層剝滅のための手段に就いて」と云ふ長たらしい題目でこの規定が公にされたのは、やつと二月一日のことである。而も公表の二月一日頃には既にクラーク退治が完全に遂行せられてゐたのである。ある命令の實行後に、その命令の布告が發表されると云ふことはソヴェート・ロシアでは珍らしい事ではない。尤も右の布告では地方官憲にクラーク退治を許容すると云ふ形式になつてゐるので、命令する形式にはなつてゐない。このことは、後に述べるスターリンの聲明と關聯して留意せらるべき點である。

實際に行はれたクラーク退治の遂行は、地方官憲の手にも負へなかつた程、慘忍殺伐な方法でもつた。日頃農民と接觸して生活してゐる地方官憲としては、鼻垂れ小僧の頃から可愛がられて來た老農達に對して、如何に政府の命令とは云へ餘り非人情的なことは、實行するに忍びなかつた。そこで共產黨政府は止むなく、二萬五千人の若い黨員をわざわざ都市から農村に派遣し、クラーク退治及び集團化の運動に就いて出先の官憲達を指導せしめたのである。

今クラーク退治の實相を略述すれば、先づ出先の役人達は中央から派遣された共產黨員の指導の下に、祕密にクラークと認めらるべき家族の調査目録を作製した。それから共產青年團と、時には貧農の應援を得て、それぞれ武器を携帯して眞夜中に集合する。そして目指す家庭を襲撃し、家財

道具は遠慮なく掠奪し、生産手段はコルホーズ用として差押さへた。襲撃された家族は全部、小兒、妊婦、病人に至るまで無慈悲に叩き出されて、住みなれた家と農場を後にポロを纏つて雪の街道へ、また屢々酷寒の原野へ追ひやられるのであつた。而も此等の人々に宿を貸すことは嚴禁されてゐた。そして家長達の多くは捕縛されて獄につながれたのである。

出先きの官憲に對しては豫め黨から、クラークを三種に區別すべきことが命ぜられてゐた。即ち先づ祕密の反革命者と認定さるべき者は、中央の指令を待つことなく即座に銃殺すべしと云ふのである。役人達は事實到る所でこの與へられた権利を行使したのである。第二にクラークの大部分の家族は、ヨーロッパ及びシベリヤの北部森林地帯に流謫し、G・P・U支隊の監視の下に木材の伐採運搬の強制労働に服さしむべしと云ふのである。これ等の流謫者を送るために貨物車が用ひられたがそれさへも充分に準備され得ず、積みこまれた人々は殆んど一度も坐ることが出来なかつた。火の氣はなく、衣服も食物も不充分なので、遠路の中に子供の大部分は飢と寒さと疲勞のために仆れた。生残つた人々も北部森林地帯の寒氣と濕氣に凄い苦痛を嘗めねばならなかつた。最後に危険の程度も最も少ないと認められた人達は、その故里に残留することは許されたけれども、ただにコルホーズに加入することが禁ぜられたばかりではなく、工場で働くことすらも禁ぜられた。だから

殘留したものの中でも飢寒に仆れた者は尠くない。子供達は浮浪者の群に投じて町から町へと流浪した。處分された者の中、自殺したり妻子の生命を絶つた者も尠くない。かかる慘酷な處置が極寒の時期に施行せられたことを忘れてはならない。一月二月のロシアの寒さは想ふだに身震ひするものである。一九三〇年(昭和五年)の春シベリヤ鐵道を通過した人を知る者は聞け。無数の飢えた子供が群をなして汽車の窓に食物を乞ひ、發車の合圖が鳴つてもしがみついて離れなかつた事實を目のあたり見てゐる筈である。

ソ聯の政府は、何時もその慘酷な手段の犠牲として仆れた者の數を計算する習慣を有たない。けれども大約の計算では、一九二九——三〇年冬にかけて、數十萬の家族がクラークとして處分されたこととは明かである。家族の數を加算すれば、數百萬に上るであらうとは、世界のロシア研究の權威者達の間に一致する觀察である。ロシア農業の専門家なるアウハーゲン博士は、北部森林地帯に送置された者の數だけで五十萬人と計算してゐる。ある政策を貫くための國民の虐殺！ 屁理窟を離れて靜かに經濟政策本來の目的を思ふて見よ。何人と雖も右の事實を前にして人としての公憤を覺えざるを得ないであらう。

電光石火の早業で遂行したクラーク退治の結果として政府は二つの目的を達した。餘裕ある農民

を剿滅するといふことと、集團化を豫想以上速かに遂行し得たことである。集團化に反對するものは「クラーク」又は「クラークの友」として取扱はれねばならなかつたため、農民の集團經營への參加が急速に遂行されたのである。一九三〇年一月一日に集團化された戸數は五百萬であつたのに、同年三月一日、即ち僅か二ヶ月の後には、新たに九百五十萬の農家が集團經營に同意した。かくして一九三〇年の春既に全農家の半數以上は集團化されるに到つた。出先の官憲は一〇〇%集團化を競つた。従つて草原地方のみならず中部及び北部に於いても驚くべき速度で集團化が進捗した。ソヴェートの全新聞及びそれに追従する世界の左翼新聞は、雀躍して集團化のテムポの速さを喜んだものである。

### 青天の霹靂——農民の一揆とスターリンの退却

然る所に青天の霹靂が起つた。と云ふのは三月二日の重なる新聞紙上にスターリンの有名な「成功の前の眩暈」なる論文があらはれ、強制的集團化は黨の命令ではなく、出先官憲及び同志の重大な誤謬に基くことが鋭く非難された。次いで三月十五日、コルホーズからの自由脱退承認に關する黨中央委員會の決定が公にされた。

何故にかかる聲明や法令が現れるに至つたかは説明する迄もない。農民の不滿が勃發して、共產黨員の虐殺とその住宅への放火が相次いで起つたからである。暴動の火蓋は、子供に與ふべき乳を失つた（集團化を強制された農民は家畜を撲殺するか無償で沒收されたから）コーカサスの農婦の一群によつて切られた。黙々として働いてゐた農民が立上つた。暴動はコーカサスからウクライナ、カザクスタンへと、見る見る蔓延して行つた。勿論暴動鎮壓のために赤軍をさし向けたけれども、兵士は發砲を拒んだ。當時なほ赤軍の大部分は農民の子弟よりなり、彼等は父兄からの便りによつて、暴動發生の眞因を熟知してゐたからである。時局は政府の一時的退却によつて收拾する以外に途がなかつたのである。

スターリンの聲明と黨中央委員會の決議によつて暴動は鎮靜した。けれども引續いて起つた現象は農民の集團農場からの、大量的脱退運動である。政府はこの脱退の動きを阻止せんがために、一九三〇年四月五日法令を布告して、コルホーズに大きな金額の融通と補助をなすべきことを決定した。然しながらそれも大した効果はなく、三月十五日から五月一日に到る僅々一ヶ月半の間に、コルホーズを脱退した農民の數は九百萬戸に及んだ。後に猶五百萬戸の農民がコルホーズに残留したけれども、それらの残留農が自由意志で留つたと解するならば誤りである。クラーク退治はまだ終

局せられなかつたから、中農達はコルホーズを出ればクラーク退治の犠牲となるおそれが多分にあつた。また残留組のうちには南部草原地方の者が多かつたのであるが、この草原地方では三月中旬になれば、既に蒔付けが終つてゐる。コルホーズ脱退承認の法令は三月十五日(スターリンの聲明後二週間も経つて)に至つて公にされた。斯くて草原地方に於いては、その年は法令發布の前にいやでも共同蒔付けがなされなければならなかつたため、集團からの脱退を不可能とされたのである。いづれにせよ一九三〇年の集團化への強行は、強行——急激な増加——暴動——一時的な政府の退却——農民の脱退といふ経過を経て、結局不成功に終つたのである。

### 集團化の再強行——農民の涙

共産社會の實現といふ終局的目的を放棄せざる以上、政策の變更もすべて一時的戰術的意義を有つに過ぎない。一九三〇年春の集團經營脱退の承認も、ほんの農民の敵意を鎮靜するための一時的手段にすぎなかつた。それ故同一九三〇年秋になるや、再び強制的集團化が決意され、翌春迄に全農家の半數、南部草原地方ではなるべく全部を集團化すべしと云ふ命令が發せられた。而して一九三一年五月の第六回ソ聯會議で、人民委員會議長モロトフは明白にも次の如く述べた。

「コルホーズに反對し、又はコルホーズ支持の運動に反對することは、ソヴェートの政權に反對するクラークを支持することを意味する。……本年はすべての中農及び貧農の前にコルホーズに對する態度の問題が提起された。残るは只選擇あるのみである。」

而してソ聯當局の反對者と認められ、クラークの味方と見られた場合、如何なる運命に陥るかはすべての農民の熟知する所であつた。一九三〇——三一年の冬に於いては、農民の抵抗は總て打ち破られた。クラークと稱せられるものの家族を積んだ、柵に圍はれた列車が北部森林地方に向けて走つた。而して一九三一年七月一日には全農家の半分を超へ、五五%が集團化せられたと報告されてゐる。人の善いので世界に名高いロシア農民が、この強制的な集團化に如何に泣いたことであらう。集團經營に這入りたくない。併し這入らねばどんな目に遭ふかも知れない。その邊の事情を知るために、ロシア農民の報告文學の一節を引用して見よう。農民の不滿はただ斯うした文學の形をとつて漏れるのである。

X

X

X

コンドラートは牡牛を見つめて、突然咽喉に込み上げて來る鋭い塊と、眼頭に熱いものを感じた。彼は泣いた。そしてはふり落ちた涙のために、輕くなつた様な氣持で家畜置場を出た。夜の

残りを寝ないで煙草をふかした。「共營農場はどんな風だらう。すべての者が、儂が理解したと同じ様に感じもし、理解もするだらうか。子供等と一緒に家の土間で育つた家畜を連れて共同の管理に委ねることがどんなに可哀さうで、併しやつぱり連れて行かなくちやならぬと云ふことを！そして利己心——自分の財産に對するこの愛情——を壓潰さなくてはならない。それをのさばらしてはならない！」

駟を立ててゐる妻の隣りに横たはつて、闇に目盲いた眼で暗がりの黒い穴をヂツと見つめながらコンドラートはこんなことを考へたのだ。

「しかして仔羊や仔山羊は何處へ置くのか。彼等には濇い小舎が必要だし、世話が容易なことではない。それに彼等をどうして選り分けるか。どれもこれも同じぢやないか。その親だつても人間には區別出來ないだらう。が牡牛は——飼糧をどうして運んで行くか、どんなに無駄なことになるだらう。」

夜明前に彼は眠りに落ちた。そして眠りは重苦しかつた。彼は容易くは共營農場への加入を決心することが出來なかつた。朝彼は食事をしてから、長い間かかつて日焼けのために筋のついてゐる額を悩まして皺寄せながら申込書を書いた。

「グレミヤチェンスカヤ共産黨細胞の同志マカール・ナグリノフ宛

申 込 書

私儀、コンドラート・クリストフォロフ・マイダンニコフ中農は私の妻及び子供等と共に、また財産及び其の他一切の家畜と共に、私を共營農場に参加せしめられんことを乞ふ。私を新生活に入れられんことを乞ふ。何となれば私は全然それに同意するが故なり。

カー・マイダンニコフ

「這入んなすつたんですか？」と妻が訊いた。

「這入つた。」

「家畜を連れて行くのですか？」

「これから連れて行く。黙れ！ 何だつてそんな聲を出すのだ。馬鹿女！ あれ程儂が云ふて聞かせたでねえか。それなのに、お前はまだ承知しねえのか。」

「わたしはね、コンドラेशヤ、牡牛だけは可哀さうだよ。わたしは承知しました。唯、あんなにセツねえもんだで」と彼女は笑つて、前掛で涙を拭きながら云つた。

X

X

X

農民がその妻子と家畜と共にするまどかな生活、その平和を脅かすものは誰か。共産黨！ 何が共産黨をしてかかる舉に出でしむるか？ 美しき計劃經濟實現の幻想！ 凡そ自然の流れに逆らひ、歴史と傳統を否定して、抽象的機械的に構成された彼岸の理想を追ふものがよき意志の名に於いて、過渡期の犠牲の名に於いて、犯すに至る定道がこれだ。佛蘭西革命の理想とその直後の恐怖政治を想起せよ。我が日本の發展は斷じてこの様なものであつてはならない。上下心を一にし、億兆心を一にして世々その美をなす我國體の下に於ては、一部人士の頭に宿された思ひつきの改造案を、テロで強行する西洋流の強壓的行動は斷じて許さるべきではなす。

## 集團化運動と農業生産力

上來、述べ來たつた如く、激しいテロによつて遂行された農業革命、即ち集團化の結果、農業生産の成績はどれだけ効果を齎し得たであらうか。一九三〇年度に於いて蒔付面積は減退した。同年夏の第十六回黨大會では、スターリンが蒔付面積は増加したと演説してゐるけれども、それが誤りであつたことは、一九三二年に公にされた官廳の統計によつて明かにされた。蒔付面積が減少したばかりでなく、蒔付の時期が遅延した。蒔付時期の遅延と云ふ事實は、農民の努力が弛緩したこ

とを示す以外の何物でもない。然るに一九三〇年は珍らしい天候に恵まれた。天候の恵みが、努力の減退や時付面積の減少を補ふて餘りあつた。加ふるに一九三〇年の秋には、集團化がある程度迄恢復されて居り、その集團經營の幹部として共產黨の腹心が這入つてゐたので穀物の買付けには非常に便利であつた。共產治下に於ける未曾有の穀物量が輸出せられてロシアの「穀物ダンピング」として傳へられたのはこの時である。尤もそれは工業化の資金を得んがために、安くとも賣らざるを得なかつたので、普通に云ふ所の市場開拓の意味での「投賣」ではなかつた。また穀物輸出量は六百萬トンであつて、共產治下では未曾有のことではあるが、戦前の輸出量に比するならば、その平均の半分を少し超へたに過ぎないのであるから、敢へて驚くには當らない。また家畜方面では實に破局状態に陥つてゐる。と云ふのは、農民が共營農場に加入する場合、最初は持參した農具や家畜に對して特別の評價も利子も與へられなかつた結果、農民は家畜を次々に撲殺したからである。撲殺は嚴重に禁止せられたけれども、ソヴェートの統計の示す所では、一九三〇年春は前年の春との比較に於いて、馬の數八・五%、牛の數二二・九%、羊及び山羊の數三一・九%、豚は四一・六%だけの減少を示してゐる。その後政府がこの方面に努力を拂つたけれども、今日に至つてもなほ五ヶ年計劃樹立當時の數量に届かぬこと遙かに遠い。かかる家畜の減少は必然に食料難と營養不良

を惹起せずにはおかなかつた。ロシア人にとつて肉の缺乏は、日本の様な肉食の少ない國に於けるとは比較にならぬ程重大なことである。この家畜の減少と云ふ事は、五ヶ年計劃に於ける集團化政策の齎した惡結果のうち、國民經濟上最も重大なものの一つであらう。

越えて一九三一年の收穫は不作のために、蒔付面積の増大にも不拘、收穫量は減少を示した。然しながら政府の徵收は收穫高の減少を無視して、前年よりも増加したのである。農業集團化の結果として徵收が容易くなつたからである。徵收が農民の實狀を無視したと云ふ好例は、翌年必要な種子までも徵收して、蒔付時期になつて返さなければならぬ様な地方のあつた事である。既に一九三一年九月、ブルツクス教授はロシア農業の集團化強行は、種子をも徵收する無態を演ずるであらうと豫言してゐたが、その言葉通りとなつた譯である。收穫が減退しても、政府の徵收は増大すると云ふ様な状態の下で、農民は如何なる態度をとつたであらうか。農民は今までの強制で、最早暴動に出づる氣力を失つてゐた。そこで彼等に殘された方法は所謂サボタージュであつた。

### 最後年度に於ける決定的失敗——餓死する者再び五百萬

一九三二年、即ち五ヶ年計劃の最終年度が來たが農民はサボタージュに移つた。天候が不良でな

かつたことは、スターリンも時の農務人民委員のヤコウレフもこれを認めてゐる。にも不拘、蔘付の時期が遅れた。收穫の取入れが充分に行はれなかつたし、従つて收穫量は甚しく低減した。この失敗に就いてはスターリンも認めて居る。ただ彼は失敗の原因をば農民の消極的反抗に認めずして、地方の役人がクラークの取扱ひ方を心得なかつたためだとしてゐるが、さう云はねばならぬ所にもスターリンの苦惱を發見することが出来るであらう。家畜の減少に加ふるに穀物の減收は云ふ迄もなく食料難を導いた。この食料難が如何に激しかつたかは、各國の大使館員さへも食料に困つた事實を考へるがよい。一九三二年から翌三三年にかけて、約五百萬の餓死者があつたとの報道は、單なる風聞ではない。各地には食料難に基く暴動が起つてゐる。更に注意すべきは夥しい國外への逃亡者である。G・P・U<sup>グレイ・ピー・ウー</sup>の嚴重な監視の目を潜つて、隣接せる國々へ逃亡するのである。發見された者は勿論銃殺を免れないが、漸くにして逃げ遂せた者も尠くない。現に滿洲や南樺太への逃亡者はかなりの數に上つてゐる。北海道までも逃げて來た者がある。樺太や北海道の分は見つけ次第追歸して居るのだが、手を合せて拜むのである。暗夜氷の上を腹匍ひで渡り來るもの、嵐に乘じ小舟で逃げるもの、滿洲で特に多いのは支那人の密輸の道に沿ふて逃亡し來たる者である。何故に斯くも多數の逃亡者があらはれるのであらうか。云ふ迄もなく餓死と斷壓の苦痛を逃れんためである。

五ヶ年計劃の成功をうたひ、勞働者農民の生活の向上（しかくソ聯當局は報告して居る）を信ずる者は、如何にしてこの餓死や逃亡の事實を説明せんとするか。靜に考へて見なければならぬ。

周知の如く、貧乏と彈壓と云ふ點にかけては、ロシアの農民は帝政の昔から相當訓練を経た國民である。にも拘らず會つて斯くの如き多數の國外逃亡者を出したことがないのである。

祖先の國、育ての國を後に、言葉も風習も異なる異國へ逃亡するといふことは、なまかな貧乏や彈壓では起り得る現象ではない。我がブラジル行きの移民の心理に聞け。彼等にあつては親子兄妹揃ふて行くのである。補助金を貰ひ、行く先では耕作すべき土地が準備されて出發するのである。

大和民族の海外發展を意味するものとして、萬歲々々の聲に送られ、また萬歲々々の聲で迎へられる。港々では領事が迎へて呉れるし、今では官吏までが同船で目的地まで行つて呉れるのである。

かかる状態であつてさへも、彼等が日本の土地を離れる時、もうこれで祖國の見納めかと思へば、思はずも涙するのが常だと聞く。この人情に至つてはロシア人と雖も變りのあらう筈はない。住み馴れた故國を捨て、妻子兄妹ともバラバラとなつて G・P・U の目をくぐり、命を賭して迄見知らぬ國外に亡命して行くロシア人こそ、世にも哀れな存在ではないか。斯様な現象はロシアがその宣傳する如く、五ヶ年計劃に大成功を納めて國民の住み良き土地となつてゐるならば、斷じて見るこ

との出来ない現象である。何人もこの結論に異論をさしはさむ事が出来ないであらう。

### 窮餘の策——單一旅券制度と連座の刑

食料難はウクライナ、下部ヴォルガ、北コーカサスを中心に各地へ擴大し全國的に餓死者を出すに至つた。その中でもソ聯當局にとつて、政治的見地から最も考慮すべきは都市に於ける食料難である。都市の食料難は都市の住民を暴動に導く虞れがあり、都市に暴動が勃發しては政權の維持が困難となる。そこで一九三二年十二月、單一旅券制度と云ふものが發布せられた。單一旅券制度とは、大都市の住民で一定の職に従事する者のみに旅券を附與し、旅券を持たぬものに居住を許さぬと云ふ規定である。そこで一定の職のない者は大都市から地方へと追ひ出された。小都市や田舎の住民には旅券を與へなかつたから、都市へ出ることは出来ない。職なくして地方へ追はれた者の運命は田舎で死ぬと云ふ譯である。この單一旅券制度が食料難に發した窮餘の策であつたことを理解するためには、共産黨自身が嘗つて帝政時代に行はれてゐたこの制度を撤廢したことがあり、その際かかる制度の廢止を以て共産黨の輝しい成功であるとして天下に誇つた事實を想起すれば充分であらう。

食料難と彈壓による國外逃亡者の増大に關聯して、ソ聯當局のつた第二の窮餘策は「連座規定」なるものである。國外逃亡者には農民や勞働者が多いけれども、なほ兵士の逃亡も多いのである。兵士のみならず將校の逃亡も尠くないので、滿洲國へソ聯の飛行將校が逃亡して來た事實は記憶に明かな所であらう。斯うした國外逃亡者の外に、國外駐在の官吏で歸國命令に應じない者もかなりある。斯くの如きものの防止に就いては並々の處罰では最早充分の効果を收めることが出來ない。そこで去る一九三四年六月九日のソヴェート中央委員會では「賣國的行爲即ち軍事關係及び國家機密の漏洩、敵方への裏切、外國への逃亡、飛行機による逃亡者を銃殺に處することとし、賣國者が軍人の場合、その家族に對してはこれを幫助するとか、これを知りながら官憲に報告せざる場合には、五年乃至十年の懲役、財産の沒收を行ひ、犯行には全然關係なく何等聞知することのない場合でもその家族は五年の僻地追放、選舉權の剝奪」と云ふ驚くべき規定を設けたのである。これが連座規定なるものであるが、勿論これは上來述べ來たつた政策失敗に基く窮餘の策であつて、共產主義の理論からは許し難いことであらう。従つて若しも斯様な法律が日本や獨逸で發布せられたと假定すれば、ソ聯にとつて絶好の攻撃材料になつたであらうことは、想像に難からぬ所である（昭和九年六月十日、『東京朝日』朝刊參照）。

吾々は今迄具體的な事實に即して、共產治下に於けるロシア農民の實生活の如何に悲惨を極むるかを知り、同時にかかる悲惨な生活の原因が、ロシア農民の國民性にあるのではなく、國土の狹隘、地味の瘠薄に存するのでもなく、天災地變に基くものでもなくして、共產社會の幻想に導かれて、歴史的な自然經濟組織の有機性を破壊せし所に存することを斷じ得るであらう。

最近の新聞紙の報道する所によれば、ソ聯當局は昨日まで「ブルジョア帝國主義の道具」と呼び「香具師の集會」と名附けて敵視して來た國際聯盟に加入するに至つた。また資本主義國の代表視して來た米國に頭を下げて通商を乞ふに至つた。ソ聯の追従者達はリトヴィノフ外交の成功を語るけれども通商條約を結び、聯盟に加入することが何故に外交の成功であらうか。若し左様なことを成功と云ひ得るなら、世界の如何なる國の外交もすべて成功して居ることになるであらう。云ふ迄もなく、彼等が世界の所謂資本主義諸國に追従し出したのは、一つには日本と獨逸に對する激しい恐怖心と、一つには資本主義外圍から獨立するだけの基礎を第一次五ヶ年計劃によつて達成したと云ふ彼等の揚言の虚構なる事とを暴露せるものに外ならない（昭和九・一〇・一七）。

## 第四 自然經濟組織と計劃經濟制度

私が常に念願する所は、世の學者をはじめ官吏、政治家、司法官など、指導的立場にある人達が、社會主義經濟や統制經濟はよく所期の目的を達成し得るや否やに就て検討を忘れず、更に明治維新と共に展開されし經濟組織の機能を再反省して、正しく其の力を評價し、革新すべきものと革新すべからざるものとを明確に識別せられんことである。以下は私の見解の素描であるが、讀者はそれが世の流行思想と著しく異なることを發見して驚かれるかも知れなう。

### 一 自然經濟組織

周知の如く、原則として人民の自由なる選擇による生産消費の計劃活動を認め、市場の機能を通して總資源の自然的配分 $\parallel$ 生産を遂行することを本旨とする所のこれまでの國民經濟の組織は、歐羅巴諸國に於ては十八世紀から十九世紀にかけて、我國では明治維新と共に、意識的に恢復確立さ

れたもの、而して歐羅巴に於ても、我國に於てもそれ以前の數千年分にもまさる程の驚異的な經濟の進歩を、僅々百年近くの短日月の間に、その下で可能ならしめた所の經濟の組織である。曾てデューツェル教授が其の名著『技術的進歩と經濟の自由』の中で述べて居る如くに、近世の東洋諸民族が西歐諸國民に比して經濟的に著しく立遅れたる理由は何ぞや、また西歐諸國にあつても十八世紀の後半に至りて急坂を攀るが如き發展を見得たる理由如何。細かくいへば先づ英國に於て次でアルプスを境とする諸地方に於て、いち速く經濟の發展せし事實は如何に説明せらるべきか。世界文明史の重大なるこれ等一聯の事實は近世の中央集權的國家による自由なる經濟組織の意識的確保を考へずしては到底理解し難いことであらう。

かくの如き經濟組織も、今や「資本主義經濟組織」なる名稱の下に、廣く其の「打倒」が要請せられて居るのであるが、資本主義なる稱呼は、其の由來をたづぬれば、社會主義者が政治的スローガンとして造り上げ且つ普及し來れるものである。また此の組織の「行詰、缺陷、弊害」等の表現を以て、今日廣く反復せられる所のもの、例へば「無政府的生産」、「搾取」、「恐慌」等々の議論も殆んどすべてが社會主義者の見解をそのまま、意識的無意識的に繼承せるものである。今や資本主義經濟とさへ聞けば、人は一般に何等か思むべきあるものと考へ、其の名稱や批難の由來を考へる

こともなく、其の批難の適否を深く顧みようもしない。マルクス社會主義の流行して問のない今日の世界の思想界は、「資本主義經濟打倒」の聲を公理の如く受取つて居る様である。「反資本主義」の雰圍氣はまさに朝野に充つと云ふも過言ではあるまい。

さて、右の經濟組織に對して、初期の社會主義者が道徳的に反對したことは周知のことであるが、所謂「科學的社會主義」(マルクシズム)の出現によつて、道義的な反對は、歴史の必然の論理による「行詰」又は「没落」の理論に代へられるに至つた。現下の我國には、マルクス主義者も多いが初期の社會主義者に類する者が少くない。また國家主義者の一部にも國體原理に反するものとして、道義的・原理的に「資本主義經濟の打倒」を叫ぶものがある。しかし國家主義者の反資本主義は深き根據あつての主張とは思はれない。恐らくは社會主義の無意識的感染か若しくはナチ獨逸の模倣とより思はれない。明治以降の輝しき我國民經濟の發展と、それを一の條件とする隆々たる國威發揚の事實とに直面する時に、國體論者の原理的な批難の鋭鋒は幾分鈍らざるを得ないのではないかと思ふ。何となれば苟くも國體原理に反する組織の下に未曾有の國力發展をなし得たといふ事實を承認することは、國體に對する重大なる侮蔑となるからである。

かくして今日「資本主義經濟」を批難する人々の多くは、原理的批難をすてて、一應は其の組織

が明治以降數十年に亙りて果したる輝しき功績を是認しつつ、ただそれが其の使命を果し終へた今日に至りて、必然に行詰に逢着し、弊害をあらはすに至つたのだと論ずるを常とする。此の種の論者は、或は公式的に「辨證的發展」を口にし、或は資本組成の高度化によるカルテル、トラスト成立の必然を論じて、自由競争から獨占資本主義への必然的推移を云爲するのである。

兎もあれ、これまでの經濟組織が歴史的發展の必然の結果として行詰に逢着し、根本的に新たな經濟組織に推移しなければならぬとする論者は、一般に「永久に變らぬ組織」の存在を承認することなく、すべての組織は成長發展崩壊死滅の過程を免れずとの公式を信ずるものである。而して此の點に於て彼等の組織觀は、論者が意識すると否とに拘らず、我が憲法御制定の趣旨にも明に窺はれる如き「永遠ニ循環」すべき組織をも認むるものと、根本的に相容れないといふことを注意する必要があるが、この點は暫く措くとしよう。

カルテル、トラストの成立を以て「獨占時代」を云爲し、市場の自働調節作用の必然的死滅を意味するものと解する論者の論據は、直接間接に、或はシュマーレンバッハに、或は社會民主主義者の「組織資本主義」論に據所を求むるのであるが、其の論據は科學的に似て非なるものである。其の誤謬を指摘せんに、

第一、資本組成の高度化がおのづからカルテルなどの成立を容易ならしむる傾向はこれを認めねばならぬが、しかし自然發生のカルテル等の支配は、競争を否定する獨占ではなくて、せいぜい競争の形態變化にすぎない。論者の多くは競争の形態變化を以て、競争其のものゝの否定と混同して居るのである。而して第二に論者の大部分は自然發生的のカルテルと、直接國家の強制權力によりて支持せられるカルテルとの間の機能の本質的な差異を見落して居る。即ち高度の資本組成を有する産業部門に於て、競争は固定費用の回收を不可能ならしむる。これがカルテルの結成される主たる理由であるが、それはもともと競争を地盤として生ずるものであり、従つて永遠に地盤たる競争を排棄する力を持つものではない。實はそれ故にこそカルテルの讚美者達も、結局國家權力に訴へる強制カルテルを主張せざるを得なくなるのである。自然發生のカルテルが競争を排棄する力をもつものならば、強制カルテルへの要求は其の理由を失ふであらう。自然發生のカルテルが競争を排棄し得ないといふ點にのみ關していへば、社會民主主義者の「組織された資本主義」論に對して行はれた第三インター系の批判がより正しいと云はねばならぬ。

か様に自然に生滅するカルテルは、競争を排棄することが出來ず、従つてその下に於て、市場に於ける一般的價格形成を媒介としての總資源の經濟的配分は持續されて行く。然るにカルテルは、

強制カルテル法の發動により國家の權力を背景としてアウトサイダーを排除して立つとき、競争を、從つて又、需給の變化に應ずる市場の價格形成を不可能ならしめる。故に強制カルテル下の經濟は最早、從來の如き市場の自然調節の行はれる經濟とは見難く、やがて市場の自然的自働調節に代りて、中央官廳の計劃が決定的役割を演ずるに至るのである。すなはち國家の權力を背景として立つや、カルテルの獨占利潤は保證され得る。されば強制カルテルの下に於ける獨占の弊害は、在來の自然經濟の弊害ではなくて、國家がカルテルを支持したことの弊害である。そは畢竟自由なる經濟を排撃した政策の結果と見らるべく、責任は排撃された從來の經濟組織の側にあるのではなくて、其れに反對した側で負はねばならぬであらう。

さきにも述べた如く、自由の經濟組織に於ては、私的分有制度が認められ、生産消費の直接の決定が、原則として人民各自の自由意思に委ねられるのである。けれどもこのことから誤解してならぬことは、自由の經濟は、國家を「必要惡」と見たり、國家官廳の統制活動に對する原理的排斥を必然ならしむるものと速断してはならぬことである。所謂英國正統派に屬する經濟學者のうち左様な主張を持つものの存在したのは事實であるが、素より行きすぎた考といふべく、在來の、殊に我國の在來の經濟組織の本質とは關りなきものである。自由の市場經濟組織の場合にありても國家

の官廳は、司法、行政、軍事、教育等の方面に於て國民の指導統制に當るのみならず、經濟方面に於ても實に廣汎なる統制指導を行はねばならぬ。ただそれが社會主義や統制經濟と異るところは、國民の生活向の財貨に就て「何をどれだけ造るべきか、また如何なる價格で取引すべきか」が、換言すれば「總資源の配分」が、直接中央官廳の計劃決定によることなく、市場價格による經濟計算を媒介として自働的・無意識的に遂行されて來たといふだけのことである。

自由の經濟組織の下では、國家官廳の活動が廣義の治安維持に限定されるといふ理由によつて、社會主義者ラサールは、これを「夜番國家」と呼んだ。けれども國防、司法、警察教育等の仕事は統治の重要な任務であつて夜番といふが如き言葉を以て惡評すべき筋合のものではない。それ等の仕事はただに重要であるのみならず、如何に努力するも過ぎることの無い程に多いのである。

いふまでもなく、我國に於ては一切は陛下の御統治に屬するのであり、經濟生活も亦素より其の外にあるのではない。ただ官民の間には扶翼者として分擔分業があり、官吏そのものの中にも、軍事、行政、司法等翼賛の分野は分れて居るのである。天皇統治の外に横るといふ意味に於ける市民的自由の經濟などあり得ないと同様に、天皇の大御心によりて限定されぬといふ様な官吏の自由なる統制活動も許されない。我國に於ては、自由といひ統制といふも一に大御心に従つてのことであ

る。而して今日統治についての御心を窺ふべき最大のよりどころとすべきは、云ふまでもなく、「皇祖皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述」遊ばされ、子孫臣民が「永遠ニ從順ノ義務ヲ負フ」べきものとして、公に下されたる大日本帝國憲法であらう。而して憲法は官民の間に、また官廳の間に翼賛の分野を定め給ふと拜するはあやまりであらうか。官民のすべての活動はただ天皇に於て一元に歸一するのであり、それ以外の所で一元に歸一する様であつては、それこそ征夷大將軍を再生せしむるものといふべく、恐るべき國體背反といはねばならぬであらう。

私の拜する所では、憲法は生産手段の私的分有制を認め、臣民の生産活動の自由を認めて、其上での官廳の統整活動を命じて居られるものと解する。従つて、私的分有制を無効に歸し、臣民の生産計劃の自由を原則的に否認するに到るが如き中央官廳による生産計劃の一元化は、憲法御制定の御趣旨にも沿はざるものと信ぜざるを得ないが、なほそれは經濟學の立場から見ても次の如き批判が成立すると考へる。

## 二 計劃經濟制度

國家の中央官廳に於て樹立せる一元的・意識的・計劃に基いて一國の生産を遂行することが計劃經濟、又は統制經濟の理念とされて居る。而して計劃經濟又は統制經濟のうちには、少くとも二つの主なる類型を分つことが出来るであらう。すなはち一つはすべての、少くとも重要な生産手段の私的分有制を排棄し、これを國有として、國家の中央官廳に於て直接樹立せる計劃に基いて各生産部門に配分し運營せんとするもの、他は生産手段の私的分有制を、従つて個人の生産活動を認めつつ、而も生産を國家中央官廳の樹立せる一元的全般的計劃に服せしめんとするものである。前者は普通に社會主義的計劃經濟と呼ばれ、後者は單に統制經濟と呼ばれるを常とする。故に兩者の區別は、要するに、「生産手段の私的分有制の存續を認むるか否か」といふ點にかかり、共に從來の經濟組織とは本質的に異なるものとして主張されて居るのである。從來の組織と本質的に異るといふ所以は、すべての臣民の自由なる活動の綜合としての市場の自働調節の機能に代りて、専ら國家中央官廳に於ける一元的・意識的計劃が支配するに至るといふ意味である。だから問題は單に經濟活動の自由か統制かなどといふ所にあるのではなくて、總生産資源の市場の超意識的自然配分か、中央官廳の意識的計劃配分かといふ所に、從來の組織と社會主義計劃經濟又は統制經濟との區別があるのである。然らざればそれ等の組織への本質的變革として主張されることは意味をなさぬであら

う。蓋し國家統制の行はれざる經濟なるものは從來とても曾て存在しなかつたからである。いふまでもなく、所謂「部分社會化」は經濟組織の變革ではない。

さて我が知識層のうちには、「社會的生産と生産手段の私的領有との矛盾」といふマルクシズムの根本命題を信奉して、生産手段の私的分有制の上に立つ從來の所謂「資本主義經濟」に反對するのみならず、それを清算脱却し得ざる所謂統制經濟に對しても、資本主義の一變形なりとして反對し、「社會主義經濟」こそ、矛盾なき唯一の理想の組織だと考へるものが少くない。マルクス流行の残した思想の殘滓である。私の研究の結論からすれば社會主義計劃經濟は經濟として存立不可能なものであり、統制經濟といふものも、今日一般にその論者達が主張して居る意味に於ては所期の目的を達成し得ないものであると思ふ。以下兩者の主張に於ける主なる幻想の二三を指摘して、多年經濟組織の問題を主たる研究對象として來たものとしての職分の一端を果したいと考へる。

社會主義の經濟が一の幻想にすぎぬことの論證は種々な方面から可能であるが、そのうち最も致命的にして水掛論に陥るの虞なく、何人にも疑義の餘地を残さぬと考へられる論據は、「經濟計算」の方面からのそれであらう。すなはち「社會主義の組織は生産手段の私的分有制を排棄するがゆゑに、生産手段に關する限り、市場に於ける價格形成を不可能ならしむる。價格形成が不可能となれ

ば、經濟價値の單位・尺度を喪失するが故に、生産費の計算を行ふに由なく、従つて何をどれだけ何處で生産すれば「最も經濟的であるか」を知ることが出来ない。即ち社會主義は生産活動に於て經濟性測定の羅針盤を喪失する。經濟性測定の羅針盤を有せざる社會の生産は、計劃者の恣意に委ねられる、いはば盲目的な模索であつて、たとへ技術的意味に於ける生産消費はあり得るとしても、『經濟』は存しない。すなはち經濟性確保の困難なために、必要緊急なもの不足する反面に巨大な不急品が必然に生産せられる。かかるものは經濟秩序ではなくて、非經濟の混迷に外ならない。」といふ批判であらう。

自給自足する小規模な農家經濟等からの類推によつて、複雑廣汎なる今日の國民經濟の運営に於ても、價値尺度による經濟計算なくしてよく經濟を遂行し得ずやと考へたものがある。ノイラートの如く。また市場價格の代りに貫、尺等の實物單位を以て經濟計算を行ふであらうと想像する者もないではなかつた。然れども前者は總生産の過程と範圍とが、單純且小規模なるために、直接判断によりて見通しのつく場合と、今日の國民經濟の如き複雑廣汎なる場合との本質的差異を無視せる點に於て誤であり、後者は異質の財貨、例へば石炭二噸と木綿三反とは實物單位のままでは絶對に合計も引算も爲し得ないといふことを思ふことによつて、其の誤謬なること説明を俟たずして明で

あらう。

かくて多少共説明をしなければ其の誤謬が明瞭にならぬと思はれる異論は、生産に要する労働量（所要労働時間）を價值尺度として經濟計劃を遂行せんとする労働價值論者の一部、例へばヴァルガ、ライヒター等の見解であらう。かかる考の誤は、（一）労働市場を否認する社會主義社會では異質労働を共通の價值單位に還元する合理的方法が存しないこと、（二）労働のみを價值とすれば生産に要する他の生産要素、例へば自然資源そのものの價值を無視せざるを得ないこと、（三）複雑にして到底實行に堪へないことを考ふれば明となる。「複雑にして實行に堪へない」と言ふ點には若干の補充説明を要するかも知れない。

一の經濟社會に於ては、一物と雖も、他の財貨と無關係に存するものはなく、一の財貨の生産のためには直接間接にあらゆる財貨が前提となり、また一の財貨は、直接にか間接にか、一切の他の財貨の生産の前提となる。「財貨の體系」と呼ばれ「價值の體系」と名付けられる所以である。故に社會主義社會に於ての意識的なる財の價值決定に際しては、一財の價值は、同時に他の一切の財貨の價值を知ることなくしては決定せられ得ないのみならず、何等かの一財に於て價值の變動ある場合には、他の一切の財貨の價值に變動を及ぼす、而も其の及ぶ變動は一様ではなく、財によりて

大小色々の程度の影響が及ぶのである。而も經濟のファクタは不斷に動いて行くから、それに應じて不斷にあらゆる財貨の價値を修正して行かねばならぬが、左様なことが到底人間わざでは遂行出來ないといふ意味である。

この「人間能力を超ゆる複雑さ」といふ方面からの批難は、單に勞働價値計算の主張に對してのみならず、一切の價値（又は價格）を中央部で國定せんとする主張一般に對して、妥當するのである（一切の公定價格がその基礎を市場價格に求めねばならぬといふ悲劇を思ふがよい）。曾てイタリヤの數理經濟學者パローネ氏は、微分方程式の操作によりて中央集産的國家に於ける價格決定の方法を示さうと試みたが、其處に示された結果は、かへつて方程式の作製に要するデータの蒐集並に解式の仕事が、明に人間の能力を超ゆるものなることを示して居るのである。

斯くして經濟計算の必要を認め、共通なる價値尺度の必要を認めつつ、而も勞働價値計算の實行不可能なることを認むる社會主義者、例へばカウツキーやランダウアーの如き人々は、社會主義計劃經濟の價値尺度として資本主義時代の市場價格を繼承し、あとは必要に應じてよろしく試行錯誤でやつて行けばよいとの見解を漏して居る。けれどもかくの如きは問題の廻避であつて解答にはならない。利子や地代を含む資本主義市場の價格をば、それ等を否定する（ランダウアーはそれを否定し

ないが) 社會主義社會に繼承しようとすることに既に無理があるのみならず、試行錯誤等とは、市場の自然調節を背後に前提するところの、従來の社會での個々の活動に就てのみ有効に云ひ得ることであつて、それは社會主義が元來生産分配の一元的な意識的計劃に基く遂行を、そもそも目的とすることを忘れた遁辭にすぎない。ハイエーク教授も云つて居る様に「それは一の馬鹿馬鹿しき思付」にすぎないといはねばならぬであらう。

社會的分業の行はれる社會に生れたものは、初めから市場價格が與へられて居るために、稍もすれば市場價格が經濟に於て果す重大な機能を忘れる傾向がある。それは恰も吾々が空氣や水の有難さを感じないのに類する。市場價格の機能を重視する一部の學者たとへばカッセル教授の如きでさへも、それが形成される過程を分析するに止まり、その形成が生産手段の私的私有といふ事實と不可分に結びついて居るといふ所まで、突つめて考察を進めたものは稀であつた。

ミーゼス教授が、社會主義社會に於ける經濟性計算の不可能論を獨逸の學界に公にして一大センセーションを捲起したのは一九二〇年、即ち「社會化運動」の最中であつたが、同じ頃ロシアでは現實に私的私有制の排棄によつて經濟計算の困難を體驗し、この問題を中心として大論争をまき起して居る。ドイツではやがて社會化の斷念となつた。ロシアでは、所謂新經濟政策による市場の復

活にほのかなる活路を求めざるを得なかつた。しかしロシアでは其後五ヶ年計劃の遂行に着手して後、市場の自らなる崩壊によつてこの問題は再び解決の困難な問題として今日に及んで居る。それはロシア經濟の研究に従事せる若干の人々には充分に認識されて居ることである。獨逸ではライヒター、ハイマン、カウツキー、ハルム、ランダウアー等の諸學者間に論争の種となつたが、獨逸今日の學界では、社會主義を論ずる程の學者で、この問題の重大性を認識しないものは無い。而して社會主義者達の多くが、この方面からの批判に堪へ得ずして、「競争」を否定する純粹な社會主義制度の主張から、次第に退却して競争の機能する社會主義を構想するに至つたといふ事實は注意に値する。ナチスの如きも最初の頃は、利子の排除や重要産業の國有の如きかなり社會主義經濟を思はせる様な理念をかかげて居たに不拘、次第に其の色があせて行き、デクザクな道を経てではあるが、次第に市場機能の重大性への認識を深めて來て居ることも見逃がされてはならないであらう。

英米の學界は久しくこの問題の所在をさへ殆んど認識して居なかつたが、一九三五年の春、ハイエーク教授が、特にこの問題を明にするために二つの大著を世に送つて以來、頓に學者の注目をひいて居る。我國では昭和七年に私が公にした『經濟計算—計劃經濟の基本問題』は、ほんの少數の學者の注意を惹くに止つた。社會主義者や統制經濟論者の論著に於て、今もなほこの重大な問題が見

落されて居るといふことは、まことに不思議な現象である。或者は故意に回避して居るのかも知れなう。

### 三 統制經濟制度

さきに述べたるが如く、在來の經濟組織にも反對し、而も社會主義組織とも自らを區別するところの「統制經濟」の組織は、生産手段の私的分有制を承認しつつ、而も市場の自然調節による資源の配分に代りて國家の中央官廳の樹立せる一元的計劃による資源配分を貫徹せんとする經濟組織である。私が以下に批判せんとするものはかかる意味の統制經濟の組織である。従つて部分的な需給の矛盾を調整したり、法外な暴利を取締つたり、また國家の必要とする或種の財貨が直接國營で生産されようとも、市場の自然調節を本旨とする限り、換言すれば「何をどれだけ、また如何なる價格で取引されるか」が、原則として國家の中央官廳の決定によらずして市場の自然機能に委される限りは、私の批判せんとする統制經濟の制度ではない。更に國家の中央官廳が一般的に價格を公定し、生産物の種類並に數量を命令し得ることが法律上規定せられようとも、それが所謂傳家の寶刀

として抜かれずに居る限り、事實はなほ自由の經濟が持續するものといはねばならぬ。かくして今日の伊太利や獨逸の經濟は、理念としては如何にあらうとも、事實は本質的に自由の經濟であつて、統制經濟でもなければ勿論社會主義經濟でもない。蓋しそれ等の國に於ける經濟は、なほ原則として市場の自動調節によつて資源の配分——生産が行はれて居るからである。歐洲大戰下の獨逸では、猶太人ラテナウの下に統制經濟が行はれたことは周知のことであるが、それは普通に「戰時社會主義」の名で呼ばれて居る。最近の我國民經濟組織は大戰時の獨逸のそれに向つて益々類似して來た。それは一部は戰時の必要に基くものであらうが、一部は學者の統制經濟の理念に導かれてあらはれたものと見るべきであらう。而して私がここで問題とするものは戰時の必要に基く不可避なる統制の強化に就てではなくて、一の正常的な經濟組織の理念としての統制經濟の制度に就てである。

統制經濟の機能を考へるに當りて注意すべき第一の點は、統制經濟の意味に於ける第一の統制は第二の統制を生んで結局全面的の統制に至らざるを得ないといふ事實の認識である。具體的政策としては常に何れかの一面への統制として着手されるの外はないが、市場機構の一面に對する統制は残りの他の面に於ける秩序を破つて跛行状態を生じ、第二の統制が餘儀なくされるのである。この點に於て統制經濟の統制は、自由經濟に於ける統制と嚴に識別されねばならぬ。自由經濟に於

ける統制は、いはば市場の自然調節機能の滑かな運行を妨ぐる事情を取のぞく意味に於て行はれるし、統制經濟に於ける統制は、反對に市場の自然調節機能の結果に對する不信任から出發して統制するのである。それ故に例へば需要と供給が二十圓といふ價格に至つて均衡するものとすれば、自由經濟ならばそれが二十圓に定まる限り統制を行はない。然るに統制經濟では屢々それが高きに過ぎるとして、代價をそれ以下の、例へば十五圓に公定し、それ以上に賣る者を處罰せんとするのである。かりにこのことを實行し得るとすれば、生産者及び商人は右の價格では損失を招かざるを得ないから、より有利に賣り得る時を豫想して其の販賣を手控へる。かくて商品は市場から姿を消すに至るであらう。故に代價を公定せる國家は更に彼等の賣惜みを禁止しなければならぬ。所が賣惜みを禁止し得たとしてもそれだけでは充分ではない。何故ならば、公定價格が自由市場の價格よりも安いのであるから、需要は供給を超過する結果を來し、一部の人は安く買ふが其の代り他の一部の人は全く買ふことが出來なくなる。かかる場合には、早く市場にかけつけた者か、或は賣手と縁故關係にある者が財貨を手に入れて、爾餘の者は貨幣を有しながら入手することが出來ない。茲に於て國家は更に進んで割當制（實物配給制）を採用して、各一人の購買し得る量の限度を決定しなければならぬ。即ち公定價格と賣惜み禁壓と割當制度を同時に行はねばならない。所が問題はそ

れだけでも片附かない。といふのは右の如くにして一應現存するストックが賣盡されたとすると、生産者は最早かかる代價で生産する事を中止するか、少くともこの生産高を制限するに至るからである。この場合生産の繼續を命ずるためには、國家は彼等が損失なく事業をなし得る爲に其の生産に必要な原料、半製品の代價及び勞働賃銀をも公定しなければならぬ。而もこの國家の操作はただ重要な二、三の産業部門だけに止めるわけに行かず、恐らくはすべての産業部門を包括し、總ての生産物の代價、すべての賃銀、あらゆる資本家、企業者、地主、勞働者の行爲を統制しなければならなくなるであらう。何となれば、若し自由の領域を残すに於ては、社會に於ける資源は、この自由産業に流入する。ところが其場合忘れてならぬことは、最初に價格を公定した財貨は何等かの意味で國民生活上重大と見られたに相違ないといふことである。さうでなければわざわざ最初に價格を公定する必要がないであらう。所が其の結果として、價格を公定した重要財貨の生産部門から、自由に委して居る重要視されない財の生産部門へ、資源が流れて行くといふ事態は、最初に價格を公定した所期の目的に逆行するものだといふことは説明をしなくても明であらう。かくて所期の目的を追求する限り、統制は否應なく全面に波及せざるを得ないのである。我國の現實はまさにかかる全面化の道程を辿りつつある。この事態に面して、一部の統制經濟論者は、「統制の深化」とし

て喜び、「革新」の叫をあげて聲援を送つて居る。部分的統制論者は「そんな筈ではなかつた」と云つて統制の「行すぎ」を警めて居るが、實は深く自らの不明を反省する外はなからう。統制が統制を生んで全面に及ぶことは、最初から識者には判り切つた事であつたのだ。物價を單に法定して安定し得る位なら、米價調節に長年の苦勞は要しなかつたであらう。

第二、統制經濟の統制が遂に全産業活動に及ばざるを得ないといふ右の論理は、經濟學を專攻するもので統制を論ずる程の者ならば、今では一般に理解されて居ることであらう。ただその等の人にも一般にまだ充分理解されて居ないと思はれることは、全面に及んだ統制經濟が實は實質上所謂社會主義的計劃經濟に外ならぬといふこと、詳言すればここでは市場價格の形成が不可能となり、従つて經濟計算の方面からの社會主義經濟への批判が、そのままにかかる經濟制度に對して妥當するといふことである。部分的統制にとどまる間は、二重價格や跛行の混亂はあつても、兎も角も市場價格の形成が可能であり、従つてなほ經濟計算に一の規準を提供する。全面的統制の完成は、即ち社會主義經濟であり、經濟計算の破滅である。今日社會主義者がこのことを理解せざるごとく、「革新」を叫ぶ統制論者達も亦、このことについての完全な無智を示して居る。而してこの無智こそは、時局日本の最大なる禍の一つであらう。

X X X X

市場機構の破壊は、これまでの國民經濟秩序の根柢を破壊するものである。それはただにこれまでの經濟秩序の根柢を破壊すると言ふべきのみならず、一般に經濟秩序の根柢を破壊することなのである。我が國策は、經濟秩序を破ることなくして、時局を突破することを期すべきであり、それは不可能でないと思ふ。若しそれが不可能な程度の大事業ならば、經濟秩序の根柢を破壊してはなほさら不可能であることを忘れてはならぬ。

すでに與へられた紙數を遙かに超えたこの文章で、時局突破の私見を詳説することは出来ない——ある程度までは拙著『非常時局と經濟生活』（國民精神文化研究所刊）に述べて置いた——が、要するに國體明徴運動によりて官民の臣道實踐を要求すると共に、國民の家計と國家財政とに於て、必要だけの徹底的な編成替を遂行せしむることに歸する。換言すれば國民生活に於ける持久財の愛護と消費節約の徹底を通じての軍需財の増産を期することである。

非常時國民經濟の根本課題は、如何なる方法を以てすれば、最もなめらかに且能率的に、總生産資源を軍需部門へ爾餘の部門から移動せしめ得るかといふ點にあるのである。而して軍需方面への政府資金の配分と官民の消費節約徹底とは、市場機構を破壊せずして、自ら其の目的を實現せしめ

るてあらう。持久財の愛護と消費節約の進行以上には、如何なる方法を以てするも軍需財擴充の方法は存しないと考へる。難局突破に必要な限り國民は如何なる程度の消費節約にも堪へて行かねばならぬ。而して堪へ得るに違ひない。而してそのためにも市場の解體だけは斷じて避けなければ、收拾すべからざる事態を惹起するであらう。戦時經濟から社會主義と統制經濟のイデオロギーを驅逐せよ！（『理想』昭和十三年十二月號所載）

書評 (二) (「日本読書新聞」昭和十四年五月二十五日号所載)

山本勝市著

## 計画経済の根本問題

—— 社会主義経済の批判を

通じて示された経済原論 ——

東 畑 精 一

近頃 読んだ経済学書の中で山本勝市氏の『計画経済の根本問題』は内容の豊富な、読みごたえのある、非常に有益な著書の一つであった。それだけに興味をもって読み終へることが出来た。この書の序文によると、この書で論ぜられてある問題は過去十数年の間、著者の頭脳の中で洗練せられたものであることが解る。計画経済論の流行を追った所謂『きわ物』ではなく、もっと根本的な問題を原理的に取扱ったものである。

茲に計画経済と云ふのは社会主義の夫れではあるが、然し若干の条件変更を加へるときには、充分に其儘、今日われわれが当面している計画経済、統制経済に就いても問題の共通点を持っている。此の意味に於て現時局にとつても必ず考慮されねばならぬ経済学的問題を提出してゐると云つてもよいと思はれる。

◎ —

計画 経済論と云はず、社会主義経済建設論と云はず、多くの論議が之等の機構、制度、組織、イデオロギー等々に集中してゐる。夫れは経済学者の所謂経済の与件を論じたもので、未だ以て純粹の経済論ではなく、実に乏し

きは斯様な經濟論であつたのである。今山本氏の著書は斯かる欠陥を補い、計画經濟の根本に横はる問題を明示してゐるのは喜ばしき次第である。

元來資本主義經濟に於ては市場を通じて消費財にも生産財にも悉く價格なる大きな焼印が押されて、之れが指標の下に一切の經濟活動、需給の調整が行はれる。此の諸生産財や資源の無数のコンビネーションが、此の無数の消費財の生産のために夫々配分されてゐる。

斯かる過程には素より種々の動揺や錯誤（例へば景氣變動）があるが、然しこの價格計算を通じてのみ、始めて經濟の合理性が基準を与へられ維持されることになる。價格計算はこの意味に於て、資本主義經濟の運行にとって根本的重要性をもつ。

山本氏は斯かる價格計算に代るべきものが計画經濟に果して独自のものとして存し得るかを問ふことに本書の全部を挙げて當ててゐる。

元來計画經濟が資本主義といふ大海の一孤島の如く部分的局部的に行はれてゐるのなら兎も角、若しも全面的に計画經濟を建てるならば、夫処では如何なる經濟過程が行はれねばならぬか。少くとも生産財の私有や私的処分は行はれずに悉く中央企画部とも云ふべきものに委される。そこで統一的に計画的に、全生産財や資源が各種各様の産業へ夫々一定量づつ割当てられねばならぬ。

云はば夫処には「國民經濟の經營」が行はれるを要する。具体的に云つてもロシア政府は正に斯様な問題に日々当面してゐなければならぬ（本書第八、九章は説くこと詳し）仮りに一千名の労働者と一千屯の石炭を中央

企画部が持つとする。抑々彼等を幾時間労働せしむべきかの問題があるが、夫れは兎も角、之等の生産財を以て生産し得るものは甚だ多い。鉄材の生産に、硫酸の増産にあつべきか、船舶の運行に乃至は農具の修繕に振り向けるべきか。或は石炭をストーブに投げて労働者に暖をとらすべきか等々、幾多の可能性がある。之等の諸可能性の内の何れを選択すべきか、又何れを幾何づつ選ぶべきか。

**問題** は其処にある。この配分選択が勝手気儘なものでなく、浪費でなく、何等かの統一性や合理性を保持するには何が必要か。また斯かる配分が仮りに合理的に行はれたとして、その結果たる生産物は国民の需要に如何に適合するの、それとも單純に家畜に飼料を与へるように国民に割当てて行くのか。進んでは之等の生産財の再生産や減価償却が如何にして可能となるか。一言で云えば『社会主義社会も亦費用といふ概念を知ること』が大切なのである。茲に当然『経済計算』が行はれ、之れなくしては経済学的な意味では計画経済は不可能である。資本主義の経済計画に代るべき何等かの形態の計算が社会主義に存するか。

**著者** は此の問題に關しては否定的態度をとる。そして此の重要にも拘らず比較的最近に至る迄取り挙げられなかつた問題の学説史を詳細に述べている(第一、第二篇)。そこには経済計算を或は現物により、或は労働の尺度により、或は資本主義より伝承せる価格により行ひて計画経済の可能性を説かんとする諸説と其の批判とがある。平易達意の文章が著者の説くところを充分に読者に伝へるであらう。第三篇にはロシヤの現実経験が詳しく記述されてゐる。

「ソ聯政權の如き、原理的には資本主義的貨幣計算方法を極度に排撃して労働価値計算を主張して居りながら、すでに廿年以上になった今日、なほ「過渡期」の口実の下に、欧州大戦による市場攪亂の始まらざりし一九一三年の資本主義市場価格に訴へて、それを基礎に、諸財の規準価格を、あれこれと決定に苦心して居る実状」

(二〇一頁) を知るとき計画経済と云ふ新しき経済のシステムの創造が如何に困難であるかを思はざるを得ない。  
そして、斯かる認識が、逆に抑々今日の資本主義経済に於ける価格が如何なる作用をもつてゐるかを一層深く究

めるに充分に役立つ。本書はその意味に於て『社会主義経済の批判を通じて示された一個の経済原論』と云ふのを  
適当とさへ考える。(菊版五四二頁、四円、理想社出版部)

(評者—東大教授、農業経済研究家、国民学術協会々員、著書「日本農業の展開過程」他)

書評 (二) (小樽高商「緑丘新聞」昭和十四年五月二十五日号所載)

山本勝市著

計画経済の根本問題

手塚壽郎

山本氏は人も知る憂国の士である。かつては私と同じやうな道を歩んだこともあった。フランス重農学派研究の道がそれであった。此重要学派に関する細い点で、私は氏の教を乞ふたこともあった。其頃—今も変りはないが—細いことに興味をもった私は、氏が重要視せられるブルガン—レ・システム・ソーシアリスト・エ・レエボルシヨン・エコノミークの著者—を田島博士がブルゲンと発音したので、書信でそれをねちこんだ。曰は勿論アンではないが、アンと書くのが最も近いのであるから、Bourgin はブルガンであらうと思った。こんなつまらぬことを田島博士にねちこんだといふことは、実は私も十四五年の昔否それ以前から経済計算の問題に注意を払ってゐたことを物語るのである。十数年間も注意をしながら、今以て私の此問題に対する研究も業績の進歩を見せないのは、自分から自分をあきれるのである。然しそれも無理はないのである。如何に威張って見た所で、まだ／＼私などは西欧学者の後塵を拝しないわけには行かないのであるが、其西欧の学界に於ける此問題の研究が左程進展を見せなかつたからである。然しロシアにはそれがあつた。

山本氏はロシアに於ける此問題に対する研究を恐らく多大の経費と困難を払って研究せられた。氏の著述にはそれが充分に活かされてゐる。だから投下労働価値による経済計算の記述の如きは、恐らく何人と雖もあれ程まで

に豊富な内容を盛り得まいと思われるほど、豊富になっている。それだけでも氏の新著―旧著も―は世界に比類がない。加之現在経済計算に関する論文や著者はずいぶん多くなって来ているのではあるが、然し氏の新著ほど徹底的に此問題を取扱ったものは世界に比類がない。それは決して御世辞ではない。いくら吾々が人におもねる世の中になって来てゐる御時世であるとは云ひながら、山本氏に御世辞を言はねばならぬ必要は私に毛頭ない積りである。だから山本氏の著述が世界に比類がないと云つたならば、懸値なしにさうなのであると思つていただきたい。

経済計算と云ふと専門学者でない人々には一寸見当がつくまいと思ふ。然し私は年々学生に此問題の輪かくだけは伝へてゐるから、読者は専門学者でないにした所で、それが何であるかを概ね承知せられてゐるに違ひない。だから其説明の必要はない。それにしても経済計算は共産主義にとつては、其主義に忠実であらうとすれば、実に重大な問題である。

けれども私は考へてゐる。今や其主義に忠実な共産主義などと云ふものは、何処にも無いのではないかと。投下労働価値原則を貫き得ないような経済計算をする制度は共産主義でも何でもないのであるが、今時そんな素朴な経済計算をする國は何処にもないのである。フランスのアルプス山系に近い所に風光明媚のグルノーブルと云ふ町があり、其法科大学の経済学の講師 Robert Mossé はロシアにも滞在し、ロシアの経済制度の研究者として仏蘭西切つての学者であるが、最近 *L'économie collectiviste*, 1939 を書いてゐる。其六二頁で、貨幣を廃止しようとする共産主義は素朴なユートピアであり、ロシアもそんな素朴な共産主義ではないと云つてゐる。―尤も農業の場合

には投下労働量を以て価値量とすることが行はれてゐると云つたような矛盾も犯してゐる。――

山本氏の新著は労働量による経済計算の吟味で相当大なる部分が占められてゐるが、然し貨幣による経済を認容しようとする説にも多くの頁を費してゐる。労働価値量を以て経済計算をしようとする見解は比較的批判に容易であるが、貨幣を以て経済計算をせんとするものならば、たとへ資本が社会化されてゐても、批判に相手ごとくたいがある。英米の若手は概ね此後の立場から社会主義の擁護をする。結局擁護されてゐるのは共產主義ではなくて Collectivism ではない。Lange の近著でも、Dickinson の近著でも、Collectivism を論ずるのだと限定してゐる。吾々は共產主義と云ふ言葉の使用を捨てねばならぬ。

山本氏は集産主義の下に於ては、貨幣による経済計算は不可能だと云ふ結論を出される。恐らく此点山本氏の言はれる通りであらうと思ふ。

ところで近時世界どこでもかしこでも行はれてゐる経済の統制は集産主義の下に最も完全に行はれ得るであらうが、山本氏は此点について如何なる考をもたれるのであらう。現代の経済における独占の解釈といひ、集産主義への批判といひ、私は自らの姿を山本氏のうちに見出したやうに思へてならないのであるが、其私は集産主義の或程度の基礎付をしなければ、統制経済の基礎付は出来ないのではないかと思つてゐる。そして戦争上の必要と云ふことのみ経済統制の基礎を置くことより他に私は何も考えて居ない。

さて、山本氏は経済計算が労働価値を以てしては不可能であるとか、実物計算を以てしては不可能であるとか云ふ結論を以て最終の結論とせられるのであるが、私を以て云わしめれば、それらは不可能なのではない、人の自由

を拘束し、強制に訴へさえすれば、必ずや可能なのである。だから強制を恐れなければ、投下労働量を以て価値とすること、換言すれば共産主義の実行も決して不可能ではない。所詮人は自由を重しとするか、強制を通しての平等を重しとするか、二者選択の途上に置かれてゐるのである。山本氏は同様のことを旧著で明確に云ひ乍ら、新著ではこれを明示してゐない——精読してゐないので、或ひは誤読かもしれぬ——のは何故であらうか。

最後に、人の行動を根本的に動かすものはプレートが云ふやうに理知ではないとすれば、経済計算を通しての共産主義批判は、共産主義の駆逐にどれだけの力があらうか。

計画経済の根本問題

非売品

昭和十四年三月二十五日 初版発行  
昭和四十六年九月二十五日 復刻版印刷  
昭和昭十六年九月三十日 復刻版発行

著者 山本勝市

発行者 山本勝市

印刷者 大沢忠義









